九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遠藤周作論 : 「救い」の様相

池田, 静香

https://hdl.handle.net/2324/7182259

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

遠藤周作論―「救い」の様相

池田　静香

遠藤周作論―「救い」の様相

池田　静香

目次

序章　1

第一章　第二次世界大戦との対峙――マルキ・ド・サドとコルベ神父　4
第一章第一節　「われら此処より遠きものへ」――資料の位置　15
第一章第二節　「われら此処より遠きものへ」――内容分析　34
第一章第三節　『女の一生二部』論

第二章　日本を作品舞台とした第二次世界大戦との対峙　55
第二章第一節　『火山』論―サドから「絶対」へ　70
第二章第二節　『海と毒薬』論　82
第二章第三節　教科書掲載作品「幼なじみたち」―宗教者の戦後

第三章「母なる神」再考　91
第三章第一節　共苦ということ―『沈黙』と「満潮の時刻」の間　103
第三章第二節　かくれ切支丹調査から振り返って

第四章　遠藤作品の受容　117
第四章第一節　カトリック新聞―一九四七年～一九七四年―　136
第四章第二節　カトリック新聞―一九七五年～二〇〇〇年―　162
第四章第三節　長崎新聞――昭和編　177
第四章第四節　長崎新聞――平成編

終章　195

参考文献一覧　199

序章

遠藤周作（一九二三～一九九六）が没してから今年で二八年になる。没後二五周年となった二〇二一年九月の遠藤周作学会全国大会における講演のなかで、川島秀一代表（当時）は、小嶋洋輔『遠藤周作論―「救い」の位置』（双文社出版、二〇一二・一二）の提言を参照し、作家の自作解説を正解としそれに寄り添うように読み進められてきた遠藤作品と遠藤周作の文学研究そのものを、歴史として捉え相対化しようとする試みは今後さらに深められていく必要があることを述べていた。遠藤の作品と文学研究そのものを歴史として相対化するとは、例えば小嶋が前掲書で示した、第二ヴァティカン公会議の精神が日本に普及する社会的状況の変化によって遠藤の作品受容がどのように変化したのかを明らかにすることである。

いわゆる純文学作品を中心に論じられてきた遠藤作品・遠藤研究を相対化する試みは、近年刊行された研究書においても、小嶋が前掲書のなかで試みる中間小説を対象とすることや、長濱拓磨『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として』（和泉書院、二〇一八・二）が取り組む歴史小説、金承哲『遠藤周作と探偵小説―痕跡と追跡の文学』（教文館、二〇一九・三）の探偵小説といった、これまでは研究の中心的な対象とみなされてこなかった作品を研究対象に取り込むことでも深められてきている。

なお、小嶋の提言以前からなされてきた「『沈黙』論―諸書との関わりから」（『近代文学論集』二〇〇二・一一）を始めとする下野孝文の一連の長崎を舞台とした作品への典拠研究、笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・一一）や、近年刊行された香川雅子『遠藤周作と芥川龍之介―史料分析からみたそのキリシタン理解』（教友社、二〇二一・二）などによって、遠藤の自作解説に頼らない実証的な読みは深められてきている。

一九九六年に遠藤が没して以降は、日記や書簡、蔵書の書き込み、原稿などといった新出資料が継続的に発掘、公開され、作家の生前の発言を新たな目線で眺めうる確かな参照点を得やすい状況が整えられつつある。本稿はこうした遠藤作品を相対化しようとする研究史の流れに沿い、その作品世界に表れた「救い」の様相を、特に第二次世界大戦を対象とした場合について明らかにしようとするものである。このことは、弱者に寄り添う「母なる神」を描く遠藤作品の「救い」が及ぶ状況を限定していく試みとなると考える。

第一章では、未発表の小説草稿「われら此処より遠きものへ」（以下草稿「われら」と略記）の分析を中心とする。草稿は、遠藤の小説家修行となったフランス留学中（一九五〇～一九五三）のマルキ・ド・サド研究を、第二次世界大戦という状況を取り込みながら活かそうとしたものである。執筆時期は、第一小説「アデンまで」（『三田文

学』一九五四・一一）の前となる一九五三年である。第一章の第一節と第二節では、草稿「われら」を留学期の日記およびエッセイなどと比較検討し、その創作意図を考察する。「われら」におけるサド研究には、西洋と日本の距離を棚上げにした状態ながら、汎神的世界の中での「救済」を模索していた可能性がある。また、遠藤におけるサド受容は、「サド伝」（『文学界』一九五九・九、一〇）や「爾も、また」（『文学界』一九六四・二～一九六五・二）を中心に議論され、サドを媒介としてでは西洋との距離感を埋めることができなかったとみなされてきた。しかし、草稿「われら」には、そうした従来の見方に修正を迫る要素がある。草稿「われら」のポイントは、第二次世界大戦の傷跡が生々しい戦後の状況下で、遠藤が、サドの現代的意義を、どのように受容したのかという点にある。それを同時期のエッセイやエリック・マルティ『サドと二十世紀』（森井良訳、水声社、二〇一八・一二）などを参考にしながら考察する。そして第三節では、第二次世界大戦下でのコルベ神父が体現する「救い」のあり方を考察する。草稿「われら」では、第二次世界大戦によって「狂女」となった女性を救う力を持つ存在がサド研究を介して探究された。そうした特異な「救い」の展開としてコルベ神父による「救い」に注目する。

第二章では、フランス留学時にサドに興味を抱いた根幹にある、第二次世界大戦がみせた「悪」への「救い」について、日本を舞台とした作品をとおして考察する。第一節では、サドの自然観を「悪」の表象として取り入れたとされる『火山』（『文学界』一九五九・一～一〇）を分析した。『火山』の赤岳とモデルとなった桜島との比較を通し、西洋との対立を描いたといわれてきた『火山』には、西洋との距離感を超え、サドを通じて目指したキリスト教福音前の世界を描いた可能性があることを確認する。第二節では、第二次世界大戦末期に起きた米軍捕虜の生体解剖実験を描いた「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）を考察し、キリスト教を日本的に変容した「母なる神」とは異なる、普遍的な「救い」が求められていることを明らかにする。第三節では、戦時下の日本で拷問を受けた神父を描いた、「幼なじみたち」（『野性時代』一九七七・五）を考察する。まず、戦後、自身を拷問した日本人のいる世界で生きることを選択し、恨み言一つ言わなかったという神父の内面は、外部からしか描かれていないことを確認する。『沈黙』をはじめとする遠藤文学の主要テーマは「許すことの大切さ＝母なる神」だが、その観点では、神父の心情を説明できない表現があることを指摘し、そのうえで、他者としての子供を描いた「白い風船」（「朝日新聞」一九六九・一・一）との比較から、たどり着けない内面を有する他者を尊重することの重要性が描かれていることを明らかにする。

第三章では、遠藤作品の主要テーマとなる『沈黙』（新潮社、一九六六・三）で示した「母なる神」について、第二次世界大戦に目配せしながら「救い」のあり方を検討する。第一節では『沈黙』執筆のスタートラインに戦時中の弱者としての経験があっ

たという回想に着目し、『沈黙』への船出と目され踏み絵も登場する「満潮の時刻」(『潮』一九六五・一～一二)との比較を行う。「満潮の時刻」には病室における死に際し、苦しみに共感する「母なる神」が描かれている。本作の中心的な「救い」は、病に倒れた者の孤独を和らげる点にあるが、自身の病死と第二次大戦下に戦死した人々の死を重ね合わせて意識する主人公に、『沈黙』と同じような「救い」を見出すことができるのかを検討する。続く第二節では、『沈黙』で打ち出した棄教を許す「母なる神」のあり方を、その後の遠藤作品との比較から検証したい。なぜなら、『沈黙』発表の際、キリスト教界から棄教を許す神を描いたことで強く非難された応答として「母なる神」の正当性を今後の創作で証明したいと遠藤が訴えたからである。遠藤はこの際、日本人の宗教心にある母親への思慕とかくれ切支丹信仰を例に挙げた。そこで、『沈黙』以後深められた、かくれ切支丹研究をまとめた「日本の沼の中で」(『野性時代』一九七九・一～六)から振り返り、評価する。

第四章では、『沈黙』の文学碑が長崎に建立した際には青ペンキがかけられるほどに一部拒絶反応を示した人々のいた、文学館のある地域の人々(主にカトリック信者)が、遠藤作品を好意的に受けとめるようになる経緯をカトリック新聞と長崎新聞の資料調査から検討する。第一章から第三章までは遠藤周作の文学研究のなかでの作家の発言や作品の受け止められ方について検討してきたが、第四章では、カトリック教会が一般信者に作品を伝えようとしてきたのか、また、信者側がどのように受け止めたのかを明らかにするわずかな基礎が作れればと考える。ただ、本稿で論じてきた遠藤作品とカトリック新聞にみる遠藤作品に共通項はおそらく見出しづらい。本稿で検討してきたのは、第一章第二章のタイトルにあるように、主に第二次世界大戦という状況下における遠藤の興味関心や作品での救いの描かれ方だが、カトリック新聞に、戦争との関係で遠藤作品を取り扱った記事はほぼ見当たらないからである。第四章は、「遠藤作品と遠藤周作の文学研究そのものを、歴史として捉え相対化しようとする試み」の一環で、そのための基礎調査の報告である。本論に即して言えば、第一章～第三章の作品論を相対化していくための端緒と位置づけている。

第一章　第二次世界大戦との対峙――マルキ・ド・サドとコルベ神父

第一章第一節　「われら此処より遠きものへ」―資料の位置

〇、はじめに―マルキ・ド・サド研究

未発表草稿「われら此処より遠きものへ」は、遠藤周作文学館開館一〇周年となる二〇一〇年五月、同館企画展で展示公開され、二〇一一年三月には全文が翻刻刊行された。未完未発表ではあるものの小説としての第一作品「アデンまで」（『三田文学』一九五四・一一）に先立つ一九五三年頃に書かれたと推測されている。評論家から小説家への転身を決心し、一九五〇年六月から約二年半に及ぶフランス留学中に取り組んだマルキ・ド・サド研究を、帰国間もない頃に活かそうとしていたことが窺える資料である。

遠藤は肺結核の再発により一九五三年二月、不完全燃焼のまま帰国せざるを得なかったが、その後もサド研究に取り組み、一九五九年には「サド伝」（『群像』一九五九・九～一〇、以下『サド伝』と記す）を発表する。しかし、資料収集や実地見聞の必要を感じ、同年一一月に妻順子を伴って渡仏、『サド伝』執筆の参考諸書の筆者として名を挙げたジルベール・レリー、ピエール・クロソフスキーに会い、サドの居城ラ・コストを訪ねている。しかし、この二度目の渡仏後間もない一九六〇年四月には肺結核が再発し、その後、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）前の大患と言われる二年二ヶ月に及ぶ入院生活を送ることとなる。二度目の渡仏体験は、一九六四年二月、短編「爾も、また」（『文学界』一九六四・二～一九六五・二）に『サド伝』の一部を含む形で活かされ、「爾も、また」は『留学』（文芸春秋社、一九六五・六）の第二章に組み込まれていく。しかし、サドを中心に取り入れた作品はその後、ほぼ書かれていない[1]。そのことは、「爾も、また」発表から二ヶ月後の一九六四年四月、初めて長崎を訪れ、『沈黙』執筆の原動力となった十六番館（当時）の踏絵と出合ったことからも推測されるように、遠藤文学の主なテーマが「母なる神」「同伴者イエス」の探求へと進んだからであろう。「爾も、また」以降、初期の遠藤がサドに神を求めるネガティブの道という思想を託した作品は、『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）においてユングへの興味へと形を変えて書かれていくこととなる。

澁澤龍彦全集の編集にも携わった松山俊太郎は、「日本におけるサドの受容」（『文学』一九九四・一〇）で「遠藤周作は、カトリック作家として、反カトリシズムの権化（カトリックの裏返し）であるサドに深甚な関心を抱いていたが、追及すべきほかの主題

[1] サドについては「王妃マリー・アントワネット」（『週刊朝日』一九七八・二～一九八〇・七）で触れられる。

の造形化に忙しいためか、独特なサド像を瞥見させるに留まっている」としている。とはいえ、「一、澁澤龍彦以前」、「二、澁澤龍彦時代」、「三、澁澤龍彦以後」に分けた受容史の三区分全てに遠藤を登場させている。このことからは、遠藤の存在が日本のサド受容において特筆すべき存在であったことが窺える[二]。遠藤は、一九五九年に澁澤龍彦が訳した『悪徳の栄え 続』（現代思潮社、一九五九・一二）が猥褻文書に問われたサド裁判において、澁澤と並ぶ日本におけるサド研究の第一人者として紹介されている[三]。一九六一年、第一回公判において特別弁護人として法廷に立った際には、「サドの作品の中には（略）肉体や肉欲の描写がある」が、それは「キリスト教の肉体観にたいする反思想、あるいはそれをもっと昇華しようという思想がそこに裏打ちとなっている」とし、サドの描く「サディズムはたんに肉体的加虐性ではなく、実は純潔をよそおう者の偽善性を破壊することによって真の純潔を求めようとする思想に裏づけられている」と『悪徳の栄え』と同年に発表した『サド伝』でも示したサドの文学についての認識を語っている。しかし、この点について「詳しくは今後の法廷で述べさせて頂きたい」としたまま体調を崩し、再び陳述することはなかった[四]。

遠藤とマルキ・ド・サドとの関係について論じた先行研究は、唯一のまとまった『サド伝』執筆後、サド理解の不足を補うため渡った二度目のフランス取材旅行後に書かれた「爾も、また」の読解を中心になされてきた。「爾も、また」におけるサドとの関連は、主に二つの観点から読み解かれてきた。一つには、サド裁判で述べた「純潔をよそおう者の偽善を破壊することによって真の純潔を求めようとする思想」、つまりサドが実践した神を求めるネガティブの道の描かれ方についてという観点である。これは、「白人」（『近代文学』一九五五・五、六）からの系譜である。もう一つには、サドの後半生となる「一七七八年以後の牢獄生活」が培った、それまでの実践を書くという行為によって再構築し新たなモラルを求めた「芸術家」「思想家」としてのサドに着目する視点である[五]。

前者の視点について上総英郎は、「あくまでもキリスト教秩序の枠内においてのみ叛逆性を発揮する」サドの思考性に対し、サド研究のためにフランス留学する「爾も、また」の主人公田中には「サドが終生なにを敵視して生き、なにを対象として作中世界を築き上げてきたかという核心的な理解が不足している」と述べている。その具体的表れが、サドの背徳の実践の場となったラ・コストの城を訪れる田中が城内に立ち

二 松山俊太郎「日本におけるサドの受容」（『文学』一九九四・一〇）七四～七五頁
三 現代思潮社編集部『サド裁判（下）』（現代思潮社、一九六三・八初版。一九七二・一〇新装一刷）一〇八頁を参照。
四 現代思潮社編集部『サド裁判（上）』（現代思潮社、一九六三・八初版。一九七二・一〇新装一刷）五三～五四頁
五 「サド伝」（『群像』一九五九・九～一〇）、引用は『遠藤周作文学全集第一一巻』（新潮社、二〇〇〇・三）四一～四二頁。

入ることができないという場面にあり、「サドが敢えて行っていた背徳の逸楽の意味、その核心に」迫ることができない田中という日本人がサドに迫ることの困難が、ラ・コストの城に立ち入ることができない田中の姿に投影されていると指摘している[六]。後者の観点について小嶋洋輔は、『サド伝』のなかで「サドの書くという行為は現実では自分を粉砕した世界とは別のしかももっと真実な世界を創りあげ、この創造世界のなかで自分の自由を守るための抜きさしならぬ行為であった」という箇所が「爾も、また」に引用されていることに注目している。そのうえで、外国文学者の田中が異国の文学を研究する意味を模索するのと同様、サドを対象としつつもそこに独自性を獲得することのできなかった『サド伝』までの遠藤自身との訣別が「爾も、また」の田中にあるとしている[七]。

いずれの観点からも、「爾も、また」における田中とサドの間に横たわる溝を指摘している。作者と主人公を重ねることには慎重を要するが、『サド伝』の一部をほぼそのまま引き写す形で挿入した「爾も、また」を境に、小説家になる以前のフランス留学時代（一九五〇・六～一九五三・二）から取り組んだサド研究を中心的な創作対象とすることはなくなっていった状況は、遠藤と作中人物「田中」の距離の近さを示すことにもなろう。後に「王妃マリー・アントワネット」（『週刊朝日』一九七八・二～一九八〇・七）でサドを登場させるが[八]、新たなサドへの視点が加わっているとは言い難く、遠藤がサドをメインに創作に取り組んだのは、二度目の渡仏取材を糧とした「爾も、また」（『文学界』一九六四・二～一九六五・二）までということになろう。

したがって、一九五三年頃に書かれた「われら」は、その最初期のサドへの期待が表された小説草稿ということになる。とはいえ、一九五〇年六月からのフランス留学中のサドへの興味を窺い知る資料はさほど多くなく、留学中の日記を参考にできる程度である[九]。没後、基礎資料として公開されたものには、日記を除けば昭和二〇（一九四五）年代以前の資料が多いが、作者公称の評論家デビュー「神々と神と」（『四季』

六　上総英郎『遠藤周作論』（春秋社、一九八七・一一）一三一～一三五頁。

七　小嶋洋輔『遠藤周論―「救い」の位置―』（双文社出版、二〇一二・一二）四四～四九頁

八　佐藤晴夫「訳者あとがき」（『ソドムの百二十日（新版）』青土社、二〇〇二、八）は、「サドは権力から懸命に逃れようとした、自由な、しかし真面目で臆病なリベルタンであったに違いない。多分、人間的に魅力がある人物であって、多くの女性とのエピソードはそれを証明しているような気がする。そうした点について、遠藤周作氏は『王妃マリー・アントワネット』の中で、実に生き生きとサドの姿を描いている」と指摘している（四四八頁）。

九　当時の日記からもうかがい知れるサドへの関心として、後年、一九七六年一一月にアウシュヴィツ収容所を訪れたことを振り返り、「無抵抗、無力な相手を苛める快感が（略）どこから生まれたのか、私は留学時代はじめてサドの本を読んだ時から疑問だった」と回想している（『心の夜想曲』文芸春秋、一九八六・二）一二六頁。

一九四七・一二)、小説としての第一作品「アデンまで」(『三田文学』一九五四・一一)以前となる「われら」執筆にかかわる時期については、活字化された資料であっても資料の整備が俟たれる状況である。よって、「われら」にはそうした時期の草稿という意味での資料的価値もあろう。なお、遠藤の作家デビュー期から編集者として支えた大久保房男に、執筆当時、この草稿を見てもらおうとしていたようでもある[一〇]。とすれば、未完未発表の習作期草稿ではあるが、他者の眼に触れることを意識して書かれたということになる。

一、執筆当時のサドへの興味

小説家デビュー前に書かれた「われら」には、一九五九年の二度目の渡仏のきっかけとなった、後の『サド伝』で主張した牢獄文学者としての後半生のサドの姿よりも、書くという行為によって現実を再構築する基盤となる前半生のサドに焦点が当てられている。このことは、サドが幽閉生活を始める一七七八年への言及が「われら」にはないことからも読み取れる。旧蔵書の洋書群を調査した久松健一は、遠藤のサドへの関心について、「「王制封建主義と通俗化したキリスト教の腐敗に血みどろになって反抗し、新しいモラルをみつけようとした人」(澁澤のいわゆるサド裁判の際の特別弁護人陳述より)という位置づけから生まれているものと考えられる」と指摘している[一一]。この指摘に沿えば、『白い人』に引き継がれた「純潔をよそおう者の偽善性を破壊することによって真の純潔を求めようとする思想に裏づけられている」(『サド伝』)実践者としてのサドが、「われら」における主なサド像であるともいえる。だが、「われら」を執筆していた一九五三年一〇月の日記には、仮題は「主人と esclave (奴隷)」であり、「théme (テーマ) は Sadisme (サディズム、あるいは加虐性愛) を現代の悲劇にうかびあがらせるもの」と記されているのみで、サドにおける新たなモラルへの志向性については記述されていない[一二]。堀田善衛宛書簡でも次のように記されている。

> 小説、百二十枚書きました。つまり主題はこうです。現代の二人の人間の姿勢「主人と奴(ママ)れい(ママ)」「相手を物にする faire l'objet 者と、物にされる者」この典型的な姿勢を肉欲の上に還元するとサディズムの問題になります。又、拷問、虐殺の今日、肉欲と暴力の関係をフロイドのような考え方からではなく、もっとツッコンでや

一〇 堀田善衛宛遠藤周作書簡(一九五三・一二・二一消印)(『三田文学』二〇一一・五)一九七頁。翻刻の準備をしていた当時、大久保氏へ手紙で照会した際は、見たことがないとの回答を得たが、半世紀前の出来事とすれば記憶違いということもあろう。

一一 久松健一「遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響―旧蔵書の調査を通じて―」(『明治大学人文科学研究所紀要』二〇一一・三)四三頁

一二 『遠藤周作全日記【上巻】』(河出書房新社、二〇一八・五)三四三〜三四四頁。

りたかった。そこで、この小説を書きました。

（堀田善衛宛遠藤周作書簡（一九五三・一二・二一消印）

（『三田文学』二〇一一・五）一九七頁）

「主人と奴れい」つまり「相手を物にする faire l'objet 者と、物にされる者」を、「肉欲の上に還元するとサディズムの問題」になる。そしてこの問題をフロイトとは別の観点から取り組んだのだという。「拷問、虐殺の今日」とは、第二次世界大戦における凄惨な状況を指す。後年、遠藤はフランス留学中のフロイトへの関心について、一九七六年一一月にアウシュヴィツ収容所を訪れたことを振り返り、「無抵抗、無力な相手を苛める快感が（略）どこから生まれたのか、私は留学時代はじめてサドの本を読んだ時から疑問だった」と回想している[一三]。第二次世界大戦中に行われた虐殺行為の心理を解明するための参照例としてサドという存在が眼差されていたという述懐である。遠藤のサドへの眼差しは、「白い人」や『サド伝』や「爾も、また」を対象とすれば、実践者であれ芸術家であれ、リベルタンとしての存在が重要視される。だが、「われら」の創作意図を打ち明けた言及にリベルタンとしてのサドを読み取ることが出来るか否かという点については、多少慎重になる必要がある。

例えば「われら」執筆から二年ほど経った「サドと現代」（「産業経済新聞」一九五五・八・一一）でも、サドの現代的意義を、戦後の知識階級に対するそれと戦時下の人間心理解明のためのそれとに分けて言及している。

サドは二十世紀にはいってから、特に今次大戦以後、再検討されはじめた。もはや、昔のように淫猥文学の著者、おぞましい悪徳者としてではなく、われわれ二十世紀の苦悩を予知し、くるしんだ一人の思想家として摑まえられはじめたのである。／あたらしく見直されたサドは、まず既成概念や偽善にたいする熱烈な反抗者としてであった。そしてまた、あの仏蘭西大革命の前に一方では崩れおちる貴族社会の最後の一人として、この社会の腐敗を憎みながら、貴族である故にとびこんでいけない――いわば今日の知識階級と同じ苦悩の持ち主だったのである。そして最後に彼のサディズムの思想は拷問や虐殺の時代の――第二次大戦中、われわれがみせつけられた怖ろしい時代の予言者として、たちはだかってきたのである。

（「サドと現代」（「産業経済新聞」一九五五・八・一一））

（注、傍線は池田。以下同）

一三『心の夜想曲』注九に同じ、一二六頁

引用部分では「既成概念や偽善にたいする熱烈な反抗者」といったリベルタンとしての側面と、「第二次大戦中、われわれがみせつけられた怖ろしい時代の予言者」とみなすサドの側面は、整理して捉えられている。「サド侯爵の犯罪」(『知性』一九五五・三)でも、神へ通じるネガティブの道を生きるサドを説明したあと、日本でサドを紹介することの意義として、「人間の醜悪な行為にぶつかる機会が多い」現在において、「人間性にひそむ、異常な、底知れない醜悪さ」と対決するために、「サドの場合を見ておく」ことが必要だと、同様の整理がなされている[一四]。

「われら」執筆当時、またそれ以前のフランス留学中の資料に、神を求める裏返されたサドの姿について認識していた記述はもちろん確認できる。「われら」に近い時期の資料であれば、留学中の日記を素材に書かれた「滞佛日記」(『近代文学』一九五三・七～一〇、一二)にある。そこには、遠藤独自のものだというサド解釈が次のように示されている。

(注、一九五一年)七月八日／クロソウスキー「サド、我が隣人」を読み始む。今日読んだ所では、著者はサドが①ジャンセニスム的に人間を罪悪視し、②彼には神を信ぜられぬ故に③必然的に自己純化を人間の虐待(一種の自己苦行)に求めてサディズムを行ったと解釈している。しかし、もし、ぼくがサド論を書くとしたら、そうは書かない。ぼくは①サドは善の欠除として悪をみなかった。(トミスム[ママ]の悪についての解釈の反対)②つまりサドは悪を不毛と考えなかった。悪を通して人間は創造しうる。悪の創造の意義を否定する基督教に挑んだ。③悪の神秘主義からスコラ哲学が規定した人間の限界を破ろうとした。こういう風に、ぼくはサドを解釈する。サドにぼく自身の思想の一部を托するように変形する。それでも構わない。

(「滞佛日記」(『近代文学』一九五三・七～一〇、一二)

(引用は『遠藤周作全日記【上巻】』河出書房新社、二〇一八・五　三一〇頁)

この引用箇所の素材となっているのは、『作家の日記』(作品社、一九八〇・九)として公表された留学中の日記、一九五一年四月二五、二六日の部分である[一五]。町田市民文学館に遺されている旧蔵書には、「サド、我が隣人」の最初の章「無神論のマスク」の冒頭に、引用にある「悪を通して人間は創造しうる」というサドの自然観に対する書き込みがなされている[一六]。また、久松健一は、「サド、我が隣人」について「「カト

一四 「サド侯爵の犯罪」(『知性』一九五五・三)一四三頁
一五 『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、一〇六～一〇七頁
一六 書き込みは「此の場合、Sadeにとつて自然とは何であつたか。自然は基督教や古

リック護教家サドという逆説的着眼」で知られる書」と説明したうえで、遠藤がこの書物から得たのは、サドの自然観と処女（エヴァ）を「「男性を肉欲に引きこむ罠」とする見方」であったと指摘している[一七]。後の『サド伝』へ与えた影響としてはこの指摘に異存はないが、「滞佛日記」の引用の「しかし」以降で言及されているサドの自然観によって導かれる人間像とは、「悪を通して創造する」人間によって、「スコラ哲学が規定した人間の限界を破ろうとした」姿とされている。サドの行為が単なる異常行為ではなく、実践者としてであれ思想家・芸術家としてであれ、逆説的に神に通ずるリベルタンとしての行為なのだとすれば、破られた限界の先にあるのは神に通じる新たなにかであると捉えられるのだろうか。

だが、先述したとおり、「われら」の創作意図を示す資料では、フランス留学中の日記にある「サドに心ひかれ始める」理由の一つ、「この戦争の影響の下に――罪と残酷とは僕から切り離されなくなった」ため「情欲と残酷との関係を調べる事に心ひかれている」（一九五一・一・三一）という側面のみが言及されている[一八]。また、「われら」において「戦争の影響の下」にあるサディズム的行為は、端的にはバシカの物語として描かれる、大戦中の拷問ということになる。「われら」執筆の翌一九五四年に書かれた「マルキ・ド・サド評伝（Ⅰ）（Ⅱ）」（『現代評論』一九五四・六、一二）で主張した、遠藤が魅力を感じる「サド的人間」は「「愛慾といふ狭い世界ではあつたが、當時の貴族階級と基督教が扼殺した人間の自由を恢復しようとした挑戦者」としてのサドであれば[一九]、戦時下における拷問する者の行為をこの意味でのサドと同じ挑戦とみなすには、両者をつなぐ回路を探す必要があるだろう。よって「われら」におけるサディズムの実践者が神に通じるものとして期待されているのかどうかは、後に書かれたサドを対象としたものとは異なり、やはり、ひとまず判断を保留しておく必要がある。

また、実践者としてのサドの行為に対して、遠藤は『サド伝』ではサディズム・マ

代ギリシャ哲学のやうに秩序ではなく、混乱、或はカオス、そのものであった。Sadeはそのカオスの中に無数にうごめく乱雑な原素、悪の生命力を肯定した。」（九八頁）というもの(Pierre Klossowski, *Sade, mon prochain*, Paris, Seuil, 1947)なお、久松健一監修『町田市民文学館蔵　遠藤周作蔵書目録（欧文篇）――光の序曲』（町田市民文学館　二〇〇七・九）では、最後の一文を「Sadeはそのカオスの中に無為にうごめく乱雑な原素、悪の生命力を肯定した。」（四七頁）としている。

一七　久松健一「遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響―旧蔵書の調査を通じて―」注一一に同じ、五三～五四頁

一八　『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、二一五頁

一九　「マルキ・ド・サド評伝（Ⅰ）」（『現代評論』一九五四・六）一〇九頁。「マルキ・ド・サド評伝（Ⅱ）」（『現代評論』一九五四・一二）一〇四頁。「サド侯爵の犯罪」『知性』一九五五・三）、「文学とキリスト教」（『文学界』一九五五・四）、「サドと現代」（「産業経済新聞」一九五五・八・一一）でも同様の指摘がなされている。

ゾヒズム双方から考察している。「われら」を書くにあたってもサドとマゾという対立概念でサドの行為を把握していたことは、「われら」の仮題が「主人と esclave（奴隷）」[二〇]であったことから看取される。また、それ以前のフランス留学中の一九五二年三月二五日の日記でもマルセイユ事件に関し、アルクイユ事件より「サディズムとマゾヒズムの関係をあらわしているように思われる」と記されている[二一]。後の『サド伝』ではより具体的に、転化したサド自身のマゾ的行動は、陶酔を拒絶するサド的サディズムが有する「非情の眼」と同様の行為であると両者の関係を認識している[二二]。だが、創作意図にあるとおり、「われら」におけるサド的な行為は、サドもマゾも問題化できたはずの「主人と奴隷」を仮のタイトルとしつつも、草稿のテーマだと打ち明けたサディズムが中心に採り上げられている。

「われら」は二つの物語をおよそ交互に描いている。主軸となるのは、サド研究を志しフランス留学中の日本人留学生が、現代におけるサドの痕跡を見つけ出そうとする小杉の物語である。そこで「現代の悲劇」とされるサドの痕跡は、夫殺しの女の裁判記録や大戦中の拷問で精神を病んだ女性（マリ・テレーズ）などを通して探究され、もっとも直接的にサドの幻影に接近しようとする場面は、小杉が売春婦を相手にサド的行為を試みようとするものとして描かれている。いずれの場合にも「主人と奴隷」の関係が生じているはずだが、「現代の悲劇」である、夫を殺した女の経緯や小杉が売春婦を相手に情慾の行為に及ぼうとする場面は、サディズムをなすことで相手を支配する側の視点を中心に語られている。そればかりか、遠藤がフランス留学中にサドに傾倒した理由となる「この戦争の影響の下」という状況にもっとも近しいマリ・テレーズに関してはサディズムの行われた拷問については語られていない。その代わり、精神を病み同じ歌を口ずさむだけの彼女のような存在が生じた理由を理解するために、売春婦との情欲の行為に及ぼうと小杉は決意し、支配する側の心理を追体験しようとする。「われら」でも、サディズムとマゾヒズムが共犯関係にあるという指摘が精神病理を研究するジャン・ゴチエによってなされている。だが、それを聞いた小杉は、マゾヒズムを陶酔のなかで堕ちていく悦びとして捉え、それが「陰惨な人間の深淵の秘密」だと認識している。この場面でのマゾヒズムは、先述した『サド伝』での、サドがなした陶酔を拒絶する「非情の眼」がマゾヒズムにもあるという指摘とは異なる（七六～七九頁）。マゾヒズムについて、「われら」に執筆時期が近い「サド侯爵の犯罪」（『知性』一九五五・三）でもサディズムからマゾヒズムに「容易に転化することに注意を促す」という説明はなされている（一四二頁）。これが『サド伝』のようなサドが行った場合のマゾヒズムへの認識だったのか、後の『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）で問われた「陶酔のなかで堕ちていく悦び」であったのかは判断がつかない。

二〇『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、三四三頁
二一『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、二一九頁
二二『サド伝』注五に同じ、四四頁

とはいえ、一九七六年のアウシュヴィッツ訪問後、留学期にサドの本を読んでいた頃を回想し、「サディズムと対立するマゾヒスム（ママ）の原因も私にはフロイドやサルトルなどの説明を読んでも充分に理解できなかった」と打ち明けていたり[二三]、マゾヒズムの問題にも取り組んだ『スキャンダル』の続編について、マゾヒストの心理の把握が困難だとして諦めたりしていることなどからは、遠藤にとってマゾヒズムの問題に取り組むことへのためらいもあったといえる。

アウシュヴィッツ取材時の述懐に、子供がトンボの羽むしりをする感覚が、「戦争のような状況のなかで、収容所のような場所」では、大人に対しても「トンボと同じように無抵抗、無力な相手を苛める快感」が「噴出した」結果なのではないかと考え、フランス留学中には、その快感の根源の究明のためにサドの書物を読んだとある[二四]。こうした述懐からは、留学期のサドへの傾倒には、収容所での「無抵抗、無力の者を苛める心理」の解明を考えていたことが分かる。先述した、後年サド裁判で述べた「純潔をよそおう者の偽善を破壊することによって真の純潔を求めようとする思想」が、サド的行為の裏返された神に通じる道であるならば、それと収容所で行われた虐待がまるっきり同質のものであると遠藤が捉えていたとは考えにくいということにもなる。

一方で、「われら」の伏流をなすバシカの物語においては、戦争中の拷問という「現代の悲劇」を描くことに関して、拷問を受ける側の問題はマゾヒズムとは別の観点から考察しようとされている。短編「学生」（『近代文学』一九五五・四）につながるこの物語は、第二次世界大戦のフランスを舞台とし、マキと呼ばれる対独抵抗運動に参加するバシカを主人公とする。彼に尋問が行われた後、拷問の場面が書かれる前の部分で草稿が書かれたノートは欠損している。尋問する者や組織が嫌疑をかけた相手を暴力によってコントロールしようとするサディズムを、遠藤が評価するサド的行為と捉えてよいのかは小杉の場合と同様、判断を保留する必要もある。加えて、尋問・拷問されるバシカの心理については、仲間を裏切り密告することで拷問者に加担していく可能性が描かれている。被害者から加害者ともなるという側面を含んでいくこうした観点は、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）で潜伏しているロドリゴを売るキチジローにつながっていくが、バシカの心理を遠藤のサドにまつわる言及と関連付けて説明するには、別の視点を導入する必要がある。それはおそらく、小杉の場合とバシカの場合では、サド的行為における条件が異なることに由る。

サドが「特に今次大戦以後、再検討されはじめた」ことは、エリック・マルティ『サドと二十世紀』（森井良訳、水声社、二〇一八・一二）に詳しく、「戦後直後において、（略）ナチスの恐怖はサド的比喩のなかで捉えられ、理解されるきらいが」あり、ナチス的主体をサド的主体として語ることの問題が認識されながらも、「強制収容所か

二三 『心の夜想曲』注九に同じ、一二六頁
二四 『心の夜想曲』注九に同じ、一二六頁

ら来た最初の写真や最初の証言によって、サドの重大なシーンや激しい拷問の描写を読んだときの記憶と重ね合わされて」しまったのだという[二五]。同書によれば、こうした議論は、バタイユの講演「プラトニズムにおける悪、サディズムのなかの悪」（一九四七・五・一二）における質疑応答のなかで始まり、国家の残酷性とサドのそれとの問題はバタイユからドゥルーズらへと引き継がれてゆく。バタイユが強制収容所の「権力の言語」を使い「自らで暴力そのものを語ることのない」真の虐殺者と、それを語りたがるサドの虐殺者の違いを論じた『エロティシズム』（一九四七）や『文学と悪』（一九四七）は[二六]、旧蔵書として町田市民文学館に収蔵されている。久松健一「遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響―旧蔵書の調査を通じて―」（『明治大学人文科学研究所紀要』二〇一一・三）によれば、『エロティシズム』には「われら」執筆以降となる一九五七年に東京で購入したという書き込みがある。いずれにせよ、虐殺者だけでなくバシカのような犠牲者をどのように眼差していたのかについては、バタイユやサルトルが『存在と無』（一九四三）で示した政治的尋問をも対象としたサディズムの分析などを含め、遠藤が最も依拠するクロソフスキー以外の当時のサドに関する言説に留意して考察する必要がある。また、遠藤の神へ通じるネガティブの道というサドの捉え方については、留学中の『作家の日記』（一九五二・一三～一四）に「流石に面白い」、「クロソフスキーのサドと又違った解釈をしている」、「読了」と記された、ボーヴォワールの「サドは有罪か」[二七]も考慮せねばならない。ボーヴォワールは、「クロソフスキーの研究は興味深いものであるが、サドの熱情的な神の拒否を、神を必要とする人間の告白と考える時、サドを裏切るものと私は思う」[二八]と批判している。先の久松の調査で明らかだが、この文献は町田市民文学館には所蔵がなく、遠藤が「サドは有罪か」について言及するのはエロティシズムの社会化に関する部分のため検証も困難だが、こうした文献にも接していたことからは、サドの神への志向を遠藤が確たるものとしては認識してはいなかった可能性も残されるのではないか。

その後の遠藤作品へ「われら」がどのように派生していったのかについては、下野孝文による「解説」（『『われら此処より遠きものへ』草稿翻刻』遠藤周作文学館、二〇一一・三）に詳しいが、先述したとおり小杉の物語を通して取り組まれた神の否定を通して神を描くサド的信仰は、キリスト教信仰を基盤とする白人のみを登場人物とした「白い人」（『近代文学』一九五五・九、六）となって問われることになる。また、

二五　エリック・マルティ『サドと二十世紀』（森井良訳、水声社、二〇一八・一二）六九～七〇頁

二六　エリック・マルティ『サドと二十世紀』注二五に同じ、七四～七五頁

二七　「サド伝」（『群像』一九五九・九～一〇）には、一九五四年に一時間文庫として室淳介訳で出版されたものからの引用がある。

二八　シモーヌ・ド・ボーヴォワール『サドは有罪か』（白井健三郎訳、現代思潮新社、二〇一〇・一）七四～七五頁

小杉が教会の内陣でマリ・テレーズを思い聖堂で怒りをぶつけ、日本人の自分は神の存在などそもそも信じていないはずだと自分に言い聞かせた後「疲れ」を感じる感性は、フランス留学中に感じていた距離感からくる「疲れ」に起因し、後の「海と毒薬」（『文学界』一九五六・六、八、一〇）へと派生していくこととなる。このように、「われら」には後の作品のモチーフとなる要素は複数含まれているが、サド研究をする日本人留学生を主人公に書かれたという観点においては、先述した「爾も、また」との比較のなかで、資料の位置を踏まえておくことも必要となる。

第一章第一節では、「われら」の創作意図や、「われら」と同じく戦争とサドの関係について語った資料に着目し、「われら」以外の遠藤のサドに関する言及や先行研究が指摘するリベルタンとしてのサドという視点が「われら」を読み解くうえでは、そのままでは活用しづらいことを確認してきた。この点を踏まえ、次節では「われら」の内容を分析していく。

ところで、遠藤がいつから小説家を目指し始めたのかという問題についての先行研究も数多くあり、遠藤研究上の主要な論点の一つである。勝呂奏は、「遠藤周作「アデンまで」論」（『桜美林論考　人文研究』二〇一五・三）において、遠藤がフランスに留学する前年の一九四九年に、『三田文学』の「〈主として二十代の若い作家志望者を中心に運営していく〉」とする「創作研究会」に参加し、その「世話人」の一人となっていることを指摘し、「遠藤が〈作家志望者〉として加わったのか明らかにしないが、そこで世話人を務めていたことは留意すべきだろう」と述べている[二九]。大久保房男からの依頼で日本に書き送ったフランスからの通信記「フランスにおける異国の学生たち」（『群像』一九五一・九）の一部が後に長編小説「青い小さな葡萄」（『文学界』一九五五・一～六）に収められた。「われら」もまた、フランス留学中の日記を元として通信記の形式で発表された「滞佛日記」（一九五三・七～一〇、一二）との間に相関関係が確認される。まずは、日記との照合を行うこととする。

二九　勝呂奏「遠藤周作「アデンまで」論」（『桜美林論考　人文研究』二〇一五・三）二七頁

第一章　第二次世界大戦との対峙――マルキ・ド・サドとコルベ神父

第一章第二節　「われら此処より遠きものへ」――内容分析

〇、はじめに――「滞佛日記」・『作家の日記』との照合

「われら」とほぼ同時期の一九五三年に発表された「滞佛日記」（『近代文学』一九五三・七～一〇、一二）は、フランス留学中の一九五一年三月から一一月の日記という形式で書かれている。留学期の日記は『作家の日記』として一九八〇年に作品社から刊行されているが、「滞佛日記」は「悪魔的な街」リヨンを創出するための操作がなされている。両作品の相違点についての先行研究として、北田雄一「『滞仏日記』論」（『遠藤周作研究』二〇一一・九）がある。北田は、一九五三年に書かれたこの日記からその後「文学者」として立つ遠藤の意識を探っているが、ここでは「われら此処より遠きものへ」からの系譜として、サドへの興味について、「滞佛日記」から探ることとする。

「滞佛日記」におけるサド研究に対する思いが語られている箇所を引用する。なお、日付はそれぞれの冒頭に（　）で示した。

（三月三日）フルビエールの丘の向うには、サディスムのサド侯爵が刑罰をうけたピエール・シーズの牢がある。ぼくはこの街に来て、はじめて、何故サドが此の街を愛したかわかる気がした。サンジャンの教会の鐘の音さえ、時として貫らぬくことの出来ぬ、厚い靄と濃い霧に包まれたこのリヨンの異形な空気とそれに魅せられた住民の蠢きはたしかにマルキ・ド・サドの心象風景であったに違いないのである。（二九一頁）

（四月三日）ランボオというと、ぼくはどうしてもあのアフリカのジプチの光景を思いだしてしまう。ジプチにおける、ぼくの決定的な印象は〈原初的〉という事だ。神の創造の日の炎の熱がまだ残っているその原初的な恐怖である。と同時に基督が地上に生れる福音書前の救済待望の原初世界であった。今日フランスに来て八ヶ月、アフリカに対するぼくの願望は日を追って烈しくなる。何故ぼくはサド侯爵の研究を思いたったか。リヨンの街にある異常な好奇心をそそられたか。大学の講義に出席するかわりに毎日裁判所にいき、そこで妻を殺した男、幼児をガスで殺害した女の表情をある情欲にに満ちた悦びをもって眺めたか。それはすべて救済前の世界、つまり絶対に直接ふれたいと云う願望から来ているに違いない。／絶対とは二月三日の夜、ぼくがくるしく書いた日記に一部分あらわれている。／基督教が犯した罪の一つは絶対を一つの秩序化した事だ。絶対はそんな秩序ではない。それは混とんとした無秩序だ。基督教が疲れた今日、人々が社会的には

秩序を求めながら、内部的には黒い世界にはいっていくのはそこに理由がある。

（三〇五頁）

（四月五日）マルキ・ド・サドは、悪がさらに創造の権利を有する事を主張した男だ。ああ、いつかぼくがこの十八世紀の悪の神秘主義者について論文が書ける事ができるだろうか。しかし、その論文の題辞はたしかに次の句にすべきなのだ。

（就寝前、聖書をよみながら、ぼくはさらに戦慄を持ってこの句を読みかえした。／「この日、人々は死を求めて、死を見出しえず。死なんと欲せど、死は彼等より遠くに去れり」

（三〇六頁）

（七月八日）クロソウスキー「サド、我が隣人」を読み始む。今日読んだ所では、著者はサドが①ジャンセニスム的に人間を罪悪視し、②彼には神を信ぜられぬ故に③必然的に自己純化を人間の虐待（一種の自己苦行）に求めてサディズムを行ったと解釈している。しかし、もし、ぼくがサド論を書くとしたら、そうは書かない。ぼくは①サドは善の欠除として悪をみなかった。（トミスムの悪についての解釈の反対）②つまりサドは悪を不毛と考えなかった。悪を通して人間は創造しうる。悪の創造の意義を否定する基督教に挑んだ。③悪の神秘主義からスコラ哲学が規定した人間の限界を破ろうとした。こういう風に、ぼくはサドを解釈する。サドにぼく自身の思想の一部を托するように変形する。それでも構わない。

（三一〇頁）

（『遠藤周作全日記【上巻】』河出書房新社、二〇一八・五）

（点線、傍線はともに池田）

「滞佛日記」でのサドへの言及は、①リヨンとサドの緊密さ②自身のサドへの興味は救済前の世界への憧憬にあること③サドの思想が有する実践者としての「悪の創造性」に自身の思想の一部を托すということ、という観点にある。これを同時期に書かれた「われら」の場合にあてはめてみれば、①についてはサドの伝記には記述されないリヨンでのサドの足跡を小杉が調査する場面、②に関しては小杉が妻殺しの男の裁判を傍聴する場面として部分的に反映され、③について「われら」の小杉は、サドの思想に「悪の創造性」を見出せるような地点には至っておらず、なぜ自身がサド研究を思い立ったのか、サドに惹かれる理由を模索するという設定をとっている、といえる。

第一章第一節でも確認したように、「滞佛日記」の素材となったであろう留学中の日記（『作家の日記』）にも、「悪の創造性」やサドに心惹かれる理由への言及はなされていた。「滞佛日記」と留学中の日記における「悪の創造性」への言及に大きな相違はないようだが、その一方で、サドに惹かれる「黒い世界」の例には異なる表現が用いられている。少なくとも、引用にある傍線を引いた「滞佛日記」（四月三日）の「なぜ僕はサド侯爵の研究を思い立ったか」という箇所は、元となった『作家の日記』（四月五

日）では「何故、ぼくはフォンスの井戸を見たとき一つの戦りつを感じたか。妻を殺した男を裁判所で見たとき、それは、すべて『地獄の一季節』のランボオと関わりあるように思われる」とされていた。レジスタンスの同胞虐殺の痕をみた一九五一年三月のフォンスの井戸体験は、遠藤がサドの現代性を訴える際の「拷問と虐殺の時代」を象徴する。「われら」に即せば、バシカの物語で問われようとした状況に近い遠藤の原体験が、「滞佛日記」では、サドへ興味を抱いた理由から除かれているということになる。同様の変更は、留学中の『作家の日記』では「サドに心ひかれはじめる」理由とされたスタインベックの小説への言及が、「滞佛日記」では触れられていないことにも確認できる。『作家の日記』（一九五一年一月三一日）によれば、シャルリイ・ギヨの『現代のアメリカ小説』に収められたスタインベックの短編集「大いなる谷」の解説に触発され、サドに傾倒していったという。なお、町田市民文学館に『現代のアメリカ小説』(Charly Guyot, *Les Romanciers américains d'aujourd'hui* ,Paris,Labergerie,1948)は遺されているが、スタインベックのこの短編集は遺されていない。遠藤が「感動」したという短編は、邦題『長い谷間』（石川信夫訳、河出文庫、一九五四・八）に収められた「暴徒の一人」を指す。黒人のリンチに群衆の一人として加わったマイクの表情が女性との情事のあとの顔つきと似通っていることを示す短編から、遠藤は「肉慾と残酷との秘儀（略）はこの短い小説の中であきらかである」とし、「それ故にぼくはサドに心ひかれ始める」と記していた。スタインベックの短編から触発されたサドへの興味に対し、前節で確認した「われら」当時の遠藤のサドへの評価を考慮すれば、集団の雰囲気に流されるままにリンチ現場に赴き暴行される黒人を眺めている「暴徒の一人」のマイクについて、「純潔をよそおう者の偽善性を破壊する」行為として見ていたのか、また、そこに、陶酔を拒み自己を見失わず他者との拒絶を示すサドの特異性と、遠藤がどのような見解を持っていたのかということについて検証する必要も生じる。ただ、いずれにせよ、第二次世界大戦を対象にしてサドを論じることを意識的に避けていたということはいえるだろう。

また、引用した「滞佛日記」（四月三日）では、ジプチの光景と重なるランボーが描く「福音書前の救済待望の原初的世界」＝「混とんとした無秩序」の「絶対」の世界に触れたいという願望が、サド研究の動機の一部とされている。しかし、素材となった『作家の日記』（四月五日）には、ジプチの光景がランボーの『地獄の一季節』を思わせるという同じ内容が綴られているもののサドへの言及はなされていない。一九五〇年六月、遠藤がフランスに渡る船旅の寄港地で受けたジプチでの鮮烈な光景を中心に、ランボー（『作家の日記』「滞佛日記」）とサド（「滞佛日記」）が重ねあわされると

き、サドとランボーは「黒い世界」を描くからであろう[三〇]。また、「われら」と同時期の「滞佛日記」にサドが書き込まれる一方、『作家の日記』（一九五一年四月五日）に記されていた「ランボオの現代性」への言及が、「滞佛日記」（同年四月三日）からは削除されている。削除された内容は次のとおりである。

> 『地獄の一季節』に爆発する願望は、救済以前の世界に到達したいという願望である。／（略）（ランボオは、自分がハムの一族に属すること、異教徒や、ニグロの一人であることを言明した。自分は、キリストがやって来る前の人間であり、したがってキリストが自分のために死ぬということはあり得ないのだ……）（例えば、「悪い血」の詩）／これは恐ろしい言葉だ。しかし、ここにランボオの現代性、ランボオを、ぼくが、どうしてもあのアフリカでしか想いだせなかった理由があるように思われる。（三〇五頁）

「滞佛日記」において削除したのは、「ランボオの現代性」を示す福音書前の世界のイメージ、汎神の世界ということになる。「滞佛日記」での福音書前の世界が、「救済待望の原初的世界」とされることとの関係からは、「キリストが自分のために死ぬということはあり得ない」という部分を説明する必要が生じる。また、引用した『作家の日記』（四月五日）の直前には、クロード・エドモント・マニーの「ランボオ論」を参照し、『地獄の一季節』には「真の悪魔主義があったのだ。勿論、ランボオは神を信じた。しかし、それは悪魔が神の存在を信じるように信じたのである」とある。日記における遠藤が、この神への志向性を是としていたのか判断しかねるが、少なくとも、「滞佛日記」では採用されなかったランボーの「救済以前の世界」は、汎神の世界として遠藤にはイメージされていたとはいえるだろう[三一]。

神を志向する「救済待望の原初的世界」が「絶対」であることを確定させようとするためのランボーの削除―サドへの変更―とも考えられそうだが、「滞佛日記」（四月三日、四月四日）における「絶対」の意味内容はもう少し複雑である。「滞佛日記」は、『作家の日記』にしか日付が含まれていない箇所への注意書きによって、「絶対」の世界を表現してもいる。四月三日の「滞佛日記」で「絶対とは二月三日の夜、ぼくがくるしく書いた日記に一部分あらわれている」とされた『作家の日記』一九五一年二月

三〇 『作家の日記』作品社、一九八〇・九）では、アフリカ・ジプチの光景とサドの関係を明示した記述は用いられていない。

三一 『作家の日記』では、一九五一年四月五日にランボーの救済以前の世界、同年四月七日ではベルナノスのそれを「古い世界は、待つために作られた」と記している。

三日には、次のように書かれている。

2月3日（土）（略）　ぼくの世界観はやっと一つの結論に到達しようとしている。地上には色々な原素がある。各人間は各原素から生きている。ぼくの原素は、ある一つの植物や、冬眠する動物、それから湿った土に通ずる。しかしそれは、例えば行動的な人間とは本質的に通じない。そして各人はその異なった原素の宿命から逃れる事はできない。動物たちが闘うようにちがった原素の人間は孤独であり、又闘わねばならない。それは世界原初の暗い沼に似ている。ぼくはこれを今日夕飯をくいながら考えた。その途端いいようのない生のくるしさが胸にこみあげてきた。（八四頁）

日本人である遠藤が、キリスト教精神の世界との根本的な相違、自身の内部にある汎神性を自覚したことを綴った箇所である。『作家の日記』では、この自身が異教徒である「生のくるしさ」を自覚した箇所は、後に肺結核の再発を疑う症状を伴う死の恐怖を前に、恩寵なき汎神の世界をも浄化する聖母マリアの光を感じる信仰の深さとなっていったとされる（同年二月一八、一九日）。四月三日の「滞佛日記」に示されたこの『作家の日記』での日本人としての汎神傾向を救う聖母マリアの恩寵は、翌四日の「滞佛日記」に変更を伴って採用されている。

四月四日の「滞佛日記」は、福音書前の世界についてベルナノスが「古い世界は（基督を）待つために創られた」と言ったことや、教会のなかにある「秩序の世界」「マリアの浄化の世界」を思うのだが、キリスト教徒になって以降、「自分を強いて神の手にすがろう」としても、「その度にぼくの裡にある本能的なパガニズム（注、paganism 異教徒であること）」がそれを容易にせず、「基督教が疲れた」今日、インドやアフリカ（福音書前の世界）に憧れるのだといったことが記されている。よって、自身に流れる汎神の血や福音書前の世界であるアフリカへの傾倒を示す本文から、『作家の日記』に記された聖母マリアへの信頼は、「滞佛日記」では弱まっているといえる。加えて、四月四日の「滞佛日記」で「マリアの浄化の世界」は、「ぼくにとっては二月二日の死の恐怖のなかでよんだ」とされ、その後自身の有する汎神性が言及されている。留学中、肺結核再発の恐怖を前に聖母マリアの浄化に救われたことは、前述したとおり二月一八、一九日の『作家の日記』に綴られている。変更された二月二日の『作家の日記』は、次のような内容である。

思索すべき事。／群集心理の探究　チボン（ママ）の本をよむ事　暴力について　階級闘争の問題　暴力は暴力を生むか。／サンテレーヌ街の前で、一人の老婆の前に、二人の若い婦人が看護していた。彼女たちの自動車が老婆にぶつかったのである。

老婆の顔は血で真赤になり石畳の上にも血は水溜りみたいに流れていた。／夜、ブロオ師に日本からの金をうけとりにいく。かえり道に迷って霧のたちこめたフルビエールをぐるぐるとまわった。　（八三頁）

四月四日の「滞佛日記」で言及された「死の恐怖」はスタインベックの小説に描かれる問題を指す。一九三〇年代の大恐慌下のアメリカのリンゴ農園で、移民たちが低賃金で過酷な労働に従事させられていることによるストライキを描いた『勝敗の分からぬ戦』（邦題『疑わしき戦い』廣瀬英一、小田敦子訳、大阪教育図書、一九九七・五）を、遠藤がちょうど読んでいた時期の日記である[三二]。翌二月三日には『勝敗の分からぬ戦』を読み終え、「この書物は、群集心理を（略）みごとに解剖している。群集心理――例えば血と暴力の問題――については二月中の課題の一つにしたいと思う。群集はそれを構成する人間とは全く違った存在である事、それは別の生きもの（Animal）である事をこの本はぼくに教えてくれた」と綴っている。つまり、「滞佛日記」のいう「マリアの浄化」を思い浮かべた「死の恐怖」は群集を対象とした死の問題へと書き換えられていることになり、『作家の日記』で自らの病気による死の恐怖を救ったマリアの恩寵ではなく、日本人である自身の汎神傾向が教会でミサに与りながらも内から湧き上がってくる感覚が描かれていく。

『作家の日記』は「滞佛日記」発表時には公表されておらず、「滞佛日記」自体、体調不良により途中のまま発表するとされる作品なので、こうしたテクスト内部に含まれない日付をどのように解釈するのかに唯一の正解はないのだろうが、いずれも確認することのできる状況にある現在において、テクストに書き込まれた日付をもとにたどることは、解釈の可能性を考察するうえでは必ずしも否定されるものでもないだろう。そのうえでこれまでの確認を整理すると、「滞佛日記」の「絶対」は、「福音待望」が約束されているのかは不確定な福音書前の汎神の世界も、その意味するところに含まれる可能性がある。もしくは、福音待望、つまり神に通じるかどうか判断を迷うなかで書かれた福音書前の無秩序の汎神の世界が、「滞佛日記」の「絶対」であった可能性が残されるということになる。

一、サド研究とアフリカへの憧憬

「滞佛日記」で示したサド研究を深めることによって触れることのできる「絶対」（原初の世界）が必ずしも神に通じる世界ではないという認識は、エッセイ「沈黙の

三二　旧蔵書は町田市民文学館に所蔵されている。久松健一監修『町田市民文学館蔵　遠藤周作蔵書目録（欧文篇）――光の序曲』注一六に同じ、七九頁

声」（『ユリイカ』一九五七・二～四、六）で論じられている。「沈黙の声」でも遠藤自身の渡航体験を元にリョンとジプチ（原初の世界）の結びつきを求め、その結び目の一つにサドを置くが、「滞佛日記」のようにサドの悪の創造性には言及していない。そればかりか、原初の世界に生じた永劫回帰を繰り返す悪―サドの自然観―を反転させるには「新しい沈黙の声」の導入を必要とするとし、黄色人種の自身がアフリカに象徴される原初の世界を志向する理由を自問するエッセイとなっている。

「沈黙の声」に引用されるエリアーデ『永劫回帰の神話』（堀一郎訳、未来社、一九六三・三）は、原初的世界で行われた「祖型の模倣と典型的なしぐさの反復」によって現代の宗教的行為は行われていることを指摘している[三三]。永劫回帰説におよそ近しい考えは「われら」にも挿入されているが（七八頁）、「われら」（一九五三）執筆と同時期に近い「滞佛日記」では原初世界に触れられるサドの思想に希望を見出すものの、「沈黙の声」ではサドの思想を悪魔的なものに固定している。フランス留学期のサドへの傾倒を反映させた「白い人」（『近代文学』一九五五・五、六）やその後の『サド伝』（『群像』一九五九・九～一〇）では遠藤がサドに神に通じる否定の道を見ていることを踏まえれば、「沈黙の声」でのサド評価は意識的な書き分けだといえる。遠藤研究において実践者としてのサドへの関心は、主にサドの「純潔をよそおう者の偽善性を破壊」し新たなモラルを模索する挑戦、「悪の創造性」は神に通じる可能性を模索したものとして扱われてきた。だが、そうではない可能性も残されていることは確認されるべき点だろう。

また、一九五〇年からのフランス留学中に遠藤がサド等へ傾倒し、「肉」の問題に迫ろうとしていたことについて佐藤泰正は、「絶対」と呼ばれる「「混とん」たる「人間内部の原部」に遡ることこそ文学者本来の課題」であり、「〈肉〉の秘儀を経ずして、その「混とん」に迫ることはできない」としている[三四]。この指摘に異論はない。だが、「人間内部の原部」について、「沈黙の声」や「滞佛日記」での原初的な世界への言及から整理すると、無秩序の世界というだけでなく、汎神の世界と言い換えることもできる。とすれば、「われら」の主人公は小杉である。そうした日本人を主体としたとき、肉の秘儀を経ないと到達できない場所として認識されていたのか疑問は残る。また、「絶対」につながるためにサドを通じて探究する現代的な「肉慾と残酷との秘儀」に対しては、留学中の日記（一九五一年二月一日）で今日的な小説の課題だとした「群衆」の問題への取り扱いに苦慮していたであろうことが、留学期の『作家の日記』と「滞佛日記」の比較から窺える。よって、「絶対」の世界をどの位置から切り取ろうと

三三　ミルチャ・エリアーデ『永劫回帰の神話―祖型と反復』（堀一郎訳、未来社、一九六三・三）四九頁

三四　佐藤泰正「『青い小さな葡萄』をどう読むか」（『作品論　遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・一所収）六〇頁

していたのかについて、研究を深める余地は残されていると考える。

そうした地点から、「われら」で取り組まれた「サディズムを現代の悲劇に浮かび上がらせる」という試みがどのように描かれようとしたのか、後の「爾も、また」との比較も交えて考察する。

「われら」の小杉が着目するサド像は、前節でも確認したとおり『サド伝』で芸術家サドになる前の時期だと指摘されるアルクイユ事件とマルセイユ事件に代表される実践者としてのサドの前半生である。サドの性的倒錯行為を象徴するこの二つの事件に見られる特徴は、『サド伝』では「肉欲のなかでも自由と主体性を保つこと、非情な眼を失わなかったこと、罪の意識によって消えやすい情慾を継続させようとしたこと」にあるとし、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが指摘した「エロティスムの社会化」に倣い、それらの事件に代表される性的行為は、「孤独な生物的な行為」ではなく、「一人でも多くの共犯者を作ることによって自分の執念を社会化しよう」とすることで、「その饗宴の演出者、独裁者となることがサドの理想であった」と述べられるが[三五]、サドを研究する意義を明瞭には語ることのできない小杉が、サドの起こした事件をそのように抽象化して語ることはない。

女性関係に対して「特に慾望も強くなく、女に（略）暴力を強制したい、（略）といふ嗜好が（略）あったとは覚えがない」小杉に認識されるのは、「いつから自分がいびつなほど、サドに執着しはじめたのか、自分でもわからなかった」（三一頁）という言語化されぬものだと物語の序盤で語られる。作中、自己とはほど遠いサドに執着する理由への自問は繰り返されるが、不明瞭だとはいえ小杉の認識として語られるその理由は、「陽の光の乏しい、霧と雲とにつゝまれたリヨンが俺をかうさせたのだらうか」（四六頁）という、留学体験を土台とした初期エッセイや「われら」の書かれた一九五三年に発表された「滞佛日記」（『近代文学』一九五三・七～一〇、一二）で繰り返される魔都リヨンの誘惑である。エッセイ「沈黙の声」ではリヨンを離れることになっても「彼（注、リヨン）が教えてくれたもの、彼がささやいてくれたものはそこに住んだものから消えることはない」[三六]とされている。長濱拓磨は、作品舞台そのものが遠藤作品の「劇」を創るトポスであると指摘しているが[三七]、「われら」にもすでにその傾向が表れており、小杉は、彼の意識に届いているのかは不明瞭な視点から語られる「サドは彼を呼んでいる。彼に何かを教へようとしている」（三一頁）「何故か知らぬがサドは、遠くから彼を呼んでいた　彼に何かを教へようとしていた」という声に

三五　『サド伝』注五に同じ、四五頁
三六　「最終回　沈黙の声」（『ユリイカ』一九五七・六）五一頁。魔都リヨンへの遠藤の興味は、今井真里『それでも神はいる』（慶應義塾大学出版、二〇一五・八）に詳しい。
三七　長濱拓磨『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として』（和泉書院、二〇一八・二）三六頁

促されながら、フランスでのサド研究を進めることとなる。

そうした小杉にとって、創作意図でもあり、小杉のサド研究の理由ともなるサディズムと二十世紀の関係は、「廿世紀は俺たちのサディズムやマゾシスム(ママ)の慾望をあばいた」(八一頁)、「サドは十八世紀か廿世紀にしか存在しえない人間なんだからな。俺がさがしてゐるのは、そんな廿世紀のみが遂に創りあげた人間の悪魔の像なんだからナ」(八八頁)という表現で結びつけられる。前者は小杉がサド研究の一助としようとした「内気なオド、オドとした(略)普通の青年」(七九頁)が許嫁である「タイピスト娘」(七三頁)を殺害してしまう「可能性」について小杉が思いめぐらせているときに聞こえてきた「声」(八一頁)であり、後者は、サド研究を進める小杉が現代のサドを見いだせずにいるときに「うまく云へなかった」としつつも小杉自身が発した言葉として語られている。「十八世紀と廿世紀にしか存在しえない」サドという「人間悪魔の像」(八八頁)の存在意義について小杉が語ることはない。前節で確認した、フランス革命下でのサドを評価するクロソフスキーの主張を、二十世紀の第二次世界大戦下の状況に置換した場合について、遠藤自身がエッセイや日記等で言及してはいないことを踏まえれば、「われら」でサド研究を進める小杉の物語で二十世紀におけるサドの必要性のみが語られてしまうのも当然のことだといえる。

とはいえ、そうした小杉の研究によって浮かび上らせようとするサドの幻影は、アルクイユ事件やマルセイユ事件を犯したサドであり、「滞佛日記」等と同じ、後の『サド伝』の表現でいえば「実践者」としてのリベルタンの姿である。小杉は、伝記研究上の空白地点であるリヨンで、サドがアルクイユ事件やマルセイユ事件と同等の行為をなしていないか明らかにすることを自分の研究の目的とし(二九頁)、身体を売る「エバとの行為をサド研究の一助としたい」として彼女を買う(一二三頁)。それは当初「観察のため」だったが、その目的を自覚できぬまま「変更」し実践に踏み出そうとする(一三〇頁)。これらは、遠藤が『サド伝』で評価し「爾も、また」の田中に託した芸術家としてのサドの基盤となる、実践者としてのサドの行為を生きようとする試みである。サドの後半生、芸術家サドを視野に入れる「爾も、また」のように、「書くという行為」への興味が中心的な課題であると読み取るとすれば、小杉が「サド研究の手がかり」にすべく「中世を思わせる殺害事件」(七三頁)や先の大戦での拷問によって狂女となったマリ・テレーズについて「書きつらねた(略)ノート」を自分の留学中の成果だと認識する点になるが(八四頁)、小杉はこのノートについて「何のために俺はこれをやる?」と自問し、「ノートは何も語らない」という(八五~八八頁)。そうしたなか、「われら」の小杉のサドへの接し方の特徴として指摘できるのは、「悪魔的な都市」リヨンと実践的リベルタンとしてのサドの結びつきを自身のなかで確たるものにすべく、リヨンでのサド痕跡を見つけ出そうとする点にあり(二七頁)、さらには、小杉自身がエバを相手に実践にふみだろうとする点にあろう(一三〇頁)。ただ、

エバとの行為は、「滞佛日記」のいう「絶対」の世界に通じる「最後の深淵におちる」ものとされるが、結局は飛び込めない、というところに留まる。ただ、小杉が唯一母国語を発するのが、このエバに逃げられそうになった場面である（一一八頁）。一九五〇年～一九五三年のフランス留学で、西洋との距離感を深めた遠藤において、実践者サドの行為を追体験する場面で母国語を発するという選択がなされたのは、「爾も、また」の田中がフランス留学に来た日本人がフランスで日本語をほとんど使わないという指摘をしていることとの比較から考えても特徴的な表現であるが、まずは、最も実践者サドに近づこうとしたエバとの行為に及ぼうとしたことについて、前節で確認した事柄を踏まえ考察していく。

エバとの行為は、『作家の日記』にある「肉慾と残酷との秘儀」を通じてサドの世界に近づく行為である。これは、後に「白い人」（『近代文学』一九五五・五、六）の神学生ジャックに託して創作に活かされるとされるが[三八]、キリスト教の枠組みのなかの世界を設定した「白い人」ではジャックのサディスティックな行為が裏返された神の求めであったといえたとしても、「白い人」以前に取り組まれた「われら」で、キリスト教を信仰していない日本人の小杉が、フランスにおいて日本語を発しながらサド的行為を実践しようとする先には、何が求められているのだろうか。「われら」のエバは、「白い人」でいえばマリー・テレーズのようなサドが憎悪した純潔の象徴でもない。とすれば、「われら」において「肉慾と残酷との秘儀」を通して確かめる何かは、遠藤が評価しているサドの信仰とも異なるものとして創られているということになろう。「われら」に執筆時期の近い「滞佛日記」では、サド研究は救済以前の「絶対」の世界である「アフリカ」に通じるとされていた。前節ではこの「救済前の世界」には汎神の世界が含まれる可能性があることを指摘した。「われら」は日本人主人公を設定したことによって、「アフリカ」が「福音待望」の世界であるという道筋は、必ずしも約束されたものではない可能性をより一層含むことになる。

小杉は「サドみたいな男」に会うことが出来たら「フランスでの仕事」は終わり、「アフリカへ行くよ」（八七頁）と述べる。小杉の視点で語られるこの箇所は、次のような執筆過程を経た本文である。

「俺、サドみたいな男に会ってみたいナ。中それが出来たらくもう日本に俺のフランスでの勉強目的は俺日本へかえる事。」アフリカへ行くよ」

（八七頁）

フランスでの仕事は終つた。

三八　笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・一一）七五～七七頁。菊田義孝『遠藤周作論　かれは、なにを書かなかったか…』（永田書房、一九八七・一〇）六〇頁。佐藤泰正「『青い小さな葡萄』をどう読むか」注三四に同じ、六〇頁。

（注、「われら」における取り消し線等は本文に拠る。以下同）

（注、引用の一行目は、二行目「く」に挿入）

現代における「サド」への接近が叶った暁には「日本へ帰る」としていたものを、「アフリカへ行く」と修正している。「滞佛日記」で「アフリカ」が「福音待望」の世界とされるのは、旧約聖書におけるハム族、神との約束を破ったために呪いをかけられた罪深きカインの土地がアフリカだからである。日本人留学生が、救済前の原初の世界である「アフリカ」に渡るとすれば、日本人という新たな「原素」が救済前の世界に加わることとなる。言い換えれば、サドの自然観に託す範疇を超えた「原素」が加わった「絶対」の世界が顕現することになる。キリスト教とは異質な「原素」としての小杉という存在は、小杉がサド的行為を実践しようとする相手が、純潔の象徴ではなく罪の象徴であるエヴァ、クロソフスキーの「わが隣人サド」から遠藤が学んだとされる「肉慾に引きずり込む女性」であることにも表れている。小杉はサド研究を通じて神を求めたのではなく、無秩序の絶対の世界に触れることに臨んでいるのである。ただし、サド研究を通じて神を求めたのではないというのは適切ではなく、汎神性を認めない一神教の神の救いを無秩序の絶対の世界のなかに救いを求めたのではない、といったほうが適切かもしれない。

先に確認したとおり、「滞佛日記」において遠藤は無秩序の絶対の世界を「福音待望」と表現した。サドが「自然のもつ残酷さ、無償のエネルギー」（『サド伝』）を肯定するのも、全知全能の神が創ったこの世界にそうした自然が存在しているという前提があってのことであれば、「福音待望」という言い方は不自然ではないのだろう。『作家の日記』や「滞佛日記」で絶対の世界に触れようとした参照例としたサドやランボーについて、遠藤が「神を捨てたのではなく、神にたえず嫉妬し神にかわろうとした」とエッセイ「文学とキリスト教」（『文学界』一九五五・四）で述べていることも、サド研究で近づける絶対の世界が、福音待望というキリスト教の枠組みのなかにあることを示している。それに対し、「われら」の小杉は日本人である。繰り返しになるが、「われら」において、そもそも異質な汎神的「原素」である小杉が、無秩序の汎神傾向を含む可能性のある絶対の世界に触れようとする場面が描かれることにはどのような効果が期待されていたと考えられるのだろうか。このことを考察するには、当時、日本のキリスト教が中心としていたトミズムと汎神論の関係を確認しておく必要がある。

遠藤の初期評論には、学生時代を過ごしたカトリック寮の舎監であった哲学者吉満義彦から学んだトミズムの影響が強く表れているが、日本人がトミズムを受容することの難しさについて、後年、湯浅泰雄との対談「ユングとキリスト教」のなかで、「長いこと日本のキリスト教徒」が「訓練」させられてきたトミズムの、「人間と神との間に（略）存在の秩序を設け、（略）絶対に人間と神との間に越えることのない距離を置

くという考え方」は、日本人には合わなかったと述べている。そして、トミズムを中心に教えられたキリスト教の考え方のなかには汎神傾向が認められる余地がなかったことに言及し、いわゆるヨーロッパのカトリックを西方キリスト教、オリエンタルのキリスト教を東方キリスト教と分け、次のように述べている。

（注、フロイトは）一神教のにおいがプンプンとして、パンテイズム（汎神論）の要素はほとんど排除されている。ところがユングの場合は、パンテイズムが入り込む余地が随分あるわけで、ですから日本人にとって距離感がフロイトに比べるとずっと少ないような気がする。（略）今のキリスト教というのは、（略）モノテイズム（注、一神教）とかパンテイズムとかをあまり問題にしなくなってきた。第二次大戦以後の特に一九七〇年以降、西洋のキリスト教自体が没落しはじめ、オリエンタルの方のキリスト教に関心が向けられてきた。オリエンタルのキリスト教は、パンテイズムとモノテイズムの折衷のすれすれのところですからね。そういう意味で東洋人の感覚をもちながら、キリスト教ということに関心のある者にとっては、フロイトよりユングの方が近い。ユング自体が、東方キリスト教に近いでしょう。／（略）先生の『ユングとキリスト教』の中で、「無意識」に対して、フロイトはネガティブな病的なものという評価しか与えなかったけれども、ユングの方が創造的な価値を与えたと書いていらっしゃる。そこですね、つまり、東方キリスト教と西方キリスト教の大きな違いは。無意識というものに、今までのキリスト教だったらそれほど価値を与えないと思う。東方キリスト教の場合、無意識に神の恩寵が入っている。救いの何かがあるようなものを与えてくれる。

（『プシケー――日本ユングクラブ会報――』（一九八三・六）九～一〇頁）

遠藤がサドに見出した悪に対する肯定的な見方や創造的価値を、後年ユング心理学にも感じ勉強し始めたのは一九八一年前後からだが、ユング心理学に含まれる汎神傾向を含む東方キリスト教には、「無意識に神の恩寵」や「救いの何か」があるとし、逆に、無意識に「ネガティブな病的なものという評価しか与えなかった」フロイトを「一神教」、「西方キリスト教」、「今までのキリスト教」的だとしている。そうした汎神的な要素を介在させない「西方キリスト教」的な信仰が、「われら」執筆当時の遠藤が向かい合っていたキリスト教の考え方である。「われら」では、そうしたキリスト教にサド研究を通じて接近する日本人小杉が、アフリカへ行くことを選択させられるのである。仮に、ユングに対する評価と同様に捉えるなら、汎神性を介在させた絶対の世界であるアフリカに、異質な汎神の「原素」である小杉をおき、そこに「救い」があるのかどうかを試そうとした、といえる。

また、「われら」執筆から二年後のエッセイとなるが、前述の「文学とキリスト教」

において遠藤は、モーリヤックの「人間のドラマは悪と恩寵との闘いである。」「カトリック文学はそのドラマを書かねばならぬ」という言葉を引用している。「われら」でえば、サド研究やアフリカで触れられる無秩序の絶対の世界に神の救いは働くのかどうかを描く、ということになろう。だが、「悪と恩寵」といった対立を日本人作家が形而上的に描くことは難しい。そのことを踏まえ、日本人のカトリック作家である遠藤自身の今後の方針を、次のように述べている。

ぼく等と雖もその対立をはじめることができる。ぼくらの世界を神が「ない」凹の世界とし、それを神のあった彼等の凸の世界に徹底的に対立させることである。徹底的というのは、今日までわれわれの先輩たちが犯した過ち、凹の世界に凸があるかのように錯覚する一切の思考方法を抜きとることである。ぼくらは基督教文学を自己流に考えたり、あるいは敬遠すべきではない。このぼくらからもっとも隔たったものこそ、ぼく等を圧迫してくる最大のものである。／シャルトルやブルジェのカテドラルはぼくらに決して無縁ではない。その色硝子はさまざまの反省を強いるのである……

（引用は椎名麟三他編『現代キリスト教文学全集第一八巻』（教文館、一九七四・七　二五頁）

キリスト教は日本人に「決して無縁ではない」という。「神が「ない」凹の世界」と「神のあった彼等の凸の世界」を「徹底的に対立させること」によって、悪対神、人間対神といったキリスト教文学における対立のドラマを描くことができるとしている。「われら」で試みられたのも、救済前の絶対の世界に存在する小杉という日本人に神の救いは生じるのかという、神対悪（無意識）の対立のドラマを描くことができるかどうか、ということであったのではないか。そのドラマを描くために、汎神論が入り込む余地のない当時のキリスト教の救済前の絶対の世界に、遠藤は汎神傾向を付け加えようとしたと考える。

「われら」の作品舞台が、汎神性を有しそれを意識した日本人が一神教と向き合う世界であると考えるのは、「われら」には「滞佛日記」に記された「サン・ジャン教会」と「サン・テレーヌ教会」のうち「サン・テレーヌ教会」しか描かれないことにも関係している可能性がある。小杉がキリスト教に正面から接し教会の内陣で祈るのも、サドのような行為の実践をとおして裏側からキリスト教に接しようと試みた相手のエバが、小杉を「見捨てて歩きだした」先も「サン・テレーヌ教会の穴のやうな暗闇のなか」（一一六頁）とされている。一方、『作家の日記』では「サン・テレーヌ」は街路名として二回登場するのみである。教会として記されているのは「サン・ジャン教会」で、リヨン旧市街にある黒ミサも行われた悪魔的な街リヨンを象徴する教会とし

て「教会の裏（略）気味のわるい家が多い」といったふうに書かれている[三九]。「われら」の草稿では、いかにもサドの世界を描くのに適していそうなサン・ジャン教会を、いったんはノートに書きつけ、それを削除した後に、「サン・テレーヌ教会」として設定しているのである（七〇頁）。

「滞佛日記」（一九五一年三月三日）の「サン・ジャン教会」は、「厚い靄と濃い霧に包まれたリヨンの異形な空気」を「時として貫くこと」ができない「鐘の音」を街に響かせる教会とされている。サン・ジャン教会は、フルビエールの丘を下りた旧市街に位置するリヨン最古の大聖堂の一つであり、一四世紀から時を刻む天文時計を備え、定刻になると時計が音を鳴らすそうだ。「滞佛日記」（一九五一年七月九日）ではそうした「サン・ジャン教会」で、流れているフォーレの鎮魂曲を聴きながら日本人留学生「ぼく」は、十字架を見つめ「この教会に祈りにくる者という時、それは（略）子供を自分の情欲のために殺したイボンヌのような女を人間というのであり、その吐息、その過ちのために基督はいるのだ」と思う[四〇]。それは、いわゆるキリスト教における神対人間の「肉」の問題への救いを祈る場である。「滞佛日記」での「サン・テレーヌ」の教会も「リヨンで最も古いものの一つ」であり、そこでキリスト教信仰について告白する場面が設けられているが、かたやその告白は、日本人留学生の神を求める心に潜む「裡にある本能的なパガニズム」、汎神性の自覚と、現代のフランスにおけるキリスト教へのネガティブな印象からくる「福音書前の世界」への憧れへの思いである[四一]。このことが書かれた「滞佛日記」は、前節で『作家の日記』との比較から、遠藤が「絶対」の世界に汎神の世界を想定していた可能性を確認した箇所である。繰り返しになるが、前節ではまとまった引用はしていないので、該当する「滞佛日記」（一九五一年四月四日）を引用する。

> 朝、サンテレーヌの教会のいつものミサにあずかりながら、ミサのたびにぼくは「福音書の世界」の前にプレ・エバンジイルの世界のあった事を考える。／（略）しかし今教会のなか、ぼくの前にあるのは秩序の世界（この教会はリヨンで最も古いものの一つだ。そのローマ的なスタイルと共に）音楽の世界（バッハのミサ曲……）マリヤの浄化の世界である。ぼくにとっては二月二日の死の恐怖のなかでよんだ世界である。／改宗してから幾度、ぼくは自分を強いて神の手にすがろ

三九『作家の日記』における「サン・ジャン教会」への記述は、一九五一年一月三一日、二月一日、七月一八日、一二月二日、一二月二九日にある。留学中の「下宿」が「サン・ジャン教会の近くにあった」という（「第二回　沈黙の声」（『ユリイカ』一九五七・三）五五頁）

四〇「滞佛日記」『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、三一一頁

四一「滞佛日記」『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、三〇五～三〇六頁

うとしたか。しかしその度にぼくの裡にある本能的なパガニズムは……。／今日、基督教は疲れた。文化と共に。フランスに来てぼくのみたのはそれだった。人々は印度の中に（あそこで人々は眠ることが出来るのだ。永遠に眠れるのだ。）あるいはアフリカに（福音書前の世界）に憬れている。　（三〇五～三〇六頁）

「滞佛日記」でのサン・テレーヌ教会は、キリスト教の秩序の世界・マリヤの浄化の世界が眼の前にあることを理解しつつ、自分のなかの汎神性や福音書前の世界があったことを思い、インドやアフリカに憧れる場である。また、前節で確認したことだが、引用にある「二月二日の死の恐怖」は「滞佛日記」本文に参照箇所はなく、『作家の日記』から辿るとすれば、「群衆心理」や「暴力」「階級闘争の問題」が露にする「死の恐怖」を指す。それは、「われら」執筆にあたっておそらく遠藤が『作家の日記』を素材に「滞佛日記」を書くにあたって明示的に表現することを除外した、スタインベックの小説が示す現代的な死の問題であった。

また、こちらも前節で確認したことだが、「滞佛日記」（一九五一年四月四日）は『作家の日記』同年四月七日を素材として書かれている。『作家の日記』では「二月二日の死の恐怖」ではなく「二月一八日」の死の恐怖のなかでよんだ「マリヤの浄化の世界」とされていた。それを「二月二日」に「滞佛日記」では書き換えている。このことによって、『作家の日記』において「サン・テレーヌ」が登場する二箇所、一九五一年二月二日と四月七日すべてが「滞佛日記」に取り込まれることとなる。『作家の日記』における「サン・テレーヌ」の表記がある素材を意識的に参照していた表れと捉えられる。そのサン・テレーヌ教会のみを「われら」の舞台としたことは、前節で確認した「われら」と同時期の「滞佛日記」においてサドへの興味を抱いた理由を語るにあたっては暗示されるに留まった、「群衆」を対象とした「拷問と虐殺」の問題を、バシカの物語だけでなく小杉の物語にも組み込もうとしていたといえる[四二]。また、神への祈りが、自身の汎神性ゆえに救済前の「絶対」を志向するものになる場が「われら」では「サン・テレーヌ教会」とされるのは、エッセイ「沈黙の声」で述べたキリスト教の永劫回帰の神話を象徴する「サン・ジャン教会」から離れ、日本人である小杉が接する汎神の世界がキリスト教の神に通じる可能性を高めるためであったのではないかと考える。

四二　内藤千珠子「暴力」によればトラウマ研究の名著ジュディス・L・ハーマンは、「戦争のサバイバー（生存者）と性暴力のサバイバーとが同一の経験をもつということは性暴力の被害が戦争の死傷と等しいという点に、強く注意を促している」という（飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック　日本近現代文学の読み方』ひつじ書房、二〇二三・五所収）一七二頁。「われら」の小杉とバシカの物語は、トラウマ研究が示すところの戦後の課題に取り組んでいるともいえるだろう

繰り返しになるが、「沈黙の声」（『ユリイカ』）は「われら」が書かれた四年後の一九五七年の発表だが、「われら」に近しい時期にサドに言及したもののなかでは、神へ通じるネガティブの道について言及されていない例外的なものである。「沈黙の声」は、エリアーデが『永劫回帰の神話』で説いた、原初的世界で行われた「祖型の模倣と典型的なしぐさの反復」によって現代の宗教的行為は行われているという理論を参考に、救済前の世界（アフリカ）への憧憬を語っている。「沈黙の声」でのリョンは「必ずしもサド（略）のように暗い面ばかりを主張する」のではなく、その街の歴史が「ある存在原型の繰りかえし」によって作られていることを「主張」する街だとされている[四三]。この「ある存在原型の繰りかえし」によって歴史が作られるという見解が、エリアーデの永劫回帰神話からの援用である。「沈黙の声」において存在原型は、善も悪もあるとされている。そのため、「原型と繰り返し」によって歴史が作られる「リョン的な思考方法」において、サドに見られるような「悪」の原型は、「たんに繰りかえされるだけではなく、繰りかえされると同時に再生」されなければならず、再生するためには「新しい声」の導入が必要だと述べている[四四]。このキリスト教における存在原型の繰り返しを象徴する風景が、十四世紀から時を刻む天文時計を備え、現在でも一定の祈りの時刻に鐘を鳴らすサン・ジャン教会である。エリアーデは、宗教的行為は、一年の節目ごとにその宗教が誕生した原初の世界での出来事を模倣した大切な儀式を繰り返すことによって成立しているとしている。「滞佛日記」では「サンジャンの教会の鐘の音さえ、時として貫らぬくことが出来ぬ、厚い靄と濃い霧に包まれたこのリョンの異形な空気とそれに魅せられた住民の蠢きはたしかにマルキ・ド・サドの心象風景であったに違いない」とされていた[四五]。こう書いた「滞佛日記」では、キリスト教信仰とサドの思想は対立するものとして捉えられているが、「沈黙の声」では、キリスト教信仰に繋がる原初の世界の出来事（原型）もサドに通じるそれも、原初世界にある原型としては善か悪かの違いがあるだけで、歴史を変えるなら「新しい声」を導入するしかないとしている。原型の繰り返しが歴史であるなら、「新しい声」は原初世界における新しい原型ということになろう。

「沈黙の声」には、「リョンという一九五〇年代の街」と、「存在の原型を教え」てくれたアフリカがどのように結びつくかが、「あの時ようやくわかりかけてきた」という記述がある[四六]。善にせよ悪にせよ反復される歴史を変える新しい原型として目されていたのは、おそらく「アフリカ」である。そのため、「沈黙の声」では留学当時住んでいた場所近く、裏には黒ミサの印象を与える家々があり、毎日一定の時刻に祈りの

四三 「第四回　沈黙の声」（『ユリイカ』一九五七・五）二六～二七頁
四四 「最終回　沈黙の声」注三六に同じ、五一頁
四五 「滞佛日記」『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、二九二頁
四六 「第四回　沈黙の声」注四三に同じ、二八頁

鐘の音を町中に響かせる「サン・ジャン教会」だけが登場する。それは、「マリアの浄化」の世界であれサドの世界であれ、キリスト教という枠組みの中で反復された原型の歴史である。「滞佛日記」で汎神の世界を自覚したサン・テレーヌ教会が、「われら」でサド研究をする小杉が現代の悲劇に対し祈る場として選択される。遠藤が憧憬する「アフリカ」は、自身がフランスへ渡る「汎神の世界がこの風土からどうして生まれるのかを考えた」（『作家の日記』一九五〇・六・二九）ジプチの光景である。サド研究を深めることによって「絶対」の世界に触れたいと考えた時期に書かれた「われら」にサン・テレーヌ教会が舞台として選択されるのも、「絶対」の世界に汎神の世界を組み入れていくためだった可能性がある[四七]。

こうした「われら」での取り組みを経て、サド研究を通じて異教徒としての日本人とキリスト教精神の異質さを描くのが「爾も、また」（『文学界』一九六四・二～一九六五・二）である。以降、「爾も、また」との比較を通し「われら」の内容について考察する。

二、「爾も、また」との比較

「爾も、また」における遠藤のサドへの興味は、「爾も、また」に一部本文が引用された『サド伝』で重要視された芸術家としてのサドによる「書くという行為」を中心に語られてきた。前述のとおり、「われら」にもその側面を取り入れようとした形跡は窺える。「われら」も「爾も、また」も、日本人留学生がサド研究をする意味を追求し、彼等の取ったノートにサド研究の証があるという同じ設定をとっている。ただ、「爾も、また」の田中が功利的側面からしかサドを研究する理由を自覚できず、キリスト教会を観光客の目線でしか眺められない日本人として創られるのに対し、「われら」の小杉は、田中と同じように大聖堂などを「美術的な観察」で眺める「傍観者」の一面はありながら、東西の距離を超えてサド研究やキリスト教会の底にあるものに迫ろうとする日本人として描かれている。小杉も大聖堂を「旅行者の興味や美術的な観察」から「傍観者」としてしか眺めることのない日本人である。ただし、小杉はサド研究の対象としたドイツ人に「拷問され、発狂したマリ・テレーズ」を存在させる「人間世界」について、十字架の前で「心の中でわめき」続ける存在として描かれる。異教徒であることを自覚する小杉は、サン・テレーヌ教会の内陣で「心の中でわめき」続けた後、

四七　エリック・マルティは、「クロソフスキーはサドを原始キリスト教の思想、マニ教的霊知（グノーシス）の思想と邪悪神の神学に結びつけた。概して言えば、サドの無神論を単なる仮面にすぎないものとしてしまった」と指摘している（エリック・マルティ『サドと二十世紀』注二六に同じ、六〇頁）。遠藤は、クロソフスキーからサドの思想を受容したが、管見ではこうした点には言及していない。

「俺はもともと、十字架など、信じていないのにネ。神など信じていないのに。」と呟く[四八]。西洋との距離感を抱く小杉を描きつつ、教会の内陣でマリ・テレーズのような存在を生んだ世界を認めた神に怒り、神の沈黙に対して涙する青年として創ろうとする。そして、小杉が涙する場面は、次のように書かれた。

小杉は歩きながら泪が出た。なぜかしらぬが泪がでた。ろうそくの□炎が陰□微に照らしあげている十字架、十字架に釘うたれ、力つきのめ前のめるやうにして息たへている「者」の像、そして彼が心中に叫んでも、それをハネかえした夜の内陣の厚い壁（貴方は答へてくれなかつたからナ。貴方は存在しない□□かたくなに永遠に黙っていたからナ。俺だけぢやない、あの殺人青年が、マリテレーズが呼んだ時さへも、□黙り答へてくれなかつたからな。幾世紀も幾世紀も、今度も、未来も黙っているだらうからな）　（一二〇頁）

「傍観者」を自覚する小杉が十字架を前にして怒りを訴え涙するのは、現代のサド的人間として小杉が調査対象とした殺人青年と、先の狂女マリ・テレーズに対してであり、彼／彼女らのために、小杉は教会の内陣を思い浮かべ涙するまでになる。草稿からは、異教徒としての日本人留学生小杉に関する「不信仰な日本人である小杉は、かうした教異国にあつてかうした教会や、教カテドラールを旅行者の興味や美術的な観察以外で訪れたことはなかった」という記述をすべて傍線で消し、「傍観者として」のみを書き加えていることが分かる（一一〇～一一一頁）。「爾も、また」ではサン・トロカデロ教会を旅行者として眺める田中の様子がほぼ一章に亘って書かれている。

また、小杉を単なる「傍観者」ではなくしていこうとすることを示す表現に、内陣の「貴方」に訴える小杉の心情の変化がある。事後的には「もともと（略）神など信じていない」と我に返って呟くものの、マリ・テレーズを思い「説明のつかぬ怒り、ドス□黙い怒りの情」に捉えられて内陣の「その像」に最初に訴えた場面では、「存在のか、存在ないのか」とその存在の有無を小杉は問うが、先の引用部分にある涙を流しながら十字架を想起し訴える場面では、「貴方は存在しない」を削除し、「貴方は答へてくれなかったからナ（略）かたくなに永遠にだまっていた」とその存在の沈黙を問題とする表現に改めている（一二〇頁）。更には、連綿と続くキリスト教文化を基盤とするフランスに馴染むことができない「爾も、また」の田中は、日本人を相手とした場合しか日本語を話すことはなく、外国文学者という立ち位置の自覚に乏しくフランス語混じりで会話するフランス在住の日本人のことを侮蔑していたが、小杉は、サド的行為の実践相手にしようと考えたエバに逃げられそうになった際、「我を忘れ母

四八「われら此処より遠きものへ」（『「われら此処より遠きものへ草稿翻刻』長崎市遠藤周作文学館、二〇一一、三）一一二～一一四頁

国語を発声」する（一一七～一一八頁）。「爾も、また」の田中がサドの核心に迫ることができないのは、外国文学者としてサド研究へもキリスト教精神に対しても自身との距離感を確認し続ける立ち位置にいるからだが、小杉が結果としてサド的行為の相手として向き合うエバを、「なんの他意」もなく「見失はまい」として呼び止めたのは母国語を介してであった。そして、「母国語」で引き留めたエバに対して、小杉は教会で十字架を前に抱いた「神に裏切られた」という感情と二世紀前にサドが、サド的行為の対象相手を「奴隷」としてみた感情とを抱く（一一九頁）。こうして、明瞭な意志を伴わない無意識から発された母国語をきっかけに、キリスト教信仰とサド的世界に飛び込む契機が創られ、小杉がサド的人間となろうとした後、「十字架に釘うたれ、力つき前のめるやうにして息たへている「者」を思い涙するまでになる。この箇所からは、日本人留学生を、日本と西洋との距離感を越えてサドと向き合わせようとしたことが窺えるだろう。小杉と田中のこうした相違は、サドとの関わり方の強度の差から生じているが、その後の遠藤文学との繋がりを考えると、この祈りは、キリスト教的なのか、汎神の傾向があるのか、また、そうしたものを超えた大いなる祈りとして認識されうるのか、といった疑問は生じる。とはいえ、フランス留学中のサドへの傾倒が『白い人』というキリスト教の風土を舞台に問われる前に、サドを通じて汎神の世界に身を置いた日本人が主人公となり、部分的にでも第二次世界大戦と向き合おうとしたところに、「われら」の意義はある。

なお、宮本陽子は、遠藤を「おそらく、二〇世紀においてサドに本気で取り組んだ最初の日本人であったろう」としつつも、「サドに関する情報の量」が「比較にならないほど増えた」現在においては「専らレリーらの情報に基づいて書かれた遠藤の『サド伝』は資料として読むなら訂正せざるを得ない点がいくつかある」という。訂正が必要とされるなかには、遠藤が重視した、文学者サドの核心である「ヴァンセンヌ牢獄からバスチイユ監獄での六年間の幽閉生活」における「現実を書き換える喜び」という点も含まれるという[四九]。更には、遠藤文学の「書く行為」がもっぱら弱者への同化を志向するのに対し、サドは「書くこと」によって、対象も自身も異化する。遠藤が『サド伝』において指摘した「人間の非情な観察者」サドとは、「書かれることによって他者となり書き手と対峙する」ような「わたし」を創出することを指すため、遠藤の「書くという行為」とは異なることを指摘していることを申し添える[五〇]。

四九　宮本陽子「同伴者なきリベルタン・サド」（柘植光彦編『遠藤周作――挑発する作家』至文堂、二〇〇八・一〇所収）九二、九四～九五頁

五〇　宮本陽子「同伴者なきリベルタン・サド」注四九に同じ、九六頁

第一章　第二次世界大戦との対峙――マルキ・ド・サドとコルベ神父

第一章第三節　『女の一生二部』論

〇、はじめに――「われら此処より遠きものへ」から『女の一生二部』へ

第一章第一節第二節で採り上げた「われら此処より遠きものへ」は、遠藤が第一小説「アデンまで」（『三田文学』一九五四・一一）を発表する前の一九五三年秋頃に執筆していたと思われる習作期の小説草稿である。前述のとおり、遠藤が小説家を目指すきっかけとなった敗戦後まもないフランス留学中の見聞や探究を源とした二つの物語が記されていた。

主旋律を構成するのは、一九五〇年六月から一九五三年二月にかけてフランスへ渡った作者の分身と思しき主人公小杉がマルキ・ド・サド研究を推し進める物語で、その背後に、戦時下のフランスで拷問にかけられるマキの運動員バシカを視点人物とする物語がおかれている。確認したとおり遠藤は、この草稿における創作上の目的の一つを「Sadisme を現代の悲劇にうかびあがらせる」[五一]ことに定めていた。そのことを単純化して第二次世界大戦との関係で言い直せば、小杉の物語で「何故、自分がいびつなほどサドに執着するのか、自分でもわからなかった」（三一頁）と自問する答えが、バシカの物語で追究される拷問と虐殺という現代の難問についての解決に寄与することを望んだといえるだろう。但し、これまで確認してきたとおり、バシカの物語で取り組まれた組織による尋問・虐殺という状況に対し、遠藤はサドの思想を通して考察することにためらいを持っていた可能性が高い。

遠藤は、フランス留学中、虐殺記念館を訪れたり（一九五一・四・二九）[五二]、レジスタンスによる同胞虐殺のあったフォンスの井戸を見に、フランス南部アルディッシュまで足を運んだりしている（一九五一・三・二）。これらは、「われら」執筆にあたっては現代的課題と認識されつつも取り組みの周縁におかれた、第二次世界大戦後の現代的な課題に接した原体験である。「われら」執筆の五年後、こうした問題について初の長編「青い小さな葡萄」（『文学界』一九五六・一～六）で描くが、それに対峙する明確な答えは記されず、今後の創作を通じて「あのフォンスの闇の井戸も、もはや犯すことのできない一つの世界を創る」決意が表明される[五三]。それは、『サド伝』での

五一　『遠藤周作全日記【上巻】』注一二に同じ、三四四頁

五二　『作家の日記』によれば、ナチの行った「暴虐の展覧会」を見に行ったのは、フォンスの井戸体験を載せようとした通信記「フランスにおける異国の学生たち」（『群像』一九五一・九）を執筆中のことであった。

五三　「青い小さな葡萄」（『文学界』一九五六・一～六）、引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九九九・四）八八頁

「書くという行為」に救いを見出す後半生の芸術家サドへの期待へと移行していくということである。だが「青い小さな葡萄」において遠藤は、「拷問と虐殺」への認識を更に掘り下げるように、虐殺を引き起す状況や原因を執拗に問うている。それは、後年のエッセイ『心の夜想曲』で幼年時代のトンボの羽むしりに喩えられた、サディズムの心理への探究である。第二次世界大戦下の状況にサド的行為に照らし合わせる場合、尋問・虐殺する側が焦点となる。だが、宮本陽子が指摘するとおり、拷問の場面における弱者、『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）であればアウシュヴィツ収容所で死んだ修道士コバルスキ、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）であればロドリゴやキチジローの心理に焦点化していく遠藤文学にとって、実践者サドの思想が中心的な課題でなくなっていくのは必定であったのかもしれない。遠藤のサド研究が不完全燃焼に終わったのと同様、「悪」を反転させるものとして把握されていたユング心理学への取り組みも、小説家としての地位を築いた後、『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）ひと作品のみで断念されている[五四]。そうしたなか、弱者である収容所の抑留者コルベ神父が、虐殺する者の心理を変える可能性を描いたのが、「女の一生二部」（「朝日新聞」一九八一・七・三～一九八二・二・七、以下『女の一生二部』と記す）である。

一、コルベ神父と聖母マリア

遠藤にとって、コルベ神父を語ることは、彼が身代わりの愛を見せたアウシュヴィツ収容所の虐殺を語ることであり、小説家としての出発点にあった戦争という現代の難問に立ち向かうことを目指した延長線上にある営みである。管見では、遠藤が初めてコルベ神父のことを語るのは「毎日新聞夕刊」（一九六三・一〇・七）に寄稿した「契約と脱出」である。遠藤の文学的回心を促す契機となったと言われる大患[五五]の後、死を覚悟した時にあとひと作品だけは書きたいと願った次作に備え、体力の回復を待ちながら、少しずつ『沈黙』（新潮社、一九六六・三）の構想を練っていた時期と重なる。当時、コルベ神父について次のように語っている。

> 前からこの人のことを考えてきた（略）／このカトリックの宣教師はポーランド人であるために、大戦中、ナチに連行されてアウシュヴィツの収容所に送られた。

五四　遠藤周作×加賀乙彦「最新作『深い河』――魂の問題」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九三・九）七頁

五五　山根道公編「年譜」（『遠藤周作文学全集第一五巻』新潮社、二〇〇〇・七）によれば、『沈黙』執筆前の大患は、一九六〇年四月から一九六二年二月までの二年二ヶ月。その後、一九六二年末までは体力が回復せず、療養生活を送ったという。

（略）われわれにわかっているのは彼がむき出しの壁にかこまれた特別室に入れられ、一滴の水も一片のパンも与えられぬ飢餓死の刑のために死んだということだ。そして、その刑を彼は同じ捕虜仲間の一人のかわりに「進んで引きうけた」ということである。（略）／私がコルベ神父の顔に人間の表情を感じるのは、彼が最後までみすぼらしい現実を捨てず、むしろ現実の苦しみを進んで引きうけようとしたからである。地上のものを捨てないことが彼の場合、「愛」という意味だったのだ。

（引用は『お茶を飲みながら』集英社文庫、一九八四・二　二〇二頁）

コルベ神父の「最後までみすぼらしい現実を捨てず、むしろ現実の苦しみを進んで引きうけようとした」生き方に、キリスト教の「愛」の概念を見出す考え方は、「聖書のなかの女たち」（『婦人画報』一九五八・四～一九五九・五）に記された聖母マリア理解にすでに見出されるものである。それは、マリアがイエスの母から人類の母となった理由を説明した箇所である。

彼女は誰よりも女性として母親として一番つらい人間的苦悩を与えられたといっていいでしょう。／（略）母親として一番辛い試練は我が子を失うことである。マリアに与えられた苦悩は自分の子であるキリストが屈辱と侮辱のなかに十字架上で処刑されるのを直視しなければならぬことでした。キリストの死は今日でこそ栄光ある死ですが、あのゴルゴダの丘の上では犬よりももっとみじめな、恥かしい死だった。そんな息子の死を母親として聖母マリアは凝と耐えねばならなかったのである。／（略）マリアの生涯を見ると、彼女は自分に与えられた運命に決して逆らおうとしなかったように見えます。

（引用は『聖書のなかの女性たち』遠藤周作文庫、一九七五・一一）

（九〇～九一頁）

マリアが聖母マリアという「人類の母」となった根拠を、「自分に与えられた運命（注、人間的苦悩）に決して逆らおうとしなかった」点におく遠藤にとって、コルベ神父が実践した「地上のものを捨てない（略）愛」の実践として身代わりの死を自ら申し出たことは、マリアが聖母マリアへと昇華していったことの現代社会における再現と見えたであろう。また、本書において遠藤は、「キリストが教えた本当の精神の一つ」を、「いかなる人間も高処から他人を裁く資格はない」ことだと述べる。新約聖書において、イエスが「人々や世間から軽蔑されたり見捨てられたり（略）虐げられた」女性たちと「好んで出会い」、彼女らと「苦しみをわかち合った」エピソードが繰り返し語られているが、イエスがそのように振る舞った真意について遠藤は、イエスの行為に

触れた人々が、「自分も他人も同じように弱い人間であることを知り（略）他人の苦悩や哀しみにいつも共感」することを学び、「他人の過ちや罪を蔑むこと」を慎むことを知ることにあると説いている[五六]。

イエスが示した教えの根幹を「他人の苦しみへの共感」に見据えたならば、多様な状況を想定し、その枠組みの中に一時的にでも自らを同化させることになる。そうした時、人が誰かの行為を裁くことができなくなるのは当然であろう。「聖書のなかの女性たち」連載の前年に発表された「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）において、遠藤が生体解剖実験への参加へ押し流されていく医学部生たちの苦悩を描き、「政治的にではなく人間の内面として考えた場合、自分も含めて戦争協力者でない人間というのは、日本人の中でどれくらいいるのか」[五七]と疑問を呈した背後には、ここで示された理解があっただろう。そしてその後も、『沈黙』等の歴史小説を通して、それまで日本キリスト教史の恥部として闇に葬られてきた転びバテレンに対する救いを描き、また現実的な問題としてキリスト教が禁じる自殺についても、例えば、ナチの拷問によって口を割る危険に晒された時やむなく自殺したとしても、それは神に見捨てられる行為ではないと断言した[五八]。遠藤がこのような解釈を行う根底には、既に「聖書のなかの女性たち」で示した、キリスト教の「愛」概念への理解があったのであろう。しかしながら、この道理を、現実の状況に照らして万事納得することがそれほど容易いことではないことにもまた、遠藤は言及している。

一九七六年一一月、『沈黙』がポーランドのピエトゥシャック賞を受賞し、翌月、遠藤は授賞式のためにワルシャワへ赴くが、その際アウシュヴィツまで足を伸ばした。アウシュヴィツ訪問の衝撃は、西洋人の精神性に対する不思議さという形で、数編のエッセイや小説にされているが[五九]、一九八七年に上梓された『死について考える』（光文社、一九八七・二）のなかで、アウシュヴィツにおける神の救いについて、次のように述べている。

私は大抵の人間は救われるという考えでおりましたけれど、アウシュヴィツにお

五六「聖書のなかの女性たち」（『婦人画報』一九五八・四～一九五九・五）、『聖書のなかの女性たち』（遠藤周作文庫、一九七五・一一）八九～九〇頁

五七「あなたなら、どうしますか？」（『対話の達人、遠藤周作Ⅰ』女子パウロ会、二〇〇六・一〇）三三〇頁

五八「自殺という死」（『死について考える』光文社、一九八七・二）。なお、同書（光文社文庫、一九六六・一一）一五三～一五四頁を参照した。

五九 一九七六年にアウシュヴィツを訪れた時のことは、「ポーランドにて」（「東京新聞夕刊」一九七七・一・一〇、一一）、「アウシュヴィツ収容所を見て」（『新潮』一九七七・三）、「西洋人」（『群像』一九七七・三）などのエッセイでその印象を綴り、その体験をもとに「カプリンスキー氏」（『野性時代』一九七八・四）、「ワルシャワの日本人」（『文学界』一九七九・一）といった短編を発表している。

ける彼らの行為を実際に見て、顔をそむけたくなるこのような残虐を犯した人間は果たして救われるのか、と日本に帰るとすぐ、ある神父に聞きました。その神父は、彼らの人生全体の判定を誰ができるか、その男が息を引きとる瞬間に、自分は悪かったと心の底から思った時に救われないと誰が言えるか、と答えました。あんなに残酷なことをした人間をも救うほどに、神の愛は広いのか、と私が言ったら、その神父は、そうだと言いました。（略）／その時、私には殺された人たちの身になって、殺した人間も神に救われるというのはあんまりだ、と考える一方、そのくせ神父の言うように、殺したほうの人間が救われるのを認める気持ちもどこかに起きました。／何千人という殺されたユダヤ人の子供たちが、自分を殺した大人を許すというだろうか、とたずねると、殺されたユダヤ人の多くの子供たちが、神様にあの大人のひとたちを許してあげてください、というのがキリスト教だ、とその神父は答えました。私はその言葉を聞いた時、感動し（略）、それはなんと素晴らしいことではないか、という気持ちがしないでもありません。しかし、それを心の底からうなずけるまでには、まだ至っていません。

（引用は光文社文庫、一九九六・一一　一六三～一六五頁）

ここで遠藤は、アウシュヴィツ収容所内における殺す者と殺される者に対する神の救いについて、もどかしい胸の内を述べている。遠藤は、一九七六年にアウシュヴィツを訪問した後、戦時中に日本で拷問を受けた神父の戦後の日本での生き方に思いを馳せた短編「幼なじみたち」（原題「私の幼なじみたち」『野性時代』一九七七・五）を発表している。そこでは、アウシュヴィツで家族を殺された生存者から、カトリックにおける許すことの大切さとアウシュヴィツの当事者としてのその難しさについて言及している。『女の一生二部』より先にアウシュヴィツを描いた『死海のほとり』では、抑留者のなかでも弱虫だったはずの修道士コバルスキが、コルベ神父が示した身代わりの愛に接し、同じ愛の行為をできるようになるさまが描かれた[六〇]。

「聖書のなかの女性たち」には、たとえ仮定だとしても短編の主人公が、「だれが、なにが」、弱虫であったネズミを「身代わりの死」という「遠い地点まで（略）引きあげたのだろう」[六一]と問わねばならなかった理由を示す聖書解釈が記されている。「聖書のなかの女性たち」において認識されるキリスト教精神の根本の一つは、「人間の弱

六〇　コバルスキは、「札の辻」に登場するネズミを原型とする。収容所で身代わりとなって死んだことを聞いた主人公は、「仲間のために愛のために死んだとしたならば、（略）だれが、なにがネズミにそんな変りかたをさせたのだろう」と考えた。（『新潮』一九六三・一一）、引用は『遠藤周作文学全集第七巻』（新潮社、一九九九・一一）一七九頁に拠った。

六一　「札の辻」注六〇に同じ、一七九頁

さを肯定し、しかもそれを人間の強さと高貴さに変えようと」するという原則である[六二]。短編「札の辻」ではこの原則を、「神はこの世にいるのか？」と誰もが思う収容所という状況に当てはめ、弱者の心理変化を推察し、キリスト教の現代的有効性を提示したいと考えたのであろう。こうして弱者が聖化する光でありキリスト教が教える「愛」と目されたのがコルベ神父である。そのため、『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）では、彼をマデイ神父として登場させ、コバルスキが聖化する物語を描いている。

二、アウシュヴィツを書く意義

遠藤は、一九七〇年の雑誌記事で、十年ほど前からコルベ神父の人生に興味を持ちつつも自己の内部で醸成するのに時間がかかったと述懐している[六三]。

『沈黙』を上梓した夏、遠藤は「書評　アウシュヴィツは素材にできるか」（『文学界』一九六六・八）を書いている。そこには、「アウシュヴィツで女や老人や子供を殺した人間たち（略）をくいとめるものは何かについて根本的な、本質的な方向を考えられる作家のみが（略）アウシュヴィツについて（略）小説を描く権利がある」とある[六四]。また、小説家を目指すにあたり、フランス留学時代には既に、戦後文学が果たすべき役割を先の大戦への反省とその上での人間像の構築に定めていたことがカトリック信者向けのフランス通信記に書かれている[六五]。また、「かりそめの平和や繁栄や安定では誤魔化すことのできぬ「人間とは何か」という大きな宿題を」抱えていたことが『ぐうたら漫談集』（角川文庫、一九七八・七）でも言及されている[六六]。さらには、久山康×小林信雄×水谷昭夫×米倉充×津田静男×佐々木徹「座談会『死海のほとり』をめぐって」（『兄弟』一九七三・一二）において、津田静男は、「身代わりになるマディー神父を、ナチスは平然と殺すわけでしょう。そしてナチスといえども、人間なんですから、ナチスみたいな人間はどうなんでしょうね。（略）『沈黙』の場合でも、（略）ロドリゴを拷問したりする日本人の役人（略）の持っている怖ろしさにも遠藤さんは注目すべきだった」（四二、八〇頁）と指摘しているが、「書評　アウシュヴィツは素材にできるか」の記述からは、おそらくその点を意識はしていたといえる。そして、「収容所の虐殺者をくいとめるもの」を考えることは、フランス留学期の遠藤が、サ

六二「聖書のなかの女性たち」注五六に同じ、八六頁
六三「聖母との契約――心ゆさぶるコルベ神父」（『カトリック・ダイジェスト』一九七〇・五）四〇頁
六四「書評　アウシュヴィツは素材にできるか」（『文芸』一九六六・八）一六六頁
六五「赤毛布の佛蘭西旅行」（『カトリック・ダイジェスト』一九五一・一一～一九五二・七）、『ルーアンの丘』ＰＨＰ研究所、一九九八・九　八九～九〇、九八～九九頁参照。
六六『ぐうたら漫談集』（角川文庫、一九七八・七）二二四頁

ド研究によって掴みたかったことのひとつである。

先述したとおり、収容所での出来事であっても許すことの大切さがカトリックの根幹であることを理解し、「殺されたユダヤ人の多くの子供たちが、神様にあの大人のひとたちを許してあげてください、というのがキリスト教だ」という信頼する井上神父からの説明を受けても「心の底からうなずけるまでには、まだ至っていません」（『死について考える』）と語る遠藤が、アウシュヴィツの虐殺者の心に変化をもたらす希望としてコルベ神父を描いたのが、『女の一生二部』である。

とはいえ、コルベ神父を描くにあたって、「身代わりの死」を無条件に賛美するのではなく、彼の生き方に近づくための確かな道筋を探し当てるのに、苦労していることが、「午後のおしゃべり」（初出『芸術生活』一九六三・一〇～一九六四・一二）の次のような記述から推測される。

> フランクルの本、読む。ナチ収容所の体験記なり。文中、左の一節あり。「収容所の中には自分の最後のパンの一片を病人に与えて通って行く人間はごく少数であったがいた」／この自分に残された最後のパンを病人に与えたという少数の人の心理を、なおかつ、虚栄心也と我々が眺める権利があるか、どうか狐狸庵は知らない。しかし、よし、それに二十パーセントの虚栄心がまじっていたとしてもあとの八十パーセントを我々はエゴイズムや虚栄心だけでは割り切れないということである。もしその考え方を甘いと言うならもう仕方なし。そこには一つの賭けが――つまり我々が人間にどれだけ信用をおくか、否かという重要な賭けが残されているのである。／このところの日記を読みかえしてみると、同じことをダラダラと繰りかえし書いているように見える（略）狐狸庵は小説を書きながら、人間を意地わるく見ることが段々、したくなくなってきたからであろう。
>
> （『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・七）
>
> （引用は新潮社文庫、二〇〇一・六　一〇四～一〇五頁）

『死海のほとり』や『女の一生二部』でも、コルベ神父の「身代わりの死」と同質の行為として、遠藤が尊んだのが、フランクルの証言にある病人に自らのわずかな食糧を分け与えた人々の行為だ[六七]。引用にあるとおり遠藤は、極限状態において、他人への思いやりを忘れなかった人々の行為を、「エゴイズムや虚栄心」という言葉で片づけてしまうことを拒否するが、その理由を「人間を意地わるく見ることが（略）したく

六七　『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）、『遠藤周作文学全集第三巻』（新潮社、一九九九・七）一九九、二〇二頁参照。「女の一生二部」（「朝日新聞」一九八一・七・三～一九八二・二・七）、『女の一生二部・サチ子の場合』（朝日新聞社、一九八二・三）二二七頁参照

なくなってきたから」だと述べる。更には「このところの日記」は「同じことをダラダラと繰りかえし書いている」と記すが、V・Eフランクルの『夜と霧』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九五六・八）の読後感を述べた直前には、『沈黙』執筆のための試行錯誤であったと推測される切支丹弾圧下の殉教心理への記述がみられる。また引用部分の前後には、一九六四年春の初めての長崎旅行を発端として次第に定められていく作者の転び者への共感や、『沈黙』の前奏曲のひとつである短編「雲仙」（『世界』一九六五・一）で描かれた、殉教など虚栄心の表れであるとする先輩作家の無理解への不信感と通底する疑問も示されている。

だが同時に、遠藤は『狐狸庵閑話』で、殉教する「強者」の行為を、ガブリエル・マルセルの主張に賛同し、次のように眼差してもいる。

> 意地悪ではなく意地よしの見かたをすることによっても成立することがあるのではないか。見るということは相手の偽善を剝ぎ、そのエゴイズムをあばき、その虚栄心を浮上がらせることだけではなく、もう一つの面もあるのではないか。僕は最近、ガブリエル・マルセルの『存在と有』（ママ）という本を読んで（略）その中に我々が他人を見るのはその偽善やエゴイズムや虚栄心を剝ぐことではなく、他人に期待することであると書いてあったのに非常に感銘をうけた　（一〇三頁）

遠藤は、戦争という時代を「人間が自分で自分を信用していない（略）他人も信用しなければ、自分自身も信用しない時代であった」と回顧している[六八]。そうしたなかにあって、コルベ神父の最期を「人間が人間ならざるものに墜ちていく世界で、人間が信ずるに足ることを教えてくれる戦いだった」だと語る[六九]。『女の一生二部』では、コルベ神父の生き方に触れた虐殺者の心が「善」の方向へと転化させるものとして描いている。

三、「コルベ神父」の造形―『死海のほとり』と『女の一生二部』

前述した通り、「聖書のなかの女性たち」で遠藤は、「犬よりももっとみじめな、恥かしい死」を迎えたイエスが、十字架に架けられるまで常に、人々に苦しみに寄り添う生き方を選んだ意味を、イエスの「愛」の実践を通して人々が「俗なるものが高貴なものへと変化すること」の重要性に気づくことにあったと認識していた（八六頁）。こうした聖書解釈を、小説という枠組みのなかで、どのように立体的にしていくのか

六八　「沈黙の声」（『沈黙の声』プレジデント社、一九九二・七）一七頁
六九　「アウシュヴィツ収容所を見て」（『新潮』一九七七・三）、引用は『遠藤周作文学全集第一三巻』（新潮社、二〇〇〇・五）二七三頁に拠った。

が、日本人にもわかるキリスト教の有り様を描き続けたその後の創作の勘所であったろう。

また、アウシュヴィツの記録を読み、現場にまで足を運んだ遠藤に、「人間を信じる」という願いに一縷の望みを託させる契機となったのが、フランクルの証言にある、収容所内でも自分の最後のパンを病人に分け与えた人々がいたという事実である[七〇]。人間の尊厳を奪われた状況のなかでも他人を思いやる気持ちを忘れなかった人々がいたという事実が、拷問と虐殺の時代を乗り越える希望を遠藤に与えたという。そしてこの行為を更に深め、究極の「愛」の実践であると考えたのが、コルベ神父が示した「身代わりの死」であった。『女の一生二部』でのアウシュヴィツ収容所における聖化の象徴として、この二つの尊い行為は一つの線の上に描かれている。コルベ神父の身代わりの「愛」に触れた人々に、自分のことだけで手一杯になる環境のなかで他人を思いやる心が復活し、自分にとって一日の唯一の食糧であるコッペパンを病人に分け与える者が出てくる。このことを、「聖書のなかの女性たち」が示すところのイエスの「愛」に触れた人々の心理変化という観点から言い換えれば、イエスの「愛」の実践を現代において復活させたコルベ神父に触れた人々の心が、聖なる方向へと向かったと言える。しかしながら、遠藤は、このコルベ神父の最期が私たちにもたらす影響力を、『女の一生二部』と『死海のほとり』では異なるように創り上げていることに着目したい。それは、コルベ神父の身代わりの死に触れた虐殺する側の心理変化である。

『死海のほとり』では変化をみせなかった虐殺者心理を、『女の一生二部』では、殺される者たちの苦しみに寄り添う方向へと向ける。そう創った理由について遠藤は、江藤淳との対談『『死海のほとり』をめぐって」で、次のように述べている。

> 「マデイ」の救った男が幸せになるかというと、曽野さんの調査によるとそんなことはなかった。ぼく自身はその救われた男をもう一度殺させているけれども、「マデイ」が救ったことに関しての無効性をあの小説にほうりこんだつもりなんだよ。／江藤　それは救えないですよ。人間はとうてい人間を救えない。だからこそマデイ神父の行為にリアリティーがあるんです。あれで救われた男が生き永らえてどこかのキブツにでもいれば、御利益あらたかということになってしまう。／遠藤（略）／そんなことはありえない。そこまでは、ぼくも愛の不可能性が、イエスと同じようにわかってきた。
>
> （昭和四八年（注、一九七三）五月二四日　新潮社クラブにおいて）
>
> （『死海のほとり』付録、昭和四八・六　七頁）

七〇　V・Eフランクル『新装版　夜と霧――ドイツ強制収容所の体験記録』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九八五・一）一六六頁

引用にある「曽野さんの調査」とは、曽野綾子「落葉の声」（『文学界』一九七二・二）を指すものと思われる。また、コルベ神父が救った男性のその後の人生については、『ぐうたら社会学』（集英社文庫、一九七九・一〇）にも言及がある（二三三～二三四頁）。遠藤にとってイエスとは、奇蹟をおこすこともなく、現実的には無力で、人間の苦悩に寄り添い、共に哀しむ「愛」の道を歩みながらも、果てには犬よりもみじめな十字架刑に処せられ死んだ人物として描かれている。こうしたイエスと同じく、『死海のほとり』では、コルベ神父をモデルとした「マデイ神父が死んだからと言って、毎日は何も少しも変わりませんでした」と描かれる（一九九頁）。また、コルベ神父についても、「アウシュヴィツ収容所を見て」において「あの十字架にかけられたイエスのイメージがなかったら、ガイオニチェック氏のために囚人の列から前に進まなかっただろう」とも記している（二七三頁）。

『死海のほとり』では身代わりの死によって命拾いした青年は一ヶ月後には飢餓室へ連れて行かれたとされ、約一〇年後の新聞小説『女の一生二部』では、代わってもらった青年については助けられたところで筆を止めた。それは、身代わりの死に触れた虐殺者の違いによって導かれた違いでもある。

曽野綾子によれば、コルベ神父に助けられた男性の戦後は決して幸せではなく、彼は戦争によって失った二人の息子の代わりに自分が死んだ方がマシだったと、口にしていたという[七一]。抑留された過酷な生であってもそれを引き受けるという宗教的な生き方（「幼なじみたち」）を、聖職者ではない者に求めるのは酷なことでもあろうが、そうした現実があることを認識したうえで、『女の一生二部』ではコルベ神父の愛の行為によって心を動かされる収容所所長を描いたのは、そこにしか希望を託せなかったとみることもできる。

四、『女の一生二部』における「コルベ神父」

一九七一年、二次世界大戦下の軽井沢を舞台としてキリスト教と戦争の矛盾を描いた戯曲「薔薇の館」（『文学界』一九六九・一〇）が長崎で再公演されるにあたり、遠藤は原作者として長崎を訪れている。その時のインタビュー記事が「長崎新聞」（一九七一・四・二二（二一夕））に掲載されているが、そこで「いつか浦上を描きたい」と話している。構想期間一〇数年とも言われる二部作『女の一生』は、浦上が有する日本キリシタン史における二つの悲劇、浦上四番崩れ（一部）と長崎原爆（二部）とを描くが、先のインタビュー記事からは、この二つの歴史が露わにした日本人の精神構

七一　曽野綾子『落葉の声』（聖母の騎士社、一九九〇・三）二一八頁

造とその形成過程を追究することを構想していたことがわかる。

『女の一生二部』は、一〇年ほど前から「一度は自分の作品として神父様の伝記を書こうかと真剣に考え」ながらも、「材料の不足と自分の力量の不足で」諦めたコルベ神父について[七二]、神父の名前をそのまま使ってようやくまとめあげた作品でもある。『女の一生二部』は故郷である長崎に原爆を投下される運命を辿る修平とサチ子の物語と、コルベ神父の物語が交錯しながら進む。その目論見は、先行研究が指摘する通り、「コルベ神父の物語を、サチ子の人生に交錯させて描き出し、「恩寵と救済の世界」を暗示させようと」することにあっただろう[七三]。身代りの愛に徹したコルベ神父の人生によって、キリスト教が戦時下に抱える矛盾に悩み苦しむだけでなく、新旧の違いはあるが同じ宗教を信じるアメリカから、故郷に原子爆弾を投下される運命を辿る修平やサチ子の人生を照射する。この作品全体を包みこむ光の役目を担ったのがコルベ神父である。

ところで、確認したとおり、遠藤は『女の一生二部』以前にも、『死海のほとり』(新潮社、一九七三・・六)でもコルベ神父をモデルとしたマデイ神父の身代わりの愛を描いているが、二作品における収容所内で神父の行為の意味づけには、多少、違いが認められる。

そこで、遠藤が永年腹案として抱いてきた「長崎原爆」と「コルベ神父」という二つの題材を描いた『女の一生二部』について、遠藤がコルベ神父に託して試みた、二十世紀における宗教への信頼について、ひとまずの評価を下すことを眼目とする。そのためにまず、『女の一生二部』の構成について確認する。

遠藤文学で度々使用される二つの物語を交錯させる手法について、遠藤はフォークナーの『野生の棕櫚』(The Wild Palms)からヒントを得たと打ち明けるが、作中の二つの物語が表面上は全く交わることのないフォークナー作品との違いとして、自作は二つの物語の「イメージが累層的に重なる」と述べている[七四]。作者の言葉通り、『女の一生二部』も、コルベ神父の物語と、同じ宗教を信じるアメリカから原子爆弾を落とされる運命を辿る長崎を生きた若者たちの物語が、作中、サチ子の宝物入れである「チョコレートの箱」を鍵として重なり合う。

サチ子は大浦天主堂に通うキリスト教徒である。幼馴染みである修平とは、大浦天主堂のミサへの行き帰りを通して仲良くなる。周知の通り、大浦は明治以来外国人居留地だったため、教会への道すがら、外国人とすれ違うことも度々ある。ある日の帰

七二 「聖母との契約――心ゆさぶるコルベ神父」注六三に同じ、四〇頁

七三 三木サニア『『女の一生』の世界」(『日本文芸学』一九八三・一二)九六頁

七四 遠藤は二つの物語を交錯させる意義を「イメージが累層的に重なる」ことに見出す(遠藤周作×小潟昭夫「なぜイエスか」(小潟昭夫他『わが思索のあと』出帆社、一九七五・六所収)二三八頁)。

り道、大きな犬に怯えて動けなくなった幼い男の子を、小学生だったサチ子は助けるが、その男の子はジム・ウォーカーといって、修平やサチ子の遊び友達になる。この彼が、クライマックスで幼い頃に住んでいた長崎に「ふとっちょ」を落とす役目を背負わされる。だが、そんな未来を知らぬサチ子は、ジムを助けたお礼にもらったチョコレートの箱に、コルベ神父からもらった「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」と印刷された御絵や、修平からの手紙など、大事なものを仕舞う。

時空間を異にする二つの物語は、こうしてジムの家からもらったチョコレート箱にコルベ神父の御絵や修平からの手紙が一緒に収められることによって重ね合わせられる[七五]のだが、それまで必ずチョコレートの箱に収められてきた修平からの手紙のうち、修平が特攻機搭乗を志願した理由を記した最後の手紙だけは、サチ子宛でありながら同時にプロテスタントの牧師宛であったこともあり、チョコレートの箱には収められないこととなる[七六]。「サチ子の一生」とコルベや修平のそれとの響き合いに注目する必要があるのならば[七七]、戦争とキリスト教の矛盾に悩みぬいた修平が、信者としてこの戦争に出した答えとしての最後の手紙が、コルベ神父の生涯を象徴する聖句が記された御絵と共にチョコレートの箱に収められないのは、何故だろうか。

また、『女の一生二部』では、戦争という時代の悲劇を嘆くサチ子に、大浦天主堂の聖母マリアは無言を貫く姿しかみせない[七八]。これは「女の一生一部」（「朝日新聞」一九八〇・一・一～一九八一・七・一、以下『女の一生一部』と記す）で、愛する人のために身体を売ってまで金銭を作ったキクの生き方に、キクの人生こそが真実の愛だと語ったマリアの姿とは対照的である[七九]。キリスト教という洋服を日本人の身の丈に合った和服に仕立て直す手立てを考え続けた遠藤が、聖母マリア信仰にその糸口をみていたことは、遠藤のかくれ切支丹信仰への熱心な調査や[八〇]、大浦天主堂での信徒発見のエピソードへの言及[八一]などから了解される。そうしたなか、修平への恋心と戦争に対する疑問や憤懣をないまぜにしたサチ子の祈りを前に、無言を貫く聖母マリアが描かれることは、『女の一生一部』との比較からも、重要であろう。そして二つの物

七五　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、二七、六九、一一三、一七七、二六七～二六八、三〇四～三〇五、三二九、三四二～三四四、三五二～三五三頁を参照した。

七六　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三七〇～三七六頁

七七　古浦修子「『女の一生二部・サチ子の場合』論―「愛」の根源にあるもの―」（『遠藤周作研究』二〇〇九・九）七七頁

七八　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、一七九、三一五、三八五頁

七九　『女の一生一部』（「朝日新聞」一九八〇・一一・一～一九八一・七・一）、引用は『遠藤周作歴史小説集一　女の一生キクの場合』（講談社、一九九六・一）四五八～四六〇頁

八〇　「主観的日本人論　手近な者」（「朝日新聞」一九七二・九・一八）

八一　「弱者の救い―かくれ切支丹の村々」（『切支丹の里』人文書院、一九七一・一）

語が響き合うとは、無言の聖母マリアが象徴する「修平とサチ子の物語」を、マリアとの契約によって教えに殉じ、死を選んだコルベ神父[八二]が照らすことを、遠藤が願ったということでもあろう。

戦時下にあってキリスト教に無力感しか覚えることのできないサチ子や修平の心に、希望の光を射し込むために、コルベ神父の物語と修平の物語が、一つの作品として構成されねばならなかったのだとすれば、コルベ神父の一生を象徴する聖句が印刷された御絵と、修平がキリスト教徒として戦争への態度を示した最後の手紙だけが、チョコレートの箱に収められないのは、大浦天主堂のマリアが無言を貫くように、コルベ神父が示した身代りの愛が、修平やサチ子の人生の物語を照らす範囲の限界を示しているのではないかという疑問も生じる。こうした点を踏まえつつ、「コルベ神父」という現代の聖人の人生を参照することで、遠藤が戦争という極限状態におかれた人間への救いをどのように描き出そうと努めたのか、考察したい。

五、戦争とキリスト教―コルベ神父とマディ神父

学生時代を戦時下で過ごし、戦後に作家として歩き出した遠藤が、修平が抱いた苦しみを同じように抱えていた。遠藤の文学的原点は、敗戦後まもない一九五〇年、戦後初のカトリック留学生として生々しい戦争の傷痕が残るフランスに留学した経験にある。当時の通信記「赤毛布の佛蘭西旅行」(『カトリック・ダイジェスト』一九五一・一一～一九五二・七)には、「戦争を防ぐ、根本的手段の一つは、互いの国民が互いに、相手の苦しみ、涙、悲惨を理解し合うことだ」とある[八三]。また、フランスで日本人を野蛮だと非難する級友たちに対して、「(注、日本の)侵略は侵略として(略)その悪に心から責任をとるべき」だと認めるものの[八四]、日本人だけが非難の的となることには、強い反発を感じており、次のように教会の内陣で祈っている。

「神様、どうかぼくに力と勇気をお与え下さい。(略)神様、ぼくに真実を、真実として語る勇気をお与え下さい。いかなる政治の名目でも戦争をしてはいけぬと言いきる力をお与え下さい。(略)」／顔で手を埋めて、ぼくは、何度も、／「力と勇気とを」／と呟きつづけました。しかし内陣はいつまでもひっそりとしていました。ただ窓の向うから無意味な空虚な午後の光が流れこみ、騒音が聞こえてくるだけでした。

八二 遠藤周作×小崎登明「対談　身代りこそ愛の奇跡」(『聖母の騎士』一九八三・一)六〇頁

八三 「赤毛布の佛蘭西旅行」注六五に同じ、一〇七頁

八四 「赤毛布の佛蘭西旅行」注六五に同じ、一一一頁

（「赤毛布の佛蘭西旅行」一一一頁）

留学先で「いかなる政治の名目でも戦争をしてはいけぬと言いきる力」が欲しいと祈ったこの思いは、おそらく「われら」でのマルキ・ド・サド研究に通じるだろう。また、この願いに対し、神が何も答えてくれなかったことは、「われら」では二世紀前のサドに呼ばれサドに何かを期待する青年を創り、『女の一生二部』では、修平の特攻機搭乗の決断理由となるのだが[八五]、その是非を問われた聖母マリアは、留学時代の通信記と同じく沈黙を守る[八六]。よって、『女の一生二部』の修平の物語に、こうした戦争とキリスト教の矛盾についての答えが示されるわけではない。その留学期から抱いた難問に再び挑んだ遠藤が、修平・サチ子の物語に「光」を照射するため、コルベ神父の物語を併置したのだろう。

「マルキ・ド・サド」と「コルベ神父」という相反する神への道を生きた人物を通して遠藤が求めた希望の内実を考察するために、遠藤作品におけるコルベ神父の描かれ方の変遷を確認しておきたい。前述したように、二部から遡ること八年前、遠藤は長編『死海のほとり』でコルベ神父をモデルとしたマデイ神父を誕生させている。人間の尊厳が奪われる収容所において、他人の身代りとなって死んだ聖者の描かれ方に大きな違いはないが、悪を善に転換する救いという観点から眺めた時、『死海のほとり』と二部の間には、神父が有する作中での他の登場人物への影響力に、大きな違いがある。

『死海のほとり』は、『女の一生二部』と同様、二つの物語から成り立っている。ひとつは「群像の一人」と題されたイエスの弟子たちの歴史物語で、それが「巡礼」と題された遠藤と思しき小説家がエルサレムをイエスとねずみの足跡をおって旅する現代の物語に交錯する。ねずみは、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）の前奏曲となる短編「札の辻」（『新潮』一九六三・一一）に登場した『沈黙』のキチジローの原型となる創作人物で、戦時下に敵性宗教を信仰した学生時代を振り返る「札の辻」の主人公「私」に、深い痕跡を残した修道士である[八七]。主人公は、臆病者で小狡い性格だったが故に学生から馬鹿にされていたねずみが、ユダヤ系であるために捕縛され、身代わりとなり収容所で死んだと聞いた時、「もしネズミが（略）仲間のために愛に死んだとしたならば、（略）なにがそんな遠い地点までネズミを引きあげたのだろう」[八八]と思惟する。この主人公の思いが『死海のほとり』の「巡礼」の章の主人公へと引き継がれ、この謎を解くことが『死海のほとり』の主題となる。

八五　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三七四～三七六頁
八六　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三八五頁
八七　但し、「札の辻」では「ネズミ」と表記される。
八八　「札の辻」注六〇に同じ、一七九頁

『死海のほとり』で、臆病者のねずみが飢餓室へ自分の足で辿りつけたのは何故かという謎は、ねずみが飢餓室へ連れて行かれるところを目撃した生存者の証言によって解かれる。彼の証言によれば、飢餓室へ向かうねずみの後ろを、「群像の一人」の章で追究されたイエス像を彷彿させる男が寄りそっていたのである[八九]。ここで示されたイエス像が、初めて明確に打ち出された「「永遠の同伴者」としてのイエス像」である[九〇]。ねずみの収容所での死にイエスが寄り添うだけでなく、殺されて、石鹸になった修道士ねずみの死後を、遠藤は人々の悲しみを洗うために生きたイエスの生涯になぞらえる[九一]。遠藤はこの描写をもって、『沈黙』以後、気がかりだったという弱者キチジローのその後となるねずみの聖化を示した。キチジローは、戦時中、肉体的弱さから信念を曲げたことのある遠藤自身の影である。

そして、『沈黙』から七年を経て発表した『死海のほとり』で、同伴者イエスによる弱者の聖化の道とともに、遠藤は、コルベ神父をモデルとしたマデイ神父の殉教を用いて、弱者聖化の真髄を切り開く。マデイ神父は脱走者の代りに自分を飢餓室に入れてくれと願い出、五日後に石炭酸の注射を打たれ絶命する[九二]。彼の行為を知った仲間たちは、マデイ神父のために祈るが、ねずみだけは「自分はマデイ神父のようにはなれない」と、激しく動揺するばかりだ[九三]。元来臆病者のねずみが、神父が示した「身代りの死」に倣うことなど出来るはずはなかったが、飢餓室行きが決まった日、一日の僅かな食糧である一つのコッペパンを、飢餓室へ向かう途中で仲間に分け与える。このコッペパンを分け与えるという行為が、神父の「身代りの愛」をきっかけに、ねずみが他人を思いやって行えた唯一の行為である。そして飢餓室へ連れて行かれるねずみの後ろをイエスが伴に歩んだのは、臆病で卑怯だったねずみが、収容所という極限状態にあって、マデイ神父の聖なる行為に触れ、聖化したからである。

聖者の示した愛の行為に触れた人々の心の変化は、『女の一生二部』でもほぼ同じように創られる。コルベ神父は、見せしめとして殺される男の代わりに自分を飢餓室に入れてくれと願い出、二週間後に石炭酸注射を打たれて絶命する[九四]。『女の一生二部』に登場する弱者ヘンリックもまた、ねずみと同じように「俺は（略）普通の男だ。俺にはあんたのように誰かの身代りとなって飢餓室で死ぬことなど、とてもできない」と言う（二二五頁）。だが、コルベ神父の死後、彼の顔や言葉を思い出し、自分のこと

八九　『死海のほとり』注六七に同じ、二〇二頁参照
九〇　井上洋治「解説」（『死海のほとり』新潮文庫、一九八三・八）四一七頁
九一　『死海のほとり』注六七に同じ、二〇二～二〇三頁。但し、ねずみの飢餓室行きは、「札の辻」の風の便りとは違い、仲間の身代わりではない。
九二　『死海のほとり』注六七に同じ、一九七～一九八頁
九三　『死海のほとり』注六七に同じ、一九八頁
九四　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、二〇四～二〇七、二二〇～二二三頁

だけを考えるのではなく、病人にパンを分け与えるようになる（二二七頁）。

「地獄を愛の世界に変えた」[九五]コルベ神父に触れた人々が聖なる世界へ足を踏み入れる様を描く。しかしながら、遠藤が若かりし頃、サド理論に見出しながらも挫折した、悪を善に転換しうる希望への光の新たな答えとして、神父が示した究極の愛の行為があると考えた時、『死海のほとり』と二部の間には、越え難い壁がある。それが、神父が身代わりとなった青年の末路と虐殺者の心理である。

確認したとおり、現実としては、コルベ神父が身代わりになったことによって助けられた男性ガイオチュニックは生き延びたという。だが、助けられた人物の末路について、『死海のほとり』ではマデイ「神父の犠牲にもかかわらず、結局」、身代わりとなった青年「はガス室に送られ、何もかもが変わらなかった」とし（一九九頁）、『女の一生二部』では、助けられた青年の末路は描写されないまま物語が終わる。この部分の描き分けによって生じるのは、身代わりの愛が持つ虐殺者への影響力だろう。マデイ神父の殉教は、収容所内の被害者である同志やねずみという弱者の心をわずかに聖化させはしても、虐殺者の心と行動を悪から善へと変化させる様子は描かれない。マデイ神父が身代りとなったにも関わらず、一旦は助かった青年が結局ガス室に送られてしまうのは、虐殺者の心理に変化が認められないからだろう。それに対し、コルベ神父の身代わりの死に触れた収容所の副所長マルティンの心は、コルベ神父の幻影に揺さぶられる（二二〇頁）。

繰り返しになるが、「書評　アウシュヴィッツは素材にできるか」（『文芸』一九六六・八）では虐殺者を止めることができる何かを描けるものだけが、アウシュヴィッツを小説にすべきだと述べていた。コルベ神父への期待の内実は、マルティンの心の変化にあったのだろう。その他にも「シュバイツァー博士『平和か原子戦争か』を読んで」（「毎日新聞」一九五八・四・二五）のなかで、核実験反対を次のように訴えている。

> 率直にいって私は、欧州の人や米国人が核爆発や放射能のおそろしさを抽象的にしか知らないのではないかと思う。彼らの国は広島や長崎の地獄絵をみなかったし、またその実験はたえず彼らの国から遠く離れた太平洋やシベリアでしか行われぬ。この恐怖やおそろしさはまだ彼らの上に理屈としてわかっても、実感として起ってないのではないか。／私は五年前のある経験を思い出す。私は当時、フランスにおり、フランスの学生たちの原爆反対の会に出席したことがあった。その日、私は偶然、ポケットに日本のグラフ雑誌に載ったあの日の広島の地獄そのままの写真を入れていた。私は彼らにそれをみせたのである。「こんなのだったの

九五　小野功生『『女の一生』――そのテーマ構造」（『遠藤周作――その文学世界』国研出版、一九九七・一一所収）二二六頁

か。こんなにスサまじいものだったのか」彼らは顔をそむけ、苦しそうに呻いた。しかし彼らはこの事実を知らずに原爆反対の会を行っていたのである。それならば他の無数の西欧人はどうなのか。彼らはまだ私たちが持っている恐怖を見ていないのではないか。私はあの日のおそろしさをフィルムや写真を通じてもって具体的にあの人たちに広く知ってもらうこと、彼らにも我々と同じ不安を持ってもらうことが、会議やデモよりももっとも有効な核実験反対の訴えの一方法になるのではないかと思う。

（引用は『春は馬車に乗って』文芸春秋、一九八九・四　七四～七五頁）

遠藤はここで、「いままで数多の科学者、思想家が核実験の停止（略）を訴え（略）日本の大衆は大衆で、この悲願を叫んでもみた（略）が一度だってそれは実行されなかった」（七四頁）ために、諦めの境地に達しているであろう人々に向かって、加害者になる可能性のある人々に、被害者の痛みを知らせることで核実験を阻止するという解決策を提示している。

「拷問と虐殺の時代」の極みとしてある収容所で、虐殺を行う側の心理が「聖なるもの」の方向を向くためにはどうすべきか。アウシュヴィツを描いた二作品における遠藤の苦悩も、そこにあったと推測する。『死海のほとり』では、マデイ神父は行為のみで語られるのに対して、『女の一生二部』のコルベ神父がナチスの将校に身代りを申し出た理由は、「彼には妻や子供があります……私は神父ですから死んでも歎き悲しむ妻子はありません」というものだったと語られている（二〇六頁）。『死海のほとり』で伝えなかった神父の身代りの愛の動機を、『女の一生二部』では具体的に書き付けたことに加えて、ナチスの将校マルティンが、コルベ神父の殉教に心を揺さぶられたかのような記述が続く[九六]だけでなく、マルティンが収容所副所長という職を離れた帰宅後の夫や父親という姿にまで及ぶ（二一四～二一五頁）。またこの時、繰り返し語られるのは、「彼は（略）善い夫、善い父の顔を装う」（二一五頁）、「善き夫、善きパパのマスクをつける」（二一四頁）という副所長という拷問する者ではないもう一つの顔であり、マルティンはコルベ神父の命を絶つと決意した時、「あの神父が消えてくれれば、自分はふたたびここ（注、虐殺する場）に馴れるだろう。この収容所と家庭での二つの顔を持つことができるだろう」と考える（二三〇頁）。マルティンは、妻子ある男性の身代りとなって殺されるコルベ神父の面影によって、わずかかもしれないが、良心の呵責を覚えるというのだろう。

作中、聖句と同様、コルベ神父の生涯を象徴するだけでなく、人間が聖化するため

九六『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、二〇七～二〇八、二一五～二一六、二二〇～二二二頁

のきっかけを作るコルベ神父の言葉に、「愛のない世界ならば、愛を創らねば」というフレーズが多用されるが、これは、実際にコルベ神父が呟いていたわけではなく、遠藤が創作した場面なのだそうだ[九七]。アウシュヴィッツという地獄のなかで、最も広大な「愛」を創るためには、拷問する側の心がされる者の痛みに寄り添わねばならない。だから虐殺や拷問に終止符を打つ世界を築き上げるために、父であり夫でもある男を思いやって、彼の代りに飢餓室に入ったコルベ神父の心理が語られなければならなかったのだろう。そしてその先に、殺されていく男と同じく、妻子あるナチの将校の心に、一瞬でも父であり夫である気持ちが甦ることを、遠藤が願ったのだと考える。そしてそこに、若かりし頃より、愚直に、戦争を惹き起こさない人間像を模索し続けた遠藤が、加害者の心理に変化をもたらすであろう唯一の兆しをみたのだと考える。

とはいえ、もちろん旧蔵書にはアウシュヴィツ収容所所長のルドルフ・ヘスが戦後に書き残した告白録『アウシュヴィツ収容所』（講談社学術文庫、一九九九・八）のフランス語訳（Rudolf Hoess, *Le Commandant d'Auschwis parle*, Paris, R.Julliard,1959）がのこされている[九八]。

ヘスは「死にのぞんで」、「今、たえず私が思いをはせられるのは、ただ家族のこと、それだけだ。皆はどうなるのだろうか。家族を思うこの不安な気持が、今、私の勾禁生活を苦しいものにしている」[九九]とする。

コルベ神父の殉教に、身代わりとなることを許したナチスの将校の心の動きを願ったのだと考えるのには、もう一つの理由がある。それは、修平とサチ子の物語における長崎原爆の描き方にある。

『女の一生二部』が書かれた一九八一年～一九八二年といえば、既に長崎原爆の投下については、ある程度の歴史資料が出版されていた[一〇〇]。そして、遠藤がそれらの資料を参考にしながら、場面を創っていったであろうことは、先行研究によって明らかにされている[一〇一]。だが、遠藤は、原爆投下の場面を描くにあたり、歴史的事実を踏まえた上で、長崎を地獄と化す最終人物の役割を創作人物に担わせている。被爆者たちの苦しみや悲しみが、戦後二五年経ったところで癒えないばかりか、原爆症の発

九七　遠藤周作×小崎登明「対談　身代りこそ愛の奇跡」注八二に同じ、五九頁

九八　久松健一監修『町田市民文学館蔵　遠藤周作蔵書目録（欧文篇）――光の序曲』注一六に同じ、四四頁。書き込みはないようである。

九九　R．ヘス『アウシュヴィツ収容所』（片岡啓治訳、講談社学術文庫、一九九九・八）三七四頁

一〇〇　ジョセフ・ローレンス・マークス『長く険しい道』（越智道夫訳、文化評論出版、一九七二・七）、フランク・W・チンノック『ナガサキ――忘れられた原爆』（小山内宏訳、新人物往来社、一九七一・七）など

一〇一　下野孝文「遠藤周作『女の一生』二部（三）――コルベ神父から修平へ」（『敍説Ⅲ』第三号　二〇〇四・一二）

症に怯える被爆者が数多いることを知りつつ、この場面を創作人物をもって描いた根拠に、想いを巡らせたい。

前述した通り、フランス留学中、広島・長崎の惨状が彼らに全く知られていないことに愕然とした遠藤は、まずは被爆者の苦しみを彼等に伝えることから始めねばならないことを痛感した[一〇二]。原子爆弾を製造し、加害者になる可能性を強く持つ国の人々に、被爆者の苦しみを知ってもらうこと。それが、広島・長崎の地獄を二度と繰り返さないための、最も実行に移しやすい方法だと考えていたのだろう。おそらく遠藤は、アメリカによる原子爆弾投下に至る経過を調べる過程で、「投下しない」という選択の余地を見出すことが出来なかった。だからこそ、大浦で幼少期を過ごしたジムという人物を創り出し、彼に原爆投下のボタンを押す役目を背負わせたのである[一〇三]。そうすることで、幼なじみの修平やサチ子が住む長崎が一瞬で地獄と化すことへの躊躇いを、苦肉の策を使って描き込むことが可能となる[一〇四]。コルベ神父が身代りを申し出た理由を拷問する者である収容所副所長の耳に入れ、彼の心を拷問される者の苦しみに近づけるためだったのと同じ狙いから、原子爆弾によって苦しむ人々を思い、心を痛めるジムの心理が創り出されたのであろう。ここには、戦時下において増長するばかりの加害者心理に、どうにかして変化の兆しを求めようとし続けた遠藤の反戦を訴える願いが示されていたと考える。

だが、アウシュヴィツと長崎原爆を舞台に悪から脱却する方途が描き出されたのに対し、修平が抱いたキリスト教と戦争の矛盾という難問に、決定的な解決策が示されたとは言えない。修平は、「たとえそれが戦争であれ、誰かを殺す以上（略）私は、他の人生を奪ったという、その償いをせねばならぬ」[一〇五]と考え特攻機への搭乗を決意するのだが、「他人の人生を奪う」ということの辛さについて、次のように語られる。

> 私は……文学が好きでした。（略）／文学を読んでいる私は、どんな人間にも、深い人生があることを知りました。表面は何もないようでも、沼のようなその底にはその人の苦しみ、悲しみ、悦びと共に願いと祈りとが、地層のように集積しているのだと知りました。／一人の人を殺すことは、その生命を奪うだけではない。彼のすべてを、その人のせつない願いや祈りまで理不尽に抹殺することです。私にはとても、そんなことはできません。たとえ基督教の信者でなくても……。

一〇二　「シュバイツァー博士『平和か原子戦争か』を読んで」（「毎日新聞」一九五八・四・二五）、「原爆の怖ろしさ」（「産経新聞」一九五八・八・七）
一〇三　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三七八～三八三、三八七～三九二、三九六～四〇一頁
一〇四　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三九六頁
一〇五　『女の一生二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三七五頁

（三七三頁）

修平が特攻機搭乗を決意する源は、人間への深い共鳴にある。コルベ神父が示した身代わりの死に触れずとも、修平は相手の心に寄りそう術を体得している。だが、にも関わらず、この決断は、戦争を否定し、愛を創り出す契機ではない。なぜなら、修平の特攻機への搭乗は「暗い時代の波から（略）逃れられなかった（略）辛い世代」[一〇六]の諦めから導かれた決断なのである。

遠藤は、コルベ神父の身代わりの愛の行為や、『夜と霧』に記された病人を思いやって自分のパンを分け与えたという収容所内での愛の行為を知ったとき、「どんな最悪の環境のなかでも人間らしさを見せることができ（略）愛を敢行した（略）。自分を作ることは結局、自分自身がやることなのだ」と思ったという[一〇七]。とすれば、修平が下さざるを得なかった決断は、コルベ神父が象徴する愛を創る行為とは遠く隔たった場所にある。敵兵の人生を思い、苦悩する修平の心情をもってしても、特攻機への搭乗を、どんな最悪の環境のなかでも愛を創る行為だとは、言いがたい。だからこそ、この手紙は、コルベ神父の聖句が印刷された御絵が収められているチョコレートの箱には仕舞われなかったのだと考える。

なお、『女の一生二部』は、ヨハネ・パウロ二世が一九八一年二月二六日、長崎を訪問した折、「戦争は人間のしわざです」と述べた約四ヶ月後に連載が開始されている。川口隆行によれば、『女の一生二部』が書かれた時期には、いわゆる『長崎の鐘』（日比谷出版、一九四九・一）に端を発する永井隆の「原子爆弾を神の試練」という言説を、「一九八〇年半ばに（略）「浦上燔祭説」と名付け、それが「日本の指導者の戦争責任、アメリカの原爆投下責任を免責するようにはたらいた」とする高橋眞司（『長崎にあって哲学する――核時代の死と生』北樹出版、一九九四・七）の批判や、その批判としてカトリックの立場から声を上げた元長崎市長の本島等（本島等述・平野伸人編・監修『本島等の思想――原爆・戦争・ヒューマニズム』長崎新聞社、二〇一二・九）などが、長崎原爆を語る言説として存在していた[一〇八]。こうした同時代の言説のなかに、『女の一生二部』を位置づける必要もあるだろう。

とはいえ、少なくとも、『女の一生二部』におけるアウシュヴィツや長崎原爆は、収容所副所長や原爆投下を命令された者が、被害を受ける者の苦しみに共感する場面を創ることによって救いの可能性を描いた。それは、後の遠藤文学のテーマである共苦という思想が、国家による虐殺における実際には暴力を行わない真の虐殺者に命じら

一〇六　『女の一生　二部・サチ子の場合』注六七に同じ、三七六頁
一〇七　「アウシュヴィツ収容所を見て」注六九に同じ、二七三頁
一〇八　川口隆行「「浦上燔祭説」の歴史と現在」（『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、二〇一七・九）二〇～二三頁

れた人間の心に救いを及ぼす有様として評価されるものであろう。だが修平の特攻機搭乗は、真の虐殺者に救いが届かねば止められない。「群衆」としての人間、国家や組織として行われる戦争をくい止める救いは、描きえなかったといえる。

第二章　日本を作品舞台とした第二次世界大戦との対峙

第二章第一節　『火山』論―サドから「絶対」へ

〇、はじめに

純文学作品が研究対象の中心とされてきた遠藤文学のなかで「火山」（『文学界』一九五九・一～一〇、以下『火山』と記す）は、純文学長編でありながら単体での研究論文が少ない特異な作品だと指摘する小嶋洋輔は、同時期に書かれた「おバカさん」（「朝日新聞夕刊」一九五九・三・二六～八・一五）の方が「弱者」や「同伴者」といった、後の遠藤文学に繋がるテーマと関連づけた論文が多くなってきていることを指摘している[一]。山根道公も『沈黙』（新潮社、一九六六・三）の主題は、純文学長編『火山』ではなく並行して書かれた中間小説「おバカさん」に先取りされているとし[二]、『沈黙』の棄教神父ロドリゴを通して描かれた共苦という思想は、『火山』の棄教神父デュランには見いだせないことを指摘している[三]。これら近年の研究成果が踏まえるのは、『火山』は洋の東西の精神風土の違いを把握することを試みた「白い人」（『近代文学』一九五五・五、六）「黄色い人」（『群像』一九五五・一一）や「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）を始めとするそれまでの「対立」を描く遠藤作品から、日本の精神風土に合ったキリスト教を掌握することを志した『沈黙』へ向かう分岐点をなす作品とされてきたという点である。

『火山』の舞台について小嶋は、「火山赤岳のある町、おそらく鹿児島の桜島をモデルとした、虚構の、そして作品刊行の時代と同時代と思われる町」とし、「「日本人らしい」、自然信仰者の一般化のために「虚構の火山」赤岳を舞台にしたとさえ考えられる」と述べている[四]。遠藤は『火山』の連載が開始された月に、エッセイ「活火山と休火山」（「東京新聞夕刊」一九五八・一二・三）のなかで『火山』について、「火山のことに触れたが、私が言いたいのは本当の火山のことではない。実はわれわれ人間の心の中にも悪の火山があって、平和な平穏な時代では一応、休火山の形をとっているが、戦争やある極限状態になると突然、活火山のように恐ろしい火柱をふきあげるということである」と、『火山』の棄教神父デュランに近い火山観を示している。デュランの側からみても、赤岳に象徴性を持たせるために架空の世界を設定したといえるだろう。

赤岳が象徴性を有し、そのために架空の世界が設定される一方、『火山』のユニーク

一　小嶋洋輔『遠藤周作論―「救い」の位置』（双文社、二〇一二・一二）一五五頁
二　山根道公「解題」（『遠藤周作文学全集第一五巻』新潮社、一九九九・九）三三九頁
三　山根道公『遠藤周作　その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、二〇〇五・三）二四二頁
四　小嶋洋輔『遠藤周作論―「救い」の位置』注一に同じ、一五七頁

さは、テクストの外部でも赤岳を桜島として読むための補助線が引かれている点にもある。例えば、連載開始間もない頃の取材記「桜島は生きている」（『旅』一九五九・二）で、当時の鹿児島測候所観測課長である「桜島の主」にお世話になったことや、「今度の小説では人生と火山とを対比しながら書いていくつもりだ」と『火山』について記したり[五]、作品の象徴的な舞台モデルとなる桜島が、『火山』連載終了一年も満たないうちに『火山』と同様観光地化される火山を舞台とした「ヘチマくん」（「河北新報」他 一九六五・六・二～一二・二二）では、桜島という固有名詞がそのまま採り入れられたりしている。武田勝彦は、英訳版『火山』の訳者が序文で「舞台が鹿児島市であることを明らかにしていること」に触れ、「日本人の読者なら「火山」を通読すればほぼ架空の地名がどこかを想定し得る」が、それができない外国人の読者には補足情報を提供することが適切だと述べている[六]。『火山』は、架空の世界を設定しながら現実の世界を想起できることでリアリティを獲得できるというのだろう。

モデルとなった桜島の特徴は、一九八一年の資料では「すぐ目前に人口五〇万人の都市が存在する（略）世界的にみて例がない」火山であるとされている[七]。『火山』が発表された一九五九年頃の人口は後述するとおり約三〇万人だったようだが、中核都市規模の町がすぐ近くに存在するという特徴は同様であろう。また、一九一四（大正三）年の大爆発によって、桜島は「島の姿が一変し、噴出した熔岩の景観は桜島大根とともに鹿児島地方の観光の象徴」となるが、「鹿児島市への観光客の大部分」が訪れ、「高度経済成長に伴う観光ブーム」にあやかった昭和三〇年代（一九五五～一九六四）は、「桜島への渡航者は増加の一途」をたどっていたという[八]。なお、『火山』が発表された同時代は桜島に限らず、日本各地の火山が観光地化されていく時期でもあったようだ[九]。また、執筆の動機となった出来事に、一九五八年の「阿蘇山、三原山、浅間山と相次ぐ火山の噴火」があるとされている[一〇]。そうしたなか、桜島がモデルとして選ばれる理由はどこにあるのか。桜島をモデルとする赤岳の創られ方を整理するとともに、なぜ桜島がモデルとされるのか、その理由に迫ることを眼目のひとつとする。と、同時にこの試みが、棄教神父デュランの眼に映る赤岳が有する「悪」がサドの自然観

五 「桜島は生きている」（『旅』一九五九・二）三九頁
六 武田勝彦「海外だより　遠藤周作「火山」の英訳」（『国文学　解釈と教材の研究』一九七八・九）一九〇頁
七 南日本新聞社・鹿児島大百科事典編纂室『鹿児島大百科事典』（南日本新聞社、一九八一・九）四四三頁
八 鹿児島市史編さん委員会編『鹿児島市史Ⅱ』（鹿児島市長末吉利雄、一九七〇・三）四七〇～四七一頁
九 諏訪彰「火を噴く観光地」（『気象』一九六〇・五）九七頁
一〇 山根道公「解題」注二に同じ、二八八頁。小嶋洋輔にも同様の指摘がある（注一に同じ、一五七頁）。

を模したものであることを踏まえ、第二次世界大戦下のサディズムを描くための手段であったサドを、日本を舞台とした『火山』でどのように活かそうとしたのか、その可能性を模索できればと考える。

一、桜島を想起させる導入部分

先述したとおり、『火山』では桜島という固有名詞は採用されていない。だが、「赤岳の鬼」と呼ばれる主人公須田仁平が定年退職を迎え、気象台勤続一五年の表彰を受ける冒頭の場面では、「薩摩がすりの和服」を着た市議員が駆けつけ、火山活動の観測対象である赤岳には「南岳、中岳、北岳」があり、赤岳を訪れることを「島に（略）行ってみる」と表現し、移動には「遊覧船」が必要で、島には町営の「観光水族館」並びに名産の「蜜柑」があり、桜島にある地名と同じ「白浜、割石崎、松浦」が「島」にあることなどから、赤岳はおよそ桜島を連想させるよう創られているとはいえる[一一]。

むろん『火山』は「小説の舞台を虚構の世界に求めた初めての長篇」である[一二]。そのため、須田の以前の勤務先は、「大連測候所」と現実に即して限定されている一方、赤岳を観測する気象台は地名を冠しては語られず、観測所関連の地名が限定されるのは、突然爆発した赤岳の震動を元部下に調査させる場面で、観測データが集積される場所が「白浜の町はずれにある小さな小屋」と限定して語られている程度である[一三]。とはいえ、特に「薩摩がすりの和服」から桜島を連想しない読者は少ないだろう。

その一方で、赤岳が明治一七（一八八四）年から昭和三四（一九五九）年頃までの七〇年を超える間噴火したことがないのに対し、桜島は現在でも小規模な噴火を続ける活火山である。当時も桜島が噴火を繰り返していたことについて取材記で、「今、噴火しているのは南岳だ。山は北岳、中岳、南岳」に分かれており、「北岳、中岳はすでに老い衰え、現在たえず卵色の煙をあげ、小爆発しているのは南岳だけである」と紹介されている[一四]。このように、テクストからもテクストの外部からも昭和三〇（一九五五）年以降注視を要する噴火を繰り返していた桜島がモデルであることが示された『火山』について、連載が終了した一九五九年九月、平野謙は「おそらく鹿児島の桜島あたりを想定しながら、(略)赤岳という架空の休火山を設定して」いるこの長編は、「赤岳噴火というカタストロフ（破局）をつねに予想しながら」読まれると指摘し

一一 『火山』（文芸春秋新社、一九六〇・九）。引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九九九・四）一八五、一八八、一九〇、一九二頁に拠った。

一二 山根道公「解題」注二に同じ、二八八頁

一三 『火山』注一一に同じ、二二九頁

一四 「桜島は生きている」注五に同じ、三九頁

ている[一五]。桜島火山という存在をいかように活かしながら、赤岳が創られたのか、遠藤が参考にした可能性のある文献等から確認する。

二、「赤岳」噴火史―『日本災異志』・「東京日日新聞」

「赤岳」の噴火は「天武天皇六年」（六七七年）に始まり、記録が残っている大爆発に「文明八年」（一四七六年）「明治十七年」（一八八四年）のものがあるが、それ以降の大きな噴火はなく、須田がこの地に赴任した昭和一九（一九四四）年頃以降も大噴火していないという設定である。

一方、桜島噴火の最も古い記録は和銅元（七〇八）年とされ、その後、文明八（一四七六）年、安永八（一七七九）年、大正三（一九一四）年の大噴火が、現在に至るまで最もよく語られるところである。加えて、須田が実地で見てきた一五年間、赤岳が沈静を保っているのとは異なり、桜島は溶岩の流出によって大隅半島と陸続きなった大正三（一九一四）年の大噴火以降も、昭和二一（一九四六）年の噴火で被害をもたらし、以降およそ平静を保っていたものの、昭和三〇（一九五五）年一〇月に突如噴火し、『火山』初出連載当時は、「有史以来はじめて」南岳「山頂」の火口での「活動を開始」していた[一六]。同時代の状況としては、島内に約一万三千人、海を隔てて約四～五キロの鹿児島市に三〇万人の人々が暮らす桜島の立地からすれば[一七]、須田が赤岳を老いた山と捉え噴火することはないと信じているのとは違い、平静を保つ火山が突如噴火するということ自体が、人々の記憶に新しいことであったろう。

ところで、赤岳が噴火した記録のうち、「文明八年」は『日本災異志』、「明治十七年」は「東京日日新聞」を参考にしたと語られているが、「文明八年」の他「天武天皇六年」の噴火も『日本災異志』を参考としたであろう痕跡が窺える。赤岳「天武天皇六年」の噴火を語った箇所を引用する。

> 戊寅冬の十月に「火炎大熾、沙石委積ス。声、太鼓ノ如シ。灰ヲ降ラシ、草木皆枯ル」という簡単だが烈しい噴火の模様を伝えている。
>
> （注、傍線等は池田。以下同）
>
> （『火山』一八八頁）

一五　平野謙「今月の小説（上）」（「毎日新聞」一九五九・九・一八）。足立康「ひとつの誤解――解説」（『火山・地なり』講談社、一九七六・五　二九〇頁）にも同様の指摘がある。

一六　森本良平『日本の火山』（創元社、一九五八・八）三六頁

一七　安井豊「桜島噴火と異常音聴域」（『天気』一九五六・四）二五頁

この箇所は、『日本災異志』における「噴火之部」最初の項となる天武天皇一三（六八四）年の浅間山噴火と、四番目の延暦七（七八八）年の霧島噴火が参照されている。引用の鍵括弧内一～二文目は、延暦七年霧島噴火の「火炎大熾、響雷動ノ如シ。亥ノ時ニ及ビ、火光稍止ミ、唯黒烟ヲ見、然ル後、雨砂峯下五六里、委積ス」に近しい箇所が確認でき、同じく引用の鍵括弧内三文目は、天武天皇一三年浅間山噴火の「灰ヲ雨ラシ、草木皆枯ル」という記述と同一である。また、『日本災異志』の「噴火之部」二番目の項目は、天平宝字八（七五六）年の桜島噴火の記述だが、それを避けて赤岳噴火史は創られており、更には『日本災異志』が収集した日本の噴火記録の最初の時点より前の「天武天皇六年」に、赤岳噴火史の起点を置いている[一八]。

次に、「文明八年」の赤岳噴火が説明された箇所を引用する。

山、大ニ燃出ス。此五日以前ヨリ、浜辺ノ井水沸キ騰リ流水ノ如クニナリ海水ハ紫色ニ変ジタリ。斯クテ十月九日ニ至リ赤岳ヨリ白煙ヲ射出セルガ、有村上ナル辺リヨリ黒煙ノ大噴出アリ高ク三里ノ上空マデ昇ル。煙中ニ無数ノ電光ヲ閃カシ、火石ヲ空ヘ吹上ゲ、島中ヘ降下候故、火石振リ止ミタルモ、夫ヨリ砂降リ候テ、又々泥土多ク降リ積リ平地ノ畑三四尺、山手坂地ニハ一尺に及ベリ、就中、西方ニ流出セル溶岩ハ村ヲ没シ畠ヲ埋メ海ニ流入セリ。コノ海峡ハ元来深サ四十尋ナリシガ次第ニ埋メラレタリ

（『火山』一八九頁）

この箇所は、『日本災異志』安永八（一七七九）年の桜島噴火に関する記述の前半に、部分的な類似が確認できる。

十月朔日、鹿兒島東南北数十里ノ地頻リニ震ヒ櫻島ノ井水悉ク沸キ海水皆紫色ニ変ス未ノ刻ヲ過キ嶺ノ上大ニ噴火シテ両所ニ炎上ス蓋シ火燃ユレハ地愈ヨ震ヒ地震ヘハ火愈燃ヘ互ニ　相應シ相激スルモノヽ如シ是ノ如クナルコト五日ヲ経テ炎勢稍殺ケタリト雖モ火勢尚己マス或イハ三四時ヲ過キ或ハ二三日ヲ隔テヽ噴火鳴動ス又東南五里ノ海底ヨリ炎焔騰上シテ日夜嗷々タリ而シテ海上頓ニ洲嶼若干ヲ現出シ水面ヲ出ルコト二丈許周回半里許一月ヲ経テ復タ異常ナシ是ニ於テ櫻島ノ形状大ニ変更ス

（小鹿島果『日本災異志』六一九頁）

噴火がどのようにして生じたのかという部分は『日本災異志』をおよそ参考にしつつ、噴火箇所とそれによる影響については変更が加えられている。特に、桜島の特徴とさ

一八　小鹿島果『日本災異志』（地人書館、一九六七・八）六〇五～六〇六頁。引用は読み下し文に改めた。

れる両面噴火は『火山』でも赤岳の特徴として触れられているが、『日本災異志』での両面噴火の表現はそのまま採用されず、まずは赤岳から白煙があがり続いて有村の上空から黒煙が噴出したとされている。赤岳が有する「南岳、中岳、北岳」のどこから最初に噴火したのか曖昧な記述にされているため、この折の最初の噴火口が現実の南岳と同じ位置だったとすればこの記録は片面爆発であったことになり、それを可能性として残す記述となる。また、桜島にある有村の上空に位置する火口には、昭和二一（一九四六）年に突如噴火した昭和火口と昭和三〇（一九五五）年から噴火をつづける南岳山頂火口がある。文明、安永、大正と山腹の両側から噴火していた桜島が、前例を覆し一か所から噴火したのが、この有村上空にある昭和火口と南岳山頂火口からのものである。こうした点からは、「文明八年」（一四七六）の赤岳噴火に関する記述は、両面爆発ではないと読める可能性を否定しえないといえるだろう。また赤岳のある町は、海を隔てて約四キロ地点に市街地があると設定されており、桜島と鹿児島市の距離と同等である。「文明八年」の赤岳噴火による溶岩が西方へ流出し海を埋めたとすれば、須田の暮らす町との間の海へ溶岩が流れ出た、ということになる。

次に「明治十七年」の赤岳噴火は、噴火日時から大正三（一九一四）年の桜島噴火が素材とされている可能性が高い。初出時に「毎日新聞」を参照したとされていた箇所が、単行本化にあたり『日本災異志』が明治期の記録の典拠の一つとする「東京日日新聞」と改められていることからは、「毎日新聞」前身の「東京日日新聞」記事を確認していたと推測される[一九]。

赤岳は、「明治十七年」の「一月一二日午前八時頃」に「赤岳の頂上より白煙を（略）上空に抛出し」、「遂に十時頃、先づ山の西方、高距約八百米の地点より噴火し、次いで十分内外の時を経て東南方、高距約九百七十米の箇所よりも噴火」とされるが、大正三年の噴火について、「東京日日新聞」（大正三（一九一四）・一・一三）は「一月一二日午前十時過桜島の中腹（鹿児島市の前面）は俄然大音響を発すると共に爆発しこれと同時に島の後方なる黒神温泉付近も亦爆発し」と報じている。桜島の西方と東方、両面爆発の位置などを含め類似していることが分かる。なお、この日の「東京日日新聞」は噴煙が海上四キロを隔てた鹿児島全市を覆い、「桜島の横山、赤水二村（略）は全村火を浴びて殆んど全滅の有様となった」と報じている。横山、赤水は島の鹿児島市側となる南西に位置する地区だが、『火山』では「明治一七年」の赤岳噴火による溶岩の大流出で「島の東南の横山村、宇多村を全く埋没し海に迫った」と、大隅半島側への被害を記述している。

ところで「明治十七年」の赤岳噴火は、この冒頭の新聞の抜き書きという歴史的記述に依拠したと見せる語りでは両面爆発のように語られているが、火山性ガス中のハ

一九　「火山」（『文学界』一九五九・一）三〇頁

ロゲン元素の含有量によって赤岳噴火を予測する前島博士の学説が、赤岳に観光ホテルを建設しようとする市会議員相馬から須田に伝えられる際には、「ふしぎに片側だけに限られた」(二二三頁)とされ、両面爆発ではない特異な爆発であったと語られる。

遠藤が『火山』連載開始と同時期のエッセイ「活火山と休火山」で触れた森本良平『日本の火山』(創元社、一九五八・八)も、桜島の噴火は、「いまなお噴気活動をつづける南岳の山頂火口の東端を通って、(略)三方向の直線に沿って噴出口が、いつも山腹の両側に生じているのもおもしろい」と指摘しているが、桜島は昭和溶岩としてその爪痕を残す昭和二一(一九四六)年三月以降は片面爆発を見せていた[二〇]。

赤岳最後の「明治十七年」の噴火がそれ以前の噴火とは異なり、片側の山腹からのみ噴火したという点については、昭和二一年以降の桜島噴火を模しているといえる。『火山』は両面爆発を常とした赤岳が最後の爆発では予想を覆して片面爆発であったという点を、噴火の兆しを見せた赤岳が本当に爆発するかどうかを予測する基準として五章以降採用している。それにもかかわらず、第一章で語られた「明治十七年」の赤岳噴火を報じる「東京日日新聞」の抜き書きが、両面爆発と読める可能性を残すのは、赤岳を把握しきれていない語り手が存在しているともいえよう。ちなみに、テクストに赤岳と須田が暮らす都市の位置関係を指示する記述はほとんどない。これまではひとまず、鹿児島市と桜島の位置関係にあると仮定して論じたが、両者の位置関係が不明瞭なテクストであれば尚更、読者はテクストの外部から情報を補い読み進めるだろう。テクスト外部の情報を取り入れずに読むとすれば、『火山』は揺らいだ空間を提示するテクストといえる。また、「明治十七年」の噴火地点は、須田の視点からは「九百七十米」、前島博士の視点、須田に内面化していない語り手の視点からは「八百七十米」と語られる[二一]。改稿に際して訂正しそびれた可能性もあるが、こうした差異もまた、須田が信じている自身の写し鏡としての赤岳と『火山』が描く現実の「赤岳」の間の裂け目を表しているともいえよう。

三、桜島取材―案内役「安井観測課長」

赤岳最後の「明治十七年」の爆発が両面爆発でなかったという点は、赤岳噴火の懸念を火山ガス中のハロゲン元素含有量による予測によって訴えている前島博士が、片面爆発だった「明治爆発の反対地点」を「次の大爆発の予想箇所」とするという形で使われているが、私淑した氷山博士の説に倣い、赤岳は死火山になりつつあると信じる須田が、前島博士の主張を頑なに否定する際に根拠とするのが、桜島火山のもう一

二〇 森本良平『日本の火山』注一六に同じ、一〇〇～一〇二頁
二一 『火山』注一一に同じ、一九三、二二二、二二三頁

つの特徴である火口が年々上部に移動しているという点だ[二二]。昭和三〇（一九五五）年の桜島噴火は、『火山』で予測された最新の爆発の火口の反対側ではないものの、南岳八合目付近にある昭和火口より高い南岳山頂火口一箇所であった。遠藤の桜島取材記にも登場する鹿児島測候所の「安井観測課長」こと安井豊も、「大正三（一九一四）年以後、各火口は年を追つて（略）山腹を上昇し」ていると報告している[二三]。

一九五八年一〇月の鹿児島取材の折、桜島は一九五五年一〇月から続く噴火によって「一般の登山客は山に登ることを禁じられている」状況だったが、遠藤は桜島と取り組んで一〇年、「桜島の主」と言われる先述の鹿児島測候所「安井観測課長」の「御好意で六合目」まで案内してもらい、桜島に取り組む安井の「情熱」と小説を書くことを通して「人間」に取り組む自身の気持ちが、「全く同じ」である気がしたと述べている[二四]。なお、安井は『火山』の読後感を気象雑誌に寄せ、赤岳が噴火しないことを頑なに信じ、爆発の兆候をみせた赤岳に対し須田が裏切られたと感じる場面について、「筆者ならば「よくぞ知らせてくれた」と、賞賛したい」と述べているが[二五]、創作人物である須田と火山学の徒である安井の火山に対する眼差しに違いはあれど、安井が桜島取材のよき導き手であったことに違いはないだろう。当時、およそ六合目以上の山腹でしか、爆発に伴う噴石による山火事は生じていなかったという[二六]。遠藤を特別に南岳「六合目」まで連れて行ったことも、爆発の爪痕を見せるためであろう。なお、梅崎春生は、遠藤が桜島取材でヘリコプターに搭乗し火口を見てきたというエピソードを寄せている[二七]。安井による昭和三三（一九五八）年末から昭和三五（一九六〇）年二月までの飛行機観測の報告によると、当時は、定期観測として月一回鹿屋航空隊機への搭乗が叶う他は、鹿屋航空隊へ追加観測を申請して認められるか、新聞社機に乗せてもらうしか方法がなかったとし、一年二ヶ月間で「二五件」、単純に考えれば月に二回飛行機観測できれば、という状況だったようである[二八]。

赤岳が爆発の兆候を見せた際、須田は身体の不調をおして山に登り、「赤岳」が自分

二二 『火山』注一一に同じ、一九三、二二二、二二三頁

二三 安井豊「昭和年間における桜島火山の火口の変遷」（『技術通信』一九五六・八）六頁

二四 「桜島は生きている」注五に同じ、三九頁

二五 安井豊「九州の火山だより「桜島通信」」（『気象』一九六〇・五）一〇一頁

二六 安井豊・野田義男・山形英雄「桜島火山の赤熱噴石」（『測候時報』一九五八・五）二三六頁。なお、一九五八年三月五日の噴火では、五合目まで達したという。

二七 梅崎春生「冒険心に富む人」（『昭和文学全集二〇　安岡章太郎　遠藤周作』角川書店、一九六二・九）付録『安岡章太郎　遠藤周作アルバム』所収）一三～一四頁。桜島火口をヘリコプター取材したことは、Richard A. Schuchert による英訳『火山』（*Volcano*, Charles E.Tuttle Co,1979）の序文でも紹介されている。

二八 安井豊「最近の桜島火山の飛行機観測」（『測候時報』一九六〇・五）一六四～一六五頁

と同じ「老いた」山であることを、「ガスの臭気」、「野ネズミの死骸」、松の灌木が枯れる、地動といった変化から確認しようとする[二九]。安井は、「火山の爆発は予知できるか（一）～（三）」（『転機と気象』一九五九・六～八）を『火山』の雑誌連載中に発表している。『火山』でも触れられているように、当時の気象庁に噴火予報を出す業務はなかった。安井はこの論考で、噴火予報責任がなかったのは、当時可能だった予報は観光客や登山客といった「一般の人々の希望する予報、（略）某月某日どれくらいの噴火があるという予報とはまだ程遠い」、大噴火が起こる可能性のある「危険期」と大噴火はまず起こらない「非危険期」を判断することができる程度で、危険期に必ず大爆発が生じるとも言い切れない状況にあるからだと断っており、その上で、「現状、どの程度に危険期を絞っていけるのか」について述べるとするが[三〇]、そのなかには、赤岳噴火の兆候として、須田が山に登ることで確認しようとした現象に対する噴火予測への有効性が記されている。

安井は、五感で感じることのできる兆候によって爆発の予測をなす例として、大正三（一九一四）年の桜島噴火では「蛇類の大量移動」、昭和三〇（一九五五）年噴火では「蝶の大量移動」、昭和二一（一九四六）年噴火の原初的噴火であった昭和一四（一九三九）年噴火では「松林の枯死」などがあったことを挙げ、蛇類の大量移動という現象が本当にあったのかは不確かであるものの、いずれも「渇水、低温、噴煙中の亜硫酸ガスによる」噴火の前兆とされているが[三一]、昭和三〇（一九五五）年冬から昭和三一（一九五六）年春までの「樹が枯れた、井水が減った」などの住民からの申し出の多くは「火山活動には無関係のものが多かった」という[三二]。須田は、蛇や蝶と同じく小動物である「野ネズミの死骸」を発見し動揺するが、死骸が「一匹だけ」であることに安心しようと、火山観測者でありながら半ば意識的に周囲の調査をしない、「真実を見るのが怖ろしい」（二二七頁）人物とされている。また、「ガスの臭気」について須田はほとんどの場面で「硫黄ガス」と表現するが、これはおそらく専門用語では、前島博士の論文の一部として語られるなかにある「硫化水素（H2S）」を指すであろう[三三]。但し、「ガスの臭気」を感じられなかった須田が、大噴火の前兆を確信する場面では、専門用語で「硫化水素のガス」と表現している（二四八頁）。

また「地動」、いわゆる火山性微動の観測だが、これは安井が、「もっともてっとり早く、かつ長期予測に適している」と考える観測であり、桜島の場合、中村理祐が昭

二九　『火山』注一一に同じ、二二六～二二九頁

三〇　安井豊「火山の爆発は予知できるか」（『天文と気象』一九五九・六）二頁

三一　安井豊「火山の爆発は予知できるか」注三〇に同じ、七頁

三二　安井豊・野田義男「桜島火山爆発予測の現在までの経過」（『測候時報』一九五九・五）二二九頁

三三　『火山』注一一に同じ、二二二、二二九頁

和三〇年以降の桜島火山の微動をA～E型の五種類に分けたうちの「単純な紡錘形の定常波的震動で（略）、1群だけのときもあり、数群が数分にわたって継続するのを認めることもある」「C型」地震が「大きな爆発の前に頻発する」とされている[三四]。須田が観測設備を使って客観的に噴火の見立てを立てるのが地動だが、『火山』では、地震計に描かれた「細かなジグザクが不規則でない限りは地下にも火山にも異常な動きはない」はずなのに、「意外にも三ヵ所」、須田の赤岳休火山説を覆すことを表す「異常な高低」が示されたと、波形などには拘らない表現になっている[三五]。加えて、小動物の死骸調査と同様、「地震計の異常な動き」を示す記録紙を、ポケットの中にひそませて」きてしまうような、赤岳の真実を受け入れることを怖れる人物であることがここでも示されている[三六]。

なお安井は、『火山』に描かれるハロゲン元素に着目する研究や、それに伴う最近の調査で感じた噴火予想地点付近での「硫化水素の臭気」についても触れている。安井によれば火山は、「一般的な性格として活動時にはハロゲンが増し、またCO2に対するSO2、H2Sなどの硫黄化合物の量が増すのが通例」だとし、新しい研究として、当時鹿児島大学文理学部に所属していた鎌田政明が桜島を対象に火山灰中のハロゲン元素の含有量に着目した研究を開始していたとする[三七]。『火山』では「火山ガス」中の含有量とされているが、安井によれば「火山灰」中の含有量だったようだが、火山学の新しい側面を取り入れようとしていることは窺える。但し、火山ガスや火山灰といった「噴出物の験測」には時間を要し「多くのものを統計的に見なければならない」ため、世間が期待する「某月某日にどれくらいの噴火がある」といった予報には不向きで、可能だったのは、桜島が活動期であるか、非活動期であるかといった「長期予測」、特に非活動期に噴火はおよそ生じないといった程度のことだと安井は断っている[三八]。

四、象徴としての「赤岳」

本文について、「内容に関わるような顕著な改稿のあとはない」とされてきたが[三九]、須田が赤岳を専門的な観測方法や専門用語では語らない人物として創られていることに関連して、初出では「明治十二年」（一八七九）とされていた赤岳最後の大噴火が「明治十七年」（一八八四）に改められた点に着目したい。

三四　安井豊「火山の爆発は予知できるか（二）」（『天文と気象』一九五九・七）三～四頁
三五　『火山』注一一に同じ、二四四頁
三六　『火山』注一一に同じ、二四五頁
三七　安井豊「火山の爆発は予知できるか（二）」注三四に同じ、五頁
三八　安井豊「火山の爆発は予知できるか（二）」注三四に同じ、五頁
三九　小島洋輔、注一に同じ、一七四頁

気象庁は明治一七（一八八四）年六月に全国の天気予報の発表、一二月には全国的な地震の震度観測を開始している[四〇]。『火山』発表当時は、噴火予報より進んでいた天気予報ですら外れることが多かったという[四一]。そうしたなか、国が気象の動きを科学的に予測し、周知することを開始した年を、赤岳最後の大爆発に設定し直したと考えられる。また、須田が想定した赤岳噴火史にも当然書き込まれるはずの最後の大噴火は、気象台職員が爆発に対する周辺住民への注意喚起を見誤ったと語り継がれる大正三（一九一四）年の大噴火を模して創られた[四二]。こうした点からは、赤岳火山の全容を把握することの困難さへの暗示が、テクスト冒頭の「明治十七年」への改稿に含まれていると考えられるだろう。

須田は、着任以降一五年の間に「八〇数回」赤岳に登った鬼と称されるものの、夢の中とはいえ氷山博士からその認識を否定され、現実でもその理解は「氷山博士の理論の受け売りだ」と評価されているという設定である[四三]。また、須田が赤岳を眺める場所は、職場でも病院でも特定の位置に限定されている[四四]。須田が見ているのは、赤岳の全容ではないことを暗に示しているのだろう。概ね否定的だった同時代評のうち、瀬沼茂樹は『海と毒薬』以来の「力作」だとし、「日本人の日常経験主義の限界というようなものをつきながら、人間存在の根源的不安を火山に象徴」したと評した[四五]。須田は、嗅覚や視覚などで把握できる方法で噴火の兆候を確かめ、地震計という科学技術が示す揺れを元気象台職員でありながら専門的な見地から把握せず蔵匿してしまう人物として創られている。須田は赤岳を自分の人生の写し鏡だと感じていたが、赤岳火山に対し、日常的経験からの把握を試みる須田の信念である赤岳休火山説がついに爆発することによって破綻することは、こうした点にも描きこまれているといえる。

ところで、赤岳が噴火した際、須田は氷山博士の説に従い、山頂付近の火口から出た「白い煙」を休火山になりつつあることの証としたが[四六]、夢とはいえ博士から休火山説を否定されている。安井等によれば「大噴火の順序としてまず山腹四合目より軽微なる白煙を発する」ことが報告されている[四七]。管見の限りでは、古い桜島噴火の記録に、「白い煙」を吐いていたという記述を見つけることはできなかったが、前述した『火山』の「明治十七年」の赤岳噴火を報じる新聞記事の抜き書きは、「白い煙」を吐

四〇　気象庁HP（https://www.jma.go.jp/jma/kishou/intro/gyomu/index2.html）（二〇二三年九月最終確認）

四一　安井豊「火山の爆発は予知できるか」注三〇に同じ、二頁

四二　樋口長太郎・安井豊「桜島噴火記念碑」（『測候時報』一九五七・二）

四三　『火山』注一一に同じ、一八七、二五八、二六八頁

四四　『火山』注一一に同じ、一八八頁　二二九、二四三頁

四五　瀬沼茂樹「文芸時評上」（「東京新聞夕刊」一九五九・九・二七）

四六　『火山』注一一に同じ、一八九頁

四七　安井豊「火山の爆発は予知できるか」注三〇に同じ、七頁

いた後、黒煙が上がり爆発したとされている。更には、須田の願いに逆らい、ついに赤岳が地崩れを起こし爆発した際の最初の噴煙も「湯気は最初は白い細い煙だったが」と描かれている[四八]。この点も、赤岳噴火の伏線であったと捉えられるだろう。

赤岳が須田の思いとは裏腹に爆発の兆候を示す山頂付近からの白い噴煙を上げると、須田は再び昏睡状態に陥りながら夢を見るが、この時、地崩れを生じた赤岳の山肌は須田の自宅の庭と繋がる[四九]。夢の中での赤岳噴火を告げる地崩れの映像が、夫婦生活を継続し本人としてはいい夫であったと満足していた家族生活の拠点である自宅の庭の地崩れの映像に変化していくとすれば、死因となる低血圧によって倒れ朦朧とするなかで聞こえてきた妻や長男、長男の嫁からの須田へのネガティブな言葉によって揺らいだ家庭内でのこれまでの自己評価が崩壊することは、赤岳によっても暗示されていたといえるだろう。テクスト冒頭でタカは心臓が悪く「山路が登れ」ないので赤岳に来ることがないと説明されるのも、夫婦の裂け目が赤岳にあることを示す[五〇]。

瀬沼茂樹は先の同時代評で、息子夫婦が須田に抱く「反感の根拠が最後まで解らない」ことを疑問視したが、須田に対して不可解な笑みを向けるばかりの咲子の笑みは、夢の中で失踪した妻タカの冷たい笑みにもなる[五一]。タカとの連帯を疑わない須田がその信頼の根拠としたのは、ともに過ごした時間の長さである。『火山』では、特に須田の視点から時間の経過を示す直接的な表現が繰り返し使用されている。最後にこのことについて、赤岳噴火の始まりが天武天皇の時代におかれた効果とともに考察する。

五、おわりに―サドの自然観にも触れつつ

須田と赤岳、須田と家族との間の時の経過を示す表現が散りばめられているだけでなく、『火山』には遠藤が晩年の『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）で再び問うた「老い」の問題が既に含まれている。「老いの悲劇」について、火山学の泰斗氷山博士は「それが間違いだと気づいても――もう人生やりなおす時間がない」ということであり、彼らが把握に努める火山は「千年二千年でたしかめなければわかりません」と述べる場面がある[五二]。

須田は、赤岳を見続けてきた「十五年」、大連測候所にいた「二十ちかく」の年数、妻と連れ添った「三二年」、夢のなかではあるがタカと「二十年ちかく」住んだ大連の家、家族を養うために働いてきた大連での「二十年」というように、それまで積み重

四八　『火山』注一一に同じ、二五八頁
四九　『火山』注一一に同じ、二五六頁
五〇　『火山』注一一に同じ、一九〇頁
五一　『火山』注一一に同じ、二六四頁
五二　『火山』注一一に同じ、二五七～二五八、二六〇頁

ねてきた年数を数える。そして、それらを含めて定年退職するまでの「六十年」という歳月を経た地点を振り返る[五三]。その時改めて、それまで「五十年の処世術」のもとに積み上げてきたと思っていた仕事も家族関係もまやかしだったと気づき、自分の死も「生命保険」の保険料でしか家族から評価されず、須田の赤岳研究を受け売りだと誹る菅原や、観光開発で事業を興すのに須田の赤岳研究を利用しようとしていた相場が葬儀の「友人代表」となる[五四]。ここには、積み重ねられていくものとしての時間という考え方への懐疑があるだろう。

赤岳噴火史の始まりが、元号が定められて以降初めてそれが途切れた時代にあたる天武天皇の時代におかれたのも、こうした時間という概念への不信感に起因するのではないだろうか。なお、「天武天皇六年」（六七七）の赤岳噴火の干支は「戊寅」とされているが、本来は丁丑であり、翌天武天皇七（六七八）年が戊寅である。

また、デュランは、質の異なる時間が当事者間に流れていることを示すことで、時間の不確かさを意識させる。デュランが佐藤神父への皮肉として自身の棄教の時期を他人から見た表面上は「八年前」だと独り言ちる場面、デュランが日本人修道女には自分に危害を加える相手の元に戻ってしまう女性の心理を理解できないと「二十二年たった今日」改めて思い返す場面に表されている[五五]。また、佐藤神父も、「三十年ちかく」教会司祭を務めた経験を持ちながら[五六]、日本人信徒の日常的な生活上の悩みに寄り添うことには長けているが、キリスト教の本質を身につけられているようにはデュランの眼からは見えていない。

デュランが抱く赤岳観は、『火山』と同時期に取り組んでいた「サド伝」（『群像』一九五九・九、一〇）での自然観に依拠しているため、須田との対面の場面では「悪」を内包する赤岳観を提示せず、赤岳の麓に黙想の家を建てる佐藤神父への反応として、消滅することのない「悪」としての赤岳観を訴える。『火山』が発表される二年前、遠藤はサドへの言及もあるエッセイ「沈黙の声」（『ユリイカ』一九五七・二～四、六）で「時間」という概念の不確かさに言及するとともに、ミルチャ・エリアーデ『永劫回帰の神話』（堀一郎訳、未来社、一九六三・三）に触れている。エリアーデは、現代の宗教行為は古代の原初的世界で行われた「祖型の模倣と典型的なしぐさの反復」によって成立することを指摘している[五七]。遠藤がマルキ・ド・サドに魅かれたのは、サドに接近することによって「救済前」の「原初の世界」に触れてみたいという憧れに

五三 『火山』注一一に同じ、一八五～一八九、一九一、二二〇、二二三、二六二～二六四、二六六頁

五四 『火山』注一一に同じ、一九四、二六〇、二六七頁

五五 『火山』注一一に同じ、二〇八、二一二頁

五六 『火山』注一一に同じ、一九七頁

五七 ミルチャ・エリアーデ『永劫回帰の神話』（堀一郎訳、未来社、一九六三・三）四九頁

あった[五八]。キリスト教的秩序で世界が整理される前の「原初の世界」への志向を中心にサドに言及するエッセイ「沈黙の声」では、サドの思想を神へ通じるネガティブの道だとしていた回路よりも、「原初の世界」への通路としてサド的行為が捉えられている。桜島を有する鹿児島は、日本におけるキリスト教伝来の地である[五九]。『火山』が、黄色い人の世界を代表する須田と白い人の世界を代表するデュランという相反した二つの世界から赤岳を眼差す構図を有し、この二つの世界はおよそ交わらないが、鹿児島の桜島をモデルに選んだことには、当時の遠藤が、いわゆる洋の東西の対立ではなく、時間を遡り、混とんとした「原初の世界」への志向があったのではないだろうか。

そうした須田、デュランの観る赤岳は、どちらの視点からも「きいろい煙」、「黄色い煙」を吐いているとされている[六〇]。取材記「桜島は生きている」や桜島を舞台として『ヘチマくん』でも「卵色の煙」として同様の表現がなされている[六一]。「黄色い煙」とは、『沈黙』でモキチやフェレイラが流した「白い泪」という表現同様、違和感を覚える表現ではあろう[六二]。『火山』は自然描写に色彩表現が多用されているが、そのなかでも黄色は、赤岳が吐く煙の他、タカの顔、佐々木の顔、須田の死に顔といった登場人物の顔の色として使われ、キリスト教信者の学生は「白い強張った顔」とされている[六三]。「白い泪」という表現が使われた「青い小さな葡萄」(『文学界』一九五六・一～六)では「黄色」について次のように説明されている。

> ふしぎに雨にふりこめられた大きな沼沢地帯を想像するのだった。あそこではなにもかにもが育たない。植えられたものは、じめじめとした泥の中でその根を腐らせ、やがて衰えて死んでしまう。あそこではなにもが見えはしない。じめじめとした雨のなかですべてがぼやけ、輪郭を失い、誤魔化されていくのだ。生気のない濁った色に変わるのだ。きいろちいう色はそういう色なんだ。
>
> (引用は『遠藤周作文学全集第一巻』注一一に同じ、四四頁)

日本的な感覚を「黄色」に込めたとすれば、デュランが見ている赤岳にも日本人的心

五八 「滞佛日記」(『近代文学』一九五三・七～一〇・一二)。『遠藤周作全日記【上巻】』(河出書房新社、二〇一八・五)三〇五頁参照。

五九 南日本新聞社編『鹿児島市史Ⅳ』(鹿児島市長赤崎義則、一九九〇・三)九九一頁

六〇 『火山』注一一に同じ、二二六、二二八、二五一、二五八、二七〇頁

六一 「桜島は生きている」注五に同じ、三九頁。『ヘチマくん』(新潮社、一九六一・五)一六九頁

六二 丹羽文雄「谷崎賞選後評　感想」(『中央公論』昭和四一・一一)、石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』(クレス出版、二〇〇二・六)六一頁を参照した。

六三 『火山』注一一に同じ、一八七、一九二、一九八、二六六頁

性を託そうとしていたとはいえないだろうか[六四]。デュランの心情が変化するほどの日本的なものとの対面は描かれていないが、「黄色い煙」をデュランも見ていたという描写からは、日本と西洋という二つの世界を、一つの土俵におこうと努めた要素として窺うことができるのではないだろうか。

そう考えるのは、『火山』連載開始の約二ヶ月前、「作家と読書」(『批評』一九五八・一一)において述べた、モーリヤックの『蝮のからみあい』と川端康成の『山の音』(筑摩書房、一九五四・四)に描かれた「老人の描写」の「どうしようもない隔たり」を[六五]、須田一人に背負わせようとした形跡があるからである。『蝮のからみあい』の主人公老弁護士は、相続できる財産や生命保険を期待して家族から死を待たれている。このことは、保険金の額でしか家族から受け止めてもらえず、「六十歳の正月」に「家族や肉親からこのように除け者にされて」いたことに気づいた」須田の「老い」の問題と重なるだろう。また、須田には真夜中の寝室で『山の音』を想定しているであろう「手をだして妻の体にふれるのは、いびきをとめる時だけという老人の哀しさが書かれて」いた本を思い出す場面もある[六六]。また、氷山博士が「老いの悲劇」について述べた「それが間違いだと気づいても――もう人生やりなおす時間がない」という言葉は、「作家と読書」に引き写された『蝮のからみあい』の老弁護士が述べた「老いの惨めさ、これは人生の総決算、数字一つも変えることができない総和である」という台詞にも共鳴する[六七]。少なくとも須田は、「赤岳とともに永遠の眠りにはいれるもの」と感じながら亡くなってはいないだろう[六八]。

ただ、『火山』発表の一九五九年の年末、遠藤はサド研究のための滞佛中の日記に、「考えてみると今年は仕事らしい仕事もしなかった。小説も「おバカさん」が新聞小説としては一応の成功はしたのだが、心のこもった作品は今年は書かなかったようだ。」と綴っている[六九]。『火山』も満足のいく出来ではなかったのであろう。とはいえ、先行研究で対立を描くとされてきた須田とデュランの姿は、時空間の描写から対立とは別の、「福音前」の「絶対」の次元での巡りあわせが目論まれていたように、思われる。

六四　遠藤の各作品における色彩に込められた意味を論じた先行研究に、兼子盾夫『遠藤周作の世界―シンボルとメタファー』(教文館、二〇〇七・八)がある。

六五　「作家と読書」(『批評』一九五八・一一)、引用は(『遠藤周作全日記【上巻】』注五八に同じ)三九八頁に拠った。

六六　『火山』注一一に同じ、一九五頁、二四〇頁。『山の音』(岩波文庫、一九八八・一〇)一一頁に同様の表現がある。

六七　「作家と読書」注六五に同じ。中島公子訳「蝮のからみあい」(遠藤周作編『モーリヤック著作集三』春秋社、一九八二・九所収)一二一頁に同様の表現がある。

六八　『火山』注一一に同じ、二四九頁

六九　「新資料「サド研究のための渡仏日記」(『遠藤周作全日記【上巻】』注五八に同じ)四一六頁

第二章　日本を作品舞台とした第二次世界大戦との対峙

第二章第二節『海と毒薬』論

〇、はじめに

第二次世界大戦下、九州帝国大学医学部（当時）で行われた米国人捕虜に対する生体解剖事件を題材とした「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）は、戦争という「みんな死んでいく時代」[七〇]のなかで、生体解剖実験に手を染めていく二人の医学生の心理が、当時の重々しい雰囲気を映しながら描かれている。また、発表された一九五七年は、未だ戦争の記憶も生々しい時期であったため、発表当時は、事件の関係者から「『海と毒薬』という小説を読んだ時、（略）自分等の古い傷痕を抉られたような心境」[七一]だったと言われ、自宅には「脅迫状が舞いこむ」[七二]こともあり、生体解剖事件を採り上げたこと自体に対する読者の拒絶反応にも直面したようだ。しかしながら、同時代評によって「その事件（略）は氏が永いこと主題として温めてきた、神が不在であるということの悲惨について書くためのダシに使われたに過ぎない」[七三]と指摘されたように、『海と毒薬』（文芸春秋新社、一九五八・四）における遠藤の目論見は、別のところにあった。遠藤は、あの事件にかかわった人々を「裁断する意志」はなかったと述べている[七四]。また、一九六五年には、当時の取材日記の一部を『『海と毒薬』ノート」（『批評』一九六五・四）として発表したが、そこには「集めた事件の内容メモ（略）は（略）捨ててしまった」[七五]と記されている。また、別の機会には、取材にあたっても、当事者に迷惑がかからぬよう腐心したことを打ち明けている[七六]。これらは、小説と事実の間に横たわる乖離を主張したものであっただろう。

『海と毒薬』は、「日本人における「罪意識」の不在の無気味さを追究し、結局、まことの神を知らないことが罪意識の欠如の因由ではないか」[七七]という点や、「それ（注、

七〇「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）。『海と毒薬』（文芸春秋新社、一九五八・四）、引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九九九・四）一一〇、一二七頁に拠った。

七一　平光吾一「戦争医学の汚辱にふれて」（『文芸春秋』一九五八・一〇）二〇四頁

七二　遠藤順子『夫の宿題』（PHP研究所、一九九八・七）八一頁

七三　山本健吉「小説の中の日本的風土」（『文学界』一九五八・六）五頁

七四　「出世作のころ」（「読売新聞」一九六八・二・五～一三）『遠藤周作文学全集第一二巻』（新潮社、二〇〇〇・四）四一四頁、「わが小説」（「朝日新聞」一九六二・三・三〇）『遠藤周作文学全集第一二巻』二八二頁などを参照

七五　「わが小説」注七四に同じ、二八二頁

七六　遠藤周作×窪田精「戦争文学と民衆の視点」（『現実と文学』一九六三・七）二〇頁

七七　佐古純一郎『新潮日本文学辞典』（新潮社、一九八八・一）一六七頁

罪意識の不在）を保証する神の不在意識を描きたかったのではないか」[七八]という点、近年刊行の『遠藤周作事典』では「フランス留学で直面した西洋と日本の精神風土の違い、キリスト教受容の有りようの問題が原点となり、生体解剖という凄惨な事件を材料にして、日本人における罪意識の可能性と、そのなかにある「神」の問題を見据えて」[七九]書かれていることに、作品の意義が見出されてきた。遠藤は、『海と毒薬』で試みた創作にあたっての西洋との距離感、日本人の罪意識の問題を、次のように解説している。

『海と毒薬』に出した問題は、今も言われたように日本人の罪意識の不在ということですが、それを含めてやはり、『沈黙』で井上筑後守が言っているような、日本で、日本人の心性とキリスト教がどういうふうな関係と対立を示すであろうかというテーマが背後にあるのです。

（傍線は池田。以下同）

遠藤周作×小川圭治×熊沢義宣×佐古純一郎「神の沈黙と人間の証言」（『福音と世界』一九六六・九）五一頁

ここで示されている背後のテーマを具体化する際、手本とされたのがフランソワ・モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』（*Thérèse Desqueyroux*,Grasset,1927 以下『テレーズ』と記す）であった。遠藤は『テレーズ』が抱える宗教と文学の問題を、日本の風土に置き換えた。遠藤は「戦中派」が戦争へ参加する際の姿勢を踏まえて、作品の土台を創り出すことを意識していたようだ[八〇]。日本という精神風土において、「自分を押しながすものから（略）どうしても逃れられ」ず[八一]、戸田のように「こんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけ」だとうそぶきながら[八二]、もしくは勝呂のように「もう今日から戦争も日本も、自分も、凡てがなるようになるがいい」と無気力になりながら[八三]、生体解剖事件にかかわっていく人物たちを描くことを通して、遠藤は、かの戦争に対する反省のもとに熟慮されねばならない「日本の精神風土」の有り様とキリスト教との交わりを、その接合点と対立点の双方を意識しながら、描き出そうと努めたのだと考えられる。

『海と毒薬』は、フランス留学（一九五〇～一九五三年）から帰国した遠藤が、西洋

七八　上総英郎『遠藤周作論』（春秋社、一九八七・一一）八三頁
七九　細川正義「『海と毒薬』」（遠藤周作学会編『遠藤周作事典』鼎書房、二〇二一・四）
八〇　「『海と毒薬』ノート」（『批評』一九六五・四）、引用は『遠藤周作文学全集第一五巻』（新潮社　二〇〇〇・七）二六二頁
八一　「海と毒薬」注七〇に同じ、一三一頁
八二　「海と毒薬」注七〇に同じ、一八〇頁
八三　「海と毒薬」注七〇に同じ、一二七頁

と日本の精神世界を対立させ、その違いを明瞭に描き出すことを目指した第一作品「アデンまで」（『三田文学』一九五四・一一）から芥川賞受賞作を含む『白い人・黄色い人』（講談社、一九五五・一一）といった一連の西洋との距離感・対立を際立たせた作品の延長線上に書かれた小説である[八四]。日本人でありながらキリスト教徒であるという属性の矛盾に執着することで執筆テーマを掘り下げていく遠藤にとって、『海と毒薬』もまた、西洋と日本が持つ距離感の認識を深めることや、「距離感」そのものを描くことが目的の一つだったであろう。とはいえ、結果として多くの評者から「日本人の罪意識の不在」を描いた点に「読み」の中心を据えられてきた『海と毒薬』について、後年、次のように述べている。

モーリヤックから受けた当初の影響とは、意識下にあるものはイコール悪という感じです。たとえば『海と毒薬』（昭和三三）のばあいでも、勝呂がついに戦争というもののなかに流されて生体解剖をしてしまうのは、動機もなにも外側は書いてますけれども、こういう気持だということは書いてありません。というのは、あれは『テレーズ・デスケルー』と同じ手法で書こうという気持ちがありましたから、当人にもその自分の心にある実態がよくわかっておらんわけです。その『海と毒薬』における無意識の扱い方が、生体解剖というひとつの罪に導かれるというのは、書きながら非常に苦しいことでした。これがもし神を志向するものに変わればということは、ずっと希望してました。だがそれがなかなか見つからないので、もがいていました。

（遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社、一九九一・一一）
（引用は、新潮社文庫、一九九五・四　一〇八頁）

この発言は、『海と毒薬』を書いていた頃の遠藤が、西洋と日本という距離感を乗り越えて、日本という風土における神の根ざし方を掴みたいと願っていたことを私たちに教えてくれる。だが、右の引用にある「神を志向するもの（略）がなかなか見つからなな」かったという作者の述懐の通り、結果として『海と毒薬』は「神なき人間の悲惨」を描いた作品となり[八五]、「日本人の罪意識のなさを描いた」作品として、その評価が定着していく[八六]。その一方、佐藤泰正は、遠藤がモーリヤックの作品について「恩

八四 「キリスト教と日本文学」（「東京新聞」一九五五・四・一三～一四）、引用は『遠藤周作文庫　文学と芸術』（講談社、一九七七・五）二三〇頁。「わが小説」注七四に同じ、二八二頁など参照。
八五 高橋たか子「遠藤周作論」（『批評』一九六六・八）一〇四頁
八六 笠井秋生「『海と毒薬』――日本人的な感覚の追究」（『遠藤周作――その文学世界』国研出版、一九九七・一二）六三頁

寵」を表す「海」のモチーフを取り入れようと苦心していたことについて分析し、「勝呂が「闇の中」に見る「白く光」る海をみつめ、「何かをそこから探そう」とする時、すでに作者の託して語らんとするものは明らか」であると、日本という汎神論の土壌に恩寵の光を求めた作品であることを指摘し[八七]、細川正義はその指摘を引き継ぎ、「作品は、最後の勝呂の〈白い波〉を見詰める姿に収斂した形で、日本人における罪意識の可能性を示して閉じられる」とする[八八]。

本稿では、『海と毒薬』における作家の出発点には、日本の精神風土とキリスト教の対立点を暴き出す意識のみがあったのではなく、その接合点をも掴もうと努めた願いもあったことに注目する。そして、創作にあたって手本とされた『テレーズ・デスケルー』に対する遠藤の理解が、『海と毒薬』の登場人物たちにどのように影響しているのかを検討していくことで、改めて本作で取り組まれた問題の焦点を整理し、同時に、万に一つ、勝呂が「神を志向するものに変わる」契機があるとすれば、作品で焦点化された日本の精神風土のどの部分にあると見定められていたのかを明らかにすることを眼目とする。

一、『テレーズ』と『海と毒薬』

遠藤は、何故、生体解剖事件を題材に作品を描いたのかという理由については、「重要な問題だから、書かねばと思っていた」[八九]といった漠然とした理由しか明らかにしていないが、執筆にあたって『テレーズ』を意識していたことは自作解説している[九〇]。モーリヤック作品を自作に置き換えるにあたって遠藤が参考にしたのは、「運命というか、闇の中に沈んでいく（略）テンポ」であったという[九一]。遠藤は『テレーズ』の魅力について、「この小説の面白さの一つは何といっても心にくいほど女の男にたいする根本的な憎しみをほりさげ、その憎しみの理由がその女自身にもつかめない点にある」と述べている[九二]。この「テレーズ自身にも憎しみの理由」がわからないことが作品全体を包み込むテンポを創り出し、最終的に彼女をして夫に毒を飲ませる行為へと走らせるまでに至るというのであろう。作品における表面上の行為と動機の連動性

八七　佐藤泰正「『海と毒薬』（『佐藤泰正著作集⑦　遠藤周作と椎名麟三』翰林書房、一九九四・一〇所収）三七～三八頁

八八　細川正義『『海と毒薬』論」（『作品論　遠藤周作』双文社、二〇〇〇・一）八六頁

八九　「戦争文学と民衆の視点」注七六に同じ、二〇頁

九〇　「作家と読書」注六五に同じ、三九六頁参照

九一　遠藤周作×上総英郎「私と「テレーズ・デスケイルウ」」（『三田文学』一九六九・八）八頁

九二　「「テレーズ・デスケルウ」という女」（『婦人公論』一九六三・三）、『遠藤周作文庫　聖書のなかの女性たち』（講談社、一九七五・一一）一八八頁

のなさがこのテンポを創り出すのだというが、この文体は、明晰な心理小説の伝統を持つフランス人作家モーリヤックが、フロイトの精神分析学やドストエフスキーによって知らしめられた人間の矛盾した心理（無意識）を描くべく努力した結果、手に入れた描き方だと、遠藤は述べている[九三]。

こうした特徴を持つ『テレーズ』が遠藤にとって有用だったのは、行為に対応する動機というものを捉えることが難しくなったのが戦後作家に課された難題だと認識していたからであり、闇に沈んでいく登場人物たちの明確な動機を書こうにも、戦争によって人間の複雑な心を知ったいまその動機を掴むことが出来ないという気持ちを、強く持っていたからである[九四]。遠藤は、戸田や勝呂が実験に参加する動機を、次のように説明している。

この小説は次のようなものでなければならない。／（略）彼はその罪にたいして、全く形而下的なものによって犯さなければならない。それはコメディである。たとえば〈腹が痛かった〉〈家に帰るのがイヤだった〉という理由で彼は罪に参加せねばならない。（戦中派とはそういうものだ）／（略）「AもBもCも……Xの理由でいつの間にか巻きこまれたのである。罪というのではない。しかし罪である。なぜならこの虚無感がある。

（『『海と毒薬』ノート」二六二頁）

遠藤は「戦中派」の特徴を、明確な理由があるわけでもなく何かに巻きこまれるように生体解剖実験に参加するという心理に見出していた。この動機と行為の不連続性が、作中、勝呂へと受け継がれていく。このことは、テレーズが「悪意があったためでもない、目的があったためでもない。ただ、けだるかったから」砒素療法の薬を処方されている夫に、その日の服薬の有無を教えなかったテレーズに通底しているということになるだろう[九五]。よって、『海と毒薬』の視点人物のなかで、『テレーズ』と最も似通った行為と動機の関係性を示すのは、勝呂の場合ということになる。なぜなら、遠藤は単行本化にあたって、特に第三章に多くの手を加え、上田ノブの実験への参加動機を「聖女・ヒルダへの嫉妬によるもの」だ[九六]とより明確にした。構想日記「『海と毒薬』ノート」には、彼女の造形を「テレーズ・デスケルウのごとく額が広い」女性

九三　「私と「テレーズ・デスケイルウ」」注九一に同じ、九頁

九四　『作家の日記』（作品社、一九八〇・九）、『遠藤周作全日記【上巻】』注五八に同じ、七〇～七一頁

九五　『私の愛した小説』（新潮文庫、一九八八・九）、原題「宗教と文学の谷間で」（『新潮』一九八三・一〇～一九八四・一一）、引用は『遠藤周作文学全集第一四巻』（新潮社、二〇〇〇・六）一三頁に拠った。

九六　「海と毒薬」注七〇に同じ、一七九頁

で、ノブが敵対心を抱くヒルダ（マリア）に対する「（エバ）として」の役割を持つ女にしたいと記されており、ノブは「悪の意志にひきこまれる（略）誘惑の女」という役割を背負わされている[九七]。また戸田の場合も、動機はある程度明確だ。彼は、幼少期から「他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感ぜず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味」で「ふしぎ」であった[九八]。これまでの「醜悪」な行為の数々を通して知った、こうした自分の性質が覆され、良心の苛責が襲ってくることを確かめてみたいから承諾したのである[九九]。

以上のように、生体解剖実験への参加の動機が明らかにされる上田ノブ・戸田に対し、勝呂の動機は曖昧とされたままでストーリーが進む。従って、『テレーズ』における文体（行為と動機の不連続性）を特に意識して展開が構想されたのは、勝呂の場合だということになる。よって、勝呂を通じて、遠藤が生体解剖実験への参加のあり方とキリスト教の精神とを、どのように関わらせて作品を創り上げようとしたのかを考察する。そのために、西洋の小説が孕む問題を日本の風土へと置き換えるにあたり、遠藤が、二つの精神風土のどこに焦点を絞ってその相違点と接続点とを対応させようとしていたのかを整理する。堀辰雄、三島由紀夫、中村光夫といった先輩作家によって愛された『テレーズ』は、遠藤自身がこの点を熟考するにあたっても、良い参照点となったようである。

二、堀辰雄『菜穂子』を媒介として―勝呂と戸田の罪意識

遠藤は、『テレーズ』を日本の問題に置き換えようとする際の問題点を、戦時下にあった若き日に軽井沢まで赴いて私淑した堀辰雄の『菜穂子』（創元社、一九四一・一一）を読み込むことで把握していったことを書き残している[一〇〇]。フランス留学前の評論『堀辰雄覚書』（一古堂書店、一九五五・一一、初出は『高原』一九四八・三、七、一〇）には、『菜穂子』を小説的にモーリヤックの影響の下にここでは考えない。然しモーリヤックは堀氏によって非常の屈折を以て受け入れられている事だけは一言したい」と述べられている[一〇一]。

評論家として出発して間もない時期に、既に、モーリヤックと堀の違いを感じ取っていたことがわかる。また、小説家となる前に発表したこの論評で、「屈折を以て受け

九七　『『海と毒薬』ノート」注八〇に同じ、二六二頁

九八　「海と毒薬」注七〇に同じ、一五六頁

九九　「海と毒薬」注七〇に同じ、一五七頁

一〇〇　「堀辰雄覚書　実存の悲劇」（『高原』一九四八・七）、『私の愛した小説』注九五に同じ、など。

一〇一　「堀辰雄覚書」注一〇〇に同じ、引用は『遠藤周作文学全集第一〇巻』（新潮社、二〇〇〇・二）二〇頁に拠った。

入れられている」と記した『菜穂子』について、遠藤は、晩年のエッセイ『私の愛した小説』（新潮社、一九八五・七）においてその屈折を分析し、『テレーズ』を下敷きにした『菜穂子』は、日本人の作家堀辰雄によって、いつの間にか「諦念の姿勢」ばかりを見せる「世捨て人物語の系列に入る作品」にされていると結論づけているが一〇二、その理由は次のように解説されている。

「テレーズ・デスケルー」の前半の構成は彼女が夫に自分の心の底を語るために、過去を反芻するという形になっている。言いかえると彼女は夫ベルナールを愛しているのだ。少なくともベルナールに常にこだわっているのだ。（略）ベルナールと自分との関係の修復という願いがテレーズに過去をもう一度、噛みしめさすのである。／（略）しかし菜穂子が夫を愛しつづけ、夫と自分との関係を修復することにこだわっているとは思われない。療養所に夫が見舞いに来た時も、菜穂子は彼への愛を渇望する妻としての感情をほとんど見せないのに注意されたい。（略）ここに「テレーズ・デスケルー」と「菜穂子」との本質的な隔たりがある。テレーズは夫に毒を飲ませたが、それは夫との本当の結びつきを渇望したためだった。だからこの作品には他者との関係があった。しかし「菜穂子」にははじめから夫への諦めしかないから、この作品は他者との関係ではなく、菜穂子が本当の自分の在りかたを見つけようとする作品なのである。

（『私の愛した小説』九五頁）

菜穂子が見せる夫への諦め一辺倒の生き方、遠藤はそれを実に日本的な感性の表れであるという。更に、日本人作家が自分の日本的無意識に忠実に描いたからこそ滲み出てしまった菜穂子の諦念の姿勢をもって、遠藤は「テレーズ日にあらたなり、菜穂子今日読むに価わず」とまで書きつける一〇三。こうした無意識のうちに日本的感覚が滲み出てしまう事態について、遠藤は、モーリヤックと川端の作品を対比し、この場合は諦念ではないが、その超えがたい違いを訴えもする一〇四。

遠藤は、『テレーズ』を下敷きとしながらも似て非なる小説となったのが『菜穂子』だというが、その違いは、いうまでもなく、キリスト教の問題が根底にある。前節で確認した通り、遠藤は小説としてのテレーズの魅力を、「夫への憎しみの理由が彼女自身にもわからない」という部分にみている。テレーズが夫に毒を飲ませるに至る過程について動機が明確にされることはなく、映画的描写法を用いて、外側だけを描く構

一〇二　「堀辰雄覚書」注一〇一に同じ、九六頁
一〇三　『私の愛した小説』注九五に同じ、九六頁
一〇四　「作家と読書」注六五に同じ、三九八頁

成を作品に強い[一〇五]、テレーズは「点の上に凝固して動かぬ」受動的な性分の持ち主として描かれる[一〇六]。いわゆる「寝そべる快楽」とされるテレーズのこの傾向は、一見、菜穂子の諦念の姿勢と同様に捉えられがちだが、遠藤は、テレーズにとっては作品全体を通してある傾向ではなく、夫から見捨てられて初めてテレーズに表れた性質だと解説している[一〇七]。更には、『テレーズ』の前半にある夫との関係の修復を求める願いは、聖書を原点とするキリスト教文学に伝統的に使用されてきた「置き換え手法」が意識された「再生への願望」だという[一〇八]。そうだとすれば、『菜穂子』と向き合うことで掴んでいたであろう『テレーズ』を手引きとして執筆する際の注意点は、汎神論的土壌にある勝呂が、端的な諦めによらず、それを引き留める何かを志向する姿が描かれているのかどうか、という点にあるのではないだろうか。

勝呂が実験への参加を打診される場面は、勝呂にとって「初めての患者」であったおばはんが死んで、「もう今日から戦争も日本も、自分も、凡てがなるようになるがいい」[一〇九]と投げやりになった後に訪れる。

> 俺は何故、この解剖にたちあうことを言いふくめられたのだろうと勝呂は眼がさめた時、考える。言いふくめられたというのは間違いだ。たしかにあの午後、柴田助教授の部屋で断ろうと思えば俺は断れたのだ。それを黙って承諾してしまったのは戸田に引きずられたためだろうか。それともあの日の頭痛と吐き気のためだろうか。炭火が青白く燃え、戸田の吸う煙草の臭いのために頭はぼんやりとしていた。（略）／どうでもいい。俺が解剖を引きうけたのはあの青白い炭火のためかもしれない。戸田の煙草のためかもしれない、あれでもそれでも、どうでもいいことだ、考えぬこと。眠ること。考えても仕方のないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ。（一二九頁）

勝呂は、自分が拒まなかった理由が分からないばかりか、その理由を考える気力さえない。それは、「疲れていたという以外」説明のつかない「木の根のように絡みあったテレーズの複雑な気持」（「作家と読書」一一九頁）と同様の感情として、作者に認識されていた。だが、実験後の勝呂は、捕虜を殺したことに対して戸田が提示する多方面からの理窟にも、「お前（注、戸田）は強いなあ」（一八〇頁）と自身との違いを認

一〇五　「私と「テレーズ・デスケイルウ」注九一に同じ、九～一〇頁
一〇六　「テレーズの影をおって」（『三田文学』一九五二・一）、『遠藤周作文学全集第一二巻』（新潮社、二〇〇〇・四）一四九頁を参照
一〇七　『私の愛した小説』注九五に同じ、一一二～一一三頁
一〇八　『私の愛した小説』注九五に同じ、四四頁
一〇九　「海と毒薬」注七〇に同じ、一二七頁

識するばかりで心の底から納得することができずにいる。とすれば勝呂には、生体解剖実験に参加したことに対し、戸田が内なる良心の声を求めたような明確な動機はないにしても、遠藤がいうところの菜穂子ほど一面的な諦めだけがあるわけでもないだろう。

加えて、戸田が指摘するように、おばはんは勝呂にとって「一種、(略)神みないな」[一〇]ものだったが、神のいない国において見出された唯一の「神」らしきものを失いながらも、作中、勝呂が誰よりも他人の眼を意識していることには、留意せねばなるまい。小心者故に、実際には何もすることの出来なかった実験終了後、勝呂は烈しい嘔き気と「自分の人生をメチャにしてしもうた」[一一]という後悔の念に苛まれる。そして密室で行われた行為を、看護婦や患者の誰一人、知っているはずもないのに、心の中で「もう研究室をやめよう」、なにも知らない「この患者たちを見ることはできん」と、決心する[一二]。自らの置かれた状況を見極め、巧みに立ち回ることが出来るからこそ強がる戸田にも、「(略)俺あ……今日、手術室で眼をつむっておった。どう考えてよいんか、俺にはさっぱり今でも、わからん」[一三]と嘆く。高橋たか子は、遠藤が「人間を見つめる眼(略)というものでキリストを象徴しようと」していることを評価している[一四]。また、勝呂を襲う「烈しい嘔き気」に彼の日本的罪意識を読みとる先行研究もある[一五]。他人の眼さえなければどんな罪をも犯してしまう日本の精神風土(恥の文化)を暴いたともいわれる[一六]『海と毒薬』だが、こうした点からは、勝呂はその文化とのせめぎ合いのなかで懊悩しているともいえるだろう。一九四八年、社会思想研究会出版部から初めての邦訳が出版されたルース・ベネディクトの『菊と刀』(*The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Houghton Mifflin, 1946)によって広められた「恥の文化」を、勝呂がただ緩慢と生きる青年であれば、生体解剖実験のことを何も知らない看護婦や患者を前に、研究室を去る必然性はなかっただろう。だが作中、世間の眼を逃れた状況下においても、勝呂は「でも俺たち、いつか罰をうけるやろ」と怯えている[一七]。ここには、何らかの内的な声がある。

なお、川島秀一は、誰もが死んでいく時代にあって、勝呂が自分の初めての患者であるおばはんについて考えることや語ることを、「苦しゅうなるんや」と繰り返し述べ、

一〇 「海と毒薬」注七〇に同じ、一三一頁
一一 「海と毒薬」注七〇に同じ、一七一～一七二頁
一二 「海と毒薬」注七〇に同じ、一七一、一七五頁
一三 「海と毒薬」注七〇に同じ、一八〇頁
一四 高橋たか子「遠藤周作論」注八五に同じ、一〇五頁
一五 上総英郎『遠藤周作論』注七八に同じ、笠井秋生「『海と毒薬』――日本人的な感覚の追究」注八六に同じ。
一六 西村幸雄『愛と信頼を求めて』(ヨルダン社、一九六九・四)九〇～九一頁
一七 「海と毒薬」注七〇に同じ、一八〇頁

その実感が「〈罪の感覚〉にこそ近いものなのではないか」と指摘している[一一八]。

また、北森嘉蔵は、日本人の良心が「不気味さ」という感覚的な部分にかろうじて触れあっているところに、『海と毒薬』における一縷の望みを見るが[一一九]、戸田は、幼少期から「他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感ぜず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味」であるとされている[一二〇]。生体解剖実験への参加を打診された時、これまでの「醜悪」な行為の数々を通して知った自分の性質が覆され、良心の苛責が襲ってくることを確かめたいと願い承諾する[一二一]。結果として、戸田の胸をしめつけるのは、「堕ちる所まで堕ちたという気持だけ」だが[一二二]、菜穂子が自分の置かれた状況を従順に受け入れ、「彼（注、夫）への愛を渇望する妻としての感情をほとんど見せず、「夫と自分との関係を修復することにこだわっているとは思われない」諦念の態度を示す[一二三]のに対し、少なくとも戸田は、テレーズが現実には破滅的な行動をとりながらも本当は再生を願っていたのと同じく、「他人の苦しみに無感動」な自分[一二四]に良心の苛責が沸き起こることを望んでいる[一二五]といえる。もちろん、戸田は戦時下という極限状態における捕虜に対する生体解剖実験という大事に対し、それを正当化するだけの理由も思いついているが、欠落したと自認する良心（罪意識）への渇望が、戸田が実験に参加した原動力である。菜緒子の諦念、テレーズの寝そべる快楽からは、多少なりとも動きがみられるだろう。

とはいえ、フランス留学期からの遠藤の願いを考えれば、それらが生体解剖実験への参加を踏みとどまらせるまでには至っていないことには、この問題を描くことの難しさを覚える。

三、おわりに

初期評論集『カトリック作家の問題』（早川書房、一九五四・七）において、遠藤は「われわれ（注、日本人）が無神論者である事は、おおむね「神があろうが、なかろ

一一八　川島秀一『遠藤周作〈和解〉の物語　増補改訂版』（和泉書院、二〇一六・三）五四～五五頁

一一九　山本和×北森嘉蔵×国谷純一郎×小川圭治「遠藤周作『海と毒薬』をめぐって―第一回書評会―」（『兄弟』一九六〇・四）一八頁

一二〇　「海と毒薬」注七〇に同じ、一五六頁

一二一　「海と毒薬」注七〇に同じ、一五七頁

一二二　「海と毒薬」注七〇に同じ、一七五頁

一二三　『私の愛した小説』注九五に同じ、九五頁

一二四　「海と毒薬」注七〇に同じ、一五六頁

一二五　「海と毒薬」注七〇に同じ、一七四頁

うが、どうでもいい」と言う事」だと述べている[一二六]。『海と毒薬』においても、勝呂は「俺にはもう神があっても、なくてもどうでもいいんや」と呟く[一二七]。これらは、西洋との違いを端的に捉えた日本の精神風土に対する言葉である。しかしながら、それと同時に、遠藤が「(注、戸田や勝呂の無意識が)神を志向するものに変われば」と試行錯誤していたこと[一二八]や、『菜穂子』を通じて感じていた西洋文学を日本の風土に置き換えた時の違和感からは、対立を描くだけでなく、日本の精神風土のなかでどのように罪意識を描くのかという側面もあったのではないだろうか。そして、『テレーズ』を意識しながら『海と毒薬』が書かれているのであれば、聖書における象徴的記述方法である「置き換え手法」によって示される再生への願い―『テレーズ』の前半部分にあるその手法―に『海と毒薬』も倣い、勝呂や戸田の生体解剖実験参加の場面に、日本の伝統的な罪の意識(世間の罰)とは次元を異にする新たな「良心」の出現が望まれたともいえるのではないだろうか。だが、結果として『海と毒薬』の二人に、明らかな再生や救いがもたらされるまでには至ってはいない。そのことについて、遠藤の創作に対する意識は、次のように記録されている。

『海と毒薬』以後私の気持の中に大分変化があった。その変化というのは、(略)罪意識が不在であるとかないとかいう形では、自分はすまされないのだ、だからこれから自分はどういうふうにそこからして行くべきかというテーマを小説で書いていきたい、日本人には罪意識がないから、これに対立してどうしてもむずかしいというのではなくて、ないのではなくてあるという方向に持って行くためには、どういうふうにして行かなくてはならないかという方向がひとつ。

(「神の沈黙と人間の証言」五一頁)

「罪意識が(略)ないのではなくてあるという方向に持って行く」気持ちが強くなったのが『海と毒薬』以後だと発言しているとはいえ、同じ座談会の直前には、『海と毒薬』には「日本で、日本人の心性とキリスト教がどういうふうな関係と対立を示すであろうかというテーマが背後にある」と述べ[一二九]、また後年には、勝呂と戸田の救いを願っていたことを打ち明けている[一三〇]。救いには至らずとも、登場人物たちの罪

一二六 『カトリック作家の問題』(早川書房、一九五四・七)、引用は『遠藤周作文学全集第一二巻』(新潮社、二〇〇〇・四)一九頁に拠った。

一二七 「海と毒薬」注七〇に同じ、一三一頁

一二八 遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』(春秋社、一九九一・一一)、引用は同書(新潮社文庫、一九九五・四)一〇八頁に拠った。

一二九 遠藤周作×小川圭治×熊沢義宣×佐古純一郎「神の沈黙と人間の証言」(『福音と世界』一九六六・九)五一頁

一三〇 遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』注一二八に同じ、一〇八頁

（生体解剖実験）に対する能動的な働きかけが、「置き換え手法」を意識されつつ『海と毒薬』に描かれているのは、フランス留学期からの第二次世界大戦を前にした救いのありかを模索したものともいえる。

第二章　日本を作品舞台とした第二次世界大戦との対峙

第二章第三節　教科書掲載作品「幼なじみたち」――宗教者の戦後

〇、はじめに

「白い人」（『近代文学』一九五五・五、六）「黄色い人」（『群像』一九五五・一一）のような西洋との距離感を描いた作品、また、対立を超えて日本的な視点を加えたキリスト教のあり方を描いた『沈黙』（新潮社、一九六六・三）から『侍』（新潮社、一九八〇・四）までのいわゆる「罪」の問題を扱った作品では、いずれにせよ西洋と日本の異なる点が焦点化されて語られることが多いだろう。その一方、「悪（肉）」の問題と取り組んだといわれるフォンスの井戸を始めとする初期作品や晩年の『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）では、その救いを求めるという視点から西洋との距離感が意識されることは、作者の言及も含め、少ないように見える。

第一作品「アデンまで」（『三田文学』一九五四・一一）はフランス留学中に感じた西洋との違いを認識するところから始まる小説家としての出発点であったが、一九五三年に取り組まれていた未発表草稿「われら此処より遠きものへ」や、留学中の通信記に収められるはずだった「フォンスの井戸」が一九五一年に書かれていたことからは、その始原には距離感以前の根源的な「悪」との対峙があり、「われら」ではその悪に母国語を発する日本人に、聖堂の前でも救いを求めさせようと試みていた。また『海と毒薬』（『文学界』一九五七・六、八、一〇）は、先の大戦下で生体解剖実験に参加することとなる医学生二人を通し、キリスト教的な神のいない日本でそれをくい止める何かを求めていた。「二〇世紀宗教の限界を超えて」（『潮』一九七一・一）において遠藤は、こうした現代的な課題における宗教の意義を模索していたことを打ち明けている。

第一学習社の『高等学校改訂版 現代文B』（平成三〇（二〇一八）年度改訂）に新教材として採用された遠藤周作の短編「幼なじみたち」（原題「私の幼なじみたち」『野性時代』一九七七・五）は、第二次世界大戦中に拷問や虐殺の被害を受けた人々の気持ちを、高度経済成長期にあった作品の発表当時にあたる戦後約三〇年にして改めて推し量る物語である。

日外アソシエーツ編『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品　小・中学校編』（日外アソシエーツ、二〇〇八・一二）、同『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ、二〇〇八・四）によると、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）が一九七二年に『高等学校現代文国語3 三訂版』（中央図書）に採用されて以降、複数の遠藤作品が国語教科書に掲載されている。高等学校の国語教科書への遠藤作品（小説）の掲載は、『沈黙』以外であれば「幼なじみたち」と同じく、第二次世界大戦

を経験した主人公が、戦後、当時を振り返るという設定の短編（「札の辻」（『新潮』一九六三・一一）、「その夜のコニャック」（「日本経済新聞」一九八五・一二・一二）、「カプリンスキー氏」（『野性時代』一九七八・四））がほとんどで、時を経るごとに、第二次世界大戦を素材とした短編が採用されるようになってきている。また。中学校の国語教科書（東京書籍）に長く掲載されていた「ヴェロニカ」（『聖書のなかの女性たち』角川書店、一九六〇・一二）は、十字架を背負い、傷つきながらゴルゴダの丘に向かうイエスに声をかけた女性について語ったエッセイだが、これにも第二次世界大戦中のフランスで起きた同胞虐殺のエピソードが差し挟まれている。とはいえ、第一学習社の指導書[一三]は『沈黙』とのつながりのなかで「幼なじみたち」を解説している。よって、『沈黙』が有する文学的教材としての魅力が衰えたということでは、おそらくないだろう。

中学校で、苦しむ人の痛みに共感できる心の尊さに「ヴェロニカ」を読むことで接した経験があれば、縁遠い歴史的題材を描いたというだけで嫌厭されがちな『沈黙』を読むにあたっても、踏み絵を踏む潜伏キリシタンの心情理解がなされやすい。また、「札の辻」「カプリンスキー氏」は、アウシュヴィツ収容所の犠牲者やその遺族の心情に主人公が思い巡らすことから、他者の苦しみへの共感と許しを主なテーマとする『沈黙』との関連での教材活用もできるだろう。もちろん、共苦や許しという思想は『沈黙』に限らない遠藤作品の大きな主題であり、「幼なじみたち」もその延長線上に位置付けられ得ると考える。よって活用方法によっては、主人公の「私」が、戦時中日本で日本人から拷問を受けた経験を有するボッシュ神父と共に苦しむことを生徒に読み取らせることを主眼とすることも可能だろう。だが指導書は、「他者の沈黙を前にした」ロドリゴや主人公の「私」の思索をテーマに、『沈黙』と「幼なじみたち」の系譜を見ている（七三頁）。本稿は、第一学習社が指摘する「幼なじみたち」鑑賞に対するこうした方向性を踏まえるものである。だが、指導書が「私」のボッシュ神父の内面に対する心情理解を「人間らしさと宗教者としての尊厳とが両立しているさまを見いだそうとしている」と捉える点について、【国語編】高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説」の「文学国語」「C　読むこと」で第三学年を対象に示された、「語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈すること」を意識させる指導や、「他の作品と比較するなどして、文体の特徴や効果について考察する」指導にあたっての生徒の視点を、もう一段階抽象化すると、ボッシュ神父の沈黙を前にした「私」の思索を描くということそれ自体が，寄り添うことや推し量ること自体が困難な他者という存在があるという現代的な課題を描いた短編で

一三　東郷克美他『高等学校改訂版　現代文B　指導と研究〈全8分冊〉』（第一学習社、二〇一八）以下本文中の同書を第一学習社や指導書と略記する。

あることを考えさせることが可能な教材であることを提案する。

よって、高等学校第三学年の教材に相応しいと考えるが、中学校での活用も可能である。ひとつの試みとして、各段階でどのような活用が可能となるのか、考察してみたい。

一、中学校における「幼なじみたち」の活用について

戦後七八年を過ぎ、二〇二二年二月末にはロシアによるウクライナ侵攻が始まった現在において、第二次世界大戦下における国内外での抑留体験者の心情に寄り添う「幼なじみたち」は、【国語編】中学校学習指導要領（平成二九年告示）解説」が「C　読むこと」の指導事項に定める第三学年の「文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の考えを持つこと」を促せる意義あるテーマを扱った短編だが、その指導に際し、必要だと思われる事柄を検討する。

「幼なじみたち」は、主人公の「私」が、戦時中日本人から拷問を受けたボッシュ神父の心情を、ポーランドで聞いた元抑留者が語った「許すことはできない」という言葉に共鳴しながら推し量る物語だが、肝心のボッシュ神父が戦時下の体験をどのように受け止めているのかは、ボッシュ神父本人からは説明されない。この点が、表現の方法として特徴的な作品だといえる。

第一学習社は、「私」のボッシュ神父への憶測の「当否はさしずめ問題ではない」としている（五七頁）。その一方で、読解を深めるための学習例として、ボッシュ神父が日本人を許しているのかいないのかを生徒に考えさせることを提案している（九〇頁）。ボッシュ神父の心情を考えさせることは、中学校でも活用できるだろうが、当人が直接的には語ることのないボッシュ神父の心情そのものを生徒に考えさせる問いを設定することは、中学三年生を対象とした定番教材の一つである森鷗外「高瀬舟」における、弟の最期の願いを読み手は兄の証言からしか知りえないという語りの構造が孕む問題と同様、生徒が問いの答えを作品構造から見つけ出すことが容易ではない[一三二]。よって、問いに工夫を凝らさなければ、生徒各自の経験や価値観といった本文の外部にある読み手自身の情報を最終的な根拠とした答えを導き出すことになりやすいだろう。もちろん、第二学年で求められる「文章を読んで理解したことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」が第三学年でもベースとされるため、文章を批判的・主体的に読むにあたり、生徒自身の経験等を参照点とすることは排除されるべき事柄ではない。だが、自分の「考えを広げたり深めたりして、人間、

一三二　友田義行「知足と安楽死を超えて」（松本和也編『テクスト分析入門　小説を分析的に読むための実践ガイド』ひつじ書房、二〇一六・一〇所収）四二～四四頁

社会、自然などについて、自分の意見を」持てるようになるためには、参照点とした自身の経験等をもう一度本文に返して内容を理解するという段階を繰り返すことによって可能となる。だが、語られていないボッシュ神父の心情の内容そのものを問い、本文に則した着地点を見出すことは、中学校では難易度が高いだろう。

そこで、まずは本文に則し、許すことが大切であると知りながらも許すことができないという収容所の生存者の言葉を、主人公がボッシュ神父の心情に当て嵌めて考えることについてどのように考えるかを考察させることが、有効な問いとなると考える。この問いは、文学的文章を批判的に読むための例「登場人物と自分との考え方の違いを確認したりする」こと（第三学年）に当てはまる。

また、第三学年の指導事項では「文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」が求められているが、作品を閉じる位置にある「いいえ、大丈夫（略）体の痛くなりますのは冬の寒い時だけです。春のきますと治ります。いつも、そうです」というボッシュ神父の発言と、「冬のポーランドから戻ったばかりで」という場面設定から始まる表現の効果について作中に散りばめられた冬の描写と併せて整理し考えさせること、更には、「戦争が終って三十年」経った高度経済成長期を舞台に、戦時中苛められた経験を笑い話にできる「私」を含む幼なじみと、拷問の後遺症で冬になる度に古傷が痛む体になったボッシュ神父の戦後三十年の来し方の相違を踏まえ、先述したボッシュ神父の発言の前におかれた沈黙が、読者である日本人の私たちに何を意味するのかを考えさせること[一三三]、指導書（五七頁）にも示されるこうした形式に関する理解を促すことが、ボッシュ神父の心情理解に留まらない作品の内容把握に繋り、ボッシュ神父ではなく主人公を含む幼なじみたちに焦点化されたタイトルが付けられている理由への理解を手助けすることにもなるだろう。

こうした作品への読解をいずれかの段階で生徒と共有することを想定したうえで、先の問い、主人公「私」の苦しみへの共感力――アウシュヴィツの生存者が呟いた一言を想起し、「神父の心の底に自分を叩き、蹴り、拷問をかけた日本人たちを許せぬ一部分が生涯、消えずに残っているかもしれないのだ」（二六二頁）と思う想像力――を生徒がどのように評価するのかを問うことができれば、「人間、社会（略）について、自分の意見を持つ」ための言語活動は、本文との対応のなかで生徒自身の経験や価値観にも依拠しながら進められるのではないかと考える。

もしかしたらボッシュ神父は許しているのかもしれないと主張できる根拠を本文から探すとすれば、彼が神父であるという要素におよそ限られるだろうが、キリスト教的地盤を有した生徒ばかりというわけでもない日本の中学生に、そのことを得心で

一三三　「幼なじみたち」（原題「私の幼なじみたち『野性時代』一九七七・五）、引用は『遠藤周作全集第八巻』（新潮社、一九九九・一二）二五九、二六一、二六四頁に拠った。

きるよう理解させることは難しいだろう。更には、この短編の特徴ともいうべき、なぜボッシュ神父の心情が外部からしか描かれないのかを理解させることも難易度が高い。だが、高等学校での指導事項に則すと、これらの問いへの答えを導き出し易くなる。こうした可能性を有することが、「幼なじみたち」の教材としての魅力であろう。

二、高等学校における「幼なじみたち」の活用について
―エッセイ「一人の外国人神父」との比較

第一学習社の指導書は、ボッシュ神父のモデルとなったメルシェ神父について綴ったエッセイ「一人の外国人神父」を参考資料として挙げている（四九頁）。外部からしか描かれない大戦中に日本人から拷問を受けたボッシュ神父の心情を、およそ似通った設定で神父の発言として明確に説明するのが「一人の外国人神父」（「文芸春秋」一九九四・二）である。このエッセイを手掛かりに「幼なじみたち」最大の謎であるボッシュ神父の心情理解を深めることは、【国語編】高等学校学習指導要領（平成三〇年改訂）が「文学国語　C読むこと」に定めた、「作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉えるとともに、作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、作品の解釈を深めること」に依拠した指導でもある。但し、本文から明確な解答を導き出すことが難しい事柄を、同じ作者が同じ題材について語った他の作品を根拠として理解することが最良の方法なのかについては、一考を要するであろう。また、「一人の外国人神父」で述べられた、メルシェ神父の発言を根拠としてボッシュ神父の気持ちを捉えてしまうと、「幼なじみたち」に引用された伊東静雄の詩の位置付けが宙に浮いてしまう危険が高いことにも注意が必要だ。そこで、語られていない空白の補足情報としてエッセイを活用するのではなく、両者の違いを整理し理解の手助けとするのであれば、作中に引用された伊東静雄の詩の効果を理解する上でも有益となろう。もちろん指導書は、「共通点と相違点とを拾い上げる」ことを推奨し、「幼なじみたち」にはボッシュ神父が日本人を許していないかもしれないと「私」が感じる根拠となる「ポーランドでのエピソードが加えられていることが最大の相違点である」とし、それによって「ボッシュ神父という人間への哀憐や深い人間理解を可能にしていること」を生徒が理解することが大切だとしている（四九～五〇頁）。この指摘に異論はないが、「幼なじみたち」の表現上の特徴であるボッシュ神父の心情が外部からしか描かれないという点を考えるためには、二人の神父が、抑留経験への思いを語るか語らないか、戦後の生き方に対する「私」の評価が示されるか示されないか、という二点において異なることに着目することが肝要であると考える。

「幼なじみたち」では戦争中の抑留生活に対する思いはボッシュ神父の発言としては語られず、前述したとおり主人公の「私」によって、日本人を許していないかもし

れないと推測されている。また、そう想像する主人公の眼を通して語られる、ボッシュ神父の「自分にひどい拷問を加えた日本人の世界から離れようとしなかった」（二六一頁）生き方は、評価を省き、事実だけが示される。それに対して「一人の外国人神父」のメルシェ神父は、戦後、彼の教会での初めてのミサにおいて、戦争中の抑留生活について「私は辛い目に合いましたが……私は日本人を何も恨んでいません」と一語だけ語ったとされ、その後「生涯、恨みごとひとつ、口にしなかった。虐殺と拷問とで痛めた肉体についても愚痴もこぼさず、それが原因で死んでいった」と回想されている。そしてこうしたメルシェ神父の生き方を、遠藤は「これが神父なのだ」と畏敬の念を込めて述べる[一三四]。つまり、憎んでもしかたがない相手を許すメルシェ神父の姿を尊いものとして捉えているといえる。

また、この二作品はいずれも、戦時中の思い出話に花を咲かせているところに神父も居合わせていたことに気づき沈黙がおとずれ、その沈黙に導かれるように神父に発言を促すという場面がある。この場面は、「一人の外国人神父」では、許すことを体現するメルシェ神父の尊さを著者との側面から際立たせる効果を齎す箇所として書かれ、「幼なじみたち」では、ボッシュ神父の痛みは継続しており、主人公である「私」や幼なじみたちが戦時下を昔のこととして笑える現在との違いに気づかされる場面として創られている。前節でも触れた箇所だが、ボッシュ神父の姿を鏡として、「私」を含む幼なじみたちの戦後の生き方を照射する効果をもたらす場面であるといえる。

二作品の相違点を整理すると、モデルとなった神父についてのエッセイであるとはいえ、創作人物とされた神父とは語られ方が違っていることが認識でき、エッセイでの感動の中心として描かれる日本人を許しているというメルシェ神父の心理を、なぜ「幼なじみたち」では謎として創ったのかという、教材の表現の仕方に着目した問いに、生徒が気づき易くなるだろう。

併せて、作品に引用される伊東静雄の詩は、作家論的な補足情報を提供しないことには難解過ぎるだろうが、おそらく、「秧鶏」に対する伊東の認識を提供すれば、ボッシュ神父が「秧鶏」に喩えられていること、そうであれば、「幼なじみたち」では神父の心理を語らずとも、神父の生き方それ自体が尊いものとして提示されていることに気づけるだろう。帰郷する飛行機のなかで、「私」が「ゆっくりと、静かに、舌の上で（略）味わった」（二五九頁）という伊東の詩は、『四季』一九三五年二月に発表された「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」の第一連である。『読解講座　現代詩の鑑賞３　現代詩Ⅰ』によれば、この詩はチェーホフの書簡（チェーホフ、Ａ・Ｎプレチェーイフ宛一八八八・三・六）の影響のもとにつくられているというが、出典となった書簡

一三四　「一人の外国人神父」（『文芸春秋』一九九四・二）、引用は『心のふるさと』（文春文庫、二〇〇一・二）三〇～三三頁

は、次のとおり紹介されている。

恐ろしく寒い。然し憐れな小鳥たちは既にロシアに向つて飛んで来る！　小鳥たちは郷愁と祖国の愛に駆られて来るのです。幾百万の小鳥が故郷を恋ひ慕うて生贄となり、幾らかの小鳥が途中で凍死し、どんな苦悶を彼等が三月及び四月上旬に故郷に帰着するために堪へ忍ぶかを詩人が知つたら、彼等は疾くにその讃歌を詠つたでせうに！……飛ばないで全路を歩いて来る秧鶏や、凍死を免れるため人間に身を委ねる雁の身になつて御覧なさい……何とこの世の生活といふものは辛いものでせう！

（伊藤整他編『読解講座　現代詩の鑑賞３　現代詩Ⅰ』明治書院、一九六三・五）（一三七頁）

飛翔力を持つ鳥のなかでもあえて歩行して祖国を目指す「秧鶏」は、戦後日本を離れることも可能だった神父が自分を拷問にかけた日本人の世界に止まり、神父の務めを続けるボッシュ神父に見立てることができる。また、引用された第一連「秧鶏のゆく道の上に／匂ひのいい朝風は要らない／レース雲もいらない」だけでも、「許す」という使命に対してより困難が多いであろう日本で生きていく道をボッシュ神父が選択したことを、この詩が喩えていることが分かる。加えて、引用されなかった詩の後半部分には、チェーホフが秧鶏と共に「この世の苦しさ」を象徴する対象とした雁をも、この詩が人間に飼われる安易な生き方を選んだ存在として退けることや、庭に来る秧鶏の生涯を記録しようとする伝記作者（語り手）の存在と、その庭から秧鶏が姿を消してしまう様子が詠われている。このことは、小説家である主人公の「私」もまた、ボッシュ神父の生涯について伝記を書くよう眼差しつつも、その核心を掴みとれぬままであったことを意味しよう。なお、フランス留学中の一九五〇年一一月一三日の日記に、遠藤は、裏返された宗教的な生き方をみせるサドの伝記をいつか書きたいと綴っている[一三五]。

「幼なじみたち」のボッシュ神父はその心情を自身で語る場面を持たされず、モデルであるメルシェ神父の生涯における許すという神父の崇高さは表面上削ぎ落されて創られるが、困難な道を敢えて選び、神父としての生涯を全うしようとしたことそれ自体が、「秧鶏」のごとく尊いことを示す。この、「幼なじみたち」が読者に伝えるもう一つのメッセージは、「一人の外国人神父」や伊東静雄の「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」といった資料を確認し、表現の相違を整理することによって、より明瞭に

一三五　『作家の日記』（作品社、一九八〇・九）。『遠藤周作全日記【上巻】』注五八に同じ、五三頁参照。

気づくことのできるものである。複数の情報を整理して読解を深める学習は、平成三〇年度の改訂で新設された「情報の扱い方」の指導にも応用できるだろう。

三、おわりに―小学校国語教科書掲載作品「白い風船」に触れつつ

令和六年度から開始される文学国語の教科書（第一学習社）には、以前の教科書では「幼なじみたち」と併せて読むことが奨められていた、イラク戦争後のテロ対策で混乱する現代戦争を舞台とした米原万里「バグダッドの靴磨き」（日本ペンクラブ編『それでも私は戦争に反対します』平凡社、二〇〇四・三）の掲載は継続され、「幼なじみたち」は掲載を見送られている。指導書は、「幼なじみたち」を「被害者が加害者をいかに許すのか」という「難題を信仰（カトリック）の可能性として主題化した」とし、その可能性の中心を、「拷問を受けてもなお忍耐と寛容とを貫く」ボッシュ神父の「人生」に見ている（四八頁）[一三六]。より困難な寛容の道を生きるボッシュ神父の生き方から学ぶ部分は多いだろうが、「バグダットの靴磨き」と併読することを想定した教材としての魅力は、辿り着けない他者の心があることを知るという点にもあると考える。

「バグダッドの靴磨き」で、銃を買うためにお金を貯め、「殺すのは敵だけ」と真っすぐに口にする少年に、敵をも一人の人間として尊重する心を持つべきだというのは、安全な場所から発された理想でしかないのかもしれない。だがそれでも、憎しみの連鎖を断ち切っていくためには、理解し難い相手をも尊重できる心を育んでいくしかないだろう。辿り着くことのできない心を有するボッシュ神父という存在を描く「幼なじみたち」を読むことからは、自分とは縁遠い存在をも尊重する心が育まれ、ひいてはそれが平和教育へも広がっていく可能性を有すると考える。

小学校の国語教科書（主に六年生）に掲載されていた「白い風船」は、小学六年生の息子の観察記ともいうべき小説だが，子供と大人では同じものを見ても違うものに見える、いわば他者としての子供を描いている[一三七]。小学六年生が読むのであれば、子供には真実にみえ打ち明けた事柄を、大人に尊重してもらえない部分に、より共感するだろう。「白い風船」を読むには、現状、初出紙（「朝日新聞」一九六九・一・一）にあたるしかなく機会に乏しいが、価値観の違う相手を尊重する心を育むという現代

一三六　指導書（注一三一に同じ）には、参考資料として、メルシェ神父を拷問した憲兵の一人が、「戦後メルシェ神父の道武器で受洗して亡くなった」というエピソードが載せられた「メルシェ神父「獄中記」扉文」（夙川カトリック教会『夙川　建堂八〇周年記念誌』二〇一二・三）が掲載されている。

一三七　小嶋洋輔は、「白い風船」を「遠藤作品の家族像が凝縮された形で存在している作品でもある」という（『遠藤周作論―「救い」の位置』注一に同じ、一〇四頁）。

的な課題に対処するための素地を作るうえでも、幼いうちに触れておく価値ある教材だといえるだろう。

前章では、『女の一生二部』（初出「朝日新聞」一九八一・七・三～一九八二・二・七）に描かれた、家族のいる者の代わりにコルベ神父が死を選択した行為が収容所副所長の心を動かしたことを指摘した。また、幼少期を長崎で過ごし、原爆投下によって被害に遭う幼なじみがいるジムを、長崎に原爆を落とす任務を受けた人物として創作したことも確認した。こうした表現は、虐殺する側の人々の心をくい止めるためには、被害者となる相手に同化できる側面を見出す必要があると考えられたからであろう。相手に寄り添うことの重要性は遠藤作品のテーマだが、「幼なじみたち」のボッシュ神父の戦後の日本人に対する気持ちについては、寄り添うことが困難な形で表現されている。仮に、主人公の「私」にとって理解しやすい感情として読み取るとすれば、アウシュヴィツで出会った婦人から聞いた「許すことができない」という感情になってしまいかねない。それは、おそらく神父への尊重を欠く態度となる。神父を尊重するように、たとえ相手の心理や行動が理解できなくとも尊重できれば、虐殺する側の心がくい止められる可能性は広がる。

第三章　「母なる神」再考

第三章第一節　共苦ということ―『沈黙』と「満潮の時刻」の間

〇、はじめに

『沈黙』（新潮社、一九六六・三）へのステップと位置づけられる主な作品に、短編集『哀歌』（講談社、一九六五・一〇）と、没後になって一冊にまとめられた長編「満潮の時刻」（『潮』一九六五・一～一二）がある。一九八八年、『哀歌』講談社学芸文庫版の出版にあたり遠藤は、「「哀歌」を私の「沈黙」の前奏曲、と考えてくださってよい」と述べている[一]。長編執筆の前にはそれに繋がる短編をいくつか書くという執筆スタイルに合わせ、また収録作品のなかでも踏絵が登場する「その前日」（『新潮』一九六三・一）や、雲仙を旅し、『沈黙』のキチジローの原型が登場する「雲仙」（『世界』一九六五・一）、さらには『沈黙』のトモギ村のモデルとなった長崎市外海地区が舞台となり十六番館（当時）でみた踏絵の印象とかくれ切支丹（注、遠藤表記）について記述される「帰郷」（『群像』一九六四・九）ともなれば、その執筆時期や素材の取捨選択から、これらが読者の眼に『沈黙』への前奏曲として映ることは自然であろう。また『哀歌』には、長崎のキリスト教にまつわる題材といった『沈黙』に直接かかわる作品より、いわゆる『沈黙』前の大患による回心を描いた作者の病床体験を素材とした短編が数多く収められている。この病床体験を素材とした短編群に対し遠藤は、『沈黙』と『哀歌』の関係性について「方法論として明確に意識し」ていたわけではなく「試行錯誤的な気持でやった」[二]のだと断りつつ、次のように説明する。

> もちろん「哀歌」の中のすべての作品が「沈黙」と同じ時代を扱っているのではない。むしろ、それとはまったく関係のない挿話から成りたっている。／しかし、その円周が次第に小さくなったところに「沈黙」の踏絵のイエスの顔になる。その顔に「哀歌」の諸短篇は結局は結実してしまう。
>
> （「「哀歌」の思い出」三二五頁）

なお、『哀歌』初版（講談社、一九六五・一〇）「あとがき」では、執筆の主眼を、「病院生活を背景にした作品を書くことによって次第に育まれた（略）私の基督教における現在の立場を示」すことにあるとし、「「四十歳の男」の九官鳥、「私のもの」の犬の眼」から「踏絵の基督の眼」[三]のイメージが喚起されるよう努めて書いたと、言い添え

一　「「哀歌」の思い出」（『哀歌』講談社学芸文庫、一九八八・七）三二四頁
二　「「哀歌」の思い出」注一に同じ、三二五頁
三　「あとがき」（『哀歌』講談社、一九六五・一〇）三〇一頁

ている[四]。

『沈黙』は、生死の境を体験したといわれる二年二ヶ月（一九六〇年四月～一九六二年五月）に及んだ三度の手術を含む大患を通し、作者が文学的回心の結果書き上げた作品だと言われている。この病床体験は、後に作者が『沈黙』という私にとって大事な作品はあの生活上の挫折がなければ、心のなかで熟さなかった」[五]と振り返るように、病床体験を経た文学的回心の先にある母なる神への志向の母胎となる体験として位置づけられ[六]、この母胎を、短編という断片的な形で表現したのが短編集『哀歌』だとされる。

同じく『沈黙』への道標としてしばしば採り上げられ、作家の死後一冊に纏められた「満潮の時刻」（『潮』一九六五・一～一二）は、広石廉二が指摘する通り作品内の場面や表記の不統一があるものの[七]、クライマックスで遠藤の分身とおぼしき主人公が、大病での入院後長崎へ行きそこでみた「踏絵」から踏絵を踏んだ弱者へ思いをはせるシーンをもって、まさに『沈黙』への明確な船出を示した作品[八]と見なされる作品であり、『哀歌』所収作品からでは「断片的」にしか抽出できなかった作者の病床体験における「内的体験」が、『哀歌』と比較し明らかに見てとれる長編だと評価される。

これまでの研究史で『沈黙』へのステップとして位置づけられた病床体験を経た文学的回心の表れとしての『哀歌』や「満潮の時刻」の位置は、作者自身の定義づけもあり、揺らぐことはないであろう[九]。だが、作者が『哀歌』の「あとがき」で示した『沈黙』と病床体験を題材とした作品群の有機的な関連の間には、『沈黙』が示した許しの神の救いが及ぶ範囲に相違があるように見える。具体的には、現代を作品舞台とした「満潮の時刻」と歴史を舞台とする『沈黙』の違いによって生じるものだが、この両作品が描く問題は、遠藤の文学的出発期となった一九五〇年六月～一九五三年二月のフランス留学での戦争の傷跡をみた見聞などをもとにした初の長編小説「青い小さな

四　遠藤作品における動物の眼が持つダブル・イメージについては「私の文学」（『われらの文学10福永武彦・遠藤周作』講談社、一九六七・一所収）など参照

五　「何一つ無駄ではなかった」（『PHP』一九八四・四）、引用は『生き上手死に上手』（文春文庫、一九九四・四）一八三頁に拠った。

六　佐藤泰正『鑑賞日本現代文学二五　椎名麟三・遠藤周作』（角川書店、一九八三・三）参照

七　広石廉二「『満潮の時刻』―弱者からの視点」（『遠藤周作のすべて』朝文社、二〇〇六・四所収）など

八　佐伯彰一「『沈黙』への船出」（『新潮』二〇〇〇・六）

九　笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・一一）一三八、一五九頁。川島秀一は、「満潮の時刻」に書かれた「〈生活するということと、生きるということとは別の意味を持っていた〉という言葉は、以後の遠藤の作品史において、決定的な意味を持っている」と述べている（『遠藤周作〈和解〉の物語　増補決定版』和泉書院、二〇一六・三　一一頁）。

葡萄」(『文学界』一九五六・一～六)と、先の『哀歌』所収短編にみられる、『沈黙』執筆へと至った作家の意識の重なりや逸れを示すとも考える。そこで、『哀歌』、「満潮の時刻」、『沈黙』を中心とする作品について比較することで、許しの神の有効性について検討することを眼目とする。

一九六〇年、結核が再発した遠藤は、約二年二ヶ月を病床で過ごすなかに「人間の哀しみ」に寄り添う基督の眼差しを発見していく。それが『哀歌』では「九官鳥の眼」や「犬の眼」を借りて表現され、ゆくゆくは『沈黙』で踏絵を踏む場面の「踏むがいいの声」として結実するが、この死を覚悟した病床体験を経た心境の変化について遠藤は、『沈黙』(原題「日なたの匂い」)脱稿直後に受けた新聞取材「〝弱者〟をテーマに追求「日なたの匂い」を脱稿した遠藤周作氏」(「東京新聞」一九六五・一〇・七)で、以下のように語ったとされる。

> 病気中、自分が文学でどのくらい助かるかと思ったら、そういうときはだめでしたね。近代文学はそういう不安をさらに強くするだけで、しずめてくれない。しかし人生の中でいろいろ体験がありますが、僕には三カ年の留学(昭二七年から)と病気が、いい修業になったと思います。(略)/小説が違ってきました。前は何を書いても、あとで読み返すと死のことがどこかにはいっていた。

遠藤文学と死については、例えば鈴木秀子が「「死」というものを通過儀礼として(略)かなり大きなテーマに据え」、『沈黙』から『侍』『スキャンダル』と、「死を前にして、人間が生きるということはどういうことなのか、問うている」[一〇]と指摘している。ここでいう変化は、山根道公の指摘にある「病床体験によって死にとらわれなくなったという心境になることができたのは、弱さゆえに罪を犯す者の苦しみを誰よりも理解し、それを許し、その苦しみを共にする眼差しをそそいでくれる母性的な神の愛を身をもって実感した信仰的回心といえる体験であった」[一一]ということであろう。

また、「他の純文学作品ほど緊密でなく、また、エンタテインメントほどくだけていない文体」の「満潮の時刻」は、いわゆる遠藤研究の中心をなしてきた純文学長編で

一〇 長谷川泉×鈴木秀子「遠藤文学における「悪」について」(『知識』一九八七・一二)一一二頁

一一 山根道公『遠藤周作　その人生と『沈黙』の真実』(朝文社、二〇〇五・三)二一〇頁。なお、広石廉二「弱者からの視点　「満潮の時刻」について」(『季刊創造』一九七七・四)は、この病床体験が「もたらしたものを過少評価することもできな」いが、「入院生活を余儀なくされる以前から、今までとは異なった視点から作品を書こうとしていた」ことを、入院生活(一九六〇年四月～一九六二年五月)以前の短編や「おバカさん」(「朝日新聞夕刊」一九五九・三・二六～八・一五)にも「《弱者からの視点》を模索」していることから指摘している(一〇二頁)。

はないが、初期作品の特徴である「火山」（『文学界』一九五九・一～一〇）で示した「人間同士のエゴイズムを仮借なきまでに浮き彫りにしていく」姿勢や、西洋との距離感を描いた『留学』（文芸春秋新社、一九六五・六）から、『沈黙』への橋渡しの役割を果たす」ものとして評価している[一二]。

一、第二次世界大戦と『沈黙』

『沈黙』、「満潮の時刻」における死への意識には、三つの場面がある。そのひとつが戦争の傷痕生々しい時期のフランス留学中に実地見聞を行い、また出征こそしなかったものの自身も第二次世界大戦中に青年期を過ごした①戦争における死、二つ目は留学を断念せざるを得なくなり、『沈黙』執筆前に再発した結核の療養によって体験した②病室での死、最後に、長崎でみた踏絵の黒い足指の痕によって焦点が定まった③禁教下における死である。病床体験を素地とした作品群が『沈黙』へと繋がっていったことは、作者述懐により示されているが、これら三つの場面として焦点化されている遠藤作品における「死」の問題は、戦争ともつながっている。

佐藤泰正が「『沈黙』の生まれる初源の一点」として指摘するように[一三]、遠藤は一九六九年春、『沈黙』の執筆動機ともなったとされる長崎でみた十六番館の踏絵との出合いについて[一四]、以下のように述懐する。

> あの黒い足指の痕を残した人びとはどういう人だったのか―と誰もが考えるように、私も考えた。自分の信ずるものを自分の足で踏んだとき、いったい彼らはどういう心情だったのだろう。／私は戦争中に育った人間である。当然、自分の信念や思想を棄てて戦争のなかに死んでいかなければならなかった人間を数多く見ていた。（略）人間が肉体的な暴力によって自分の信念や思想をたやすく曲げていったケースを私は目のあたりにしていたのである。その時代は、人間が自分で自分を信用していない時代であった。他人も信用しなければ、自分も信用しない。／だから踏絵に足をかけていった人びとの話は、（略）切実な問題だった。〈信仰〉などと言うと縁遠い話になるのなら、〈自分の生き方や思想・信念を暴力によって歪められざるをえなかった人間の気持〉と考えてみればどうだろう。誰にで

一二 広石廉二「弱者の視点から　「満潮の時刻」について」（『季刊創造』一九七七・四）九一、九九頁

一三 佐藤泰正「『沈黙』の終わりをどう読むか」（『国文学　解釈と鑑賞』二〇一〇・九）一四四頁

一四 笠井秋生は、この踏み絵体験を一九五七年春と推定している。『遠藤周作論』注九に同じ、一二八頁。なお、山根道公はこの説に対する疑問を提示している（『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』注一一に同じ、一八八頁）

も痛いほどに分かる問題のはずだった。踏絵の足指の痕は、他人事ではない。／それが、私を小説へのスタート地点に立たせたのである。

（注、傍線は池田、以下同）

（「沈黙の声」（『沈黙の声』プレジデント社、一九九二・七所収）一六～一七頁）

『沈黙』に限らず遠藤文学を貫く大きなテーマは、母から着せられたキリスト教という洋服を自分の身の丈にあった和服に仕立て直すことにある[一五]。その試みの一つとして、肺結核が再発した一九六〇～一九六二年の病気「療養中」、「戦国時代の切支丹たちのなかに（注、洋服を和服に仕立て直す方途を）探ってみたいと思い」、「切支丹関係の本を手に入れては勉強を続けていた」[一六]という。キリスト教が禁じられていた『沈黙』は、禁教下に踏絵を踏むか踏まないかで生死を分けた人々の生き様と、第二次世界大戦下を生きた作家自身の経験に基づく問題意識とが融合することによって、創作の「スタート地点」へと促されたのだという。この「踏絵の足指の痕は、他人事ではない」と感じた第二次世界大戦下とつながる視線は、「満潮の時刻」を『沈黙』の現代版として読み合わせることによって、より明瞭となると考える。

二、死を前にした態度――「満潮の時刻」の場合

長崎で十六番館の踏絵を見た体験は、『沈黙』執筆と併せて書いた長編「満潮の時刻」にも登場する。物語は遠藤とおぼしき主人公明石が、入院生活を送る様子を基盤として進み、入院中の明石の意識は、病気で死ぬということをどうやって自らの人生の完結の様として納得させるかということを中心とする。そしてこの納得のさせ方が、この作品の特徴だろう。戦中派として設定される明石は、作中執拗に病室で死ぬということと、第二次世界大戦での戦死を重ね合わせ、戦地に赴くことのなかった自身と比べることなど戦死したものたちを思えば不遜であると逡巡しつつも、死と隣り合わせにある病床の身の日常を、ことある事に戦争体験と結びつけ、再び戦争を生きようとしているかのように描かれている[一七]。

もちろん、戦争が兵士に強いた孤独な死の形に比べれば、病院での死には、少なくとも「死」の不安を軽減する夫婦の連帯感を感じることによる安らぎ[一八]があり、比べ

一五　「合わない洋服」（『新潮』一九六七・一二）など参照
一六　「沈黙の声」（『沈黙の声』プレジデント社、一九九二・七所収）一四頁
一七　「満潮の時刻」（『潮』一九六五・一～一二年）、引用は新潮文庫（二〇〇二・二）三四、五四～五五、六三～六七、九一～九三、一五九、二〇九、二四九頁に拠った。
一八　「満潮の時刻」注一七に同じ、一〇五～一〇六頁

ものにならないと自戒しつつも、明石は自らの死と戦場での死の場面を、病室で比較考察する。そうした彼は、入院中の仲間の死を、以下の描写をもってしる。

> ある夜のことだった。入院した最初の夜と同じように、彼は一つの声によって目がさめた。部屋の中は真暗で本間さんも井口君も開沢君も、かすかな寝息をたて眠っていた。／声は風に乗って廊下の奥の方から聞こえてくる。はじめは、また誰かが死んだために近親者が泣いているのかと思って目をさますと、泣声ではなく、泣声よりも呻き声のようでまるで犬の遠吠えに似ていた。途切れては、また続き、続いてはまた途切れる。（略）／病室に戻ると、真暗な空間の中に眼を大きくあけて、明石は今の若い看護婦の何気なく言った言葉を考えていた。病棟の中は静まりかえり、あの咆吼のような呻き声はしんとなく聞こえなくなっていた。
> （略）我々が何か、苦痛や不幸にぶつかるとき、その感覚はなまなましいから、どんな人間も自分だけがこの苦痛を蒙っているような錯覚に捉われることを彼は知っていた。不幸や苦痛はそれがどんな種類のものであれ、人間に孤独感を同時に与えるものだ。そしてこの孤独感がさらに苦痛や不幸の感情を増大する。
> （九三～九六頁）

病院での死は、夜の闇とともに「咆吼」のような「呻き声」として明石に届き、彼はその「呻き声」を聞きながら真っ暗な病室で死に怯え、その「孤独感」は「人間の苦痛や不幸」を増大させるのだと考えるようになっていく。この「孤独感」を和らげ、人間が死ぬということに私たちが抵抗する一つの形に、「夫婦が手を握りあ」うしかない行為（連帯感）があり、そこに明石は「人間の素晴らしさ」を認めている[一九]。

この「病院での死」の描写は、「満潮の時刻」の五年前、短編「葡萄」でも同じように創られている[二〇]。夜、寝静まった病棟から聞こえてくる「呻き声」に耳を澄まし、病気で死ぬということの意味を思い悩むなかに、「死の恐怖」を和らげ、死を迎える人間たちの抵抗の一つのありようとして、「手を握りあ」い「孤独感」を和らげることに「死」に対する救い（抵抗）を託し、かつ人間が死ぬことの意味を見出す。「葡萄」で夫婦の連帯感に救いを託した遠藤は、その後『哀歌』所収短編において、さらに動物たちの眼や妻の眼を借り、病死の苦しみや哀しみに寄り添う基督の眼差しを提示した。

一九　「満潮の時刻」注一七に同じ、一〇六頁。なお、「病室に聞こえてきた獣の吼える声」（『私のイエス』祥伝社、一九七六・七）から、この描写が実際の病床体験から得た着想であろうことがうかがえる。

二〇　笠井秋生は、「手を握るだけで苦痛が和らぐという話」は、「葡萄」（『新潮』一九六〇・七）「療養者に与うる記―わが闘病記―」（『中央公論』一九六一・八）「満潮の時刻」「苦しみについて」（一九七六）などで繰り返し書かれていることを指摘している（『遠藤周作論』注九に同じ、一三八頁）。なお「苦しみについては」未見である。

そしてこの病室に降り注ぐ眼差しは「満潮の時刻」でも「九官鳥」や「犬」や「十姉妹」の姿を借りて登場する[二二]。そして、明石はこれら動物たちの眼に惹かれるのは、その眼差しが「人間の生活とよぶもの、人生とよぶもの（略）を悲しみながら愛し」ているからなのだと確信する[二三]。

明石が「病室での死」への希望的相似形として追体験しようとした「戦争での死」の場面に、そうした眼差しが入り込む余地があるのだろうか。このことは「満潮の時刻」のクライマックスで、退院した明石が、入院中の夢に誘われて長崎旅行に赴き、踏絵を見る場面の描かれ方にかかっていると考える。

> 明石はその踏絵の前にたった一人の男を想いうかべる。（略）眼をあけてもう一度、踏絵を見る。（略）それは衰弱し、消耗しそして哀しそうな眼でじっとこちらをむいている基督の顔だった。人間と同じように、みじめで孤独な基督の顔だった。／その眼差しは決して恨んではいなかった。自分の顔に足をかけるものを憎んではいなかった。／（私は……おまえの足の痛みを知っている。お前がそれに耐えられぬのなら踏みなさい。私の顔に足をかけるのだ。もし、お前を愛する者が私と同じ立場にいたならば、その人は私と同じことをいうだろう。踏みなさい。足をかけなさい。）／この声が静まりかえった部屋の中で明石にふと聞えた。／九官鳥の眼……ああ、この基督の眼差しはあの病院の九官鳥の眼と同じだった。彼が少年時代に雨の日の雑木林のふちで、うずくまった犬の眼の中に発見したものと同じだった。明石は硝子ケースに両手をあてたまま長い間、動かなかった。それら病院のなかで彼が体験したものが、今、ようやく焦点を結びつつある……。
>
> （二七三～二七四頁）

踏絵を踏んだものたちへ思いを馳せ、「踏みなさい。」という声が聞こえた明石は、病院で苦しみを打ち明けた九官鳥の眼や自殺した飼い主をじっと見つめ続けていた犬の眼に、踏絵の基督の眼差しを思い合わせ、「病院で体験したものが」明石の内部で「焦点を結」ぶ。これは、先述した『哀歌』初版あとがきや文庫版あとがきで作家自身が指摘していることと同等であろう[二三]。

だが、「それら病院のなかで明石が体験したもの」が、どこまでを内包するのかという

二二　「九官鳥」については「満潮の時刻」注一七に同じ、一九一～一九二頁、「犬の眼」については「満潮の時刻」一九三～一九四頁、「十姉妹の眼」については「満潮の時刻」一九六頁。全て注一六に同じ

二三　「満潮の時刻」注一七に同じ、一九七頁

二四　この意味において佐藤泰正は「解説」（『作家の自伝98遠藤周作』日本図書センター、一九九九・四　二二九～二三〇頁）で「満潮の時刻」を『沈黙』とは表裏一体」と位置づける。

うことが問題となる。先に示した通り、明石は病院での死を、常に戦争における死になぞらえて意識していた。ここで「それら病院のなかで」と語られる「それら」が指すのは、直前の「病院の九官鳥の眼」と病院のなかで思い出した「少年時代に（略）犬の眼に発見したもの」である。つまり、『哀歌』所収短編で既に示したこれらの眼差しは病院での死の苦しみを和らげる連帯感にはなりえるだろう。だが、病室での死の不安を和らげる術として作中で提示された存在や行為が介在する場が、「満潮の時刻」で想起される戦場での死の場面にはあるのだろうか。

「満潮の時刻」における戦場での兵士の死は、「無人のジャングルの中で置きざりにされたまま、自決する」情景が想定され、その「悲惨さに意味があるのか」と明石は自問する[二四]。ジャングルで一人ぼっちで死んでいく。ここに、病室での九官鳥や兵士にとっての妻のような存在が、心に内在している存在としても想起させうる余地があるとは、なかなか読みづらい。遠藤は戦場を、動物の眼にも仲間同士の連帯感にも有効性を見いだしにくい空間として描いているといえる。とすれば、この引用部分の「病室での体験」には、戦争を追体験しようとした思索の幅までは含まれないといえるだろう。それは、『沈黙』のスタート地点に立った作家の意識にあった、自らの戦争体験を重ねた第二次世界大戦下の死を前にしてどう生きるのかという問題に、真摯に取り組みはしたもののそこに救いまでは導き出せなかったということにもなろう。遠藤が「満潮の時刻」において、病室での死の場面を相似形として描き出しながら、病室での死には「死への抵抗」もしくは「心の安らぎ（救い）」のさまを提示することができ、戦争での死にはそれを提示しえなかったことは、『沈黙』に至る大患前まで取り組んでいた拷問と虐殺の時代に有用だと捉えたマルキ・ド・サドへの興味を、別の側面からも救いえなかったのだともいえる。

ところで、十六番館の踏絵の前で『沈黙』へのスタート地点に立った遠藤の眼前には、禁教下で思想信条の変更を迫られた者と第二次世界大戦下で思想信条に規制をかけられた者たちが抱き合わせになっていた。このことに加えて、『哀歌』あとがきに示されたように、病床体験をもとに書いた短編が『沈黙』と同心円を描いているとおり、「満潮の時刻」と『沈黙』の死の場面は、時空間の違う場面設定をもって創られてはいるが、似通ったかたちで表現されている。

三、死を前にした態度―『沈黙』「青い小さな葡萄」の場合

『沈黙』における「死」の意味、それは、踏絵を踏むか踏まないかの選択の場面を通して描かれる。『沈黙』でも「満潮の時刻」や短編「葡萄」と同様に、夜の闇のなか

二四　「満潮の時刻」注一七に同じ、六七頁

で、咆吼のような呻き声を聴く。

遠くで何か声がする。二匹の犬が争っているような唸り声で、耳をすますとその声はすぐ消え、しばらくして、また長く続いた。（略）だれかの鼾だとわかった（略）／閂をはずす音がする。誰かが遠くから急ぎ足でこちらに近づいてくる。（略）／通辞だった。（略）／「私はただ、あの鼾を」と司祭は闇の中で答えた。／突然、通辞はおどろいたように黙った（略）／「あれは、鼾ではない。穴吊りにかけられた信徒たちの呻いている声だ」（略）／その言葉が終るとふたたび鼾のような声が高く低く耳に伝わってきた。いや、もうそれは鼾のような声ではなく、穴に逆さに吊られた者たちの力尽きた息たえだえの呻き声だということが、司祭にも今はっきりとわかった。／（略）自分はそれに気がつきもせず、祈りもせず、笑っていたのである。（略）自分だけがこの夜あの人と同じように苦しんでいるのだと傲慢にも信じていた。だが自分よりももっとあの人のために苦痛を受けている者がすぐそばにいたのである。（略）頭の中で、自分ではない別の声が呟きつづけている。（それでもお前は司祭か。他人の苦しみを引きうける司祭か）主よ。なぜ、この瞬間まであなたは私をからかわれるのであるかと彼は叫びたかった。（略）この呻き声は今、なぜ、あなたがいつも黙っているのかと訴えている。

（三〇五～三一〇頁）

ロドリゴは、志を同じくする者が拷問によって死に直面している苦しみを、夜の闇の中で「呻き声」「鼾」を通してしらされる。ロドリゴが夜の闇の中で呻き声に耳を澄ませ、結果として仲間の死の苦しみの匂いを嗅がされる。この描写は、「満潮の時刻」において、明石が夜中の病室で、他の入院患者たちの死、死へ向かう苦しみを呻き声をもって感知する場面を、『沈黙』の舞台設定に合わせて置換したものと言える。そして、その「呻き声」の先に、神を志向し、ロドリゴは「踏むがいい」という踏絵の摩滅した基督の声を聴く。死は、死に向かうものたちの苦しみや哀しさは、呻き声を通して描かれている。

『沈黙』では呻き声を聞くことでロドリゴは真の愛の行為に踏み出し、摩滅した踏絵の基督から、許しの声をきく。また「満潮の時刻」では呻き声に耳を澄ますことで、明石が病室で人間が死ぬということの意味を思惟し、誰にも言えない悩みを九官鳥に打ち明け、また夫婦が手を握りあうことに人間が死ぬことの意味を捉え、基督と同じ眼差しを感じる。遠藤は、こうした闇から響いてくる声に初期の作品から耳を澄ませることで作品を創っている。例えば、遠藤周作の初の長編小説に「青い小さな葡萄」（『文学界』一九五六・一～六）がある。「青い小さな葡萄」は、遠藤がフランス留学中に。第二次世界大戦下に正義の名のもとに行われた同胞虐殺事件のあったフォンス

の井戸を見に行った体験をもとに書かれている。

在仏日本人で料理屋の給仕係を務める伊原のもとを、第二次世界大戦中レジスタンスによる拷問をうけながらもそこに居合わせた娘スザンヌ・パストルのある行為によって命拾いしたドイツ人神学生・ハンツが客として訪れる。伊原は、スザンヌのその後を探し歩くハンツの話を、人種は違うものの同じ敗戦国の人間として興味深く聞く。伊原は、ハンツとともにスザンヌの墓を探しに行く。墓に行くためには「むかし、ローマ人がリヨンを征服した時（略）キリスト教徒を虐殺した」[二五]円形劇場の跡を通らねばならなかった。そのとき道案内人クロスヴスキイからハンツが次のように問いかけられるのを伊原は見る。

「足もとを見てごらんなさい。もう十何世紀も前、ハンツ君、ぼく等のたっている所では基督教徒が虐殺されたのです。この地面には彼等の血が染みこんでいるのですぜ。／ぼくはここに夜、来るのが好きでね。ここに来るとー ハンツ君ーあの収容所の頃を思いだすんですよ。おなじような処刑、おなじような血のことを思いだすのですからね。おなじような処刑、おなじような血のことを思いだすのですからね。／ここは今、皆、雪に埋もれて、怖ろしいほど静かじゃありませんか。ニューエンベルグ[ママ]の収容所も今ごろはこの通りですか。拷問室、ガス部屋、絞首台も、雪に消えてしまうわけですか。わかっていますよ。そうでなくっちゃ、世の中はうまく運びませんからねえ。死んだ者は黙らせておくに限りますよ。だが、ハンツ君、もしガス部屋や絞首台で殺された幾十万人の人間たちが、この闇の中に集まって、叫びはじめたら、どうしますかね。彼等はあの収容所で受けた恐怖や拷問や死を償ってくれ、納得のいくまで償ってくれと叫んでいるんですぜ。／生き残った連中は戦争裁判や民主主義や未来の平和ですべてを始末したつもりか知らないが、死んだ人間の苦しみはそれだけじゃ、もとへ戻らない。」

（五二頁）

後にこの言葉は、拷問によってなくした右腕の治療で通院中のハンツの脳裏に、病院の映写会で「ユダヤ人を処分した収容所ガス部屋」[二六]のシーンを見た際、蘇る。またフォンスの井戸を見に行った場面において、井戸の「闇を直視する」伊原の頭の中にも、「憤怒とも呪詛ともつかぬ群衆の声」[二七]として蘇る。そして「どっちが正しいのかわかりゃしない」[二八]殺し合いの末、「死んだ人間の苦しみ」の声に、伊原は井戸の闇を

二五　「青い小さな葡萄」（『文学界』一九五六・一～六）、引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九九九・四）五〇頁に拠った。
二六　「青い小さな葡萄」注二五に同じ、六三頁
二七　「青い小さな葡萄」注二五に同じ、八六頁
二八　「青い小さな葡萄」注二五に同じ、二四頁

凝視しながら耳を澄ますのである。「青い小さな葡萄」における戦争における死の場面は、前節までで示した「満潮の時刻」、『沈黙』で描かれた「病室での死」、「禁教下での死」の描写と同様であろう。そして「青い小さな葡萄」の冒頭、伊原は戦後間もないリヨンにおける人々の声を、同じく「呻き」として捉えている。

> 雨にぬれた顔をハンカチで拭い、彼は霧の臭いを大きく吸いこんだ。／霧は塵埃と汚物との浮いたソーヌ河のドス黒い臭気をふくんでいる、広場のむこうにリヨンの街が闇のなかに眠っている。それは大きな、疲れた獣のようにポン・ド・ショルイの沼沢地帯まで拡がっている。／無数の人間が、男女が、この夜、湿ったベッドの上に孤りぽっちで、あるいはたがいに絡みあいながら呻いている。冬のリヨンの夜空には一屑の星もない。彼等の呻きもうつろな顔もやがてこの霧のなかに閉じこめられてしまう。（一二頁）

だが、戦争を背景としたこの「闇」から聞こえる叫び声・呻き声[二九]の先には、病室の「満潮の時刻」や禁教下の『沈黙』とは違い、遠藤が提示する死の孤独を和らげる連帯感や哀しみを理解する眼差しは差し込まれない。その代わりに、「フォンスの闇の井戸も、もはや犯すことのできない一つの世界を創ること（略）それはスザンヌやすべての人間の運命に反抗するただ一つの路なのかもしれない」[三〇]という決意が示される。これは、前章で考察した拷問と虐殺の時代における表現者サドにみた希望に関連するだろうが、佐藤泰正はこの「創作への情熱は、ただ親念的なひとつの希求、また、宣言に終っているというほかはあるまい」と指摘している[三一]。いずれにせよ、戦争の場面における救いにたどり着くことが困難であるさまを表しているといえるだろう。

四、おわりに

以上のようにみてくると、遠藤が『哀歌』『沈黙』で示した、死の恐怖を和らげる救い、つまり、苦しみや悲しみを理解してくれる眼差しや連帯感は、禁教下や病室といった場面では有効性を保つが、マルキ・ド・サド研究を深める背景となった戦争の場面では効力が薄れていることが分かる。

『沈黙』（新潮社、一九六六・三）から同伴者イエス像を確立させたといわれる『侍』（新潮社、一九八〇・四）を書きあげた後、それまで書いてきた罪の問題を扱った作

二九　他に、「青い小さな葡萄」には戦争で殺された「マニラの群衆の呻き声」の描写がある。注二四に同じ、三四頁

三〇　「青い小さな葡萄」注二五に同じ、八八頁

三一　佐藤泰正『『青い小さな葡萄』をどう読むか」（『作品論　遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・一所収）六九頁

品から、いまいちど悪の問題に取り組むことを決意した流れを考慮すれば、『哀歌』や『沈黙』で示された共苦という思想で戦争における人間の悪を救うことは、難しくて当然なのかもしれない。

だが、晩年のエッセイ「沈黙の声」（『沈黙の声』プレジデント社、一九九二・七）で示された創作のスタートラインには、禁教下の弱者の苦しみと第二次大戦下の弱者の苦しみとが重ね合わせられていた。もちろん、先に引用したこの箇所で想定されていた弱者とは、戦死していく者ではない。自分の意思を表明できず、踏み絵を踏んでしまうような弱者である。弱者へとカメラ・アイを定めることで『沈黙』の方向性は決まったと言われるが、フランス留学期から意識された拷問と虐殺の時代における救いは、そうした弱者にのみ焦点化されるものではないことは、「満潮の時刻」の明石の戦死してゆく者たちへの述懐から、明らかだろう。

一方で、前章で検討したとおり、『女の一生二部』（朝日新聞社、一九八二・三）においては、『哀歌』や『沈黙』で試みられた共苦という思想は、強制収容所所長が抑留者の、長崎原爆を落とす操縦士の、それぞれの虐殺行為を踏みとどまらせる要因として描かれている。この場合も、殺されていく人々が対象となるわけではない。しかし、いわゆる「悪」の救いを描いたひとつの場面として捉えることはできるだろう。

第三章「母なる神」再考

第三章第二節　母なる神――かくれ切支丹調査から振り返って

〇、はじめに

日本人の精神風土に合ったキリスト教信仰とは何かを追究した遠藤周作の文学は、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）を一つの節目として把握されている。自身でも「第一の円環を閉じる」[三二]と振り返った『沈黙』は、肺結核再発によって死をも覚悟した大患生活を経た遠藤が、「もしなおったら小説を書きたいとせつに思」い[三三]、それまで日本人には縁遠いテーマだからと婉曲に表現してきた信仰の問題を、「妥協もヘッタクレもあるか。好き勝手なことを書いてやれ」[三四]という姿勢で臨んだ作品であり、そこには、キリスト教の日本的変容という問題に取り組んだ成果である父の宗教から母の宗教へという転換が描き出されている[三五]。この転換を描いたため、『沈黙』は激しい糾弾にもあった。

『沈黙』発表後、いちはやく作家の意図した母性的キリスト像とそこに潜む作者の母親体験を指摘したのは江藤淳だが[三六]、江藤評に呼応するかのように遠藤が行った自作の妥当性の主張は、日本の家庭における息子と母親の関係を、自分自身の母親体験や、感覚的に流布している日本人の母親意識へと置き換え一般化するという手順でなされる。それは例えば、司祭や宣教師の途絶えた日本に残されたかくれ切支丹（注、遠藤表記）に見られるマリア観音や納戸神信仰に日本人の精神風土の特徴を見出し、彼等が農村の母を模した納戸神やマリア観音を思慕しているのは、自身の母親への愛着や、第二次世界大戦下に戦死した兵隊たちが「お母さん」と叫んで死んでいったという事例の延長線上にある意識だと把握することで、母性的なキリスト像には、日本人の心の琴線に触れる感覚があるはずだと訴える説明方法のことである[三七]。そしてこの認識を深めていくなか、『沈黙』執筆の一二年後となる一九七八年、遠藤はかくれ切

三二　「異邦人の苦悩」（『別冊新評』一九七三・一二）、引用は『遠藤周作文学全集第一三巻』（新潮社、二〇〇〇・五）一七一頁に拠った

三三　「受賞の言葉」（『中央公論』一九六六・一一）二五六頁

三四　「沈黙の声」注一六に同じ、七九頁

三五　「異邦人の苦悩」注三二に同じ、一七六頁

三六　江藤淳「背教者の苦悩と悦び」（「朝日新聞夕刊」一九六六・四・二九）、石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』（クレス出版、二〇〇二・六）二七～二八頁参照

三七　例えば「父の宗教・母の宗教―マリア観音」（『文芸』一九六七・一）『遠藤周作文学全集第一二巻』（新潮社、二〇〇〇・四）三七四～三七六頁、「弱者の救い」（『切支丹の里』人文書院、一九七一・一所収）『遠藤周作文学全集第一三巻』一〇三～一〇四頁、遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』（春秋社、一九九一・一一）二七～三〇、一五一～一五六頁など

支丹調査を通じ、浄土真宗信仰にも目を向け、「日本人の宗教意識の中に（略）母親と子どもの関係というものがある」ことを理解出来たことが、『沈黙』を書いた大きな成果だったと述べている[三八]。

遠藤の執筆スタイルは、長編の準備として短編を書き、長編で言い足りなかった部分をまた短編で書くという同心円上の反復性にある。「母性的なキリスト教」の萌芽がみられる『沈黙』は、その前奏曲となる短編を収めた『哀歌』（講談社、一九六五・一〇）所収作品を通して徐々に焦点化され、その後は、短編集『母なるもの』（新潮社、一九七一・五）に収められた実地調査を伴うかくれ切支丹研究を経て描いた短編たちを通して確立されていったといえる。また、遠藤は、『沈黙』が教会から批判される最中にあって、今後の創作を通して、自作で訴えた母性的キリスト像がキリスト教の本旨を違えていないこと証明していきたいと語っている[三九]。この考えが、どのように進められていったのかを、遠藤のかくれ切支丹との取り組みを確認しながら、考察していくものとする。

なお、現在では、宮崎賢太郎が指摘するように、実情としての一般民衆におけるカクレキリシタン信仰は、「キリスト教的雰囲気を醸し出す衣をまとった典型的な日本の民俗宗教の一つ」（注、ルビ省略）であり、「隠れてもいなければキリスト教徒と見なすことのできない彼らの信仰のあり方に即して表記するならば、（略）音のみを示す片仮名の「カクレキリシタン」」が「最善」だとされるが[四〇]、本稿では、遠藤の表記に倣い「かくれ切支丹」と記す。

一、かくれ切支丹調査の成果

―日本的「後悔と許しの信仰」とカトリック信仰の違い

カトリックにおける母性的な側面を強調した『沈黙』について、遠藤がその意図を井上洋治、三浦朱門とともに自ら語った座談会「井上神父をかこんで」（『批評』一九六六・八）での主張をまとめると、『沈黙』での試みは、次の三点にあったと思われる。

一、「転んでもカトリックは見離されませんということ」。

二、「神は表面は沈黙してるけれど、われわれの人生を通して神が自分の存在を

三八 「ひとつの小説が出来るまで」（『本の窓』一九七八・二）、引用は『お茶を飲みながら』（小学館、一九七九・一〇）二五三頁に拠った。

三九 「座談会　神の沈黙と人間の証言―遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって」（『福音と世界』一九六六・九）六四～六五頁

四〇 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像　日本人のキリスト教理解と受容』（吉川弘文館、二〇一四・二）九、四四頁。

語り、自分の声を語っている」ということ。

三、「日本におけるキリスト教の観念は、これは仮定の議論なんだけれども、母の観念を強調しなくてはいけない」ということ。

（一二〇～一二一頁参照）

この「一」と「三」が、「かくれ切支丹」への興味と接続していくこととなるが、遠藤は、かくれ切支丹への興味を『沈黙』発表の三～四年前から持っていたと述懐している[四一]。また、『沈黙』の前奏曲となった短編「その前日」（『新潮』一九六三・一）には踏絵が登場し、同じく短編「帰郷」（『群像』一九六四・九）では、現在、遠藤周作文学館の建つ長崎市外海地区からほど近い三重地区を舞台に、遠藤と思しき主人公の父方の祖先がかくれ切支丹であったことなどが書かれ、更には『沈黙』執筆の原動力となった十六番館（当時）の踏絵を見た印象が初めて綴られたエッセイ「踏絵」（『芸術生活』一九六四・六）でも、初めての長崎旅行でかくれ切支丹のもとを訪ねたと記している[四二]。とはいえ、『沈黙』執筆直後の先の「座談会　井上神父をかこんで」では、これから先の文学的な道標としてマリア観音を引き合いに出しながらも、「仮定の議論なんだけれども」[四三]と留保している。『沈黙』執筆を決心して以後の長崎への取材は、主に棄教司祭フェレイラの足跡を追うことにあったものが[四四]、『沈黙』を書いて以降、フェレイラのような転び者たちのその後という宿題を得たのだという[四五]。

転びものたちのその後を示してくれるかくれ切支丹信仰について、遠藤が具体的な見解を示す文章を主に書き始めるのは『沈黙』以後のことである。その手始めとなったのが『『沈黙』についての「決算書」』[四六]と呼ばれる『沈黙』を発表した年の年末に書かれたエッセイ「父の宗教・母の宗教―マリア観音」（『文芸』一九六七・一）である。ここで遠藤は、先輩作家・正宗白鳥がキリスト教を誤解したのは、彼が厳しく裁く父なる神の側面だけを見たからであり、キリスト教が日本人に受け入れられるには、かくれ切支丹が思慕した母のイメージが伴われなければならないと述べている。またその後、記述そのものが短編「母なるもの」へと直接的に反映される取材記「弱者の救い―かくれ切支丹の村々」（『切支丹の里』人文書院、一九七一・一）においても、長崎のかくれ切支丹・村上近七翁を訪ね、また、かくれ切支丹研究の大家田北耕也に

四一　「日本の沼の中で」（『野性時代』一九七九・一～六）、『切支丹時代―殉教と棄教の歴史』（小学館ライブラリー、一九九二・二）一四七頁を参照。
四二　「踏絵」（『芸術生活』一九六四・六）一二四頁
四三　「座談会　井上神父をかこんで（『批評』一九六六・八）一二一頁
四四　「長崎―フェレイラのこと」（『走馬燈』毎日新聞社、一九七七・五）三三頁
四五　「ひとつの小説が出来るまで」注三八に同じ、二五〇頁
四六　北森嘉蔵「『沈黙』の神学―何処への踏み石か」（『月刊キリスト』一九六七・二）、引用は『遠藤周作『沈黙』作品論集』注三六に同じ、七七頁に拠った。

よるマリア観音・納戸神調査を例に、かくれ切支丹がマリア観音や納戸神を思慕したことにこそ、「彼等の切実な「許し」への悲願がこめられている」[四七]とする。つまり、これらのエッセイでは、「座談会　井上神父をかこんで」で示した「仮定の議論」を立証していく目線での言及がなされている。

そうしたなか、かくれ切支丹信仰についてのまとまったエッセイ「日本の沼の中で」（『野性時代』一九七九・一～六）では、自分がかくれ切支丹の人々に興味関心を抱いたのは「彼等は我々に基督教が土着化するためにはどのような変形をするかの良所と欠点とを共に教えてくれたから」[四八]だと語る。管見の限りでは、遠藤のかくれ切支丹への言及のなかで、良い点だけではなく、「かくれ切支丹を素材に学ぶべき（略）欠点」についても述べている点が特徴的な文章である。

前述した通り、遠藤による多くのかくれ切支丹言及は、『沈黙』にみられる許しの神、母の観念を大切にせねばならぬという良所が強調するかたちでなされてきた[四九]。良い点を中心に見た場合、カトリックが日本人の心に馴染む様相を追究した遠藤にとって、彼等が赤ん坊を抱いた農婦を描いた聖画（納戸神）や、菩薩像を聖母マリアに見立てたマリア観音信仰を行っていることは、日本人が「父親のように自分を裁いたり、罰したりする宗教ではなく、自分を許してくれ、自分と一緒に苦しんでくれる母親のような宗教をほしがっている」[五〇]ことを示し、このことが、『沈黙』でロドリゴが思い浮かべるキリストの顔が、日本の風土に足を踏み入れれば踏み入れるほど女性的な風貌に変化していくよう描いたことの正当性を訴える根拠となる。そのため、納戸神・マリア観音信仰は、『沈黙』批判渦中での回答書であるエッセイ「父の宗教・母の宗教」でも、カトリックが日本化するために通過せねばならぬ道として言及されている[五一]。だが、彼等かくれ切支丹の母親信仰と、遠藤が目指したカトリックの日本的変容としての母親信仰には決定的な違いがあることを、「日本の沼の中で」は示している。それが、遠藤がこの論考で示した「かくれ切支丹を素材に学ぶべき（略）欠点」である。欠点は、次のように把握されている。

> かくれ切支丹のなかに、とりわけマリア信仰の強まった（略）の（略）は彼等の信仰が「後悔と許しの信仰」であるにもかかわらず、許しの対象を十字架で死んだイエスにみつけず、ただ子を許す母の信仰に発見しようとしたためである。聖

四七　「弱者の救い―かくれ切支丹の村々」注三七に同じ、一〇四頁に拠った。

四八　「日本の沼の中で」注四一に同じ、二一一頁

四九　例えば、「父の宗教・母の宗教―マリア観音について」注三七に同じ、「日本人の宗教心理について」（「京都新聞」一九六八・一〇・一四）、「弱者の救い」注三七に同じ、など。

五〇　「おっ母さん」（「朝日新聞」一九七二・九・四）

五一　「父の宗教・母の宗教―マリア観音について」注三七に同じ、三七四～三七六頁

母マリアは彼等かくれ切支丹たちにとって自分たちを許してくれる母となったのである。（略）『こんちりさんのりやく』に書かれているように基督教における「後悔と許し」とは、一度犯した罪を二度と犯すまじという決心がなければならぬ。その決心がなければ許しの可能性もまたないのだ。／だが、かくれ切支丹の「後悔と許しの信仰」はこの基督教的な意味と本質的に違う。なぜなら彼等は社会的に転び者として生きることを神に詫びながら、他方、進んで社会的にふたたび切支丹であることを宣言する勇気がなかったからである。旦那寺にやむをえず詣で、毎年一度は踏絵を踏み、その度ごと、後悔の祈り（コンチリサンのオラショ）を唱えながら、彼等は来年も自分たちが同じ行為をすることを知っていた。つまり彼等は「今より以後二たび、もるたる科を犯さず（注、傍線は本文）」という決心を持たなかったのである。（略）／「後悔と許しの信仰」にすがりながら彼等ははじめから、その後悔が再起のための後悔ではなく、どうにもならぬ業に従う自分の運命を歎き悲しむ後悔であることを知っていた。そしてこのどうにもならぬ自分たちの業を仕方なしとして許してもらいたいというのが彼等の信仰だったのである。／これは日本的な、あまりに日本的な信仰である。（略）そこには基督教で言う十字架の意味、イエスの受難の意味も忘却されていたのだ。

（一九五～一九七頁）

かくれ切支丹信仰とカトリック信仰との間にある決定的な差は、罪を犯した者が再起を願い、そのための努力をなすか否かにあるという。この発言が『沈黙』執筆後一三年を経たものであっても、ここから『沈黙』を振り返ることによって、『沈黙』に描かれた「母性宗教」の存在意義を評価する尺度が入手できるともいえるだろう。この発言から、『沈黙』の表現に即して『沈黙』がキリスト教の本旨を違えていないかどうかを確認するポイントの一つは、踏絵を踏んだロドリゴが、その後「社会にふたたび切支丹であることを宣言する勇気」を持えているのか否か、にある。

二、『沈黙』で描いた母性的なキリスト教―かくれ切支丹調査から振り返って

禁教下で再び切支丹であることを宣言することは、死を意味する。また『沈黙』は、歴史の闇に葬られた転び者たちの魂に光を当てることを意図していたのだから、ロドリゴが奉行所に信心戻しを願い出て処刑されては、結果的に殉教者のみが救われる物語となり、執筆意図の大前提が崩れてしまう。そうしたなか、後年の述懐「沈黙の声」で作者が解説した通り、棄教あるいは殉教、という厳しい究極の選択しか提示されてこなかった迫害下にあって、ロドリゴが棄教後も内面において独自の新たな「信仰」を持ち続けただけでなく、再び「自分はキリスト教徒である」と申し出たために再度

拷問にかけられ、新たに棄教の誓約書を書かされていたことが「切支丹屋敷役人日記」に描き込まれているとする[五二]なら、いつかの日か禁教が解かれた時、たとえそれが「私のイエス」を信じる道であったとしても、最終章には、ロドリゴが再び信仰の道を歩むであろうという希望が暗示されている。また、棄教という信仰の死か、殉教という肉体の死のどちらかしか見出すことのできなかった局面にあって、遠藤は絵踏み後のロドリゴに「私の今日までの人生があの人について語っていた」と語らせ[五三]、生きた屍としての余生を過ごした彼の哀しみを包む微かな信仰のありようを確かに描き込んだ。そして後年、ロドリゴのモデルとなった南蛮宣教師キャラの棄教後を世話した下男夫婦を短編「召使たち」(『文芸春秋』一九七二・一)で描き、禁教下にも拘らずキャラを世話した下男下女が切支丹となったきっかけを、キャラの「苦しい孤独な生涯」を象徴する「屈辱の泪」にあったと推測し、転びバテレンの絵踏み後の信仰と、その聖なる人生に触れた夫婦に刻まれた「イエス」の痕跡を描き出している[五四]。こうした描写を考慮した時、作者は、絵踏み後のロドリゴの再起を願い、それを信じた上で、小説を創ったと考えられる。

だが、論考「日本の沼の中で」における遠藤による日本人の宗教心理解を踏まえた時、以上のようにロドリゴの信仰を肯定していく読みを展開していくには、ひとつの前提が必要となることを思う。その前提とは、ロドリゴが孤独の中で持ち続けた信仰が、日本人の転び者たちと同じように、ただ許しを乞うだけのものにならないということだ。遠藤は、踏絵を「踏んでも平気だ」などという乱暴な読みを示す読者が出現したら、「その世界にはいったらおれの「沈黙」とは全く関係ない世界だ」と言い切っている[五五]。躊躇いなくこう述べるのは、『沈黙』は、ロドリゴという旧司祭・西洋人を視点人物としたため、遠藤がかくれ切支丹や浄土真宗における信心から学んだ日本人の宗教心における特性(詫びて許しを乞うだけの信心)にまで注意を払う必要がなかったからだと考えざるを得ない[五六]。そう考えることによって、最終章及び「切支丹屋敷役人日記」に描かれた棄教後のロドリゴが、その胸中に「私のイエス」を抱き続けたことは、それだけでいつの日か再び切支丹であることを宣言する勇気の証であり、ペドロの模倣であり続けられる。つまり、『沈黙』は西洋人であり旧司祭を視点人物に

五二 「沈黙の声」注一六に同じ、七〇〜七一頁

五三 『沈黙』(新潮社、一九六六・三)、引用は『遠藤周作文学全集第二巻』(新潮社、一九九九・六 三二五頁)に拠った。

五四 「召使たち」(『文芸春秋』一九七二・一)、『遠藤周作文学全集第八巻』(新潮社、一九九九・一二)一四五頁参照。

五五 「座談会 井上神父をかこんで」注四三に同じ、一二四頁

五六 江藤淳は『成熟と崩壊』(河出書房、一九六七・六)において、ロドリゴの精神性はあくまで日本人的にしか描かれておらず、作者はロドリゴを終始「司祭」という役割に忠実なものとして描いていると指摘している(一六五〜一六六頁)。

設定したことによって、ロドリゴの信仰が、「私の主の発見」であったとしても、少なくとも、日本的「後悔と許しの信仰」へと形骸化されはしないという前提が、確保されえた。だが、作品の中心的視点人物を日本人に置き換え、その舞台設定のなかで遠藤がキリスト教信仰と取り組む時、彼は、日本人の精神風土のなかで、キリスト教がかくれ切支丹信仰にみられるような再起を宣言する勇気のない惰性的なものへと変化していくことへの懸念にも、気を配らねばならなくなっていくはずである。

「日本の沼の中で」で示された日本の精神風土への懸念がなくとも、遠藤は『沈黙』で、沢野忠庵に日本を「泥沼」と呼ばせ、西洋的な信の生成土壌との間にある越えがたい壁の存在を認識していた[五七]。また、『沈黙』以前から遠藤は、たとえ「泥沼」にあっても根腐れせぬ信仰を掴みたいという願いを課題として抱えていた[五八]。

短編「母なるもの」(『新潮』一九六九・一)は、『沈黙』以後、遠藤がかくれ切支丹研究を重ね、日本人を視点人物として「母なる神」創出に取り組んだ最も中心的な作品である。『遠藤周作事典』(鼎書房、二〇二一・四)には、「「哀しみの聖母像」と重ね合わせられた母のイメージに救われている「私」が、聖母への祈りにより救われている「かくれ切支丹」の存在に共感し感銘を受けるさまを描くことで、日本人のキリスト教における宗教心理の本質的な「母なるもの」への思慕というテーマを表している」とある[五九]。「日本の沼の中で」は、「母なるもの」が発表されて一〇年ほど後のエッセイである。よって、「母なるもの」の評価にあとから提出されたエッセイを当て嵌めることには一考を要するものと考えるが、作中に示された「哀しみの聖母」の意味内容を、かくれ切支丹認識から照らし返すことは、遠藤文学における「母なる神」を考えるための確認作業とはなるだろう。

三、短編「母なるもの」における「哀しみの聖母」
―「良心の規準」としての「母」の行方

前述した通り、『沈黙』の正当性を主張する時に遠藤が引き合いに出したのは、かくれ切支丹信仰における納戸神・マリア観音信仰と、自分自身の母親体験であった。その二つを織り交ぜて構成し、「母なる神」の結晶と銘打たれたのが、短編「母なるもの」(『新潮』一九六九・一)である。遠藤と思しき小説家の「私」は、かくれ切支丹の住む長崎のある島を訪れる。「私」は、地元司祭の紹介で滅多に部外者には会わない「か

五七 「日本の沼の中で」注四一に同じ、二九四～二九七頁

五八 「座談会　神の沈黙と人間の証言」注三九に同じ、五一頁

五九 遠藤周作学会編『遠藤周作事典』(鼎書房、二〇二一・四)一三四頁。なお、「母なるもの」というテーマについての論文に、下野孝文「『哀歌』論―「母なるもの」の形成と行方」(『国語国文薩摩路』二〇一四・三)がある。

くれ」の長に会わせてもらい、最終的には納戸神まで見せてもらえることになる。道中、小説家は、いまは亡き厳しかった母の面影を、繰り返し思い出す。そして「かくれ」の島を歩く主人公の脳裏に甦った、音楽家として一つの「音をさがし（略）たった一つの信仰を求め」た母の面影が[六〇]、時を経て、生前母が大事にしていたマリア像の眼差しと重なり、その二つが同化した哀しみの聖母の眼差しが、更に納戸神に描かれた農婦の母の眼差しと溶け合う[六一]。この二段階の変容を遂げて誕生するのが、遠藤が追究した日本人に合ったキリスト教「哀しみの聖母」のイメージである。『沈黙』で描いた母性的キリスト像の正当性は、このようにして、主人公の母親への意識をまずは「哀しみの聖母」へと移し、その上でかくれ切支丹が納戸神を慕う意識にまで拡大することで、深められた。だが、「日本の沼の中で」で示した懸念を踏まえた時、日本の精神風土のなかでも根付く信仰のありようを示すには、ただ単に日本人の心の琴線に触れるイメージを形成するため、単純に哀しみの聖母と納戸神が同一視されるだけでは済まされないだろう。

主人公が思い出す母の面影の描写は、『沈黙』執筆まもない頃のエッセイ「母と私」（『母を語る』潮文社、一九六七・一〇所収）における「良心の規準」としての「母」の姿とおよそ同様である[六二]。だが、エッセイ「母と私」と、短編「母なるもの」における「母」の思い出の記述はほぼ同一でありながら、エッセイのみに、「良心の規準」というキーワードが記されている。

> 私は書斎に母の写真を飾っているが、私が酒を飲んで悪業を働いて帰ってくると、写真の母は何か怒っているような顔に見えてくる。また、仕事がはかどった時、母の写真を見るとニコニコしているような気がする。同じ写真なのだが、そういうように感ずるのは、私がこんな年齢になっても母を怖いと思うのは、私が母を良心の一つの規準にしているからだろう。／とにかく、考えてみると、私は母に対して迷惑ばかりかけた。私は学生としても悪い学生で、あちこちの学校を受験しては落ちてばかりいて、浪人も三年ぐらいするし、母としては、他家の息子と比較して自慢になるような点は一つもなく、ようやく学校に入学しても教師から呼び出しがくる始末だった。やっと芥川賞を受け、文士として一人前になったが、子供の頃、小説家になれと言ってくれた母は亡くなっていて、受賞後になって、

六〇　「母なるもの」（『新潮』一九六九・一）引用は『遠藤周作文学全集第八巻』（新潮社、一九九九・一二）三八頁に拠った。

六一　「母なるもの」、注六〇に同じ、五五頁

六二　エッセイ「母と私」には、短編「母なるもの」に繋がる「良心の規準」としての「母」の他、短編「六日間の旅行」（『群像』一九六八・一）へと繋がる「自分の弱点を平気でさらけ出」す烈しい女としての「母」の思い出が綴られている。

家内や子供をつれて温泉へ行ったりしたが、私はそれまでは一回も自分の金で母を連れて行ったことはないし、こんな温泉へ家内や子供を連れて来ているというようなことが、非常に母に対し申し訳ないという気がする。（略）／これは単に私だけでなく一般の男性が、自分の母とか妻に対して、常に良心―相手は良心で自分は悪い人間だと思うのである。私には母や妻は良心であり、私はいつもその良心をふみつけにする悪い人間だという気持から抜け切れない。私にとっては妻を拡大したのが母親であり、これは世の中の一番いい部分で、しかも、それに対して悪いことばかりして、迷惑をかけてきたのが、私だという気持から抜け切れない感じがしている。

（引用は『遠藤周作文学全集第一二巻』三九三頁）

「日本の沼の中で」におけるかくれ切支丹理解から振り返る時、短編「母なるもの」で示したカトリックの母性的な側面が、キリスト教の本旨を逸脱していないとするならば、『沈黙』以後の遠藤が母なる神を求めた日本的な精神風土と取り組まねばならない難所、「哀しみの聖母」に詫びた「私」がその後をどう生きるよう促されていくのかという問題が生じるが、この問いについて「母なるもの」本文を評価するために必要となるのが、作中における「哀しみの聖母」が、エッセイ「母と私」で綴った「良心の規準として機能していた現実の母の面影」とどの程度融合し、更には、「現実の母の面影」から変化した「哀しみの聖母」が、納戸神とどの程度重なり合うことで生み出されているのかという点になるだろう。そこでまず、「良心の規準」というキーワードを外して創られた作品「母なるもの」で、母の思い出はどのように描出され、納戸神と溶け合う前の「哀しみの聖母」となっていくのかを確認する。作品は、エッセイ「母と私」を土台としながら、次のように構成される。

「良心の規準」としての母からの期待に応えられない不甲斐無い息子と思しき短編「母なるもの」の主人公に、殉教のみを栄光とする神の期待に応えられず後ろめたさに苛まれるかくれ切支丹が重なる[六三]。その重なりの先に、赦しを乞い願う思いを寛容に受け止める「母」が、短編「母なるもの」の主人公に対しては「哀しみの聖母」のイメージ[六四]で、かくれ切支丹信仰には納戸神やマリア観音の姿で[六五]、存在する。エッセイ「母と私」での認識を源泉としながら、遠藤は両者の重なりを短編「母なるもの」でこのように創るのだが、まず納戸神と融合する前の段階での「哀しみの聖母」は、次のように創られている。

六三　「母なるもの」注六〇に同じ、四八頁
六四　「母なるもの」注六〇に同じ、五五頁
六五　「母なるもの」注六〇に同じ、五〇～五一頁

真夜中まで、上半身を丸めるようにして仕事をしている時、急に彼女を背後に意識することもある。母はうしろから、こちらの筆の動きを覗きこむような恰好をしている。仕事の間は、子供はもちろん、妻さえ、絶対に書斎に入れぬ私なのに、その場合、ふしぎに母は邪魔にならない。気を苛立たせもしない。／そんな時の母は、昔、一つの音を追い求めてヴァイオリンを弾き続けていたあの懸命な姿でもない。車掌のほかは誰もいない、阪急の一番電車の片隅でロザリオをじっと、まさぐっていた彼女でもない。両手を前に合せて、私を背後から少し哀しげな眼をして見ている母なのである。／貝のなかに透明な真珠が少しずつ出来あがっていくように、私は、そんな母のイメージをいつか形づくっていたのにちがいない。なぜなら、そのような哀しげなくたびれた眼で私を見た母は、ほとんど現実の記憶にないからだ。／それがどうして生れたのか、今では、わかっている。そのイメージは、母が昔、持っていた「哀しみの聖母（マーテル・ドロロサ）」像の顔を重ね合わせているのだ。

（五一頁）

短編「母なるもの」には、エッセイ「母と私」で綴った自らの信じる芸術や信仰を厳しく求める良心の規準としての母の側面が描き込まれるものの、そうした母の姿がいつしか自分の行動をそっとみつめている母の眼へと変化していく。「ほとんど現実の記憶にない」母のイメージが、「哀しみの聖母」の持つイメージとなっていく。エッセイでも短編でも、「私」は生活の様々な場面で母を思い出すのだが、先のエッセイの「私」には、「私が（略）悪業を働いて帰ってくると、（略）何か怒っているような顔」をする良心の規準として機能する「母」が存在した。「良心の規準」として「母」が機能している時、彼女の顔は息子のその日の行動によって良くも悪くも変化するのだが、「哀しみの聖母」は、人々の哀しみに寄り添うべく、常に同じ表情を保つ。短編に記される厳しかった母の面影は「良心の規準」としては充分に機能せず、厳しかった現実の母の眼差しとは別の次元に存在する不肖の息子を常に見つめる「哀しげな（略）眼」となっていく。このように変化した短編の「母」に、「良心の規準」としての母の役割を、積極的に読み込むには、少々無理があるだろう[六六]。そして、現実の母にはなかったイメージから紡ぎ出された「哀しみの聖母」のイメージは、納戸神と重ねられる。両者が重なり合う場面は、次のように描かれる。

キリストをだいた聖母の絵―いや、それは乳飲み児をだいた農婦の絵だった。（略）私はその不器用な手で描かれた母親の顔からしばし、眼を離すことができなかっ

六六　短編「母なるもの」に描かれる「母親像」に、良心の規準としての役割を読み込むことで「哀しみの聖母」を「聖トマス的秩序」と位置づけた論考に武田友寿『遠藤周作の世界』（中央出版社、一九六九・一〇）がある。

た。彼等はこの母の絵にむかって、節くれだった手を合わせて、許しのオラショを祈ったのだ。彼等もまた、この私と同じ思いだったのかという感慨が胸にこみあげてきた。昔、宣教師たちは父なる神の教えを持って波濤万里、この国にやって来たが、その父なる神の教えも、宣教師たちが追い払われ、教会が毀されたあと、長い歳月の間に日本のかくれたちのなかでいつか身につかぬすべてのものを棄てさりもっとも日本の宗教の本質的なものである、母への思慕に変ってしまったのだ。私はその時、自分の母のことを考え、母はまた私のそばに灰色の翳のように立っていた。ヴァイオリンを弾いている姿でもなく、ロザリオをくっている姿でもなく、両手を前に合わせ、少し哀しげな眼をして私を見つめながら立っていた。

（五五頁）

愚行を繰り返した挙げ句、母の死に目にも会えなかったことを思い出しながらかくれ切支丹の島を歩く主人公の「私」。現代を生きる「私」の後悔の念に、島に眠るかくれたちの霊の念が呼応し、殉教に足を踏み出すことができず、神に詫びながら生きた彼らが拝んできた納戸神・農婦の母に、「母」でありながら現実の母にはなかったイメージの「母」の眼差し・哀しみの聖母を重ねる。こうして織りなされるイメージからは、かくれ切支丹研究を進めながらも、また、実際の母が持つ「良心の基準」としての厳しさを認識しつつも、「優しく許してくれる母のような存在」という許しに重点のある母性宗教イメージを強調して作品を創っていったと改めて考えられる。むろんこの強調は、カトリックを日本の精神風土に受け入れられるようにするためだと遠藤が考える条件であった。だが、「日本の沼の中で」で捉えた「泥沼」でも根腐れせぬ信仰のありようを考慮した時、そこには、同時に「良心の規準」としての母のイメージが内在されることが望まれるが、先の引用の記述にある現実の母から聖母像のイメージへの変化を踏まえれば、この重なりのなかに「良心の規準」としての母の機能を読み込むことは、やはり難しいだろう[六七]。

佐藤泰正は、短編「母なるもの」に登場する案内役の地元住民（カトリック信者）の「固い背中」の描写を通して、「哀しみの聖母」と「納戸神」の違いを指摘している[六八]。佐藤は、この固い背中と母なるものとの更なる融合と深化とを、作家の進むべき

六七　武田友寿が前掲書で示した「形而上的聖母像」とかくれ切支丹のマリア像の違いを指摘した論文に、辛承姫「母なるもの」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇六・二）がある。

六八　佐藤泰正「遠藤周作における「母のイメージ」――「母なるもの」の原像をめぐって」（『国文学解釈と教材の研究』一九七三・二）。鈴木秀子「〈母なるもの〉の志向」（『季刊創造』一九七七・四）も、「〈永遠の同伴者〉がたんに弱者を許し包む存在ではないことが、これからの作品に鮮明に描かれるはずである。また弱者が、弱者であるがゆえに背負うものに、きびしい対決がなされなければならない」（五一頁）とする。

道として求めてもいる[六九]。「母」を描くことを通して信仰を示そうとした遠藤作品が耕すべき土壌の困難を見抜くことで、「哀しみの聖母」像の良所と欠点とを指摘し、次作への期待を込めたものと考える。

「日本の沼の中で」を通し、「泥沼」と呼ばれる日本で信仰が確立されるためには、「良心の規準」として存在する厳しい母に胸を張って対面する努力が必要となることに、明確に気づきつつあったであろう遠藤は、亡くなって三〇年経ってなお「昔のように今日までの私の信仰うすき生き方を指さしてとがめてくる気さえする」母の遺骨を抱いた自分の姿[七〇]を、短編「還りなん」(『新潮』一九七九・一)で次のように描く。

> 膝においた骨壺は兄のそれよりもずっしりとした重さがあるような気がする。体も小さく背の低かった母の骨がなぜ、こんなに重いのかと、暑くるしい白っぽい空を見ながらぼんやり考えた。それはこの齢まで持ち続けた母にたいする私の偏愛と愛着のためにちがいなかった。母は私にとって必ずしもやさしい女ではなかった。むしろその孤独な生活や信仰の烈しさのため、惰弱でぐうたらな私は幾度となく苦しまされた。学生の時、私はそんな母に耐えきれず彼女と離婚をした父親の家に逃げたことさえある。だが父の家に住むと、私は母を見捨てたという悔いに悩まされつづけた。／(でも結局は俺も、同じところに埋められるわけだ)／と私は膝の上の骨壺に囁いた。そして先ほど見た丸い深い、そして暗い穴のことを思いだし、あそこが私が永遠に母や兄と住む場所だと考えた。
>
> (引用は『遠藤周作文学全集第八巻』二九二頁)

短編「還りなん」は、「日本の沼の中で」が書き出された年の作品である。そこで遠藤は、「信仰の烈しさのため(略)苦しまされた」母、「信仰うすき(略)生き方を(略)とがめてくる」かもしれぬ母のイメージを強調している[七一]。また、作中、「私が永遠に母や兄と住む場所」だと認識し[七二]、いつか自分も還る場所であるお墓は、「暗い穴」と喩えられる。また、この「暗い穴」は、飼い主から暴行を受けながらも飼い主の元に戻ろうとする雑種の犬がみせる帰巣本能と同じく、再び叱られるのがわかっていながら還る場所として位置づけられ[七三]、同時に一七世紀、迫害下にあることを知りながらも、フィリピンから故郷・日本へ戻ったミゲル西田の望郷の念とも二重写しの象徴と

六九 佐藤泰正「遠藤周作における「母のイメージ」――「母なるもの」の原像をめぐって」、注六八に同じ、一〇九頁

七〇 「還りなん」(『新潮』一九七九・一)、引用は『遠藤周作文学全集第八巻』(新潮社、一九九九・一二)二八五頁に拠った。

七一 「還りなん」注七〇に同じ、二八五頁

七二 「還りなん」注七〇に同じ、二九二頁

七三 「還りなん」注七〇に同じ、二九〇頁

して描かれる[七四]。こうした「母」の眠るお墓のイメージは、約一〇年前、短編「母なるもの」で「誰にも言いたくない私と母の会話の場所」[七五]と喩えられた安らぎの場所ではない。また「母なるもの」で強調された哀しみだけを残した聖母マリア像に同化し、優しく許してくれる対象と共に想起された母としてのイメージ[七六]も、この短編には描かれない。このような描写の変遷を辿るとき、「良心の規準」としての母親像が主人公に促す再起、と同時に優しく許してくれる「哀しみの聖母」としての母親像。いつの日か、この二つの母親像がせめぎ合うイメージを持つ聖母像が確立されることが、かくれ切支丹が教えてくれる良所と欠点とを踏まえた遠藤の「母なる神」の到達点であったのではないかと考える。

四、おわりに

『沈黙』で問われたキリスト教の母性の強調という点に関し、遠藤のかくれ切支丹との取り組みと、母への言及を確認することで、北森嘉蔵『『沈黙』の神学―何処への踏み石か」(『月刊キリスト』一九六七・二)が指摘した、「父母合一」であるか否かという側面への取り組みが、『沈黙』以後の「母なるもの」「還りなん」といった母を描く短編でなされてきたのではないかということをまとめてきた。

とはいえ、特に「母」を描いた短編には、自身の信仰が母への愛着と畏敬とに結びついていたことを語る「影法師」(『新潮』一九六八・一)や、音楽や信仰とひたむきに向き合う、烈しい母の側面を語る「六日間の旅行」(『新潮』一九六八・一)がある。江藤淳が『沈黙』評で指摘した、遠藤の母親体験ということで言えば、おそらく「影法師」や「六日間の旅行」で描出された「烈しい母」の側面は[七七]、「良心の基準」として刻まれていたのであろう。また、二〇二〇年六月、母について語った自伝的中編「影に対して」が遺されていたことが長崎市遠藤周作文学館から発表された。「影法師」や「六日間の旅行」が発表されていた頃を含む一九六五～一九六九年あたりに書かれたと推測される「影に対して」(『三田文学』二〇二〇・八)は、信仰や音楽を烈しく求める理解しがたい他者としての母を描いているが、この烈しさが「聖なるもの」を求める尊さを教えてくれたと紡ぐ「影法師」などとは異なり、最後まで他者としての母の烈しさが語られている。もちろん、「影法師」でも烈しい母に対してぐうたらな自分

七四 「還りなん」注七〇に同じ、二九〇頁
七五 「母なるもの」注六〇に同じ、四六頁
七六 「母なるもの」注六〇に同じ、五一～五二頁
七七 烈しい母の側面が哀しみの聖母へと次元を変えて書かれていくことを論じたものに、笛木美佳「遠藤周作「母なるもの」論―「一つの秘密」が切りひらいた世界―」(『学苑』二〇一〇・一)がある。

を自覚していることが語られているが、「影に対して」では、母を理解できない自分のルーツに、「猫背の姿勢や、とも角何とかやっていける毎日にすみついてしまおうとする自分の臆病さや弱さ――あれは父ゆずりのものなのかも知れない」といった部分や、「彼の体には母の血も流れていたが、同時に父から受けた性格もまじっていた。反撥しながらも、父と同じように安穏で何事もない人生を歩こうとする傾向もまじっていた。」といった部分に、父の血脈を挿入している[七八]。『沈黙』の前奏曲の一つである「帰郷」（『群像』一九六四・九）ではすでに、父方の祖先にかくれ切支丹がいる主人公を登場させ、弱者としての自分への認識を深める物語が描かれてもいる。こうした点からは、許してくれる存在だけではない「母」の姿を描く取り組みがあったことも窺える。また、藍沢鎮雄は、『巡礼』（『群像』一九七〇・一〇）に描かれた母を傷つける息子と、その息子の眼に映る哀しげな母の眼に痛みを感じることを重視し、「「母なるもの」だけがもつ許しと痛みの過程を経たとき、はじめて子の意識は清められる」と指摘している[七九]。

次章では、こうした遠藤作品から読み取られる信仰の問題が、どのように受容されていくのか、その一端を「カトリック新聞」や「長崎新聞」から探ってみたいと考えている。

七八　「影に対して」（『三田文学』二〇二〇・八）、引用は『影に対して―母をめぐる物語』（新潮社、二〇二〇・一〇）二五、七二～七三頁に拠った

七九　藍沢鎮雄「母なるもの」（『母なるもの』新潮文庫、一九七五・八所収）、引用は泉秀樹編『遠藤周作の研究』（実業之日本社、一九七九・六）一三四頁に拠った。

第四章　遠藤作品の受容

第四章第一節　カトリック新聞―一九四七年～一九七四年―

〇、はじめに

本節は、カトリック新聞一九四七年一月～一九七四年一二月における遠藤周作に関連する記事を分析したものである。カトリック新聞を繰った最初の動機は、長崎市遠藤周作文学館在職中に担当した二〇〇八年から開催された第五回企画展「遠藤周作とフランス」の企画展示制作にあたって、一九五〇年、戦後初のカトリック留学生として遠藤がフランスに渡った経緯を報じる資料を探すことにあった[一]。続いて、二〇一二年開催の第七回企画展「遠藤周作と長崎―心の鍵が合う街」準備の折、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）に対するカトリック教会からの反響が、教義レベルではない生活の側面において僅かでも垣間見える教会側からの資料はないものだろうかと思い、四年前と同様休日を利用して、カトリック信者の家庭向け新聞であるカトリック新聞の調査を実施した。企画展に活かせないまま職を辞したが、一九八七年『沈黙』の文学碑が建立された際には一部の住民が拒絶反応を示した長崎（外海）で[二]、文学館開館から一〇年以上が経過した二〇一三年あたりには地元で好意的に受け止められているように見受けられたその変化を、少しでも明らかにする傍証を求め、この度カトリック新聞における遠藤周作関連記事の調査に再び着手した。調査対象期間は、遠藤が「神々と神と」（『四季』一九四七・一二）で評論家デビューした一九四七年から文学館が開館する二〇〇〇年一二月までとする。

本調査によって、小説家になる前にあってはフランス留学前からフランス留学期にかけての遠藤がカトリック新聞によって知られていく場を設けられていることや、『沈黙』以降遠藤の聖書研究を元とした著作について聖職者の意見が述べられていること、そして一九七〇年の大阪万博における基督教館プロデューサーとしての遠藤に対する意見が確認された。以下、「一、単行本等未所収初期の著作について」、「二、母郁に関連して」、「三、遠藤文学をめぐって―『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に」、「四、大阪万博キリスト教館に関連して」、「五、まとめ」としてまとめる。なお、本紙はデータベース化されていないため、遠藤周作の関連記事一覧を作成するこ

一　フランス留学を報じた記事（一九四九・一二・一八、一九五〇・六・一八）、「赤ゲットの佛蘭西旅行」広告（一九五二・一・二七）、母郁の記事（一九五五・四・一七）については、図録『第五回企画展　遠藤周作とフランス』（長崎市遠藤周作文学館、二〇〇九・二）に活かした。

二　『沈黙』の碑建設の経緯等については、下野孝文・山下静香「遠藤周作と長崎、ある大きな力で―「とら寿し」大竹豊彦氏に聞く」（『敍説Ⅲ』二〇〇二・一二）を参照されたい。

とにも多少の意義はあると考える。そこで、本稿では、前半部分となる一九七四年までの遠藤周作関連記事をまとめる。なお、残念ながら遺漏もあるかと思う。新たな記事が確認できた際は続報にて補いたい。

一、 単行本等未所収の初期著作について

本調査における最大の収穫は、これまでほとんど存在を知られてこなかった一九四七～一九四八年に発表された著作―記事としては八件、著作としては五件―を確認できたことである。遠藤が慶應義塾大学文学部仏文科を卒業する学年から卒業した年にかけて発表されたもので、フランス文学の現状を扱ったもの（「佛カトリック文壇　大戦後の新旧作家の消息」一九四七・九・一四）、フランソワ・モーリヤックの作品紹介（「モーリヤックの新作の中より（一）（二）」一九四七・一一・二三、三〇、「小説「ファリザイ女（一）（二）」一九四八・五・二、九）、シャルル・ペギイの現代的意義を論じたもの（「大戦とペギイ　手紙（一）（二）」一九四八・九・五、一九）、フランス文学を背景とした日本近代文学解説（「日本近代の形成」一九四八・九・一二）となっている。一記事につき一二〇〇～二五〇〇字程度とはいえ、モーリヤックに関しては、当時の洋書入手の困難さを憂えながらも近作の「愛しえぬ人々」や翻訳されていなかった「ファリザイ女」[三]を採り上げ、アメリカでのペギイの現代的隆盛について紹介した記事では、機会あって知人にペギイに関する叢書を借りて読むことができたことなども記されており、当時の読書環境をわずかながらだが窺い知ることができるものにもなっている。

なかでも、一九四七年九月一四日に掲載された「佛カトリック文壇　新旧作家の消息」は、没後、「新たな処女作」[四]として単行本収録された上智学院から出されていた雑誌に掲載された評論「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔」（『望楼』一九三七・八）から後れることひと月半程度、神西清に認められ、評論家として活動していくきっかけとなった作者公認の処女作「神々と神と」（『四季』一九四七・一二）、恩師佐藤朔の推挙で執筆した「カトリック作家の問題」（『三田文学』一九四七・一二）よりひと月半程度早く発表されている。遠藤の没後、「神々と神と」以前の著作については、年譜上の十八歳の空白を明らかにすることと併せ、飛躍的に調査が進められた。

三　「愛しえぬ人々」は一九四五年発表、翻訳は一九五三年に新潮社から二宮孝顕訳「愛されぬ人々」（『現代フランス戯曲叢書　アスモデ・愛されぬ人々』所収）が出された。「ファリザイ女」は一九四一年発表、一九五三年に柳宗玄訳『パリサイ女』（新潮文庫）が刊行された（浜崎史朗編「モーリヤック略年譜・書誌」（遠藤周作編『モーリヤック著作集第六巻』春秋社、一九八三・八所収）など参照。

四　加藤宗哉「（解説）評論家と小説家が同居した作家」（加藤宗哉・富岡幸一郎編『遠藤周作文学論集　文学篇』講談社、二〇〇九・一一所収）三四八頁。

そして改めて、十八歳当時、上智大学予科に在籍していたこと、その短い在籍期間に評論「形而上的神、宗教的神」（『上智』一九四一・一二）を発表していたことが、研究上の共通認識となった[五]。当時の状況を綿密に調査した山根道公は、『遠藤周作―その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、二〇〇五・三）において「神を身をもって実感したいと祈り、魂を満たす神の実在感を求めるカトリック青年であったこと」が読み取れる処女評論「形而上的神、宗教的神」は、遠藤の「その後の文学的生涯を貫くものであった」と指摘している[六]。「神々と神と」が抱える汎神論的世界と一神論的世界の対立というテーマでは取りこぼされてしまう「神の実在感」の掌握という遠藤文学を通底するもう一つのテーマが訴えられている、上智に在籍したからこそ書かれたこの評論を、生前の遠藤はなぜ公にしたがらなかったのか。

その理由について調査した先行研究は、先の山根論を嚆矢とし、主なものに加藤宗哉の『遠藤周作』（慶應義塾大学出版会、二〇〇四・一〇）、久松健一『原稿の下に隠されしもの』（笠間書院、二〇一七・七）がある。いずれの先行論も、遠藤が上智に在籍した理由に、母郁と、遠藤が上智大学予科に入学した年に上智に赴任した郁の精神的指導司祭であったヘルツォグ神父の存在を挙げる。更に、生前の遠藤が上智への在籍や当時の評論について語らなかった理由に、母が尊敬するヘルツォグ神父のような強者になれないばかりか、「魂を満たす神の実在」を感じられずに上智退学に至ったであろう点をみている[七]。また久松は、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔」の発表媒体も、上智学院内の書院であることに着目している[八]。

慶應大学在学中のカトリック新聞への寄稿について、遠藤が語らなかったのは小文だからということもあろう。だが、上智在学中の評論への先行研究から翻って考えると、山根が「遠藤母子とヘルツォグ神父との実際の体験（池田注、遠藤が上智予科に在籍していた経緯）が変形されて投影されている」[九]と指摘する長編「火山」（『文学界』一九五九・一～一〇）に、信者一般の認識として、「自分たちの教会と自分たちの主任司祭が（池田注、カトリック）新聞紙面に掲載されることはどの信者にとっても悦びであり誇りだった」[一〇]という記述があることが、まずは興味深くみえてくる。

五　存在が注目を浴びたのは没後だが、中野記偉「苦しみと文学的神の役割―遠藤周作堀田善衛　G・グリーン」（『逆説と影響―文学のいとなみ―』笠間書院、一九七九・四）が既に重要な新資料として紹介していることを、山根道公が指摘している（『遠藤周作―その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、二〇〇五・三）五一頁）。

六　山根道公　注五に同じ、一九頁

七　加藤宗哉『遠藤周作』（慶應義塾出版会、二〇〇六・一〇）五七～五九頁。山根道公注五に同じ、六三～六九頁。久松健一　注三に同じ、一九六～一九七頁。

八　久松健一『原稿の下に隠されしもの』（笠間書院、二〇一七・七）一五四頁

九　山根道公　注五に同じ、五五頁

一〇　遠藤周作「火山」（『文学界』一九五九・一～一〇）、引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九九九・四）二七五頁に拠った。

記事内容やカトリック新聞と当時の遠藤との関係についての調査分析は今後の課題としたいが、近年刊行された『遠藤周作全日記【上巻】』（河出書房、二〇一八・五）がフランス留学開始の一九五〇年から始まっていること、「神々と神と」発表前後の一九四七～一九四八年の著作はアクセスが容易いものが少ないこと[一一]を考慮すれば、短い寄稿五件でもこの時期の作者の動向を窺える活字資料を確認できたことは、望外の成果であったと考える。

二、母郁に関連して

記事一覧のなかには、母郁に関するものも含めた。遠藤作品において母の存在が欠かせない要素であることは周知のとおりだが、一九五四年一二月二九日に五九歳で急逝した母についての寄稿「写真に寄せて　遠藤郁子さん」（一九五五・四・一七）には、郁の略歴とその人柄が紹介されており、「子息の仏文学者、周作氏が『裏切られても、裏切られても愛さずにはいられない』のだと母を評していた通り、「郁子さんの生涯を貫くものは、その性格の烈しさから多くの誤解を招くことはあったにしてもただ『愛』の一言につきていた」と綴られている。寄稿した池淵鈴江は、郁と同じく安藤幸に師事した人物を従姉に持つ人物で（「安藤幸子先生のこと」（「カトリック新聞」一九六三・三・三）、『世紀』に「聖書の中の女性たち」（角川書店、一九六〇・一二）[一二]についての好意的な随想なども発表している。

広告欄には、「赤ゲットの佛蘭西旅行」（『カトリックダイジェスト』一九五一・一一～一九五二・七）、「続赤ゲットの佛蘭西旅行」（『カトリックダイジェスト』一九五三・四～一二）があった。『カトリックダイジェスト』は、ヘルツォグ神父が日本版編集長兼発行者を務め、「赤ゲットの佛蘭西旅行」連載第二回目となる一九五一年一二月号からは郁が顧問に名を連ねている。寄稿「写真に寄せて　遠藤郁子さん」でもこの雑誌のことは触れられており、「『ダイジェスト』の事務所に起居されるようになってからも」とある[一三]。また、周知のとおり、フランス留学前の遠藤にとって、『カトリックダ

一一　山根道公「資料編　遠藤周作年譜・著作目録」（『遠藤周作―その人生と『沈黙』の真実』）掲載の一九四七～一九四八年の著作は評論八件である。その他、一九四七年の創作として、母が務めていた小林聖心女子学院新制高校三年生の卒業劇のために創った戯曲「サウロ」がある。没後に発見され『新潮』（二〇〇〇・六）に掲載された後、『遠藤周作文学全集　第一四巻』（新潮社、二〇〇〇・六）に収められた。

一二　『婦人画報』（一九五八・四～一九五九・五）初出

一三　山根道公「母・郁と周作の年譜」（遠藤周作著　山根道公監修『落第坊主を愛した母』海竜社、二〇〇六・九）によれば、郁は、一九四八年三月、宝塚市の小林聖心女子学院の音楽教師の職を辞し、カトリックダイジェスト社ビルに移り住み、編集発行の仕事に携わった（二〇四頁）。

イジェスト』の編集を手伝うことが、鎌倉文庫での嘱託と同じく生活の糧でもあり、胸を病んでフランスから帰国した一九五三年には、本調子ではない身体で編集長を務め、先の「続赤ゲットの佛蘭西旅行」を執筆してもいる。

フランスから書き送った「赤ゲットの佛蘭西旅行」は全九回のうち六回がタイトルと内容をまとめた短文を添えて広告になっていた。なお、同誌の広告に著者名の掲載がないのは他の掲載記事についても同様である。また、郁に代わって遠藤が編集長を務めた時期の「続赤ゲットの佛蘭西旅行」は全九回のうち七回がタイトルと筆者名で広告となっていたが、この時期の広告は、遠藤が日本の読者の現状を意識した雑誌を目指して編集していたと推察される日本人の執筆陣[一四]は筆者名が載り、そうでない場合は筆者名の掲載はなされないという方針のように見受けられる。

この他、一九五五年六月五日には、郁が訳したヘルツォグ神父の著書『聖心における黙想』（ドン・ボスコ社）の広告もあったが、残念ながら現物にたどり着くことはできなかった[一五]。

三、遠藤文学をめぐって―『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に

調査対象期間は、慶應義塾大学在学中の評論家デビュー前後から『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）『イエスの生涯』（新潮社、一九七三・一〇）上梓の翌年までである。この期間の紙面で最も遠藤文学を語るのは、遠藤研究の重要な基礎参考文献でもある『遠藤周作の世界』（中央出版社、一九七〇・九）『遠藤周作の文学』（聖文舎、一九七五・九）を有し、遠藤作品の読み巧者でよき伴走者であった武田友寿である。少しでも遠藤について触れたものも含めれば一〇件の寄稿、そして、『遠藤周作の世界』で亀井賞を受賞した際のインタビュー（一九七〇・一二・二〇）もある[一六]。武田の寄稿が増えるのは一九六九年あたりといえる。

全体的な流れへの考察は今後の課題とし、まずは、『沈黙』と『死海のほとり』『イエスの生涯』の報じられ方について、まとめておきたい。踏絵の許容、神が沈黙を破る点を中心としたカトリック内部での『沈黙』への非難については、作者存命の折から伝説的に語り継がれる出来事である。二〇一一年頃、カトリック新聞調査を実施した目的も、遠藤が『沈黙』について釈明した討論会について図録（長崎市遠藤周作文学館第七回企画展）に活用できればと思ってのことだった。遠藤の弟子である加藤宗

一四　山根道公　注五に同じ、八二頁
一五　同書が一九五四年の刊行であることまでは、久松健一が明らかにしている。注八に同じ、二〇九頁
一六　遠藤の名前や作品名が確認できた記事は一覧に組み込んだ。

哉の述懐する「作者を呼びつけての（略）討論会」[一七]と一致するかは定かではないものの、例えば、遠藤が「キリストの愛の日本における受肉について」をテーマとして自作『沈黙』について語った講演会（六月一一日、東京新宿区恵の園カルチャーセンター）の記録が二度に亘って掲載されている（一九六六・六・二六、七・一七）。短いとはいえ六月二六日付け記事は、「遠藤氏が哲学者でもなく神学者でない作家であることを考慮に入れてきかなければ、或いは聞き誤る点が生じかねないふんい気もあった。」としつつも、「当日の聴衆は信仰について判っていても、文学についてのよい理解者とはいえない面もあった」と遠藤を擁護し、参加者の声として「日本という特殊な風土を考慮し、キリストの愛の本質を曲げることなく日本的なものを創造する遠藤氏の努力には、一様に共感する」[一八]旨が伝えられ、今後、カトリック国際援助会図書館主催で、「わたしの小説」をテーマとした遠藤の講演会を開くことを伝えている。この恵の園カルチャーセンターでの講演会内容の詳細は、「素顔／精神的泥沼への踏み石　問題作〝沈黙〟書いた遠藤氏」として、「〝沈黙〟を書いたこころ」を小見出しに、書き手の評価を極力抑えた文体で七月一七日に掲載されている。

刊行当時の『沈黙』に対するカトリック信者の受け止め方を調査した先行研究に、増田斎「〈踏絵〉と〈転向〉の交差　遠藤周作『沈黙』と大阪万博キリスト教館出展問題」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、二〇一九・一〇所収）がある。増田は、カトリック新聞に信者による好意的な『沈黙』評が掲載されていることに着目する。その『沈黙』評は、先述した遠藤による『沈黙』講演会と同時期に掲載された読者投稿欄「声」に載ったもので、一九六六年五月二二日、六月二六日に掲載された東京都在住の高校教師による「沈黙」評と、同じく六月二六日掲載の東京都の主婦による「〝沈黙〟と〝黄金の国〟」を指す。高校教師は、『沈黙』に対し「殉教者を見世物にして市価を高らしめていると思うと、たまらなく腹が立った（略）しかし、実際は作者はやはり自分を処刑していたのだ」、「反カトリックかと思う言辞のおくに、カトリック信仰がかくされている」、「第一級のカトリック文学」であることに気づいたと記す。また主婦は、『沈黙』について「作家というものはある意味ではデモンだと思います。人の心をこれほどまでにずたずたに切りさいてみなければならないのか」と嘆きつつも、ユダへの謎が解けた気がすると『沈黙』の読後感を記し、「黄金の国」（『文芸』一九六六・五）について、片岡弥吉が問題視した、百姓の悲哀を根拠とする司祭の棄教[一九]に感動を覚えたことを綴っている。遠藤の没後、妻の順子が「この間まで私が通っ

一七　加藤宗哉　注七に同じ、一六三頁

一八　資料合綴により、末尾は「共」までしか判読できなかった。

一九　片岡弥吉『踏絵―禁教の歴史』（日本放送出版協会、一九六九・六）一六七～一七一頁

ていた教会では『沈黙』はいまだに禁書なんですよ」[二〇]と述懐したことを思えば、好意的な読者投稿が掲載されていることは、増田の指摘通り特筆に値するだろう。

増田はこの読者投稿が『カトリック生活』一九七二年四月号で問題視されたことも指摘している。同誌において、サレジオ会士アロイジオ・デルコルが『沈黙』刊行当時、「一般読者は、これをよんで、どんな印象をうけるだろうか？」と疑問を呈し、当時編集長サレジオ会士フェデリコ・バルバロは、いまなお『沈黙』に好意的な記事を掲載するカトリック系の雑誌や新聞に対して、（略）「抗議」し続ける姿勢を明らかにしている」という[二一]。先の『沈黙』に対する読者投稿が『カトリック生活』で問題視されたことはその通りだが、カトリック新聞には『沈黙』への批判ともとれる読者投稿があることにも着目しておきたい。遠藤の名前も『沈黙』のタイトルも文面に表れないが、踏絵の場面で神が沈黙を破った点を批判していると読める「神の沈黙について」と題した読者投稿が一九六六年八月一四日に掲載されている。また先述したように、『沈黙』について語った講演会の記事には開催経緯が報じられるため、批判的な内容も含まれてはいる。それでもなおバルバロがかように非難するのは、好意的な意見が掲載されるという背景に、「ひと握りの聖職者たちの（略）声を大にして『沈黙』擁護を述べるわけにはいかなかった」様子[二二]が垣間見えるからであろうか。推測の域を出ないが、まずは『カトリック生活』のカトリック新聞批判が、『沈黙』刊行から六年を経た一九七二年になされていることにも着目したい。

一九七二年は、キリシタン関係遺品が再び注目を集めた年でもある。『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』（一九七二・一）の編集刊行と併せ、特別陳列が企画された。図版目録作成・展示に携わった江口正一による寄稿（「生々しい迫害秘めた踏絵や殉教者の遺品」一九七二・一・二三）には、真鍮踏絵の写真も大きく掲載されている。また一九七一年には『沈黙』の取材記『切支丹の里』（人文書院、一九七一・一）が刊行され、篠田正浩監督による映画『沈黙』も公開された。そうしたなか、先の江口の寄稿の隣には、遠藤による「踏絵」も掲載されている。『沈黙』で問題視された棄教の場面に対する遠藤の思いが綴られた小文だが、遠藤の著作物を、遠藤が一九六四年からともに活動してきた心のともしび運動を行うＹＢＵ善き牧者運動本部が提供したという形で掲載されるのは、半年後に出る『カトリック生活』のような批判、何より上梓以降続くカトリック内部の『沈黙』バッシングへの対応として必要とされたとみるべきであろうか。

二〇　遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』（文芸春秋、二〇一三・九）一一八頁
二一　増田斎「〈踏絵〉と〈転向〉の交差　遠藤周作『沈黙』と大阪万博キリスト教館出展問題」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、二〇一九・一〇所収）四一二～四一四頁
二二　加藤宗哉　注七に同じ、一六四頁

先述したように、一九七二年四月号の『カトリック生活』が『沈黙』に好意的な媒体を非難するのは「一般読者」への影響を問題視してのことである。『沈黙』発表当時は『沈黙』に好意的な読者投稿を掲載し実質的な『沈黙』批判を掲載しなかったカトリック新聞だが、一九七三年に続けて刊行された『死海のほとり』(新潮社、一九七三・六)『イエスの生涯』(新潮社、一九七三・一〇)については、神学的立場から直截的な疑問を提出し、『カトリック生活』と同様に聖職者ではない読者への影響を心配している。

門脇佳吉「注意すべき小説の一面性　遠藤周作の『死海のほとり』」(一九七三・八・五)、堀田雄康「『死海のほとり』のイエズス像―聖書研究者の立場から(一)～(四)」(一九七三・八・一九～九・一六)、門脇佳吉「遠藤周作　イエスの生涯」(一九七三・一一・二五)と続く。門脇神父は、遠藤が代父となった加賀乙彦の受洗に際し司式を務めた遠藤に好意的な人物であり、堀田神父は『文学界』一九七四年新春特別号の座談会「なぜ「イエス」を書くか―『死海のほとり』『或る聖書』をめぐって―」に同席した神父である[二三]。両者とも、『死海のほとり』『イエスの生涯』いずれについても、小説として読む場合と聖書に照らして考える場合の二つの読み方を示し、最後は神父としての立場からの希望―イエスにおける弱さの強調の危険―を綴る。

また、遠藤が一九六四年から協力する心のともしび運動を主宰するハヤット神父が疑問を呈するのも、『死海のほとり』『イエスの生涯』が描く奇跡を行うことができないイエス像の是非であり、特に復活という最大の奇跡を否定しているとすれば、ハヤット神父は、「遠藤さんの間違いを指摘したい」「奇跡を否定するのは間違い」だと訴える。遠藤は復活は否定していないことを強調するが、誤解されないよう書くのが小説家の責任だと諭されている。何より、ハヤット神父から遠藤の説明を聞けば間違っていないと分かるが「読者に神学的誤解を与えないで欲しい」と願われる点は、『カトリック生活』の『沈黙』批判と同質であろう。これは、小説として読んだ場合にも疑問が残るという門脇神父の注文にも当てはまる。

一九七七年三月、遠藤はローマ法王パウロ六世に謁見し、「日本の他宗教と協力して働いてほしい」との言葉を受けた[二四]。教会のために働くという点においてであれば、一九七〇年には、大衆伝道の目的も担った大阪万博キリスト教館のプロデューサーを

二三　兼子盾夫『遠藤周作による象徴と隠喩と否定の道―対比文学の方法』(キリスト教新聞社、二〇一八・一〇)によれば、座談会「なぜ「イエス」を書くか―『死海のほとり』『或る聖書』をめぐって―」(『文学界』一九七四・二)で遠藤は、堀田神父から『死海のほとり』の無力なイエスをブルトマン理論の受肉化だと言われて激怒していることを指摘している(二七七頁)。ここで採り上げた「カトリック新聞」での寄稿でも聖書学者としての批判をしていないわけではないが、聖書学者ではない読者の小説としての読みも尊重する文章となっている。

二四　山根道公　注一一に同じ、四六四頁

務め、その働きを認められてローマ法王庁から騎士勲章も授与されている。カトリック新聞においては『沈黙』講演会について報じた記事（一九六六・六・二六）で、信仰と文学の問題を分けて考えようとする傾向もみられたが、教会側の活用もあるなかで、この時期には遠藤の影響力の大きさがより問題視されるようになっていく側面もあるのではないか。

『沈黙』発表直後の上智大学での討論会の様子が『週刊新潮』（一九六六・七・一六）に掲載されている。そこで遠藤は、信者以外の読者の受け止め方を大事に考えている旨述べ、「文学として読む」ことを求めた。この姿勢が継続されているとすれば、聖書の根幹ともいうべき復活の否定とも取れる『死海のほとり』『イエスの生涯』は、『沈黙』に比較的好意的だったカトリック新聞でも疑問を提示せねばならなかったといえようか。

とはいえ、一九七四年三月一〇日掲載の「遠藤周作氏の評判―ベストセラーの秘密伝える「フィデス」」では、ヴァティカンの福音伝道聖省が発行する国際ニュースサービス「フィデス」で、遠藤の『イエスの生涯』が日本で週刊ベストセラーのトップを二週連続で飾ったことを取り上げ、キリスト教を取り扱った作品がキリスト教とは縁遠い日本でなぜベストセラーになるのか解説していることを報じている。そこでは、「この作品の第一の強みは、用いられた素材が研究しぬかれていることだ。著者はフラビウス・ヨゼフス、ギュンター・ボルンカム、ルドルフ・ブルトマンを含む歴史家、神学者の書物を入念に研究している。彼は聖書学者の業績に依拠している」と、遠藤の聖書研究を褒め称えている。

なお、作品ではないが、早いものでは助野健太郎が「キリシタン小説と演劇と」（一九五八・九・二一）で、「先日遠藤周作さんに会つた時、浦上信者の流配地となつた津和野の乙女峠のことをテーマにした小説を書きたいといつておられた」と、遠藤の名を挙げている[二五]。

四、大阪万博キリスト教館に関連して

遠藤が、一九七〇年に開催された大阪万博キリスト教館のプロデューサーの依頼を受けたのは、一九六八年五月頃のことで、三浦朱門、阪田寛夫とともにこの「慣れぬ仕事を引きうけたのは、一つにはこれが日本ではじめての旧教、新教合同の事業であ

二五　おそらく「最後の殉教者」（『別冊文芸春秋』一九五九・二）として結実する。長崎市遠藤周作文学館所蔵の遠藤宛て助野書簡（一九六四・八・一九消印）には、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）に登場する「フェレイラ忠庵とキャラ三右衛門の皮肉な運命の巡り合せをドラマになさる由」との記述もある（図録『第九回企画展　刊行から五〇年――遠藤周作『沈黙』と長崎』長崎市遠藤周作文学館　二〇一六・五　一八頁）。

ると知ったから」だという[二六]。遠藤がプロデューサーに迎えられた理由についての考察は、先に挙げた増田斎の論文に詳しい。増田は、『沈黙』でカトリック教会から神学的批判に晒された経緯を持つ遠藤が、キリスト教館の公的プロデューサーに任命されたのは、キリスト教館の出展目的である「大衆伝道」のための広告塔機能、「第二公会議後のエキュメニカル運動の推進」のための『沈黙』利用にあるとする[二七]。

遠藤がプロデューサーの依頼を受けたであろう一九六八年五月頃には、「祈り働く教会の姿を　万国博キリスト教館の理念」の見出しで、「カトリック側としての理念を相談する万博博対策カトリック特別委員会の会合」が四月下旬に開かれ、「キリスト教館の理念」の「基礎的な線」が整ったことが報じられている[二八]。そうしたなか、一九六八年五月二六日のコラム欄「地の塩」には、布教の有効な手段となるカトリック出版界における作家の活躍を期待する内容が掲載され、遠藤も採り上げられている。

「望楼」で犬養道子さんが、「カトリック・ダイジェスト」で遠藤周作氏が、「世紀」で曽野綾子さんが書きはじめたころ、その新鮮な筆致がカトリック文筆界に新風をもたらしたのであったが、これらの人たちはいずれも、文筆家としての素質を他の世界で発揮している▼それはそれで結構なのだけれども、今ここで想うのは、これら二つの世界のギャップが少し広すぎるのではないかということなのだ。こういう第一線の文筆家たちにカトリック出版界から執筆を願うのがかなりむずかしいということが、そのギャップの広さを事実として語っているといえる。

（「カトリック新聞」一九六八・五・二六）

大阪万博キリスト教館出展が計画され、遠藤がプロデューサーを打診された頃、文学の世界で活躍するキリスト教作家を布教に役立てたいと考えていたことが窺えるだろう。

むろん、教会が是とするかどうかは別としても、『沈黙』執筆にあたって布教意識があったことは遠藤の認めるところである[二九]。また、一九六四年には遠藤や曽野綾子が、ハヤット神父が始めたテレビ・ラジオを通じた伝道活動「心のともしび運動」に積極的に関わっていた。このコラムの末尾が、カトリック出版界における良書が一般にはほとんど知られていないことを憂え「出版布教関係者の反省を強いる」と結ばれてい

二六　遠藤周作「現代人に〝沈黙〟の回復を　万国博基督教館を担当して」（「読売新聞」一九六九・六・八）

二七　増田斎　注二一に同じ、四〇四～四〇七頁

二八　「カトリック新聞」一九六八・五・一二

二九　遠藤周作・小川圭治・熊沢義宣・佐古純一郎「座談会　神の沈黙と人間の証言　遠藤周作『沈黙』をめぐって」（『福音と世界』一九六六・九）

ることを考慮すれば、カトリック作家に「執筆を願うのがかなりむずかしい」と綴る背景には、出版布教関係者側のネックが意識されていたと推測されるが、この記事の後、一九六九年あたりから、武田友寿によって文学の世界と宗教の世界を橋渡す文芸記事が増えていく点に、興味深さを覚える。

なお、大阪万博に関する記事のなかには、キリスト教館への感想が綴られたものが一件あった。当時、東宮侍従であった浜尾実による「万国博キリスト教館　訪ねてみた感想　沈黙だけでは意味がない」（一九七〇・六・七）である。プロデューサーがキリスト教館の中心に据えた「沈黙の間」を意識しての見出しだが、作為的な見出しのように感じる。

周知のとおり、「沈黙の間」は科学技術の進歩を競う万国博のパヴィリオンのなかで、そうした進歩や繁栄の意味を自分自身に語りかける「聖なる空間」を設けるために設けられ、そこまでの動線も、「沈黙の間までの通廊には人々に自己をIMPOSER（池田注、課する・負わせる）するべき心の準備のもの（池田注、ヴァチカン美術館秘蔵のラファエロの織物など）が置かれる」構造になっていた[三〇]。

見出しがとられたであろう箇所は、以下である。

> 喧騒とあわただしさの他のパビリオンから、この「キリスト教館」に入ると、心の平静をとりもどし、ほっとすることは確かだが、何も生み出さない沈黙では意味がないし、内容のない祈りもまた、真の祈りではない。／そこには、考えるべき材料と、祈るべき目的がほしい。／あらゆる余計なものを、けずりにけずって、簡素そのものにされた場所では、私など中味が貧しいものには、考えたり、祈ったりする、取りかかりがないので、かえってまどうのである。
>
> （浜尾実「万国博キリスト教館　訪ねてみた感想　沈黙だけでは意味がない」「カトリック新聞」一九七〇・六・七）

浜尾が「何も生み出さない沈黙では意味がない」、「考えるべき材料と、祈るべき目的がほしい」というのは、三月に訪れた際には、沈黙の間までの動線に置かれた「折角のラファエルの絵にも、作者の名も題名も、どこにも書いていないし、知らない人が見たら、なんだかちっともわからなかったろう」と思ったからである。だがこの記事は、その後二回の訪問を重ねた印象を述べたものである。一月後の四月には、「ラファエルの名前と題名とが明記されていて、（略）そこからいろいろと思いめぐらす出発点となった」ことや、シスターによるキリスト教関係書籍の展示即売の様子を見て「キ

遠藤周作「〝沈黙〟の部屋　万国博の中の劇場」（現代演劇協会機関紙『雲』第一九号、一九六九・三）。引用は、遠藤周作『観客席から　芸術エッセイ』（番町書房、一九七五・六）一五八頁に拠った。

リスト教を全く知らない人でも、この機会に本を読んでみよう」と思うだろうと嬉しく思い、五月にはプロテスタント・カトリック合同礼拝から聴こえてくる聖歌を耳にして、「祈りを心から天に向かって叫んだ」と記されている。

万国博の会期は、三月一五日から九月一三日までである。オープン当初の準備不足への指摘は否めないにしても、浜尾の総じての感想はプロデューサーの意図に沿ったものに近い。また、浜尾は会場に足を運ぶたび、「この万国博に来るすべての人が、真理の港と、信仰の一致とに帰ることができ、やがては、一人の牧者、一つの群れとなることができますように」と祈るとも綴る。そうした訪問記に対し、不満を述べた三月の印象に焦点化し「沈黙だけでは意味がない」との見出しがつけられたのは、キリスト教館が「キリスト教徒以外の人々にどのように受け止められる可能性が高いのか」という布教を念頭においた懸念のほうが、強く作用したと考えるべきであろうか。

とはいえ、カトリック新聞で、「沈黙の間」の意義が繰り返し報じられただけでなく、事前に読売新聞[三]やテレビ出演を通して、「沈黙の間」の意義を説明してきたことを想起すれば、いささか作為的に過ぎる気もする。

五、まとめ

調査対象期間（一九四六年一月～一九七四年一二月）における遠藤関連記事を、「一、単行本等未所収初期作品」「二、母郁」「三、遠藤文学をめぐって―『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に」「四、大阪万国博キリスト教館」を軸に紹介し検討した。その結果、「一、単行本等未所収初期作品」では評論家デビュー前となる一九四七年～一九四八年に八件のフランス文学者としての記事をカトリック新聞に寄稿していることが分かった。内容の精査は今後の課題とするが、基礎資料の少ない時期の文献として価値がある。また「二、母郁」では、フランス留学中の遠藤を期待されるフランス文学研究者として、母に関する記事を通して伝えられていることが分かった。つづく「三、遠藤文学をめぐって―『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に」では、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）に好意的な読者投稿を掲載したとして一九七二年に『カトリック生活』を編集するバルバロ神父から批判されたことについて、一般信者への影響が懸念されていたことが確認された。また、遠藤の聖書研究の成果が表された『死海のほとり』や『イエスの生涯』についても同様に紙面で聖職者から注意喚起されていることが分かったが、批判される場合にあっても、あくまで小説家の立場と聖職者の立場と双方の立場を尊重した意見が示されており、こうした記事か

三　遠藤周作「現代人に〝沈黙〟の回復を　万国博基督教館を担当して」（「読売新聞」一九六九・六・八）

らは、生前の遠藤がカトリック教会から自作を否定、非難されてきたと言及してきたこととはいささか状況が異なることが判明した。また、「四、大阪万博キリスト教館に関連して」では基督教館のプロデューサーを担うなかで、カトリック作家にキリスト教を解説してもらうことを望む聖職者の風潮もあることが窺いしれた。この点からも、生前の遠藤の言及と実際のカトリック教会との関係を、作家の発言を離れて調査する必要があることが確認できた。

次に、本節で検討素材とした遠藤周作関連記事一覧を掲げる。遠藤のことが少しでも触れられているものについて可能な限り採録したものである。名前、もしくは作品について触れたものは確認できた限り採り、大阪万博キリスト教館に関する記事については、名前かプロデューサーとして掲載されているものを採った。

年代の若い順に並べ、同日掲載記事は、掲載面が若いものを先とした。見出しはなるべく省略せずに採ったが、内容が判りづらい記事は、末尾に（※）として内容を示し、筆者がわかる記事は、末尾に（）で括って示した。また、広告は冒頭に「（広告）」と示し、広告情報として掲載された遠藤に関連する記事を末尾に（）で括って記した。なお、広告のうち、遠藤著作については著者名を省き、同一タイトルの広告については、一番若い項以外は出版社等を省略した。

なお、次の第二節では、文学館が開館する二〇〇〇年までのカトリック新聞における遠藤文学の捉えられ方の変遷を辿っている。

カトリック新聞（一九四七年一月～一九七四年一二月）遠藤周作関連記事一覧

一九四七年　九月一四日　佛カトリック文壇　大戦後の新旧作家の消息／（遠藤周作）
一一月二三日　感銘深い新戯曲　モーリヤックの新作の中より／（遠藤周作）
一一月三〇日　愛は苦悩の中に　モーリヤックの新作より（二）／（遠藤周作）
一九四八年　五月　二日　小説「ファリザイ女」モーリヤックの新作紹介／（遠藤周作）
五月　九日　小説「ファリザイ女」モーリヤックの新作紹介（二）／（遠藤周作）
六月一三日　文化消息　雑誌
九　月　五日　霊性の優位強調　〃　大戦と〝ペギイ〟手紙（一）／（遠藤周作）
九月一二日　日本近代の形成―文学的領域の素描／（遠藤周作）

九月一九日　精神的諸徳と文化　〝大戦とペギイ〟手紙（二）／（遠藤周作）
一九四九年　四月一〇日　アンテナ（※野村英夫遺稿・追悼文）
一二月一一日　文化消息　雑誌（※「ネオトミニズムの詩論」）
一二月一八日　生活費は仏国信者が負担　フランス留学の招き　初春に十余名門出か
一九五〇年　六月一八日　教会短信／四学生欧州留学
一九五一年一一月二五日（広告）『カトリックダイジェスト』クリスマス特集号
一二月　二日（広告）『カトリックダイジェスト』クリスマス特集号
一二月二三日（広告）『カトリックダイジェスト』一月号
一九五二年　一月二七日（広告）『カトリックダイジェスト』二月号
四月　六日（広告）『カトリックダイジェスト』四月号
四月一三日（広告）『カトリックダイジェスト』四月号
五月　四日（広告）『カトリックダイジェスト』五月号
六月　八日（広告）『カトリックダイジェスト』六月号
六月二九日（広告）『カトリックダイジェスト』七月号
七月　六日（広告）『カトリックダイジェスト』七月号
一九五三年　三月二九日（広告）『カトリックダイジェスト』四月号
五月　三日（広告）『カトリックダイジェスト』五月号
八月　二日（広告）『カトリックダイジェスト』八月号
九月　六日（広告）『カトリックダイジェスト』九月号
九月二七日（広告）『カトリックダイジェスト』一〇月号
一一月　一日（広告）『カトリックダイジェスト』一一月号
一一月二九日（広告）『カトリックダイジェスト』クリスマス号
一九五五年　四月一七日　写真に寄せて／遠藤郁子さん／（池渕鈴江）
六月　五日　（広告）ヘルツォーグ著『聖心についての黙想』遠藤郁訳（ドン・ボスコ社）
九月一八日　芥川賞受賞作『白い人』について　異常心理を通じ、罪という大問題に／（A・I生）
一九五六年　五月　六日　カトリック作家の悩み／（遠藤周作）
一九五八年　六月二九日（広告）『世紀』百号（主な執筆者）
七月　六日（広告）『世紀』百号（「一つの反省から」）
七月一三日（広告）『世紀』百号
七月二〇日（広告）『世紀』百号
七月二七日（広告）『世紀』百号

八月　三日　（広告）『世紀』百号
八月一七日（広告）『世紀』百号
九月一四日　日本とカトリシズム―「世紀」第百号記念特集を読んで／（長島達也）
九月二一日　キリシタン小説と演劇と／（助野健太郎）
一九六一年　三月一九日（広告）『世紀』四月号（池淵鈴江「主における共感―「聖書の中の女性たち」随想」）
三月二六日（広告）『世紀』四月号
四月　二日（広告）『世紀』四月号
四月　九日（広告）『世紀』四月号
四月一六日（広告）『世紀』四月号
一九六四年　二月一六日　素顔／積極的な信者生活を　そのあり方を語る、三浦朱門氏
四月一二日（広告）『わたしが・棄てた・女』文芸春秋新社（※作者のことば）
四月二六日（広告）『世紀』五月号（岩瀬孝・遠藤周作・三浦朱門「現代作家・小説・信仰」）
五月　三日（広告）『世紀』五月号
一九六五年　五月三〇日（広告）『世紀』六月号（座談会「日本人の生活とキリスト教」）
六月　六日（広告）『世紀』六月号
一一月二一日〝心のともしび〟テレビ東京（12）
一九六六年　一月　二日　電波こぼれ話／（川隅）（※心のともしび）
三月一三日　四月一〇日ご復活祭号より連載　小説　悪いヤツ　三浦朱門
五月二二日　声／網も破れるほどに―「沈黙」評―／（田中捨彦）
六月二六日　声／フェレイラとは？「沈黙」評／（田中捨彦）
声／〝沈黙〟と〝黄金の国〟／（小島静子）
〝沈黙〟の作者・遠藤周作氏講演会
（広告）『世紀』七月号（粕谷甲一「「沈黙」について」）
七月一七日（広告）『あけぼの』八月号（佐々木孝「神の「沈黙」とは？遠藤周作氏の近作をめぐって」）
素顔／精神的泥沼への踏み石　問題作〝沈黙〟を書いた遠藤氏
七月二四日（広告）『世紀』八月号（「「沈黙」の神学的批判をめぐって」）

八月　七日　（広告）『世紀』八月号
八月一四日（広告）『世紀』八月号
八月二一日（広告）『世紀』九月号（佐古純一郎「「沈黙」について」）
九月　四日（広告）『世紀』九月号
一九六七年　五月二一日　催し／遠藤周作氏講演　〃近ごろ考えていること〃
六月　四日　燭台／宗教と文学／（武田友寿）
一九六八年　五月二六日　地の塩／（J）
（広告）『キリストカトリック　喜びのおとずれ』カトリック思想普及社（※遠藤執筆）
一九六九年　三月　九日　〃沈黙の建物〃で勝負
三月二三日　催し／講演会「聖書の旅」（講師：遠藤周作氏）
五月一一日　聖母マリアと文学／（武田友寿）
五月一八日　教会・わが家・社会をつなぐカトリック放送／（曽野綾子）
五月二五日　教会一致の姿を示す　万国博キリスト教館の催し物
七月二七日　万国博キリスト教館　参加意義示す物を　プロデューサーが計画説明
九月二八日　万国博キリスト教館　オルガンコンクール
精神面でテーマ強調　日本万国博キリスト教館プロデューサーが声明書
造反にゆらぐ日基教団　信仰の核心に迫る問題点／（白木信夫）
遠藤周作氏の書おろし劇〃薔薇の館〃を公演
一〇月一二日　日曜ハイライト／近づく万国博　キリスト教館プロデューサーの苦心
一〇月二六日　宗教と文学の間（一）　現代文学と聖書／（武田友寿）
一二月　七日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社
一二月一四日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
一二月二一日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
一九七〇年　一月　四日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
一月一八日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
二月　一日　大都市なみの賑わい　お客さんの多い軽井沢教会（※遠藤家ミサ参列）
（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
二月　八日　宗教と文学の間（五）遠藤文学と私／（武田友寿）
三月一五日　万国博は始まった　議論より一致協力のとき

三月二九日　宗教と文学の間（四）最近の宗教小説／（武田友寿）
五月一七日（広告）『カトリックグラフ』創刊号（「聖母との契約」）
五月二四日（広告）武田友寿『文学と人生』中央出版社
五月三一日（広告）『世紀』六月号（中野記偉「G・グリーンと日本の作家たち（二）遠藤周作の場合」）
六月　七日（広告）『世紀』六月号
万国博キリスト教館　訪ねてみた感想　沈黙だけでは意味がない／（浜尾実）
八月一六日　宗教と文学の間（七）キリスト教の土着化をめぐって／（武田友寿）
九月　六日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
九月二七日　恩寵の世界求めて　光の証人の作家モーリヤック／（武田友寿）
一一月一五日　武田氏に〝亀井賞〟〝遠藤周作の世界〟で
一一月二二日（広告）武田友寿『遠藤周作の世界』
一二月　六日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』中央出版会
一二月二〇日　変わらぬ問題意識　第二回亀井賞を受賞して／（武田友寿）

一九七一年

一月二四日　（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』
一月三一日　カトリック放送センター　東京三軒茶屋で活動始める
宗教と文学の間〈八〉小説とエッセイとのきずな／（武田友寿）
三月　七日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』
三月一四日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』
弱者を強者と対比　迫害時代の信仰にメス　話題呼ぶ遠藤周作切支丹の里／（月田光一）
巧妙に語り掛ける　劇　薔薇の館／（矢代静一）
四月　四日（広告）『切支丹の里』人文書院
（広告）ジム・ビショップ著　三浦朱門訳『キリストが死んだ日』荒地出版社（※遠藤評）
四月一一日（広告）『カトリックグラフ』五月号（「遠藤周作の「薔薇の館」評判記」）
五月　二日（広告）『カトリックグラフ』五月号（「「薔薇の館」誌上再録」）
五月二三日　ＹＢＵ運動における電波媒体の実情キリスト教の愛伝える
聴取者から多大の支持心のともしびに期待　なまのことばが人生を教える／（ニッポン放送編成局長　羽佐間重彰）

六月二七日　（広告）『世紀』七月号（中野記偉「「沈黙」へのアプロウチ」）
七月二五日　（広告）『カトリックグラフ』既刊セット販売
一〇月　三日　（広告）『世紀』一〇月号（佐古純一郎「たった一枚の踏絵から」）
一〇月一〇日　（広告）『カトリックグラフ』一〇月号（「「沈黙」に賭ける男」）
一〇月三一日　映画「沈黙」のねらい　篠田監督にインタビュー　受難を浮き彫り　人間の誠実にひかれる
（広告）『カトリックグラフ』一一月号（「「沈黙」誌上試写会」）
一一月　七日　（広告）沈黙　SILENCE　東宝
一九七二年　一月二三日　踏絵／（遠藤周作）（※ＹＢＵ善き牧者運動本部・提供）
五月一四日　健全な世論の形成　きょう世界広報の日
テレビ“巡礼の旅”帰国　教皇謁見番組にも成功　心のともしび
一〇月二二日　（広告）責任編集＝遠藤周作・椎名麟三『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻　教文館
一一月　五日　秋に静かな波紋　キリスト作家が全集刊行／（武田友寿）
一二月　三日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
一九七三年　一月二一日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
二月一一日　座談会やドラマも　『心のともしび』放送で計画
二月一八日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
三月一一日　陽を浴びて開館　故岩下神父の遺志継いで　新装なった真正会館ビル
三月一八日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
三月二五日　（広告）『あけぼの』四月号（「開眼」）
五月二〇日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
八月　五日　注意すべき小説の一面性　遠藤周作
「死海のほとり」／（門脇佳吉）
八月一九日　「死海のほとり」のイエズス像―聖書研究者の立場から一／（堀田雄康）
八月二六日　「死海のほとり」のイエズス像―聖書研究者の立場から二／（堀田雄康）
九月　九日　「死海のほとり」のイエズス像―聖書研究者の立場から三／（堀田雄康）
九月一六日　「死海のほとり」のイエズス像―聖書研究者の立場から四／（堀田雄康）

一〇月　七日　遠藤周作・芥川比呂志のコンビで　メナム河の日本人―山田長政
劇団「雲」第三五回公演
一一月一八日　心のともしび全国放送表　一一月
一一月二五日　心のともしび全国放送表　一二月　遠藤周作　イエスの生涯／（門脇佳吉）
『死海のほとり』をめぐる対談から上　作者の真意はどこに（遠藤周作×矢代静一×ハヤット神父）
一二月　二日　『死海のほとり』をめぐる対談から下　作家としての聖書解釈（遠藤周作×矢代静一×ハヤット神父）
一二月九日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

一九七四年
二月一〇日　教皇庁から叙勲　小林、高津、上田三氏に
三月一〇日　遠藤周作氏の評判―ベストセラーの秘密伝える「フィデス」
六月　二日　現代演劇協会・青少年名作劇場　遠藤周作「黄金の国」を上演　2～9日　三百人劇場
六月三〇日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
八月　四日　（広告）『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻
一一月一〇日　文学の広場（一）日本のキリスト者作家たち／（武田友寿）

第四章　遠藤作品の受容

第四章第二節　カトリック新聞―一九七五年～二〇〇〇年―

〇、はじめに

前節に続く一九七五年から遠藤周作文学館が開館する二〇〇〇年までを対象とする。教会から禁書扱いを受けたとされる『沈黙』（新潮社、一九六六・三）を始めとする遠藤作品が、第二ヴァティカン公会議における「広報機関に関する教令」を受けた日本のカトリック教界において、一般信者との橋渡しを役目とするカトリック新聞のなかでどのように扱われていたのか、わずかではあるが垣間見られる調査になったものと考える。以下、「一、聖職者による作品評価」、「二、布教活用のなかの文学・小説家」、「三、一般信者の作品受容」、「四、広告欄から」、「五、まとめ」、「六、「カトリック新聞」遠藤周作関連記事一覧―一九七五年一月～二〇〇〇年一二月」を柱に概略をまとめる。

一、聖職者による作品評価

本稿の調査対象期間に上梓された主な作品には、『キリストの誕生』（新潮社、一九七八・九）、『侍』（新潮社、一九八〇・四）、『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）、『深い河』（講談社、一九九三・六）がある。一九七四年までの紙面では、信仰の問題が特に問われた『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）、『イエスの生涯』（新潮社、一九七三・一〇）に対し、聖職者から疑問が提示されていた[三二]。だが一九七五年以降の紙面においては、遠藤の生前には聖職者から作品に対する言及はなされておらず、一九六六年九月の一連の追悼記事で聖職者が遠藤を語る以外では、コラム「地の塩」（一九九七・四・一三）が『福音宣教』（一九九七・四）に掲載されたプロテスタント説教者加藤常昭の「説教と文学―福音を語る言葉たち」が触れた『深い河』への感慨を紹介し、好意的に『深い河』を取り上げる程度である。

そうしたなか、大学教員（病理学）が対談集『日本人はキリスト教を信じられるか』（講談社、一九七七・八）について日本人の特殊性が強調される点を疑問視し（一九

三二　一九七四年までのカトリック新聞に『沈黙』への直接的な批判は確認されなかったが、心のともしび運動に共に励み、同紙上でも『死海のほとり』についての疑問を投げかけたハヤット神父が『沈黙』に対して否定的な立場であったこと、実現しなかったが、矢代静一を司会に、遠藤とハヤット神父を迎え、テレビ番組で討論する予定もあったことを遠藤は後年回想している（『対話の達人、遠藤周作Ⅱ』（女子パウロ会、二〇〇六・一〇）。

七七・一二・一一)、新聞記者[三三]が『銃と十字架』(中央公論社、一九七九・四)が描く強者ペドロ岐部の裏側に存在する『沈黙』における弱者へのまなざしを批判している(一九七九・一〇・二八)。『銃と十字架』に関する記事は、おそらく後述する読者投稿「『銃と十字架』を読んで思うことは」(一九七九・九・一六)が、これまでの遠藤作品とは違い、強者の生き様を描いた遠藤作品に感動していることへの応答である。『沈黙』に好意的な読者投稿を掲載したカトリック新聞に対し難色を示したフェデリコ・バルバロが、一般信者が誤解することを懸念し自身が編集長を務める『カトリック生活』(一九七二・四)で『沈黙』批判をなした時と同質の懸念が、こうしたインテリ階層に属する信者による遠藤作品への懐疑には含まれているのだろう。

聖職者ではないが社会的地位が高いと見做されやすい肩書きを有する人物によって遠藤に批判的な記事が書かれていく背景を探るための入口となりそうな記事に、「カトリック文学と布教」(一九七九・七・八)、「文学は布教に役立つか」(一九七九・九・一六〜三〇)がある。遡れば、一九六八年五月二六日の「地の塩」でも布教活動への小説家の助力が期待されていた。遠藤が一九七〇年開催の大阪万博基督教館プロデューサーに抜擢された際も、広告塔としての期待もあった。

これらの記事は、カトリック全国広報委員会が委員の研修と総会を兼ね年に一度開催する広報総会について報じたもので、一九五九年五月には「文学は布教に役立つか」をテーマとして遠藤文学を中心に討議されたという。寄稿者で基調講演も担当した武田友寿は、遠藤作品とカトリック教会との間に漂う空気について、「作品は読まないほうが好ましい」とか「名前が出ただけで敬遠する風潮がある」と述べ、「少しはよくなった」が、現在でも「文学に対する偏見が残存している」と伝えている[三四]。

そうしたなかの基調講演で、「信仰的にも、文学的にも(略)天才的なカトリック者である」遠藤の作品を「導きの星」として、武田自身は信仰と文学の道を歩んできたと強調する。また、「信仰が堅固」で「信仰を深く生き」、「その信仰を自分が客観視でき」、さらには「個人の信仰としてのそれを普遍化することができなければならない」というカトリック作家としての必要十分条件を満たし、「信仰が文学的表現に堪える」素晴らしさを兼ね備えたのが遠藤作品であるという。また、遠藤との直接の人的交流もあり受洗した三浦朱門を始めとする作家を挙げ、布教の側面から見た遠藤の有用性を示している。

三三 一九七九年一〇月二八日の紙面に肩書きはないが、一九八〇年三月三〇日・一九八一年五月一〇日の紙面から、毎日新聞記者・編集委員であったことが分かる。

三四 武田友寿「文学は布教に役立つか?カトリック作家の現在 広報総会講演要旨(上)」。遠藤作品と教会の関係性について、『沈黙』(新潮社、一九六六・三)が話題になって以降も、「白い人」(『近代文学』一九五五・五、六)「黄色い人」(『群像』一九五五・一一)「海と毒薬」(『文学界』一九五七・六、八、一〇)を隠れて読まなければならない状況が存在していた、とも伝えている。

一方で、遠藤が「自分にできることは、キリスト教の土壌のない国に育った、キリスト教に無縁な人びとを、ほんの一瞬でもキリスト教のほうへ顔をむけさせることだ（略）その顔を向けた人を教会に向かって一歩足を進ませるか、さらに教会の門をくぐるまで手をかすかどうかは、聖職者の仕事だ」と述べていることを紹介し、教会が遠藤文学を「聖書に代わるもの、神学書、歴史書、（略）布教を目的とした啓蒙書」と読むために甚だしい誤解や、遠藤の「信仰を裁くような錯誤まで犯しかねない」状況があることを指摘している。加えて、聖職者の役目を遠藤文学に背負わせ、結果として非キリスト者の読者を何十万と持つ遠藤文学を布教に利用しないで葬り去っている側面があると憂え、「人間の真実を描く文学」に対し、神と人間のことを真摯に考える聖職者が、「文学のことは知らないので……」と応答することもある現状に、疑問を呈している。

基調講演に基づき、討議は「①カトリック作家の作品は影響力を持っている②基調講演と私たち（池田注、参加者）の体験を前提とする③この討議が単なる批判に終始してはならない④カトリック文学をどう布教に役立てるのか」を前提に行われたという。その結果、一九六三年一二月四日に公布された第二ヴァティカン公会議の「広報機関に関する教令」、一九七一年五月二三日に公にされた司牧指針「コミュニケーションと人類の進歩」、一九七六年六月一八日に出された「日本カトリック広報委員会司牧計画で述べられている「カトリック作家を積極的に支持する」という公文書に着目しながら[三五]、「（一）カトリック作家の作品は布教に役立っている（二）カトリック作家の作品を布教に生かすよう努力する（三）カトリック作家の固有な使徒職を認め、その活躍に期待している」といったことが合意されたという。（二）への対策としては「①求道者に適当な作品を勧める②読書会で使用し、よく指導する③『カトリック新聞』や雑誌に作品を紹介したり、評論を載せてもらうようにする」こと、（三）については「作品の中のカトリック教理にかかわる部分について、神学者、聖書学者、司牧者が見解を明らかにすることは、司牧上必要である」としている。

一九七三年、カトリック新聞にも掲載された『死海のほとり』批判に際し、遠藤はハヤット神父を相手に「文学として読んでほしい」と応答した[三六]。むろん、「広報機関に関する教令」では文学作品における芸術の自律性は認められており、司牧指針でも

三五　「広報機関に関する教令」・司牧指針「コミュニケーションと人類の進歩」については、南山大学監修『新風かおる教会』（中央出版社、一九六九・五）、教皇庁広報委員会『コミュニケーションと進歩―第二バチカン公会議「広報機関に関する教令」司牧指針―』（川中康弘監訳、南窓社、一九七四・七）を参照した。残念ながら一九七六年の「日本カトリック広報委員会司牧計画」は未見である。

三六　『『死海のほとり』をめぐる対談から下　作家としての聖書解釈　遠藤周作・矢代静一・ハヤット神父」（「カトリック新聞」一九七三・一二・二）

著者の表現の自由に干渉することを意図したものではないと述べられている[三七]。だが、司牧指針は同時に、「メディアについて十分に理解して、よいメディアとよいメッセージを選ぶのは、受け手の社会的責任である」と受け手への教育を強調している[三八]。そのため、布教に文学作品を役立てるにあたっては、一般信者が誤解・混乱しないよう努めるのが聖職者の役割であることが、一九七九年の広報総会記事からも窺える。また、「文学のことは知らないので」という文句を盾に感想を回避する聖職者の出現からは、聖職者が文学作品への発言に対し慎重になっている様子も把握できる。

「広報機関に関する教令」から導かれる聖職者の文学作品に対する取り扱いの難しさが、『キリストの誕生』や『侍』に関して聖職者からの批評を掲載せず、『銃と十字架』については新聞記者からの批評を選択させるのだろう。また、一九七七年からは文芸時評が企画されているが、文学作品を布教に役立てる試みの延長線上にあるのだろう[三九]。文芸時評に限らず、武田友寿・上総英郎らの寄稿によって、遠藤の主要作品はほぼ紙面で解説されている。むろん、遠藤擁護一辺倒ではなく、前節で確認した一九七七年一二月一一日掲載の『日本人はキリスト教を信じられるか』に対する疑問については、上総英郎も文芸時評で「〈日本人〉であることと〈キリスト教徒〉であることとのどうすることもできぬ隔差というもの、それが存在するか否かについて、われわれは一度立ちどまって考え直してみる必要があるのではないか」（一九七八・一・一五）と距離を保っている。

一九七九年に開催された広報総会は、教会内部に限らない「社会的コミュニケーションについて委員会として公に取り扱い話し合った最初のものとして高く評価された」[四〇]という。討議対象となる直前、遠藤は芸術院賞を受賞している。カトリック新聞では「遠藤さんの“無力な神”観に対して、カトリック界からも異論がないわけではない」としつつも、「市民権得た宗教作品」「〝キリスト教〟広めた遠藤さん」と評している[四一]。遠藤が読者として想定した「基督教とはほとんど縁のない人々」[四二]への影響力を評価しての賛辞であろう。一九七〇年から一九八〇年頃の日本社会の特徴としても、遠藤を始めとする「カトリック作家の作品や「善き牧者運動」への協力により、

三七　『コミュニケーションと進歩』注三五に同じ、一〇五頁、『新風かおる教会』注三五に同じ、六六〇～六六一頁

三八　『コミュニケーションと進歩』注三五に同じ、ix頁

三九　一九七七年一〇月二日から一九七八年一〇月八日まで、武田友寿・上総英郎・水谷昭夫・佐々木孝によって月一回掲載。

四〇　「〝カトリック文学と布教〟武田氏が基調講演　積極性示し理解深める　広報総会」（「カトリック新聞」一九七九・七・八）

四一　「カトリック新聞」（一九七九・四・八）

四二　「私の文学」（『われらの文学10 福永武彦・遠藤周作』講談社、一九六七・一所収）、引用は『遠藤周作文学全集第一二巻』（新潮社、二〇〇〇・四）三七九頁に拠った。

日本全国に想像以上にキリスト教へのシンパが生まれてきていること」が指摘されているが[四三]、広報総会記事からは、その先にある内部的な取り扱いに苦慮していたであろうことが窺える。

二、布教の場で活用される文学・小説家

遠藤は、『スキャンダル』（新潮社、一九八七・三）を執筆していた頃、「キリスト教の小説があるとしても、それは（略）布教や護教のために書かれるのではありません」と改めて訴えている[四四]。また、自らをモデルとした小説家の主人公を登場させた『スキャンダル』では、それまでの総決算ともいうべき『侍』（新潮社、一九八〇・四）と思しき小説を描き上げた主人公について、「彼は誰かを教導するために今日まで小説を書いたのではなかった。基督教を宣伝するために小説家になったのではなかった」と語らせてもいる[四五]。一方で、小説家となることを決意した一九五〇年からのフランス留学中の日記には「文学者として自分を選んだ。それは、ぼくの発言が人々に影響を与える位置をぼくが選んだ事である」との認識を綴っており[四六]、『沈黙』がキリスト教界から理解を得られなかった一九六六年当時、布教意識をもって『沈黙』を書いたと打ち明けてもいる[四七]。また、『イエスの生涯』（新潮社、一九七三・一〇）の「あとがき」では「この本はイエスの生涯を小説として書いたものであるから聖書におけるその使信についての神学的解釈もない。それらは本書の意図をはみでたものであり、私の力の及ぶところではない」とも訴えている[四八]。これらの発言から、あくまでキリスト教に無縁な日本の人々を主な対象としていたと言える。

なお、一九七八年一〇月八日の文芸時評で上総英郎は、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）・『死海のほとり』（新潮社、一九七三・六）を「読んではいけない本」に認定しているカトリック学校があることを指摘している。実質遠藤作品がどの程度カトリック教育や布教に役立つものだったのかまでは本調査のみでは判然としないが、文学作品

四三　上智大学中世思想研究所監修『新装版キリスト教史第一一巻』（講談社、一九九一・八）三九一頁

四四　「〈特別講演〉キリスト教作家の問題」（『日本の風土とキリスト教　キリスト教学校教育同盟全国学校代表者協議会記録』キリスト教学校教育同盟、一九八五・四所収）一頁

四五　『スキャンダル』（新潮社、一九八六・三）。引用は『遠藤周作文学全集第四巻』（新潮社、一九九九・八）五六頁に拠った。

四六　『作家の日記』（作品社、一九八〇・九）。引用は『遠藤周作全日記【上巻】』（河出書房新社、二〇一八・五）二一一頁に拠った。（一九五二・三・一四の記述）

四七　遠藤周作・熊沢義宣・小川圭治・佐古純一郎「座談会　神の沈黙と人間の証言　遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって」（『福音と世界』一九六六・九）六五～六六頁

四八　『イエスの生涯』（新潮社、一九七三・一〇）二五六頁

を布教に役立てる教会の企ては、先の一九七九年の広報総会に関する記事によれば、カトリック新聞での図書紹介にも影響しているはずである。一九七六年の「日本カトリック広報委員会司牧計画」でカトリック作家を積極的に支持することが述べられて以降、遠藤作品は、一九七六年八月一五日図書紹介欄に『私のイエス―日本人のための聖書入門』(祥伝社、一九七六・七)、一九八二年一一月二一日書評紹介欄に『自分をどう愛するか〈生活編〉』(青春出版社、一九八二・九)、一九八四年二月二六日図書紹介欄にインタビュイーの一人であった泉秀樹・加藤宗哉共著『率直にきこう　あなたはなぜ神なぞ信ずるか』(女子パウロ会、一九八三・七)、一九八六年五月一八日書評欄に『あなたの中の秘密のあなた』(ハーレークィーンエンタープライズ日本支社、一九八六・四)、一九九二年二月二三日書評欄に佐藤泰正との対談集『人生の同伴者』(春秋社、一九九一・一一)、同年六月二一日新刊紹介欄に書誌のみだが『ひとりを愛し続ける本』(講談社文庫、一九九二・四)、一九九三年一月一七日新刊紹介欄に門脇佳吉編『愛されるより愛することを　アシジの聖フランシスコ』(学習研究社、一九九二・一一)の分担執筆者として書誌のみ、同年八月二九日新刊紹介欄に遠藤周作編『キリスト教ハンドブック』(三省堂、一九九三・七)が書誌のみ、文学館が開館する二〇〇〇年には一月三〇日図書紹介欄に『聖母のなかの女性たち』(すえもりブックス、一九九九・一二)の計九作品が掲載されている。

また二次作品にまで広げれば、七作品が計一二回掲載されている。一九七五年六月一日、八日に舞台「黄金の国」、一九七九年八月一二日に英訳版『口笛を吹く時』、一九九二年六月一四日に舞台「黄金の国」一九九五年六月四日に映画「深い河」、同年一〇月一五日に舞台「沈黙」、一九九七年八月三一日に『わたしが・棄てた・女』(文芸春秋新社、一九六四・三)を原作とする映画「愛する」、同年九月二一日、一二月七日に映画「深い河」、一九九八年六月七日に舞台「沈黙」、一九九九年一月二四日に映画「沈黙」、同年三月一四日に舞台「薔薇の館」である。その他、一九九九年一二月一九日に、妻順子による『夫の宿題』(PHP研究所、一九九八・七)がテレビドラマ化されたこともある。

入門書・研究書としては、一九八〇年三月三〇日に徳岡孝夫「パウロ遠藤周作」(毎日新聞社編『宗教は生きている3―ルポルタージュ』(毎日新聞社、一九八〇・三)所収)の紹介文、一九八一年一一月一五日図書紹介欄に遠藤の寄稿も収められた聖心女子大学キリスト教文化研究所木間瀬精三編『文学における神』(春秋社、一九八一・九)、一九八二年八月八日書評欄に戸田義雄編『日本カトリシズムと文学　井上洋治　遠藤周作　高橋たか子』(大明堂、一九八二・五)、一九九八年三月八日図書紹介欄に山形和美編『遠藤周作―その文学世界』(国研出版、一九九七・一二)の四冊が掲載されている。更には、一九九四年三月二〇日にはカトリック点字図書館の蔵書としてエッセイ『逆さま流人間学』(青春出版社、一九八九・三)が紹介されている。

図書紹介・書評に採り上げられるのは、概ねエッセイ・対談で、小説は二次作品を対象に平成に入って以降増えているといえるが、「カトリック・ベストセラー、この一年」（一九七六・五・二三）には、「聖書はむずかしいので、聖書について書かれたやさしい本を、という一般の人の声も強い」として、『聖書のなかの女性たち』（角川書店、一九六〇・一二）が挙げられ、「新刊ではないが、毎年着実に多くの人に読まれている」とある。昭和五一年はカトリック作家を積極的に支持するとした「日本カトリック広報委員会司牧計画」が出された年で、本書がベストセラーに入った三か月後の八月一五日には、前述の通り『私のイエス―日本人のための聖書入門』が紹介されている。

遠藤本人がカトリック新聞に掲載されるのは、一九七九年四月八日の芸術院賞受賞、一九九〇年一一月四日のキャンピオン賞受賞、一九九五年一一月一二日の文化勲章受章といった外部評価が確定した場合に限られているようだが、こうした作家仲間の信仰に遠藤が影響していることについて、三浦の場合であれば文化庁長官就任の際に「彼の信仰は遠藤周作の影響によるところが大きい」（一九八五・二・二四）とされ、文化功労者に選出された際には遠藤と共に活躍したことが報じられている（一九九九・一一・七）。矢代の場合は、矢代自身が代父となった経験を語った記事で自身の代父としての遠藤を追想し（一九八三・七・三）、矢代の帰天に際しては、「遠藤周作氏らの勧めもあり洗礼を受けた」（一九九八・一・一八）とある。また、加賀乙彦による矢代への弔辞が掲載されているが、遠藤を含めて交流してきたことをもって偲んでいる（一九九八・三・八）。遠藤が亡くなった際には、日本で「キリスト教を広めた」点を功績とし、遠藤を「宣教師」と称してもいるが[四九]、遠藤の帰天一周年を記念した対談「遠藤文学の宗教観を語る」では、加賀と矢代が対談者となり、三浦・加賀・矢代の三人が代父遠藤を囲む写真が掲載され、リード文には、「作家という立場で福音宣教の使命に生き、そして逝った遠藤さん」とある（一九九九・九・二八、同年一〇・二六）。作品だけでなく、結果として遠藤本人が布教に有用であったことを示すのが「代父」としての登場であろう[五〇]。一九七九年の広報総会基調講演でも武田は、布教における遠藤文学の有用性の実例として、自身だけでなく「三浦朱門、矢代静一、大原富枝、高橋たか子といった作家たちが、遠藤氏の文学と信仰、それを共存させている氏の人格にふれてカトリック者となった」ことを挙げている[五一]。

四九　「カトリック新聞」（一九九六・一〇・六、一三）など。

五〇　遠藤は、三浦朱門・矢代静一の受洗について「次々と友人が受洗するのを見て」（「波」一九七七・一）で回想している。『遠藤周作文学全集第一三巻』（新潮社、二〇〇〇・五）を参照。加賀乙彦『キリスト教への道』（みくに書房、一九八八・一一）には、加賀の受洗のきっかけの一つに遠藤の発言があったことが示されている（八〇頁）。

五一　武田友寿「文学は布教に役立つか？カトリック作家の現在（下）」（「カトリック新聞」一九七九・九・三〇）

なお、こうした直接的な人的交流を有する人々から、遠藤への賛辞が紙面に表れてくるのは、没後のことである。一九九六年九月二日の「ラジオ「心のともしび」一万回　女優河内桃子さんに聞く」、一九九七年四月一三日「ラジオ〈心のともしび〉」、二〇〇〇年二月三日「この人をしのぶ　歌に生き、愛に生きたオペラ歌手　東敦子さん」に確認できる。

三、一般信者の作品受容

遠藤に関するものは七件、読者投稿「声」に掲載されていた。生前に『銃と十字架』（中央公論社、一九七九・四）の感想が一件、一九九六年九月二九日に没してからは同年末までに五件、舞台「沈黙」が一九九八年に再演された際に一件である。

没年の一九九六年一二月一五日に掲載された一件を除き好意的な内容だが、『銃と十字架』刊行から約半年後に掲載された投稿「『銃と十字架』を読んで思うことは」（一九七九・九・一六）は、弱者の救いを描く『沈黙』は好きではないという読者からの投稿で、『銃と十字架』が描く強者の信仰心は一握りでいいから自身のものにしたいと願うほど尊く、それに照らして自分の信仰が「キリスト者的」であるか、改めて振り返るべきだと述べている。この投稿の約一ヶ月後には、第一章で採り上げた新聞記者からの応答（一九五九・一〇・二八）が掲載され、見出しには『銃と十字架』が掲げてあるが『沈黙』批判に終始した内容となっている。

没年以降の読者投稿では、六件中四件が『沈黙』に触れている。発表当時、通っていたカトリック系高校で『沈黙』に関する全体討議会が開かれたことがあり、『沈黙』が「カトリックを揺るがす」ほどの衝撃を与えていたことを示す回想もみえる（一九九六・一〇・一三）が、受洗のきっかけに『沈黙』があったことを打ち明ける投稿が二件（一九九六・一〇・一三、二七）、『深い河』に至る遠藤文学の思想を振り返り、改めて『沈黙』を読み返したいと述べるものが一件（一九九六・一〇・二七）となっている。最後に、一九九八年に追悼公演として、舞台「沈黙」が劇団昴とアメリカのミルウォーキー・レパートリー・シアターによって再演された際の観劇記（一九九八・七・一二）がある。投稿者は視覚障害者で、最前列での観劇機会を設けてくれた教会関係者への感謝と併せ、「作品の評価とかその神学などというような難しいテーマは、どなたかにお願いし、劇評もどなたかにお願いするものとして、当日の私の実感を述べてみたい」と断り、「棄教した男の「おれは弱い」という嘆き」に共感し、「「私はお前が苦しんでいるとき、お前の隣で共に苦しんでいた」という神のせりふ」が心に響いたと綴っている。

また、没年最初の読者投稿（一九九六・一〇・一三）では遠藤作品を「私の聖書」と喩え、イタリアからの投稿にも作品名はないが「受洗前から今日まで、彼の作品か

ら特に影響を受けたとは自覚していませんでしたが、あらためて回顧する今、故人がどれほどカトリックへの案内者となってくださったかを身にしみて感じます」とある（一九九六・一二・一）。

こうした投稿からは、一般信者が『沈黙』を始めとする遠藤作品を介して、信仰上の大きな影響を得ていたことが分かる。そして、『沈黙』に関する聖職者からの制限・注意が、一般信者にとってインパクトが強かったであろうことも確認される。

唯一否定的な声を寄せたのは、一九九六年一二月一五日の投稿で、「文化的様式のある一部を強調しすぎたあまり、遠藤さんが「キリスト教＝西洋」というイメージを日本社会に強く植えつけてしまったのも事実ではないでしょうか」と述べている。なお投稿者は、独自の見解ではなく、ひと月前に「展望」に掲載された稲垣良典「キリスト教と西洋」に賛同しての意見だとしている。だが、一九九六年一一月一〇日の稲垣寄稿に反応した読者の投稿としては、読み手の解釈が色濃いものとなっているように見える。「広報機関に関する教令」が公布される背景には、マス・メディアの発達とその大衆への影響力への配慮があるが[五二]、いずれの投稿も、活字メディアの受け止め方について「正しさ」を求める「広報機関に関する教令」が孕まざるを得ないジレンマを示しているともいえる。

さて、『沈黙』が刊行された一九六六年にカトリック新聞が『沈黙』に好意的な読者投稿を寄せていたことを、『カトリック生活』一九七二年四月号は一般信者を迷わすものとして強く批判していた。以降も同じような対応がなされたのかを確認すべく、『カトリック生活』における遠藤作品に関する記事も、一九七二年から文学館開館の二〇〇〇年までを対象に調査した。一九七二年に『沈黙』批判を展開したフェデリコ・バルバロは一九七三年三月号で編集長を辞しているが、一九九六年の逝去の折、平成八年五月号で特集「バルバロ神父を偲んで」が組まれ、「小生は、四十数年前初めてドン・ボスコ社でバルバロ神父の謦咳に接し、それ以後、師のもとで『カトリック生活』誌とともに歩いてきた」[五三]と偲ぶ司祭も確認できる。

管見の限りでは、一九七二年四月号の『沈黙』批判以降で遠藤作品を批判的に扱った記事は見当たらなかった。一九八六年五月号では、大友宗麟の四百年祭にあたる年に、偶然大会役員となった信者が、毎年一回開催される市の文化講演会講師として神父を仲介役に大分県津久見市に迎えることができたこと等を写真付きで紹介している。この投稿が遠藤を扱った最初の記事になり、同号には、『心の夜想曲』（文芸春秋、一九八六・二）の紹介もある。この他、遠藤作品は『死について考える』（光文社、一九

五二 『新風かおる教会』注三四に同じ、六五一～六五四頁、『コミュニケーションと進歩』注三五に同じ、七～九頁

五三 金子賢之介「バルバロ神父と過ごした日々」（『カトリック生活』一九九六・五）二七頁

八七・二）が一九八七年五月号、『聖書のなかの女性たち』（すえもりブックス、一九九九・一二）が平成一二年三月号で紹介され、遠藤作品ではない係わりのある三作の紹介文に遠藤の名が確認できる[五四]。

また、『カトリック生活』一九九七年一〇月号では、一周忌特集「追想　遠藤周作」が組まれ、カトリック新聞でも広告がうたれている（一九九七・九・七）。そのなかで、『沈黙』刊行当時、上智大学学生会館で開催された『沈黙』公聴会に参加した経験を持つ司祭は、第二ヴァティカン公会議の精神が遅れて日本の教会に入って来たこと、その代表的な公文書のひとつである現代世界憲章の宣言が日本の教会の言葉になるためには一九八七年まで待たねばならなかったと断りつつ[五五]、『沈黙』発表当時に起きたカトリック教界からの批判は、『深い河』発表の際には起きなかったと述べている[五六]。『カトリック生活』が、エッセイを中心としつつも遠藤作品の紹介を始めるのは一九八六年頃からで、その紹介文の隣には、講演で訪れた津久見にある教会で、信者に囲まれる遠藤の写真が掲載されている。

四、広告欄から

週一回全六面での刊行という点を考慮すれば、全体に占める広告の割合は大きいだろう。広告掲載された遠藤作品は、一九七六年四月一一日に『吾が顔を見る能はじ』（北洋社、一九七五・六）、同年七月一一日に著者のことば付きで『私のイエス』（祥伝社、一九七六・七）、一九八〇年五月二五日に『侍』（新潮社、一九八〇・四）、同年九月二一日に共著『かくれ切支丹』（角川書店、一九八〇・八）、一九八三年七月二四日に『私にとって神とは』（光文社、一九八三・六）、一九八八年二月二一日、三月六日に対談集『遠藤周作と語る―日本人とキリスト教』（女子パウロ会、一九八八・二）、

五四　「わたしの本棚　加賀乙彦『キリストへの道』」（『カトリック生活』一九八九・七）、天川月子「わたしの本棚　Ｇ・ネラン『おバカさんの自叙伝半分』」（『カトリック生活』一九九三・三）、「私の本棚　『遠藤周作と「樹座」の素敵な仲間たち』」（『カトリック生活』二〇〇七・三）

五五　『新装版日本キリスト教史第一一巻』（注四三に同じ）に、一九八七年京都で開かれた第一回全国福音宣教推進会議（ＮＩＣＥ）をもって、「第二ヴァティカン公会議の精神がようやく日本に上陸したという感じである」とある（四〇五頁）。また、オリビエ・シェガレは、一九八五年から一九九五年までのＮＩＣＥの運動は「社会を糾弾するよりも、すべての人々の悩み、苦しみに共感し、それを共有しようとする」もので、「現代世界憲章の姿勢」だと評価している（カトリック東京教区生涯養成委員会『講演集　第二バチカン公会議と私たちの歩む道』サンパウロ、一九九八・一　五〇頁）

五六　首藤正義「遠藤周作―『沈黙』と『深い河』の間」（『カトリック生活』一九九七・一〇）二頁

一九九一年一二月一日に対談集『人生の同伴者』（春秋社、一九八八・一一）、一九九七年九月二一日に『深い河』（講談社、一九九三・六）が掲載された。

大半が刊行に合わせた広告だが、『吾が顔を見る能はじ』・『深い河』は刊行から遅れてのものである。後者は、一周忌に併せて一九九七年八月に「三田文学」で公開された『『深い河』創作日記」や、前述した没後一周年追悼のために再上映された映画「深い河」に連動した広告であろう。なお、『侍』の広告は全三段で、『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』『キリストの誕生』も小さく併記されている。

また、遠藤文学の研究書については、武田友寿『遠藤周作の文学』（聖文舎、一九七五・九）が一九七五年一〇月五日を最初に五回、北森嘉蔵『遠藤周作論』（週刊カセット出版、出版年月不明）[五七]が一九八〇年九月七日を最初に二回、聖心女子大学キリスト教文化研究所編『③文学における神』（春秋社、一九八一・九）が一九八一年一一月一日を最初に広告としては一回、武田友寿『遠藤周作の世界―『沈黙』以後』（女子パウロ会、一九八五・六）が一九八五年六月二三日を最初に二回、上総英郎『遠藤周作論』（春秋社、一九八七・一一）が一九八七年一〇月四日を最初に二回あり、キリスト教関係者の著作広告に遠藤が言葉を寄せているものに、一九七六年七月一八日付広告Ⅰ・リバス著『日本人とのおつきあい』（コルベ出版社、一九七六・七）がある。なお、遠藤については触れていないが、一九九四年四月一七日の広告『世界日本キリスト教文学事典』（教文館、一九九四・三）には、「有名作家の重要な作品には「あらすじ」を付した。説教やお話のタネになる。教会、学校に必須」とある。事典には、『海と毒薬』（文芸春秋新社、一九五八・四）『沈黙』『侍』が特に詳しく解説されている[五八]。こうした広告からも、布教活動に文学作品を活かそうとしていたことが看取される。

さて、女子パウロ会による「トップレベルの女性教養誌」[五九]『あけぼの』の企画「遠藤周作連続対談」は、一九七九年二月号の開始から一九八一年一二月号の最終回までの全回が広告掲載された。また、一九八三年七月号から開始される対談「日本人の生活とキリスト教」も、最終回の一九八九年六月号までの全回が広告掲載されている。本稿調査対象期間における遠藤周作関連記事は総数三一一件でそのうち広告が一九七件、つまり全体の約三分の二を広告が占める。更には、広告のうち一二二件およそ六割が『あけぼの』からの出稿であった。『あけぼの』誌の連続対談の一部は、『遠藤周作と語る―日本人とキリスト教』（女子パウロ会、一九八八・二）、『対話の達人、遠藤周作』Ⅰ・Ⅱ（女子パウロ会、二〇〇六・一〇）に収録されたが、生前の刊行となる『遠藤周作と語る―日本人とキリスト教』の「まえがき」で、一九七〇年にローマ教

五七　残念ながら、現物を確認することができなかった。

五八　笠井秋生「遠藤周作」（遠藤祐、高柳俊一、山形和美他責任編集『世界日本キリスト教文学事典』教文館、一九九四・三所収）一一二～一一三頁

五九　「家庭に生かそうカトリック月刊誌」（「カトリック新聞」一九八〇・五・四）

皇拝謁の折に賜った「異教徒の方と心から対話をしてください」という言葉について、「カトリックにあらざる人々、信者でない人、他の宗教の人、他の世界の人――そういう人と話し合うのを前教皇様は私に希望されたのだ」と解釈しているとし、この対談で試みたのは「この他者の理解であった」と述べている[六〇]。約一〇年続いた対談の最終回で、矢代静一がこの対談を通して洗礼を受けた例を知っていること、「君の文学作品と同じくらい、質のいい仕事だとぼくは思ってる」と語っているが、遠藤は洗礼を受けた例があったとすれば共同作業をしてくれた担当シスターのお蔭だと返答している[六一]。活字メディアのみを通してキリスト教を伝え広める際の聖職者と小説家の役割分担がうまく機能していたか、先述した小説家としての本分を弁えての応答だろう。

また、これほどの量の広告をカトリック新聞に出す経緯が垣間見られる回想も矢代との最終回対談にある。この対談の話が遠藤のもとに舞い込んだ時分は、まだ『沈黙』がカトリックの出版物で批判されていた最中であった、そうしたなかの依頼だったからこそ依頼者の心に打たれて引き受けたのだと[六二]。対談記録からは、『侍』（新潮社、一九八〇・四）の数か月前となる対談開始の一九七九年頃に『沈黙』が批判されていたと述懐しているように読めるが、判然としない書き方となってはいる。とはいえ、いずれにせよ『あけぼの』での連続対談がなされている最中、未だカトリックのなかで自作は批判されているというのが遠藤の認識だったのだろう[六三]。だとすれば、カトリック新聞に、これほどの量の広告をうってもらえることは心強く、読者にも強いインパクトを与えたことであろう。

とはいえ、広告掲載されたすべての雑誌の遠藤に関する記事や論文が、好意的なものばかりだったかどうかは未調査である。前節の対象範囲となるが、例えば一九七一年五月三一日、六月七日広告掲載の中野記偉「G・グリーンと日本の作家たち（二）―遠藤周作の場合」（『世紀』一九七〇・六）、同年六月二七日広告掲載の中野記偉「沈黙へのアプロウチ」（『世紀』一九七一・七）は、『沈黙』の踏み絵の場面で聞こえくる「声」を「幻聴」だとするもので、遠藤研究者からの疑問も呈されたものだ。この二論文については、『世紀』一九七一年六月号で「沈黙の謎―一司祭の妻帯」を発表し論戦を交わした、兼子盾夫『遠藤周作による象徴と隠喩と否定の道―対比文学の方法』（キリスト教新聞社、二〇一八・一〇）に詳しい（三九～四三頁）。遠藤作品は、第二ヴァティカン公会議の精神に即しているものの、日本のカトリック教会にその精神が

六〇 「まえがき」（『遠藤周作と語る―日本人とキリスト教』女子パウロ会、一九八八・二）四～五頁

六一 『対話の達人、遠藤周作Ⅱ』注三二に同じ、三四一～三四二頁

六二 『対話の達人、遠藤周作Ⅱ』注三二に同じ、三四二～三四三頁

六三 例えば、『沈黙』執筆前、切支丹時代について教えを請うたH・チースリック神父は、『キリシタン史考』（聖母の騎士社、一九九五・二）で『沈黙』批判をしている。

入ってくるのが遅かったため非難されたと言われている。上智大学中世思想研究所監修『新装版　日本キリスト教史第一巻』（講談社、一九九一・八）によれば、「第二ヴァティカン公会議の精神がようやく日本に上陸したという感じ」がしたのは、一九八七年だったという（四〇五頁）。特に、この年代以前の広告掲載タイトルについては、今後、内容を精査したうえで検討していきたい。

五、まとめ

第二ヴァティカン公会議の「広報機関に関する教令」に則して実施された一九七九年の広報総会討議を中心に、文学作品が布教に活用されるなか、遠藤作品がカトリック新聞でどのように語られてきたのかをまとめてきた。

遠藤は、『沈黙』執筆の契機となる一九六二年に受けた三度目の肺手術前に沸き上がった思いを綴った「初心忘るべからず」（『群像』一九六二・七）のなかで、「私が小説を書くたびに私の作品をもっとも非難したのは日本のカトリック新聞だった」と述べている[六四]。当時は男子パウロ会によって編集発行されていたが、唯一の全国紙であるカトリック新聞が司教団の責任のもと、「日本の教会の機関紙としての性格をはっきりさせ、司牧・啓蒙を主目的とする意向」で紙面作りをするのは一九七〇年から一九八〇年に入ってからのことであるという[六五]。一九六二年以前の主要作品は、『白い人・黄色い人』（講談社、一九五五・一二）、『海と毒薬』（文芸春秋新社、一九五八・四）である。遠藤作品とカトリック新聞という媒体との関係性については、前号掲載分併せ、今後、精査を深めたい。第一章に取り上げた、没後、聖職者が遠藤に触れたコラム「地の塩」（一九九七・四・一三）では、聖書の言葉を、「魂の深層に響き、その存在を揺るがすような新しい言葉」で伝えるための模索のなかで、遠藤を初めとする「「巷間の説教者」ともいうべき作家」の多くがカトリックであることに触れている。

次は第二節対象期間の記事一覧である。記載要領は第一節と同じである。

カトリック新聞（一九七五年一月～二〇〇〇年一二月）遠藤周作関連記事一覧

一九七五年　四月一三日　文学の広場（六）掘り起こした新しい芽「キリスト教文学」という呼称／（武田友寿）

六月　一日　遠藤周作「黄金の国」札幌藤学園で巡演

六四　「初心忘るべからず」（『群像』一九六二・七）、引用は『遠藤周作文学全集第一二巻』（新潮社、二〇〇〇・四）二八四頁に拠った。

六五　『新装版キリスト教史第一一巻』注四三に同じ、三九〇頁

六月　八日　遠藤氏の「黄金の国」長崎にも巡演する
一〇月　五日　（広告）武田友寿『遠藤周作の文学』聖文舎
一〇月一二日　（広告）武田友寿『遠藤周作の文学』
連載随筆「私の中の聖書」（三五）／（曽野綾子）
一一月　二日　（広告）武田友寿『遠藤周作の文学』
一一月三〇日　文学の広場（一一）キリシタン小説の条件「沈黙」と比べ「みじかい命」／（武田友寿）
「祈りある生活」と「高山右近」を放映　ＮＨＫが総合テレビで

一九七六年　三月　七日　（広告）遠藤周作『吾が顔を見る能はじ』北洋社
四月一一日　カトリック・ベストセラー、この一年　やはり聖書はナンバーワン
五月二三日　（広告）遠藤周作『私のイエス』祥伝社（※著者のことば）
七月一一日　文学の広場（一三）日本のカトリシヤン　井上神父のキリスト教受容／（武田友寿）
七月一八日　（広告）Ｉ・リバス『日本人とのおつきあい』コルベ出版社（※遠藤評）
八月一五日　図書紹介／遠藤周作著　私のイエス　日本人のための聖書入門
（広告）『季刊創造』創刊号
八月二九日　（広告）『季刊創造』創刊号（「創刊によせて」）
一一月二一日　（広告）『キリスト教文学の世界』全二二巻　主婦の友社（※編集委員）

一九七七年　三月　六日　（広告）『キリスト教文学の世界』（※遠藤による第一巻解説文の抜粋）
四月一七日　（広告）『キリスト教文学の世界』
四月二四日　図書紹介／キリスト教文学の世界Ｉ　Ｊ・グリーン／ジッド　解説遠藤周作
五月一五日　（広告）『キリスト教文学の世界』
六月　五日　（広告）『季刊創造』第四号（遠藤周作・宮本顕治　対談「自由をめぐって」）
六月一九日　（広告）『キリスト教文学の世界』
七月一〇日　（広告）『矢代静一対談集』聖文舎
七月三一日　（広告）『矢代静一対談集』
八月二一日　（広告）『椎名麟三信仰著作集』全一三巻　教文館（「編集の

ことば」）
椎名麟三信仰著作集　文学の福音の芽蒔く　エッセーにみるその個性と信仰／（佐古純一郎）
一一月一三日　（広告）『あけぼの』一二月号（遠藤周作・今道友信　対談「日本人とキリスト教」）
一二月　四日　文芸時評／キリスト教と文学雑感／（佐々木孝）
一二月一一日　遠藤周作対談集『日本人はキリスト教を信じられるか』を読んで　特殊化論でなく普遍的発展を／（福島祥紘）
一二月一八日　（広告）『キリスト教文学の世界』
一九七八年　一月一五日　文芸時評／一九七七年文学回顧／（上総英郎）
六月一一日　文芸時評／キリスト教文学の現在―「季刊創造」終刊と関連して―／（武田友寿）
九月一七日　（広告）『家庭の友』一〇月号（遠藤周作・井上洋治「神につかまった人間ども」）
九月二四日　イタリアの遠藤周作　日本人のキリスト教観話題
一〇月　八日　文芸時評／文学の中の宗教性　救い求める魂のあえぎ表出／（上総英郎）
一九七九年　一月二一日　（広告）『あけぼの』二月号（遠藤周作連続対談①）
（広告）『家庭の友』二月号（「ある女（2）怒った女」）
二月一一日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
三月一一日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
四月　一日　（広告）『キリスト教文学の世界』
四月　八日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）一筋の道輝く芸術院賞遠藤・江藤両氏が受賞　同年代に生きるカトリックの二人
四月二九日　（広告）井上洋治『私の中のキリスト』主婦の友社
五月二〇日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
（広告）健全映画観賞会（『沈黙』改訂版）
六月一〇日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月　八日　“カトリック文学と布教“武田氏が基調講演　積極性示し理解深める　広報総会
（広告）『あけぼの』八月号（対談）
八月一二日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
遠藤周作『口笛を吹く時』英訳出版
九月一六日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
声／『銃と十字架』を読んで思うことは／水戸・須藤永子

文学は布教に役立つか？―カトリック作家の現在―広報
総会講演要旨　上／（武田友寿）
九月二三日　文学は布教に役立つか？―カトリック作家の現在―広報
総会講演要旨　中／（武田友寿）
九月三〇日　文学は布教に役立つか？―カトリック作家の現在―広報
総会講演要旨　下／（武田友寿）
一〇月一四日（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
（広告）『世紀』一一月号（「私にとっての神（二）」）
一〇月二八日　教会の現実に問う『銃と十字架』遠藤周作著／（徳岡孝夫）
一一月一一日（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月　九日（広告）『あけぼの』一月号（対談）

一九八〇年
一月二〇日（広告）『あけぼの』二月号（対談）
二月一〇日（広告）『あけぼの』三月号（対談）
三月　九日（広告）『あけぼの』四月号（対談）
三月三〇日　カトリック作家に語らせた信仰の“奥深さ”と“内面性”／（徳岡孝夫）
「パウロ遠藤周作」／（岩間辰弥）
四月一三日（広告）『あけぼの』五月号（対談）
五月　四日　家庭に生かそうカトリック月刊誌　あけぼの
五月一八日（広告）『あけぼの』六月号（対談）
五月二五日（広告）遠藤周作『侍』新潮社
ＹＢＵテレビラジオ番組ガイド六月（ラジオ「太陽のほほえみ」）
六月　八日（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月一三日（広告）『あけぼの』八月号（対談）
七月二〇日　『沈黙』からの道　『侍』・遠藤文学の開花と結実／（武田友寿）
八月一〇日（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月　七日（広告）北森嘉蔵『遠藤周作論』週刊カセット出版
九月一四日（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
九月二一日（広告）文-遠藤周作　写真-アイリーン美緒子スミス『かくれ切支丹』角川書店
図書紹介／『余白の旅』井上洋治著
一〇月一二日（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
将軍〟ＳＨＯＧＵＮ〟とイエズス会　キリシタン殉教史

の理解がなければ迷惑　カトリック記者奮戦記

一〇月二六日　ＹＢＵテレビラジオ番組ガイド一一月（ラジオ「心のともしび」）

一一月　九日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）

一二月一四日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）

一九八一年　一月一八日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）

二月　八日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）

三月　八日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）

四月一二日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）

五月一〇日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）

六月一四日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）

七月　五日　（広告）北森嘉蔵『遠藤周作論』

七月一二日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）

八月　九日　（広告）『あけぼの』九月号（編集部「遠藤周作取材旅行〔朝日新聞連載女の一生〕に同行して」、対談）

九月一三日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）

一〇月一一日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）

一一月　一日　（広告）聖心女子大学キリスト教文化研究所編『③文学における神』春秋社（「わたくしと小説」）

一一月　八日　（広告）『あけぼの』一二月号（遠藤周作連続対談最終回）

一一月一五日　図書紹介／『文学における神』聖心女子大学キリスト教文化研究所編

一二月一三日　新芸術院会員に　遠藤周作、島尾敏雄氏ら

（広告）『あけぼの』一月号（三浦朱門連続対談①）

一九八二年　四月一一日　（広告）『あけぼの』五月号（遠藤周作・泉秀樹・加藤宗哉「平均的日本人から見たキリスト教への疑問・質問」）

八月　八日　書評／戸田義雄編『日本カトリシズムと文学　井上洋治　遠藤周作　高橋たか子』／（村松定孝）

九月二六日　ＹＢＵテレビラジオ番組ガイド一〇月（ラジオ「心のともしび」）

一〇月二四日　ＹＢＵテレビラジオ番組ガイド一一月（ラジオ「心のともしび」）

一一月二一日　書評紹介／『自分をどう愛するか』〈生活編〉　遠藤周作著

一九八三年　二月一三日　（広告）『あけぼの』三月号（インタビュー遠藤周作）

二月二〇日　書評紹介／倫理観の問題を鋭く分析　武田友寿著『内村鑑

三・青春の像』／（井上洋治）
六月一二日　（広告）『あけぼの』七月号（対談日本人の生活とキリスト教①）
七月　三日　くらしの中から二四／そろって受洗／（矢代静一）
七月一〇日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
七月一七日　（広告）泉秀樹　加藤宗哉『率直にきこう　あなたはなぜ神など信ずるか』女子パウロ会
七月二四日　（広告）遠藤周作『私にとって神とは』光文社
八月一四日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月一一日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
一〇月　九日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一一月一三日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月一一日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）
一九八四年　一月一五日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
二月一二日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
二月二六日　図書／『率直にきこう　あなたはなぜ神なぞ信ずるか』ききて　泉秀樹・加藤宗哉
三月一一日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
四月　八日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）
五月二〇日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
六月一〇日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月　八日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
八月一二日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月　九日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
九月三〇日　（広告）西川孟『日本キリシタン史写真集　殉教』主婦の友社（「日本切支丹と殉教」）
一〇月一四日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一一月一一日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月　二日　（広告）森一弘『神父が答える身上相談』女子パウロ会
一二月　九日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）
一九八五年　一月二〇日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
二月一〇日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
二月二四日　三浦朱門氏が文化庁長官に
三月一〇日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
四月一四日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）

五月一九日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
六月　九日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
六月二三日　（広告）武田友寿『『沈黙』以後　遠藤周作の世界』女子パウロ会
七月　七日　（広告）武田友寿『『沈黙』以後』
七月一四日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
八月一一日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月　八日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
一〇月一三日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一一月一〇日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月　八日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）

一九八六年

一月一九日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
二月　九日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
三月　九日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
四月一三日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）
（広告）聖母の騎士『BOOKS遠藤周作『スキャンダル』』五月号
五月一八日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
書評／遠藤周作著「あなたの中の秘密のあなた」
六月　八日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月　六日　（広告）『愛の道　有島暁子の生涯』みくに書房
七月一三日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
七月二七日　（広告）『愛の道　有島暁子の生涯』
八月一〇日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月一四日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
一〇月　五日　（広告）真和会 第一四五回月例懇話会（テーマ：心あたたかき病院を願う　講師：遠藤周作）
一〇月一二日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一一月　九日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談
日本人の生活とキリスト教最終回）
一二月　七日　第1回「宗教と文学」国際会議に出席して〈上〉／（武田友寿）
一二月一四日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）
第1回「宗教と文学」国際会議に出席して〈下〉／（武田友寿）

一九八七年　一月一八日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
一月二五日　ＮＨＫテレビから一月二六日（月）、二七日（火）「医者と患者の間」　遠藤周作と家庭医を考える
二月　八日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
三月　八日　（広告）『あけぼの』　四月号（対談）
四月一二日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）
五月一七日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
六月一四日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月一二日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
八月　二日　国内短信／外海町に文学碑
八月　九日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）
九月一三日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
一〇月　四日　（広告）上総英郎『遠藤周作論』
一〇月一一日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一〇月一八日　（広告）健全映画鑑賞会（「海と毒薬」）
一一月　八日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月　六日　（広告）上総英郎『遠藤周作論』春秋社
一二月一三日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）
一九八八年　一月一七日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
一月三一日　（広告）女子パウロ会（『遠藤周作と語る』・『「沈黙」以後』）
二月一四日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
二月二一日　（広告）女子パウロ会（『遠藤周作と語る』・『「沈黙」以後』）
三月　六日　（広告）『遠藤周作と語る』
三月一三日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
四月　三日　国内短信／「沈黙」碑に青ペンキ
四月一〇日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）
五月　八日　（広告）『あけぼの』六月号（対談）
六月　五日　（広告）武田友寿『遠藤周作の文学』
日本キリスト教文学会第一七回全国大会　長崎に一一六人が集う
六月一二日　（広告）『あけぼの』七月号（対談）
七月一〇日　（広告）『あけぼの』八月号（対談）
七月一七日　（広告）女子パウロ会（『遠藤周作と語る』・『「沈黙」以後』）
八月　七日　（広告）武田友寿『遠藤周作の文学』
八月一四日　（広告）『あけぼの』九月号（対談）

九月一一日　（広告）『あけぼの』一〇月号（対談）
一〇月　九日　（広告）『あけぼの』一一月号（対談）
一一月一三日　（広告）『あけぼの』一二月号（対談）
一二月一一日　（広告）『あけぼの』一月号（対談）
一九八九年　一月一五日　（広告）『あけぼの』二月号（対談）
二月一二日　（広告）『あけぼの』三月号（対談）
二月一九日　（広告）『世紀』三月号（「孤狸庵先生の天使たち　第一回」武田友寿）
三月一二日　（広告）『あけぼの』四月号（対談）
三月一九日　（広告）『世紀』四月号（「狐狸庵先生の天使たち（第二回）」武田友寿）
四月一六日　（広告）『あけぼの』五月号（対談）
五月二一日　（広告）『あけぼの』六月号（対談最終回）
六月二五日　キリスト教文学の核心―上から差す神の光―／（金兒伸欣）
一〇月二九日　告知板／南山大学創立四〇周年記念講演会（テーマ：わたしの考え方講師：遠藤周作）
一九九〇年　四月二九日　読者レポート／『写真集』の出版記念パーティ（※ミカエル神父『聖書の世界―イエズスの道』）
八月一九日　書評／西欧文化の理解に　三雲昴著『四等船客の文化論　ある物理学者の見た「東」と「西」』／（飯山敏道）
一一月　四日　遠藤周作氏に「キャンピオン賞」10月11日、上智会館でグリーン追悼／（ピーター・ミルワード）
一九九一年　六月　二日　（広告）『あけぼの』一二月号（阿刀田高・遠藤周作　対談「クリスマス―心に神がささやく日」）
一一月一〇日
一二月　一日　（広告）『人生の同伴者』春秋社
一二月　八日　好評！ド・ロ神父人形劇　一〇年で公演六〇回に　長崎外海町劇団「わらべ」
一九九二年　二月二三日　書評／遠藤周作　聞き手佐藤泰正『人生の同伴者』／（上総英郎）
六月一四日　遠藤周作「黄金の国」「くるま座」が公演
六月二一日　新刊紹介／『ひとりを愛し続ける本』（※書誌のみ）
八月　九日　（広告）『あけぼの』九月号（遠藤周作・三浦朱門・奥川幸子　座談会「在宅看護と家族」）
一〇月一八日　国際会議　東西文明の出合い 1492―1992 年／（ピーター・ミルワード）

一九九三年　一月一七日　新刊紹介／『愛されるより愛することを　アシジの聖フランシスコ』（※書誌のみ）
四月二五日　（広告）劇団くるま座　第一〇回記念公演（※劇団紹介のなかで）
八月二九日　新刊紹介／『キリスト教ハンドブック』（※書誌のみ）
一〇月　三日　明治以来のキリスト教の流れと文学② 現代文学とキリスト教／（佐古純一郎）
一九九四年　一月一六日　（広告）『あけぼの』二月号（村松禎三・木崎さと子「オペラ「沈黙」の世界」）
三月二〇日　設立四〇周年の記念出版　カトリック点字図書館（※『逆さま流”人間学』）
九月一一日　書評／写真集『使徒パウロの旅』ミカエル・モイズィキエヴィチ著／（遠藤周作）
九月二五日　告知板／風編集室の講座・東京（「遠藤文学とキリスト教―『深い河』を読む」講師：山根道公）
一九九五年　六月　四日　映評／深い河／（奴田原智明）
九月二四日　告知板／風編集室講座受講生募集・東京（「遠藤文学とキリスト教―『沈黙』を読む」）
一〇月一五日　遠藤周作氏の話題作「沈黙」日米演劇人が公演　10月25日―11月12日　東京・三百人劇場
一一月一二日　遠藤周作氏に文化勲章
遠藤文学の日本における宗教的意義／（井上洋治）
一一月一九日　各地からの便り／大籠キリシタン殉教公演完成
一二月一七日　告知板／上智大学東洋宗教研究所続講演会「文学と宗教」・東京（「遠藤周作『深い河』」講師：横山紘一）
一九九六年　四月一四日　告知板／講座・東京（「遠藤文学とキリスト教―『死海のほとり』を読む」講師：山根道公）
五月一二日　（広告）季刊誌『風』一九九六年春号（※遠藤講座のお知らせ）
九月二二日　ラジオ「心のともしび」一万回　女優河内桃子さんに聞く
一〇月　六日　遠藤周作さん帰天 カトリック作家として貢献遠藤周作さんをしのぶ／（※白柳誠井上洋治、ジョルジュ・ネラン、ピーター・ミルワード）
地の塩／（P）
展望／遠藤周作氏の死を悼む／（山本襄治）

一〇月一三日　声／遠藤周作文学に支えられて／（原木初美）
遠藤周作さん安らかに　友人の井上洋治神父らの司式で葬儀ミサ　弔問者　故人を語る
イエスのまなざしで（井上神父の説教要旨）
信徒の作家として生きた遠藤周作さん／（ピーター・ミルワード談）
一〇月二〇日　地の塩／（Ｉ）
一〇月二七日　声／遠藤氏に学ぶ信仰の在り方／（永井紗織）
声／人生を変えた遠藤氏の作品／（島村真理）
一一月　三日（広告）『聖母の騎士』一二月号（池田和正「長崎愛した遠藤周作さん」）
一一月一〇日　展望／キリスト教と西洋／（稲垣良典）
一一月一七日　「遠藤周作」貸し出し中　上智・聖三木文庫
一一月二四日　一二月八日まで　遠藤周作さんの愛した長崎で　全国初の特別展
一二月　一日（広告）『聖母の騎士』一月号（三浦朱門「遠藤周作の信仰」）
声／遠藤周作氏を思う死者の月／在・イタリア（匿名）
各地からの便り／東京　慶応ＯＢ集まり周作さん追悼
一二月　八日　今週の番組／テレビ〈心のともしび〉遠藤周作さんの思い出　出演三浦朱門
一二月一五日　声／遠藤周作さんが残したもの／（堀井泰明）
ＹＢＵテレビ「心のともしび」（※再放送案内）
一二月二二日　ＹＢＵテレビ「心のともしび」（※再放送案内）
一九九七年　二月　二日（広告）『あけぼの』三月号（木崎さと子・遠藤順子「カトリック作家遠藤周作を想う」）
三月　九日（広告）『福音宣教』四月号（上総英郎「遠藤周作のヒロインたち」）
四月一三日　地の塩／（Ｆ）（※『深い河』）
ラジオ〈心のともしび〉（※井手雄太郎出演時の遠藤への感謝を紹介）
四月二〇日　告知板／東京・風編集室講座（「「遠藤文学とキリスト教―『死海のほとり』を読む」講師：山根道公）
五月　四日（広告）『あけぼの』六月号（遠藤龍之介「免疫性とタブー」）
六月　一日　告知板／東京・講演会　立川教会国立集会所（「「遠藤文学とキリスト教をつなぐもの―聖なる世界と最もイヤな自分」

講師：山根道公）
六月　八日　遠藤周作・追悼公演　劇団「くるま座」上演　場所求む
七月一三日　（広告）『福音宣教』九月号（上総英郎「遠藤周作のヒロインたち２」）
八月三一日　映評／愛する／（晴佐久昌英）
九月　七日　（広告）『カトリック生活』一〇月号（※特集遠藤周作追想）
九月一四日　扉を開けて―元気さん／遠藤順子さん
映評／アジアの瞳／（晴佐久昌英）九月二一日　遠藤周作さん帰天一周年で　「深い河」全国で上映　九月二四―一〇月三一日　遠藤周作作品読書期間　上智大・聖三木図書館（広告）追悼上映会映画「深い河」
九月二八日　遠藤周作帰天一周年追悼　遠藤文学の宗教観を語る　対談／（加賀乙彦・矢代静一）
一〇月二六日　遠藤周作帰天一周年追悼　カトリックと文学の接点を語る対談／（加賀乙彦・矢代静一）
一一月　二日　扉を開けて―元気さん／Ｇ・ネラン神父
一二月　七日　（広告）『家庭の友』一月号（兼子盾夫「訪ね合う心・見つめ合う心『深い河』とは何か」）
告知板／東京・遠藤周作さん追悼「深い河」特別上映会
（広告）『家庭の友』二月号（兼子盾夫「『深い河』とは何か（後編）」）

一九九八年
一月　四日　カトリック劇作家の矢代静一さん帰天
一月一八日　（広告）『福音宣教』四月号（上総英郎「遠藤周作のヒロインたち四」）
三月　八日　この人をしのぶ／劇作家の矢代静一さん―キリスト教の魅力伝える
図書紹介／『遠藤周作―その文学世界』山形和美編
告知板／北海道　えんどうの会定例会「遠藤周作の読書会」
三月二二日　（広告）『あけぼの』五月号（遠藤順子・野中ともよ・杉山恒太郎　座談会「母なるものとは何か」）
四月　五日　東京・世田谷文学館遠藤周作展四月二五日―六月七日
四月二六日　今週の番組／テレビ〈心のともしび〉夫・遠藤周作を語る／出演　遠藤順子
五月一七日　演劇紹介／『沈黙』（英語版）
六月　七日　（広告）『聖母の騎士』八月号（小崎登明『『沈黙』の舞台
七月　五日

となった村に両親を葬って祈った感激」）
七月一二日　声／劇団昴「沈黙」を「感劇」して」／（高木伸雄）
一一月　一日　（広告）『あけぼの』一二月号（遠藤順子「キリストの誕生に思う」）

一九九九年　一月二四日　告知板／神奈川・映画上映「アジアの瞳」「沈黙」「国東物語」「青銅の基督」
三月一四日　告知板／東京・キリスト伝道劇団第九二回公演・遠藤周作「薔薇の館」
五月　二日　（広告）『風』四九号（山根道公「遠藤周作―夕暮の眼差し」、遠藤文学講座）
図書紹介／『我等なぜキリスト教徒となりし乎』（安岡章太郎・井上洋治共著）
六月一三日　少年時代から晩年まで　劇作家矢代静一特別展　長野・軽井沢
六月二七日　告知板／東京・第二四回ＩＡＰＲ年次大会講演＆パネルディスカッション「21世紀における良心の諸問題」（※講師順子）
七月　四日　（広告）『あけぼの』八月号（遠藤順子・新井満・高祖敏明鼎談「次の世紀、固有文化に求められることは何か」）
七月二五日　プラズマ（※遠藤文学館）
九月　五日　（広告）『あけぼの』一〇月号（遠藤龍之介「見せかけの危機と本当の危機」）
一一月　七日　文化功労者に　三浦朱門さん
一一月二一日　告知板／東京　聖母女子短期大学同窓会主催セミナー「夫遠藤周作の看護を通して思うこと」（※講師順子）
一二月　五日　（広告）『あけぼの』一月号（竹下景子・遠藤順子　対談「今、夫婦・家族がかかえている宿題」）
一二月一九日　カトリック作家遠藤周作・順子夫妻の愛と勇気を描く　順子さん執筆の『夫の宿題』がテレビドラマに
（広告）ＴＢＳ・ＭＢＳ『夫の宿題』

二〇〇〇年　一月　二日　（広告）『聖母の騎士』二月号（遠藤順子「文学館の開館」）
一月三〇日　図書紹介／『聖母のなかの女性たち』遠藤周作著
二月一三日　この人をしのぶ／歌に生き、愛に生きたオペラ歌手　東敦子さん／（大岩一美談）
二月二〇日　告知板／東京21世紀キリスト教社会福祉実践会議主催・

講演とシンポジウム「今なぜキリスト教社会福祉なのか」
（※パネリスト順子）

三月一九日　教派を超えて福祉関係者が連帯第二回21世紀キリスト教社会福祉実践会議
「遠藤周作文学館」落成記念行事
追悼ミサ講演　五月に長崎で開催

五月一四日　書評・図書紹介／『神父ド・ロの冒険』今なお息づく熱い塊　森禮子著

五月二八日　『沈黙』の舞台・外海町に　遠藤周作文学館落成「日本で育ったキリスト教の発信基地に」

七月　二日　（広告）『あけぼの』八月号（遠藤純子・井上洋治　対談「新しい世紀の信仰のために」）

第四章　遠藤作品の受容

第四章第三節　長崎新聞――昭和編

〇、はじめに

「長崎新聞」における遠藤周作関連記事を調査することで、長崎での遠藤周作の動向や、遠藤作品の取り扱われ方の一端を明らかにすることを試みたものである[六六]。今回は、遠藤が三浦朱門や井上洋治とともに『沈黙』（新潮社、一九六六・三）取材のために二度目の来崎をし、その後数度にわたって意識して長崎をまわったとされる一九六五年を初めとし[六七]、一九八九年一月七日までを調査した。地元紙における調査に着手した理由は、プライバシー等様々な理由から一般公開まで時間がかかる一次資料以外で信用のおける資料から、先行する長崎にまつわるテクストを経由せずに、文学館の建つ長崎と遠藤が直接的に交わる系譜を追うための基礎資料を整えていければと考えたからである。新聞は比較的アクセスが容易で信用のおける資料だとはいえ、今後の研究に資する有効な情報が得られる予感もないなかで調査に着手したのだが、いくつか興味深い記事に接することができた。

調査の結果、『沈黙』や「女の一生一部」（「朝日新聞」一九八〇・一一・一～一九八一・七・一）「女の一生二部」（「朝日新聞」一九八一・七・三～一九八二・二・七）といった作品取材に関する情報ではないものの、長崎へ足を運んだ記録が確認できたことは、遠藤の長崎来訪記録を整えていく手がかりとなると考える。また、長崎において一般市民が遠藤作品をどのように受け止めていたのかという輪郭を、ぼんやりとでも捉えることができればという無謀な腹案もあった。この点に関しては、長崎・佐世保を対象とした書籍売り上げのベストテン、長崎県や長崎新聞社主催で実施された読書感想文コンクール、遠藤作品の上演や上映などから、若干ではあるが窺い知ることができる。

以降、簡単ではあるが紙面調査から判明した遠藤の長崎来訪記録と、長崎における遠藤作品受容の一端をまとめる。なお、根拠とした紙面については記事一覧に本稿本文で示した通し番号を付す。

六六　本調査は、長崎市遠藤周作文学館在職中の二〇一一年、第七回企画展「遠藤周作と長崎――心の鍵が合う街」（二〇一二年五月～二〇一四年五月）の作成のために着手したものであり、記事一覧のうち①②③⑮、「長崎のキリシタン　遺跡の保存訴える　旅二月号（九州特集）から」（一九六七年一月二九日（二八日夕））は、同展図録（長崎市遠藤周作文学館、二〇一二・五）に活かした。

六七　『沈黙』の原動力となった十六番館の踏み絵を見たであろう初めての長崎訪問は、下野孝文氏の指摘により、鹿児島近代文学館が所蔵する、遠藤が長崎で投函した梅崎春生宛葉書（消印：一九五九年四月一〇日）から凡その来崎日時が確定されている

一、長崎来訪記録

紙面からの情報のみでは凡そが推定されるところまでだが、今回の調査で判明した来崎は、①一九六六年六月一～三日頃②一九六六年一一月初旬～中旬頃③一九七一年四月一三～一四日頃④一九七二年五月三～四日頃⑤一九七八年一一月六日頃⑥一九八六年一〇月二一日頃⑦一九八七年一一月二二日前後の七回である。

①は、一九六六年六月一日、長崎市公会堂で催された劇団雲による「黄金の国」（『文芸』一九六六・五）公演によるもので、併せて三日には、長崎放送の婦人ニュース（テレビ）に出演し長崎の町や女性について語ったようだ[六八]。それから約半年後となる②では、タナカヤ主催の文化講演会で「聖書にみる愛情」について語る。講演日時の記載はないものの、「黄金の国」長崎公演に関する記事に『沈黙』（新潮社、一九六六・三）が触れられていないのに対し、谷崎賞受賞後となる一九六六年一一月段階の記事では、『沈黙』の遠藤周作と冠されていながら講演では『沈黙』に直接は触れていないことも興味深い。なお、婦人ニュース出演時に「五度目」、タナカヤ主催文化講演会で「六度目」の来崎と答えているところから、おそらく一九六五年に初めて長崎に旅行し、十六番館（当時）で踏み絵を見て以降、四回長崎を訪れていたと推測される。

田中澄江らと長崎キリシタンを特集した『旅』（一九六七・二）、『切支丹の里』（人文書院、一九七一・一）『母なるもの』（新潮社、一九七一・五）などに絡んで、その後も継続して来崎を重ねたであろうが、紙面では五年後となる一九七一年の③が次となる。③では、一九七一年四月一三日午後七時過ぎから長崎市浜町にあったタナカヤ・ホールで『切支丹の里』『黄金の国・薔薇の館』（新潮社、一九六九・九）のサイン会、一四日には、長崎市公会堂で再演された「薔薇の館」（『文学界』一九六九・一〇）で舞台挨拶、長崎新聞のインタビューを定宿であったグランドホテルで受ける。翌一九七二年は、長崎出身の女子大学院生を主人公とした新聞連載「ピエロの歌」に取り組むが、④では「狐狸庵閑話」（「夕刊フジ」一九七二・一・一八～五・一三）でペアを組む画家清水崑の「長崎の春夏を遊ぶかっぱ展」が開催されるのに併せて来崎する。五月三日、レストラン銀嶺でタナカヤ主催の座談会に清水とともに出席し、四日朝帰京する。

⑤は、一九七八年一一月三日、県勤労福祉会館で開かれた小学館文化講演会で、山本健吉ともに講演し、長崎のキリシタン史跡の保存を訴えた。続く⑥一九八六年一〇月二一日は、長崎県主催の長崎文化を考えるフォーラム「異彩の長崎文化、その継承

六八　二〇一一年、記録映像の有無について長崎放送に問い合わせたところ、「当時は撮影用のテープが高価で何度も上から撮り直して使用していたため、映像は残っていない」という回答を頂戴した。

と創造」で、討論会講師の山本、三浦朱門、井上洋治らとともに来崎する。討論会は、遠藤の没後、「長崎市にお墓を」と順子夫人に願い出た高田勇長崎県知事が山本との交流をとおして抱いた「長崎独自の文化を見直し、新しい地域文化を築こう」という提言に沿って行われ[六九]、遠藤は③④⑤⑥と、一九六七年に『旅』で主張したキリシタン史跡保存の大切さが採り上げられている。今回の調査期間の最後となる一九八七年一一月二二日⑦は、とら寿し店主大竹豊彦氏が建設場所設定に尽力した『沈黙』の文学碑除幕式に立ち合うための来崎。

なお、一九八四年一一月三日、山本が前年一〇月に文化勲章を受章し、文学碑が長崎市に建立されるのを記念して催された文化講演会に、遠藤も講演予定として周知されているが、当該講演を取材した記事（一一月四日）に遠藤に関する記録は掲載されていないことを申し添える。

二、長崎における遠藤作品受容の一端―ベストセラーとなる遠藤作品から

まず注目すべきは、長崎・佐世保のベストセラーが掲載されていることだろう。現時点で確認できた最初の欄は、一九六七年一月一五日（一四日夕）付けの紙面からで、月によって掲載回数にバラつきがあるが、長崎は一九〇六年創業の好文堂書店、佐世保は一九三〇年創業の金明堂書店調べで、東京の結果と比較できるようになっている。東京ではベストセラーに入っていない場合には一覧記事名の末尾に「▼」を、東京でのみベストセラーに入っている場合には同じく末尾に「▽」を付した。

小説だけをみても、『ピエロの歌』（新潮社、一九七四・一）、『第二ユーモア小説集』（講談社、一九七三・一一）、『口笛をふく時』（講談社、一九七三・八）、『彼の生き方』（新潮社、一九七五・三）、『さらば夏の光よ』（講談社、一九七六・二）、『父親 上・下』（講談社、一九八〇・七）、『女の一生 一部』（朝日新聞社、一九八二・一）『女の一生 二部』（朝日新聞社、一九八二・三）、『宿敵 上・下』（角川書店、一九八五・一二）、『わが恋う人は…』（講談社、一九八七・二）、『妖女のごとく』（講談社、一九八七・一二）、『ファーストレディ』（新潮社、一九八八・八）が、長崎もしくは佐世保でのみランクインしている。パパ様の来崎翌年に上梓され、二度の浦上の悲劇を描いた『女の一生 一部・二部』や『ピエロの歌』『わが恋う人は…』といった長崎もの、キリシタン大名小西行長を主人公に据えた『宿敵』以外にも、特に長崎県下で遠藤作品が親しまれていたことは、特筆に値するだろう。また、断定はできないが、一九七三年に刊行され、遠藤文庫としては一九七四年九月に出版される『第二ユーモア小説集』が同年四～五月に佐世保のみで売り上げを伸ばしていることからは、書店での遠藤フ

六九　越中哲也「長崎学の人びと〈一〉」「長崎新聞」一九八九・一・一

ェアなどの影響が推測される。

但し、本欄の表記では、一部・二部や上・下など、セットで刊行された書籍についての集計方法が不明であることを申し添える。また、煩瑣となるため、ベスト・セラーについては根拠とした記事の末尾に番号は付していない。

三、中等教育・高等教育、生涯学習の一環として

県や長崎新聞社が主催する読書感想文コンクールの課題作品となり、遠藤作品を対象とした感想文が優秀作品として掲載されていることが確認できた。一九七七年(⑧)に『海と毒薬』(文芸春秋新社、一九五八・四)、一九八四年(⑨)、一九八七年(⑩)に『沈黙』、一九八八年(⑪)に『おバカさん』(中央公論社、一九五九・一〇)を読んだ感想文が入選している。

また、演劇に関しては、『沈黙』の姉妹編「黄金の国」が教育の一環として上演されている。高等教育としては、玉川大学文学部芸術学科演劇専攻の学生と教職員によって佐世保→長崎→島原→諫早→大村→川棚の順に県内各地を回ったのが映画『沈黙』の封切りの三か月前となる一九七一年八月二九日から九月五日(⑫)。その後、中等教育の一環として、やはり「黄金の国」が、一九七五年七月一八日に県立大村工業高校が同校生徒対象の演劇教室として、翌一九日には長崎市高校演劇連盟が高校生対象公演として、現代演劇協会を招き上演された(⑬)。加えて、同年一一月、第二四回佐世保地区高校演劇発表会では佐世保西高校演劇部が、「新四谷怪談」に挑戦し、「今回最大の話題作」と謳われている(⑭)。続いて、青山広志作曲、東京オペラ・プロデュースによるオペラ『沈黙』が、初の地方公演として一九八三年四月一二日に長崎で上演されたきっかけは、東京で観劇した長崎西ライオンズクラブ会長の中島忠男会長が、「地域奉仕活動の一環としてぜひ長崎で」と切望し働きかけたことによるもので、地元合唱団も参加した。こうした形で遠藤文学に親しんでいるのは、生涯学習の一環でもあろう(⑮)。

加えて、映画『沈黙』が封切られたのは一九七一年一一月二〇日だが、これに併せて来崎した篠田監督と映画を観た長崎市民代表十数名が歓談し、語り合う場が設けられたようだ(⑯)。原作からの改変について市民代表が原作者と篠田の意思疎通を問うなど、主体的に小説『沈黙』に関わっていることを窺い知ることができる。短期間の流行を示すベストセラーに対し、長く読み続けられることを指すのがロングセラー七〇だとすれば、長崎・佐世保でのロングセラーの兆候をみせるのが、ここで採り上げられた作品と考えることもできるだろう。また、「一」で採り上げた長崎における遠藤の

七〇 清水英夫「ベストセラーの性格」「長崎新聞」一九七三・一〇・一一

講演会や遠藤戯曲の公演自体が、地方都市では得難い貴重な生涯学習の機会でもあろう。

なお、「長崎における遠藤作品受容の一端」を示す記事には、日本二十六聖人記念館長を務めた結城了悟神父による遠藤作品評があるが、今回は、教義レベルの受容から外れるものに着目することを眼目としているため、まとめからは省いた。

四、まとめ

今回の調査のうち特に「一」でまとめた部分から、婦人服「タナカヤ」、レストラン「銀嶺」、「とら寿し」など、『沈黙』取材以降、遠藤が懇意にした長崎の人々との交流が、点として浮かび上がった。今後、複合的な視点から調査を深め、長崎での足取りを少しずつ明らかにしていきたい。また、「二」でまとめたベストセラー欄に関しては、思いがけず出会った記事だったが、引き続き調査を継続し、長崎における遠藤作品受容の一端を明らかにするひとつの指標を作成できればと考えている。

その他、『沈黙』をイメージさせる長崎の風景写真として、一九八三年一二月段階では、長崎市福田に近く、長崎湾が角力灘に接する付近の海に臨む神ノ島教会が選択されている（⑰）[七一]。一九六七年、作者自身による『沈黙』の舞台再訪時の写真が福田浦に立つ遠藤の姿だったこと[七二]、ポルトガル人司祭による日本の風土との格闘を描く『沈黙』のイメージに、外海を臨む真っ白な美しい神ノ島教会の画が選ばれること自体に違和はない。とはいえ、この記事が、一九八四年に東京で開催される国際ペンクラブ大会[七三]へ向けて実施した企画で、遠藤の文章が掲載されていることからも遠藤公認の紙面であることが推測されるため、現在からすると多少の違和も覚える。つまり、便宜的に、神ノ島を含む長崎西南部広域を福田付近とすれば、『沈黙』の舞台としてのイメージは、一九八七年一一月の『沈黙』の文学碑建立以前は、現在文学館の建つ外海地区が第一ではなかったのかもしれない、という感触だ。文学碑の設置場所は、「沈黙の地形に似ている」場所から選ばれ、遠藤は除幕式で「私の作品の中にここの地形がそのまま表れており、ここに碑が建ったことで自分の小説の原点が決まったような

七一　奥野政元は、『受難の文芸　近代日本の作家たちとキリスト教』（翰林書房、二〇二二・七）において、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）の「トモギ村のモデルは西彼杵半島の黒崎村」だが、「このトモギ村での潜伏状況として実際に作者が使ったのは、現在は長崎市内になっている福田港及びその周辺を見た体験であった」とし、トモギ村のモデルの原初は、遠藤が「福田の裏山で見た小さな「部落」」の「無人の教会」、岳教会であったことを重視している（三三〇～三三一頁）。

七二　『第七回企画展遠藤周作と長崎――心の鍵が合う街』表紙写真

七三　一九八四年五月一五日、第四七回国際ペンクラブ東京大会で遠藤は、「文学と宗教―無意識を中心として」と題して講演した（「朝日新聞夕刊」一九八四・五・一五）。

気がする。私を町民の一人と受けとめて今後温かくお付きあいしてほしい」（⑦）と述べたという。「長崎新聞」における遠藤周作関連記事の調査を継続することで、外海地区がいかに遠藤文学を象徴する場所となっていくのか、没後も含めた遠藤周作と土地の関係を示す一端が明らかにできる手がかりを得られればと考えている。

「長崎新聞」に掲載された一九六五年一月一日～一九八九年一月七日までの遠藤周作関連記事の一覧を時系列に列挙したものだが、芥川賞選考委員としてのコメントが掲載されたものについては長崎との関連をしるという観点から、煩瑣となるため省略した。記事名については見出しに拠った。なお、著者名があるものについては記事名の最後に（）で明記したが、読書感想文コンクールの著者名については（名前）とのみ記載した。また、「ベスト・セラー」に入った遠藤作品については、見出しのあとに（）で書名と順位を明示し、明らかな誤植については改めた。なお、長崎新聞の独自記事とおぼしきものには備考欄に「★」を付し、備考欄におけるそれ以外の印は、前述したとおりである。

長崎新聞遠藤周作関連記事一覧―昭和編

年月日	記事名	備考
一九六五年二月一七日	ざっし◇群像（３月特大号）	
二月一八日	展望／三島・佐伯氏らで四月に「批評」を復刊	
三月一七日	文芸時評／遠藤氏の「留学」”外国享受”にメス／（白井浩司）	
六月九日	◆起きぬけ戯評◆早起きは三文の~~徳~~とく	
七月二日	文芸時評／（日沼倫太郎）	
一〇月八日	長崎の踏み絵　私とキリスト教／（遠藤周作）	
一九六六年一月一〇日（夕）	ながさき往来／新劇俳優・舞台　演出家　芥川比呂志氏／プロのまね　無用　アマ劇団への注文　“転び切支丹”考証で来崎	★
四月二五日	ベスト・セラーズ（長崎６位『沈黙』、佐世保１０位『沈黙』）	★
五月一六日	ベスト・セラーズ（長崎７位『沈黙』）	★◇
五月二八日（二七日夕）	殉教の地　長崎を舞台に／仲谷、山崎らが競演／来月一日長崎で劇団“雲”の「黄金の国」	★
五月二八日	（広告）『金と銀』佼成出版社	
五月三一日	ベスト・セラーズ（長崎３位『沈黙』、佐世保７位『沈黙』）	★◇
六月三日	長崎の女性など／婦人ニュース　遠藤周作氏に聞く	1
六月五日（四日夕）	演劇手帳／見事な仲谷昇の演技　劇団「雲」の「黄金の国」を見て／（霧満二郎）	★
六月八日	ベスト・セラーズ（長崎３位『沈黙』、佐世保７位『沈黙』）	★
六月一四日	ベスト・セラーズ（長崎３位『沈黙』、佐世保７位『沈黙』）	★
六月二一日	ベスト・セラーズ（長崎２位『沈黙』、~~佐世保３位『沈黙』~~）	★
六月二八日	ベスト・セラーズ（長崎４位『沈黙』、佐世保９位『沈黙』）	★
七月一日	カソリックと日本人／ＮＨＫＦＭ＝作家と作品「遠藤周作」（後９・１５）	
九月二八日（二七日夕）	文芸時評／偶然の人生描く庄野潤三／めざましい“第三の新人”／（日沼倫太郎）	
一〇月二日（一日夕）	話題の人／“踏み絵”は背信か　キリスト教殉難で追及「沈黙」／谷崎賞を受ける遠藤周作氏	
一一年一三日（一二日夕）	聖書にみる愛情　遠藤周作氏の講演から／情熱や同情と違う　忍耐と努力で築くもの	2
一九六七年一年一五日（一四日夕）	作家裁断②／遠藤周作／俳優稼業にも味　ジキルとハイドが共存	
一月二九日（二八日夕）	長崎のキリシタン　遺跡の保存訴える　旅二月号（九州特集）から	★
一月二九日	信仰の火は消えず　迫害、殉教の歴史を語る／教育テレビ＝宗教の時間「隠れキリシタン」（前６・５）	~~★~~

三月二一日（二〇日夕）	ベスト・セラーズ（長崎9位『沈黙』）		
三月二八日（二七日夕）	ベスト・セラーズ（長崎10位『沈黙』）	★▼	★▼
七月一三日（一二日夕）	苦悩する姿を鮮明に　遠藤周作　三浦朱門共著　キリシタン時代の智識人		
一一月一六日（一五日夕）	宗教と文学／殉難の極限描く　遠藤周作著「沈黙」		
一九六八年　一月六日（五日夕）	学芸短信／遠藤編集長の「三田文学」		
一九六九年一月一四日（一三日夕）	ながさき文学風景（2）／序章下／長崎の特殊性を反映　殉教と原爆ものを柱に	★	
七月八日（七日夕）	本と著者／「踏絵」の片岡弥吉氏	★	
九月二日（一日夕）	九月の日本映画　話題作がズラリ　日活「私が棄てた女」など		
九月一二日（一一日夕）	映画手帳／愛情の今日性えがく　浦山桐郎監督六年ぶりの秀作／私が棄てた女		
一九七〇年　一月七日（六日夕）	随想／雑種の犬　遠藤周作		
一九七一年一月二三日（広告）	『切支丹の里』人文書院		
一月二六日（二五日夕）	ベスト・セラーズ（長崎6位『切支丹の里』）	★▼	
一月三一日（三〇日夕）	新しい本／遠藤周作の「切支丹の里」“殉教と影の部分”／（松永伍一）		
二月二日（一日夕）	ベスト・セラーズ（長崎3位『切支丹の里』）	★▼	
二月九日（八日夕）	ベスト・セラーズ（長崎2位『切支丹の里』）	★▼	
二月一六日（一五日夕）	ベスト・セラーズ（長崎1位『切支丹の里』）	★▼	
二月二五日（二四日夕）	ベスト・セラーズ（長崎3位『切支丹の里』、佐世保7位『切支丹の里』）	★▼	
三月二日（一日夕）	ベスト・セラーズ（長崎2位『切支丹の里』、佐世保8位『切支丹の里』）	★▼	
三月一六日（一五日夕）	ベスト・セラーズ（長崎6位『切支丹の里』）	★▼	
三月九日（八日夕）	ベスト・セラーズ（長崎5位『切支丹の里』）	★▼	
三月二三日（二二日夕）	ベスト・セラーズ（長崎10位『切支丹の里』）	★▼	
四月一日	（PRのページ）催し／「薔薇の館」（劇団雲）公演近づく　本格派の演技が愉しみ	★	
四月八日（七日夕）	劇団・雲の「薔薇の館」／14・長崎15日・佐世保で公演／仲谷昇が代打主演　戦時下の教会を舞台に	★	
四月二二日（二一日夕）	“浦上”を書きたい　キリシタンの里大切に／「薔薇の館」公演で来崎の遠藤周作氏	3	
七月二日（一日夕）	書評／生身の膚の感覚　遠藤周作著「母なるもの」		
七月一五日（一四日夕）	「沈黙」再スタート　丹波・岡田英次ら参加		
七月二九日（二八日夕）	県下を回る「黄金の国」／玉川大学演劇／来月二十九日から佐世保・長崎などで上演		12
一一月一六日（一五日夕）	映画物語④　沈黙		
一一月二〇日（一九日夕）	（広告）映画「沈黙」（思案橋　長崎宝塚）		

一一月二四日（二三日夕）映画「沈黙」の篠田監督に聞く　純粋すぎた伝道者　日本の風土理解できず
一二月二日（一日夕）ベスト・セラーズ（長崎8位『沈黙』、佐世保9位『沈黙』）★▼ 16
一二月七日（六日夕）「沈黙」小説から映画まで（上）／パチェコ・ディエゴ★
一二月八日（七日夕）「沈黙」小説から映画まで（下）／パチェコ・ディエゴ★
一二月九日（八日夕）ベスト・セラーズ（長崎5位『沈黙』、佐世保7位『沈黙』）★▼
一二月一一日芸術祭大賞決まる／映画「沈黙」など七件
一二月一六日（一五日夕）ベスト・セラーズ（長崎4位『沈黙』）★▼
一二月二四日（二三日夕）ベスト・セラーズ（長崎10位『沈黙』）★▼
一二月二九日（二八日夕）ベスト・セラーズ（長崎9位『沈黙』）★▼
一九七二年二月一五日（一四日夕）ベスト・セラーズ（佐世保7位『沈黙』）★▼
二月二二日（二一日夕）ベスト・セラーズ（佐世保5位『沈黙』）★▼
四月一四日次の連載小説　ピエロの歌　遠藤周作／作者のことば
四月一九日あすから連載　ピエロの歌　遠藤周作
四月二〇日～一一月一二日ピエロの歌
五月一〇日（九日夕）往来／来崎した「ピエロの歌」の遠藤周作氏／長崎はおいしい町／“かっぱ”に母性のイメージ　4
五月三一日中教審の新委員決まる　遠藤周作氏ら18人
九月二日（一日夕）“小百合論”も一席／日本テレビ系「夫婦学校」遠藤~~周作~~氏が出演
一一月二一日（二〇日夕）ベスト・セラーズ（長崎5位『ぐうたら人間学』）★
一一月二八日（広告）狐狸庵先生　遠藤周作　違いがわかる男のゴールドブレンド
一九七三年一月一日私のテレビドラマ論　遠藤周作
一月一八日（一七日夕）ベスト・セラーズ（長崎5位『人間学』、佐世保2位『人間学』）★
一月二五日（二四日夕）ベスト・セラーズ（長崎1位『人間学』）★▼
一月三一日（三〇日夕）ハーイ本番／多才ぶりを披露　遠藤周作
二月八日（七日夕）ベスト・セラーズ（長崎5位『人間学』10位『ぐうたら交友録』、佐世保7位『人間学』）★
二月一五日（一四日夕）ベスト・セラーズ（長崎2位『交友録』、佐世保8位『人間学』）★
二月二二日（二一日夕）ベスト・セラーズ（佐世保7位『人間学』）★
三月一八日（一七日夕）ベスト・セラーズ（長崎6位『人間学』、佐世保7位『人間学』8位『交友録』）★

四月三日（二日夕）	ベスト・セラーズ（長崎２位『交友録』３位『人間学』、佐世保３位『交友録』、７位『人間学』）	★
四月二六日（二五日夕）	ベスト・セラーズ（長崎１位『交友録』３位『人間学』、佐世保１位『交友録』２位『人間学』）	★
五月八日（七日夕）	ベスト・セラーズ（長崎１位『交友録』２位『ぐうたら愛情学』９位『人間学』、佐世保１位『愛情学』２位『交友録』３位『人間学』）	★
五月三〇日	ベスト・セラーズ（長崎１位『愛情学』２位『交友録』３位『人間学』、佐世保１位『愛情学』２位『人間学』３位『交友録』）	★
六月一三日	ベスト・セラーズ（長崎２位『愛情学』３位『交友録』４位『人間学』、佐世保２位『愛情学』３位『人間学』６位『交友録』）	★
六月二七日	ベスト・セラーズ（長崎２位『人間学』３位『愛情学』６位『交友録』、佐世保２位『愛情学』３位『人間学』４位『交友録』）	★▼
七月四日（夕）	年輪／日本人のイエス像　周囲の群像を通して　「死海のほとり」の遠藤周作氏	
	ベスト・セラーズ（長崎２位『愛情学』３位『人間学』７位『交友録』、佐世保２位『愛情学』３位『人間学』４位『交友録』）	★
七月一一日	ベスト・セラーズ（長崎２位『人間学』４位『交友録』７位『死海のほとり』、佐世保２位『愛情学』３位『人間学』５位『交友録』）	★
七月二七日	ベスト・セラーズ（長崎２位『死海のほとり』５位『人間学』６位『交友録』７位『愛情学』、佐世保２位『人間学』４位『愛情学』７位『交友録』９位『死海のほとり』）	★
八月一日	ベスト・セラーズ（長崎２位『死海のほとり』４位『愛情学』７位『人間学』１０位『交友録』、佐世保２位『愛情学』４位『人間学』６位『死海のほとり』８位『交友録』）	★
八月二二日	ベスト・セラーズ（長崎１位『死海のほとり』７位『愛情学』１０位『人間学』、佐世保２位『愛情学』６位『死海のほとり』）	★
九月五日	ベスト・セラーズ（長崎７位『死海のほとり』、佐世保４位『死海のほとり』）	★
九月一九日	ベスト・セラーズ（長崎７位『死海のほとり』、佐世保６位『人間学』）	★▼
一〇月一三日（夕）	芥川演出で　「メナム河の日本人」	
一一月二八日	ベスト・セラーズ（東京９位『イエスの生涯』）	★▽

一二月　五日	ベスト・セラーズ（東京９位『イエスの生涯』）	★▽	
一九七四年一月一六日	ベスト・セラーズ（長崎５位『イエスの生涯』、佐世保４位『イエスの生涯』）	★▼	
一月三〇日	ベスト・セラーズ（長崎２位『ぐうたら好奇学』６位『ピエロの歌』、佐世保６位『好奇学』）	★	
二月六日	ベスト・セラーズ（長崎３位『好奇学』、佐世保８位『好奇学』）	★	
四月一〇日	ベスト・セラーズ（佐世保８位『第二ユーモア小説集』９位『好奇学』）	★▼	
五月一五日	ベスト・セラーズ（佐世保１０位『第二ユーモア小説集』）	★▼	
六月二六日	ベスト・セラーズ（長崎２位『狐狸庵ＶＳマンボウ』）	★	
八月一五日	ベスト・セラーズ（佐世保３位『狐狸庵ＶＳマンボウ』）	★▼	
九月三日	ベスト・セラーズ（長崎６位『狐狸庵ＶＳマンボウ』）	★▼	
九月二五日	ベスト・セラーズ（長崎８位『口笛をふく時』）	★▼	
一九七五年　二月九日	文化／ことしの目玉出版　多彩で幅広い企画　回生のヒット出るか		
四月九日	ベスト・セラーズ（長崎３位『彼の生き方』、佐世保１０位『彼の生き方』）	★▼	
七月五日	「黄金の国」を公演　１８日大村１９日長崎仲谷以外、新顔ぶれ現代演劇協	13	
一一月五日	第２４回佐世保地区高校演劇発表会（下）／遠藤作品に挑戦　佐世保西「新四谷怪談」　佐世保南「マッチ売りの少女」「熱こもる舞台／（竜）	14	
一九七六年四月二八日	ベスト・セラーズ（佐世保４位『さらば夏の光よ』）	★▼	
九月五日	雑誌の創刊二つ／「季刊創造」と「日本文化」		
一一月一五日	往来／ポーランドから文学賞　遠藤周作		
一二月一二日	芥川賞選考委員に遠藤氏、大江氏（◎以降、選考委員としてのコメント掲載は省略）		
一九七二年二月二二日	新しい本／人間と神をテーマに／▼「悲しみの歌」（遠藤周作著）		
五月八日	ベスト・セラーズ（長崎６位『鉄の首枷』	★▼	
五月二五日	ベスト・セラーズ（東京９位『鉄の首枷』）	★▽	
六月二日	書評／矛盾の人を明らかに　「鉄の首枷―小西行長伝」遠藤周作著／（高橋英夫）		

一二月二六日	第6回県読書感想文コンクール　最優秀作品の紹介／高校の部「海と毒薬」を読んで　長崎北高二年（名前）	8	
一九七八年一〇月一〇日	ベスト・セラーズ（東京8位『キリストの誕生』）	★▽	
一一月二日	山本、遠藤氏迎え　6日小学館文化講演会	★	
一一月七日	ベスト・セラーズ（東京3位『キリストの誕生』）	★▽	
一一月一八日	長崎の史跡を守れ　遠藤周作氏「長い流れのなかで」／小学館文化講演会から	5	
一九七九年五月二二日	「銃と十字架」のペトロ岐部／（結城了悟）	★	
一九八〇年五月一四日	ベスト・セラーズ（長崎3位『侍』）	★	
五月二二日	書評／権力と策謀―信仰　世界史的に語る遣欧使節／「侍」遠藤周作著		
	ベスト・セラーズ（長崎5位『侍』）	★	
五月三〇日	ベスト・セラーズ（長崎9位『侍』、佐世保1位『侍』）	★	
六月一四日	ベストセラーズ（佐世保4位『侍』）	★▼	
六月一七日	学芸短信／山本健吉氏の五選決める		
六月二四日	ベスト・セラーズ（佐世保6位『侍』）	★▼	
九月四日	新しい本／かくれ切支丹　遠藤周作＝文　I・美緒子・スミス＝写真		
九月二一日	ベスト・セラーズ（佐世保10位『父親』上・下）	★▼	
九月二八日	ベスト・セラーズ（佐世保6位『父親』上・下）	★▼	
一二月二二日	弾むカトリック文学論　野間文芸賞　遠藤周作氏へ贈呈式		
一二月二八日	回顧特集　八〇年の終わりに〈3〉／長編小説に収穫		
一九八二年　三月三日	ベスト・セラーズ（長崎8位『女の一生一部』、佐世保9位『一部』）	★▼	
三月一七日	ベスト・セラーズ（長崎9位『一部』）	★▼	
三月三〇日	次の連載小説　燭台　遠藤周作／作者の言葉		
四月四日	あすからの連載小説　遠藤周作の「燭台」		
四月五日〜一〇月二二日	燭台		

四月八日	ベスト・セラーズ（長崎６位『一部二部』、佐世保６位『女の一生二部』）	★▼	
四月一四日	ベスト・セラーズ（長崎３位『一部二部』）	★▼	
五月二日	ベスト・セラーズ（長崎３位『一部二部』）	★▼	
五月七日	ベスト・セラーズ（長崎５位『一部二部』）	★▼	
五月一五日	ベスト・セラーズ（長崎６位『一部二部』）	★▼	
五月一九日	ベスト・セラーズ（長崎９位『一部二部』）	★▼	
六月一〇日	山本健吉理事長を六選／日本文芸家協会		
九月一四日	ベスト・セラーズ（佐世保４位『自分をどう愛するか（生活編）』）	★▼	
九月二一日	ベスト・セラーズ（佐世保９位『生活編』）	★▼	
一〇月二二日	「燭台」の執筆を終えて　遠藤周作		
一九八三年一月二一日（夕）	長崎でも４月に　オペラ「黄金の国」島原の乱後の神父	★	
二月八日	盛り場神父は人気者／来日３０周年びっくりパーティ　仏国から実兄招待　遠藤周作氏らも出席		
四月八日	地元合唱団も参加　オペラ「黄金の国」公演／１２日・長崎市公会堂		15
四月一四日	本格オペラ楽しむ　長崎で「黄金の国」上演		15
六月七日	文庫情報／▽集英社文庫「父親（上・下）」		
六月一六日	大型カラー企画／名作の舞台　２０日付から週一回登場		
七月七日	新しい本／「悪霊の午後」（遠藤周作著）		
七月一九日	新しい本／「私にとって神とは」（遠藤周作著）		
一二月一二日	名作の舞台２４／「沈黙」　踏絵からの衝動　長崎市／文＋遠藤周作		17
一九八四年　五月一日	文壇関係者ら４００人　山本健吉氏の喜寿祝う		
一〇月一六日	山本健吉氏文化勲章受章記念文化講演会	★	
一〇月二七日	遠藤氏迎え講演会　長崎平和推進協	★	
一二月二日	「第１３回長崎県」「５９年度文庫による」読書感想文コンクール　最優秀９編／「沈黙」を読んで　長崎・西高１年（名前）		9
一二月二八日	ほんの周辺／大学生の読書　（小林一博）		
一九八五年六月一二日	時の顔／リリーフ投手の感じで　日本ペンクラブの新会長になった　遠藤周作		
七月六日	「国際交流を積極的に」／“クラブ”精神強調　日本ペン・遠藤新会長が抱負		
九月二日	思想の遍歴を告白　遠藤周作著私の愛した小説		
一〇月二一日	浦山桐郎監督が死去　「キューポラ…」「青春の門」		

一一月一四日　海と毒薬　ショック！生体解剖映画化／企画１５年やっと日の目
原作の遠藤氏も全面協力

一九八六年二月七日　「スキャンダル」完成　老境に表れる悪見つめる／久々の現代小説　遠藤周作氏

三月四日　ベスト・セラーズ（佐世保１０位『心の夜想曲』）

三月一一日　ベスト・セラーズ（佐世保１０位『宿敵』上・下）　★▼

三月一八日　ベスト・セラーズ（長崎９位『スキャンダル』、佐世保６位『宿敵』上・下）　★▼

三月二六日　ベスト・セラーズ（長崎８位『スキャンダル』、佐世保１位『スキャンダル』）　★

四月二日　ベスト・セラーズ（長崎６位『スキャンダル』、佐世保２位『スキャンダル』）　★

四月一四日　ベスト・セラーズ（長崎７位『スキャンダル』）　★▼

四月二二日　ベスト・セラーズ（長崎８位『スキャンダル』）　★▼

四月二九日　次の連載小説　わが恋う人は…　遠藤周作／作者の言葉

五月三日～一一月二四日　わが恋う人は…

一〇月九日　国際ペン東京大会の論文集刊行　英・仏語訳で

一〇月二五日　長崎文化の継承と創造／私の長崎体験　遠藤周作氏　6

異彩の長崎文化その継承と創造　公開座談会　6

一九八七年三月一二日　第３７回ベルリン国際映画祭／喜びの熊井監督が帰国　「現代劇でも通用する」

三月一七日　ベスト・セラーズ（長崎９位『わが恋う人は』）　★▼

四月二一日（夕）　映画「海と毒薬」／長崎でも衝撃の公開　旧日本軍の人体解剖描く

五月一八日（夕）　私の一作㊷／一作にかけた１７年　海と毒薬　熊井啓

七月一日　「沈黙」遠藤周作氏の文学碑　出津文化村に建設へ　外海町　7

九月八日　ベスト・セラーズ（長崎８位『あまのじゃく人間へ』）　★▼

九月一五日　新しい本／「眠れぬ夜に読む本」（遠藤周作著）

ベスト・セラーズ（佐世保５位『眠れぬ夜に読む本』）　★▼

九月二九日　ベスト・セラーズ（長崎７位『あまのじゃく人間へ』）　★▼

一〇月六日　ベスト・セラーズ（長崎８位『あまのじゃく人間へ』）　★▼

一〇月一三日　小説「沈黙」の文学碑　デザイン決まる出津文化村に建立　外海　★

一一月一日〝島原の乱〟一色の文化祭　有馬商業高校
一一月二〇日あすから2日間　西海町の産業まつり　外海町ふるさとまつり
一一月二三日「沈黙」の文学碑除幕　外海遠藤周作氏夫妻を迎え
一二月一五日ベスト・セラーズ（長崎１０位『妖女のごとく』）　★▼
一二月一六日（広告）『妖女のごとく』講談社
一二月二二日第１６回県第９回文庫読書感想文コンクール　最優秀９編／「沈黙」長崎・長大付属中３年（名前）／「沈黙」時津（名前）　10
ベスト・セラーズ（長崎８位『妖女のごとく』、佐世保５位『妖女のごとく』）　★▼
一九八八年一月一九日新しい本／「妖女のごとく」（遠藤周作著）
二月二六日今度は「沈黙の碑」　外海町　青ペンキ塗られる　★
三月四日１週間ぶりに修復　外海　遠藤周作氏の文学碑　★
五月九日山本健吉氏をしのぶ／万物を生かす命の尊重　抜群の文章鑑賞力持つ　遠藤周作
五月二六日９００人が“大御所”悼む　故山本健吉氏の文芸家協会葬　井上靖氏ら弔辞　東京
七月七日こよなく愛した郷土／追い続けた少年の日の夢とロマン　「長崎学」にも熱い思い　山本健吉さん逝去されて２カ月　★
七月一九日文庫拝見／▽遠藤周作著「十一の色硝子」　★▼
九月六日ベスト・セラーズ（長崎８位『ファーストレディ』上・下　佐世保５位『ファーストレディ』上・下）　★▼
九月三〇日新しい本／▼「その夜のコニヤック」（遠藤周作著）
一〇月三日ぶんか短信／日本ペンがトークイン
一〇月三〇日文化功労喜びの三氏／ありがたいが当惑　遠藤周作さん
一一月八日文庫拝見／▽遠藤周作著「私の愛した小説」
一一月三〇日第１７回・県第１０回・文庫　読書感想文コンクール最優秀９編／「おバカさん」長崎・花園町　（名前）　11
一二月二二日安岡氏、受賞２度目に感激
一九八九年　一月一日長崎学の人々〈一〉／越中哲也　★

第四章　遠藤作品の受容

第四章第四節　長崎新聞――平成編

〇、はじめに

「長崎新聞」における遠藤周作関連記事を調査したものである。昭和編に続き、一九八九年から遠藤周作文学館が開館する二〇〇〇年までの関連記事を確認することで、長崎における遠藤作品受容の一端を明らかにすることを目的としている。

平成に入って以降の主な遠藤作品は、戦国時代に材をとった歴史小説と、インドを主な舞台とする最後の純文学『深い河』（講談社、一九九三・八）である。『深い河』創作日記が一九九〇年八月に開始されていることからも想起されるように、長崎を舞台とした遠藤作品自体がほとんどない。よって、「長崎新聞」を繰った当初の主目的であった来訪記録を更新する記事は残念ながら確認できなかった。だが、周知のとおり遠藤は、「平成四（一九九二）年、三月終り（略）最後の病床につく直前のころ」、プレジデント社作成の映像と活字を併せたメディアミックスの試み、カミュ文庫『沈黙の声』（一九九二・七）の撮影で長崎に二日間滞在し、自作『沈黙』への思いを語った[一]。この長崎行きについては『『深い河』創作日記」（『三田文学』一九九七・八）に記述がある。同日記も収録する『遠藤周作全日記【下巻】』（河出書房新社、二〇一八・五）に収められた平成期の日記のうち、長崎に行き関して記述したものは、カミュ文庫の撮影のための二日間（一九九二年三月二二～二三日）のみである[二]。

平成編最初の関連記事は中村真一郎『火の山の物語―わが回想の軽井沢』（筑摩書房、一九八八・一一）の紹介文であった。遠藤との初対面は追分の堀辰雄の家であったという中村は、自身との思い出だけでなく堀と遠藤の精神的交流を綴る。そして最後に、遠藤について「軽井沢が日本であるかという問いに似た、カトリシスムが日本人の伝統といかに融け合うかという問題は、神学的にも実践的にも、彼の中で相変わらず大きく揺れているように見える」[三]と結ぶ。先のカミュ文庫のために書き下ろされたエッセイ「沈黙の声」（『沈黙の声』所収）で遠藤は、「堀辰雄は、自分の内面にもっとも合った場所を追分（長野県）に見つけた。／私にとって、それは長崎県なのである」というが、すでに『深い河』にとりかかっていた一九九二年当時、「いま、私の心の街は

一　加藤宗哉「解説　書き手の秘密『沈黙』の場合」（遠藤周作『沈黙の声』青志社、二〇一七・一一所収）二七二頁
二　遠藤周作「『深い河』創作日記」（『遠藤周作全日記【下巻】』河出書房新社、二〇一八・五）三五〇頁
三　中村真一郎『火の山の物語―わが回想の軽井沢』（筑摩書房、一九八八・一一）二五八頁

インドのベナレスになっている」とし、「青年期・壮年期においては長崎が大きな部分を占めていた」と断っている[四]。青年期・壮年期の長崎、老年期のインドは、遠藤が棺に入れることを言い遺したという『沈黙』と『深い河』と言い換えることもできる。また『『深い河』創作日記」からは、『深い河』が『沈黙』を意識しながら書かれたことも読み取れる[五]。よって、「胸にたたきこんだのは『沈黙』準備のとき」[六]だという長崎―たとえそれが作家の心の中の長崎の風景だったとしても―が、平成以降の遠藤にとっても重要な場所であったことに相違はないだろう。

平成期の関連記事のなかで特徴的なのは、没後から文学館設置が発表されるまでの間の官民あげた遠藤作品受容の盛り上がりであろう。以下、「一、長崎県立長崎図書館主催「遠藤周作特別展」」「二、遠藤作品原作映画の自主上映」「三、舞台劇「沈黙」公演」「四、コラム」「五、文学館開館決定後、開館までの長崎の動向」「六、ベスト・セラーズ」「七、所感、今後の展望など」「長崎新聞・遠藤周作関連記事一覧（平成編）」を柱に、概略をまとめる。

以下、根拠とした新聞記事について掲載日を文中に示さない場合は、番号を（ ）で付し、記事一覧の備考にその番号を記す。

一、長崎県立長崎図書館主催「遠藤周作特別展」

一九九六年九月に遠藤が没して以降、二〇〇〇年五月に文学館が外海に建設されるまでの長崎における遠藤作品受容をまとめる。

遠藤死去は、一九九六年九月三〇日紙面の一面と社会面で報じられた。「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」といった主な全国紙も大差ない取り扱いだが、「長崎新聞」の特質は、没後の報道にある。

イグナチオ教会での通夜の折、髙田勇長崎県知事（当時）は生前の遠藤の手紙を手に「長崎にお墓を」と申し入れたという[七]。この時に結ばれた縁によるのだろうが、長崎県立長崎図書館（当時）二階で一九九六年一一月一二日一二月八日まで「遠藤周作特別展―狐狸庵先生を偲んで―」が開催される（①）。展示品は、おそらく図書館蔵書の貸出可能な著書約五〇点の他、遺族提供の書き下ろし原稿及び遺品等五四点、県立図書館等が所有する踏絵などの関連資料三〇点、関連写真一六点と、カミュ文庫の映像放映がなされる。没後一か月半に満たない日程で開始されたこの展示には、遺族か

四 遠藤周作「沈黙の声」（初出『沈黙の声』プレジデント社、一九九二・七）、引用は『沈黙の声』　注一に同じ、八七～八九頁に拠った。
五 遠藤周作『『深い河』創作日記」注七五に同じ、三六三、三六四、三六六頁
六 遠藤周作「沈黙の声」注七七に同じ、八六～八七頁
七 遠藤順子『夫の宿題』（PHP研究所、一九九八・七）二一九頁

ら提供品として『沈黙』の生原稿や愛用の万年筆・三浦朱門の弔辞、そして通夜の日に妻順子に見せた、遠藤が一九八七年六月に長崎県知事宛てに出した手紙が出品される（②）。約一五〇点の資料を展示するとなれば準備にも時間を要したと推測するが、没後ひと月半に満たない日程で開催を迎えていることや、東京での遺族への交渉、遺品の長崎までの運搬費用のことなどを思えば、開催は知事のかなりの肝煎りがあったと思われる。また県が出した新聞広告も、紙面の下部五段が全て使用されている。新聞社等の共催ではないなかでは、格別な大きさであろう。この力の入れように、地元がきちんと応えていることも窺える。観覧無料で県外からの観覧もあったということだが、一ヶ月に満たない会期での観覧者数が一万人を超える（③）。コロナ禍前の遠藤周作文学館の年間入館者数は二〇一八年が二五三二三人、二〇一九年が一九五七〇人である[八]。年間三万人の来館者が来れば御の字と言われる。よって、交通の便の悪い立地ながら立派な来館者数を記録していると言える。とはいえ、小説家の社会的役割の時代的な差異を分析しない状況ではあるが、没後まもない県立長崎図書館の来場者数は、やはり驚異的といえよう。

二、遠藤作品原作映画の自主上映

遠藤周作文学館建設地の最終的な決定者であった妻順子によれば、文学館の話が持ち上がったのは一九九六年九月末の葬儀後まもなくのことで「初七日には候補地の選定が始まった」という[九]。長崎市や外海町（当時）が誘致していたことを地元の人々がどの時期からどの程度理解していたかは定かではないが、『夫・遠藤周作を語る』（文芸春秋社、一九九七・九）で外海に文学館設置が出来ることを打ち明けた一九九七年には、上映期間の終了した遠藤原作映画『深い河』『愛する』の自主上映会が、市民主体で企画運営されている。いずれも熊井啓監督作品で、一九九五年公開の映画「深い河」と一九九七年に公開された『わたしが・棄てた・女』（文芸春秋新社、一九六四・三）を原作とする映画「愛する」である。

「深い河」の自主上映会は、一九九七年四月一七日長崎市民会館文化ホール、一八、二一日長崎市チトセピアホール、同月二五日佐世保コミュニティーセンターにおいて一日三回の上映を予定した。問い合わせ先は長崎県映画センターとなっているが、主催は、長崎市内の主婦らを含む二〇代から六〇代までの一三名で構成される映画「深い河」上映実行委員会である。県映画センターが募集をかけたのか、実行委員の持ち込み企画か定かでないが、上映会と併せて「遠藤作品のブックフェアやインド写真展、

八　二〇二〇年七月、遠藤周作文学館に問い合わせた回答による。
九　遠藤順子『夫の宿題』注八〇に同じ、二一九～二二〇頁

インドツアーなど、上映会を持ち上げる企画も計画」するほどで、「実行委のメンバーのほとんどが『私の映画だ』と集まった人たち」であった（④）。また、長崎での上映会は満席、三日間で四千五百人を動員し、来場を断ったこともあったことから、五月一日に三回の追加上映を決定したという（⑤）。入場料は前売り一般千四百円、学生千二百円という当時の一般的な興行映画と同額である。ビデオレンタル開始は一九九八年一二月なので、気軽に視聴できる状況にもなかったとはいえ、二〇一九年度、長崎の文学館が主催した「深い河」上映会（於チトセピアホール）が、一日一回上映、観覧無料の申し込み不要で、定員五百名をもって運営されている[一〇]ことと比較すれば、没後まもないなかでの自主上映会は驚異的な動員を誇ったといえるだろう。

実行委員が物語に自分自身を見出し、遠藤作品のブックフェアも開催した映画「深い河」上映会に対し、一九九八年に企画された映画「愛する」上映会を主催する「映画『愛する』を観る会」から遠藤作品に対する声は紙面に表れない。問い合わせ先として県映画センターがあるのは同様であるが、映画と併せて後日開催される講演会・勉強会は映画や原作に対するものではなく、平成八年四月に廃止されたものの、らい予防法のもとで長年差別や偏見に苦しめられてきたハンセン氏病患者への正しい理解を深めてもらうためのものである。この上映会は、直接的な遠藤作品受容の盛り上がりというより、一九九六年四月にようやくらい予防法が廃止されたことによるハンセン氏病理解に対する啓もう活動の一環という側面が強いだろう（⑥）。

三、舞台劇「沈黙」公演

先述したとおり文学館が外海に建設されることは一九九七年九月には少なくとも公知となっていた。その影響も少なからずあろうが、一九九五年九月から一一月にかけて劇団昴とアメリカのミルウォーキー・レパートリー・シアターの共同製作によって初演[一一]を迎えた舞台劇「沈黙」が、一九九八年六月に初めて長崎県内各地で公演された。六月九日有家町民センターコレジョホール、一〇日諫早文化会館、一二日平戸文化センター、一三日佐世保市民会館、一四日長与町民文化ホール、一六日長崎市公会堂で、各会場の連絡先は開催各市町の教育委員会もしくは文化振興課で、全体の問い合わせ先は長崎県文化推進室である。入場料は千円から二千五百円の間での設定で、公演に先立つ五月一〇日には全面広告が「沈黙の碑」の写真つきでうたれている（⑦）。

一〇　「ステージ情報　映画「深い河」上映会」（「長崎新聞」二〇二〇・一・一一）。
一一　初演時には長崎公演はなかったが、「長崎新聞」（一九九五・一一・二三）で報道されている。

長崎公演初日を迎えるまでには、外海の復活キリシタンを祖先に持ち[二二]、カクレキリシタン研究の道に進むきっかけに遠藤周作との出会いがあったという宮崎賢太郎の寄稿「遠藤周作と私　上中下」（⑧⑨⑩）が遠藤と『沈黙』の世界に迫る。公演当日の報道は初日の有家でのものしか確認できなかったが、「会場には約九百人が詰め掛け立ち見がでるほどの盛況ぶり」であったという（⑪）。有家方面は、県立長崎図書館での遠藤周作特別展を観覧するために来崎した妻順子が、文学碑をみたあとに足を運んだ場所でもある（⑫）。

舞台劇「沈黙」が初演を迎えた一九九三年は、『沈黙』がサントリー財団の企画で村松禎三によってオペラにもなった。上梓から二七年を経た時点でなお、発表当時のキリスト教界からの非難を振り返り、「九州のミッション・スクールではこれを読んではならぬ小説として生徒に読書を禁じたり、基督教系の本屋で売ることは避けていたようである」と綴る[二三]。一九九八年、有家で舞台劇「沈黙」を観劇したクリスチャンの女性三〇歳は、「「聖書の教えがさらに深く分かり、『ずしん』とくるものがあった」と語ったという（⑩）。

四、コラム

現在確認できている範囲では、没後、コラム「水や空」に『沈黙』や文学碑が取り上げられるようになる。一九九六年九月三〇日、一九九七年一月一六日、七月八日、八月一日、一九九八年四月一七日、一九九九年四月四日に触れられている。

一九九六年九月三〇日は、遠藤死去が一面で報じられた日である。その日のコラムでは、「いたずら電話の大好きなユーモア作家とばかり思っていた遠藤周作さんが「沈黙」を発表したときは、それだけに衝撃が大きかった」と振り返り、『沈黙』の踏み絵の場面を引き合いながら『沈黙』が問うテーマを「「沈黙」が永遠に問いかけるものは重い」そして「答えはまだでていないのではと追いかけても問いたい心境だ」と綴る。

外海に文学館が建つことが決定した一九九七年は、元日に松浦市出身の劇作家岡部耕大が「人さらい」と題した詩を寄稿し『沈黙』にも触れた。この詩には、文学碑の写真が大きく添えられたが、一九九七年八月一日のコラムは県内の文学散歩がてら『沈黙』の文学碑に足を運ぶことを推奨している。一月一六日のコラムは、『自分づくり』（青春文庫、一九九六・一二）に触れながら、心あたたまる医療活動を提言、尽力した遠藤に触れている。七月八日は、天正遣欧使節を描くポルトガルと日本の合作映画『アジアの瞳』に登場するフェレイラとともに穴吊りの刑を受けながら殉教した中浦

二二　宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像　日本人のキリスト教理解と受容』（吉川弘文館、二〇一四・二）四頁

二三　「私の期待するオペラ「沈黙」」（「日本経済新聞」一九九三・一〇・一七）

ジュリアンと対比するために、『沈黙』を持ち出している。長崎新聞において、文学館が外海に建設されることが初めて報じられるのは一九九七年一一月二〇日の堀憲昭による寄稿「好奇心旺盛な人柄偲ぶ　遠藤周作さん一周忌長崎からも多数参列」である。『夫・遠藤周作を語る』によって公知となるのが一九九七年九月であることを考慮しても、偶然とは思えないほどに一九九七年夏までのコラムにおける登場回数は多いように感じる。

一九九八年四月一七日は、長崎県編『長崎県文化百選四　うた・文学散歩編』（長崎新聞社、一九九八・三）の紹介を兼ねており、コラムで遠藤作品は『沈黙』のみに触れられているが、『走馬燈』（毎日新聞社、一九七七・二）のなかから島原半島の有馬神学校への思いを綴った「セミナリヨのこと」も紹介されている。なお、同書の広告は数多掲載されていたが、広告欄から遠藤や『沈黙』が想起される要素は見当たらなかったので、一覧からは省いたが、同書編纂に携わった田中正明の寄稿「豊かな文学の原郷・長崎」（一九九八・五・二〇）は、「どこに佇んでいても古い葡萄酒の味がする」という遠藤の長崎に対する賛辞を引用する。

一九九九年四月四日のコラムは遠藤の誕生日である三月二七日に執り行われた文学館の起工式の参加をベースにしたもので、初めて全文が遠藤にかかわる内容で構成されたコラムとなる。

五、文学館開館決定後、開館までの長崎の動向

一九九七年九月の一周忌で外海に文学館が建つことが発表されたことが記事になるのは同年一一月三〇日の寄稿を待たねばならない。東京で催される一周忌の偲ぶ会については記事になっているし、長崎からも多数参列したとのことなので、おそらく報道されるまでの間にも長崎で情報は共有されつつあっただろう。次に文学館について報じられるのは、翌年、三回忌にあたる一九九八年九月二九日の偲ぶ会で、妻順子が記念館概要を紹介したものになる。この間、前章で採り上げた一九九七年年度末発行の『長崎県文化百選四　うた・文学散歩編』における遠藤作品の二項には、外海に文学館が建設される予定であると記された。設置主体となる外海町（当時）からの基本計画発表が報道されるのは、一九九八年一二月二三日で、一九九九年三月二七日、遠藤周作の誕生日に併せて着工、報道される。そして建物の着工式を済ませた後、文学館開館へ向けた地元の人々の動きが活発化する。

『夫・遠藤周作を語る』において、もし三周忌までに文学館が外海に建てばサンセットミサを開きたい、そしてゆくゆくはその日を「迫害に遭って死んでいった無名の

キリシタンのため」の「キリシタン・メモリアル・デイ」にしたいと打ち明けた[一四]。開館は当初予定の一九九九年から若干遅れ、二〇〇〇年五月一三日となったが、落成の際には文学館での式典だけでなく、大浦天主堂で追悼ミサが執り行われる。設置主体である自治体はミサを主催することは難しい。よって、このミサを含む開館イベントについて、遺族を始めとする東京の関係者と連携しながら地元で支える実行委員会が設置されることとなる。その事務局を引き受けるのが、訃報を報じる一九九七年九月三〇日社会面の記事にも登場する、生前の遠藤が懇意にしたとら寿し店主（当時）、大竹豊彦である[一五]。

開館翌日に行われる追悼ミサにも、周知のとおり一般参列が可能で、地元には歌で追悼する合唱団員も募られた。女性四十人、男性三十人程度の編成、指揮と伴奏は長崎純心短期大学の教員、八月末から毎月二回程度の練習を予定していると、一九九九年八月初旬にオーディションが行われた。このオーディションを報じた記事で大竹氏は「遠藤さんのために歌いたい人に歌ってもらうのが一番の追悼になる」と呼び掛けている（⑬）。こうして、文学テキストやメディアを通じて遠藤に親しみを持っていた地元の人々が、積極的に文学館にかかわっていく場が作られていったことが見てとれる。

また、一般読者からの遠藤作品に対する思いが寄せられる。「遠藤周作の魅力」（一九九九・三・二五）を寄稿した長崎市職員（当時）柿田信之は、「ここ三ヵ年の読書の約五分の一」を占めるのが遠藤作品で、読んだ作品数は九〇冊を超えるという。豊富な自身の読書体験の他、新しく新潮社から出る『遠藤周作文学全集』の刊行や、一年後の文学館の開館を心待ちにしていることが綴られる。二〇〇〇年二月二九日には、後に周作クラブ長崎世話人（二〇〇一年～二〇一二年）となる長崎商工会議所専務理事（当時）宮崎應男が、開館予定の文学館関連イベントを企画している友人に薦められて読んだ『わたしが・棄てた・女』について語っている。

更には、遠藤夫妻と親交のあった後輩作家の森禮子は、外海出津地区で医療・教育・福祉に尽力したド・ロ神父の評伝を執筆するために、一九九八年九月末頃外海を訪ねているが、「こんな立派な人（注、ド・ロ神父）を私に書けるかなという気があったんですが、ここにきて遠藤さんの『沈黙の碑』を見た途端、書かなければという強い気持ちになりました」と述べたという（⑭）。『神父ド・ロの冒険』（教文館、二〇〇〇・三）冒頭で触れられる取材旅行[一六]は、おそらくこの記事を指す。二〇〇〇年五月の文

一四　遠藤順子・鈴木秀子『夫・遠藤周作を語る』（文芸春秋、一九九七・九）一三〇～一三一頁

一五　下野孝文・山下静香「遠藤周作と長崎、ある大きな力で―「とら寿し」大竹豊彦氏に聞く」（『敍説Ⅲ』二〇〇二・一二）を参照されたい。

一六　森禮子『神父ド・ロの冒険』（教文館、二〇〇〇・三）一〇～一一頁

学館開館式典にも参加する森が側面から応援したといえようか。

最後に、一九九八年年末に、長崎と遠藤の交流を示す老舗古本屋文録堂書店[一七]の閉店を報じる記事がある（⑮）。先代店主の頃には、遠藤が小切手で資料を購入し、「遠藤さんの署名がある小切手だが、監禁するのがもったいないねえ」と言って、遠藤さんの作品に文録堂書店の古本が貢献することを素直に喜んだ」と述懐する。長崎の古書店店主が遠藤との直接交流を喜んだように、文学館開館前日の社説（⑯）は、「遠藤氏の文学作品から私たちが学ぶべきことは少なくないはずだ。文学館を積極的に活用したい。そして、全国的な文化施設の完成を県民の誇りにしたいと思う」と訴えるが、そうした土台を、先の開館式典大浦天主堂での追悼ミサにおける合唱団員の募集などで少しずつ形成していっているのだろう。なお、地元で文学館を支える市民団体「周作クラブ長崎」が大竹氏らを中心に結成されるのは、二〇〇一年二月である[一八]。

六、ベスト・セラーズ

昭和編同様、長崎・佐世保・東京を対象とした書籍のベストセラー一覧がおよそ週一回のペースで掲載されていたが、東京調べの掲載がない記事もあった。「五、「長崎新聞」遠藤周作関連記事一覧―平成編」の備考欄に、東京ではランクインしていない場合については「▼」、東京でのみランクインの場合は「▽」、東京の掲載がない場合は「◇」を記した。なお、一九九五年五月一日から、長崎・佐世保調べのみフィクション部門／ノンフィクション部門に分かれ、各トップ5を掲載するようになっている。本欄のみをベースとした東京でのランクとの比較はより精度の低いものとなるが、まずは長崎での遠藤作品受容の目安を作成することを目的とし、比較の整合性については今後の課題としたい。

長崎・佐世保でのみランクインしているのは、一九九一年『生き上手　死に上手』（海竜社、一九九一・三）・『友を偲ぶ』（光文社、一九九一・九）・『狐狸庵対談　快女・快男・快話』（文芸春秋、一九九一・一一）、一九九二年『王の挽歌　上下』（新潮社、一九九二・五）、一九九三年『万華鏡』（朝日新聞社、一九九三・四）、一九九四年『心の航海図』（文芸春秋、一九九四・二）、没後に出版された一九九七年の『無鹿』（文芸春秋、一九九七・五）と文学館への思いも綴られた一九九八年の遠藤順子『夫の宿題』

一七　昭和初期に大村市に開業、その後長崎市内に移転し市内を転々とする（「長崎新聞」一九九八・一二・一五）。一九五七年長崎の中心街浜町アーケードに移転（「西日本新聞」一九九七・一・二二）。この他、遠藤が訪れた長崎の古書店に長崎市鍛冶屋町の大正堂書店がある（図録『遠藤周作と長崎―心の鍵が合う街』遠藤周作文学館、二〇一二・五参照）。

一八　「「周作クラブ長崎」発足　最も愛した特別な地に…」（「長崎新聞」二〇〇一・二・二〇）

である。一九九一年の三冊はすべて佐世保のみ、一九九二年の『王の挽歌』もランクインした五回のうち四回は佐世保のみで、一九九三年『万華鏡』と一九九七年『無鹿』が長崎のみでのランクインである。長崎・佐世保で若干でも長期間ランクインしている作品に、一九九一年『決戦の時　上下』（講談社、一九九一・五）がある。

昭和編のベストセラーの遺漏の確認とデータ精査を重ね、今後、長崎でのベストセラー作品については、今後まとめて整理したいと考えるが、直接長崎にかかわる作品ではないものの、遠藤作品が長崎・佐世保でよく読まれていたかすかな証にはなるのではないかと考える。

七、所感、今後の展望など

一九六五年を始めとした昭和編の約三分の一、一二年間という短い期間の「長崎新聞」における遠藤周作関連記事のうち、文学館が建つ長崎の特徴が窺えそうなものを簡単にではあるが紹介してきた。

私事ながら、二〇〇四年四月から九年間遠藤文学館に在職していた。高田元知事への手紙の存在はすぐに耳にしたし、県立図書館郷土課の方々にもお世話になる機会が度々あったが、没後まもない時期に県立長崎図書館で特別展が開催されていたことは、この調査を実施するまで知らなかった。当方の不勉強故ということもあろうが、記録としての図録が作成されているわけでもないだろうし、おそらく前年度の長崎市議会で予算要求がされているわけでもない事業であろうから、活字資料として県主催のこのイベントの所在が確認できたことは、長崎における遠藤の文学と思想が受容されていくさまを捉えていく上で、今後更なる調査が必要であるとしても、一つの成果となりうる。

また、文学館開館イベント（追悼ミサ）に地元の方々が参加したことは、周作クラブ長崎の方々から常々伺ってきた。さらに今回の調査で、没後に映画の自主上映会が市民を中心に企画されたことが判明した。こうした積極的な遠藤作品と地元の人々との触れ合いは、長崎に特異なものなのか、データベース化されている全国紙との比較などから、今後精査できればと考える。

体調の不調もあって長崎に足を運ぶ機会のほとんどない平成編の記事一覧ではあったが、その一方で長崎の側が遠藤作品を積極的に受容する様子がみてとれるのではないか。

「長崎新聞」に掲載された一九八九年一月八日～二〇〇〇年一二月三一日までの遠藤周作関連記事の一覧を時系列に列挙したものである。原紙もしくは電子縮刷版を利用して調査したが、一九九九年七月一〇日以降の紙面はデータベース化されているた

め検索機能を利用した。記事名については見出しに拠ったが、該当記事のテキストデータだけが示されるデータベースで挙がってくるタイトルと紙面の見出しには差異が生じていた。統一のため紙面の見出しを採用した。なお、著者名があるものについては記事名の最後に（）をして明記したが、読書感想文コンクールの著者名については（名前）とのみ記載した。また、「ベスト・セラー」に入った遠藤作品については、見出しのあとに（ ）して書名と順位を明示した。なお、長崎新聞の独自記事とおぼしきものには備考欄に「★」を付し、備考欄におけるそれ以外の印は、「〇、はじめに」、「六、ベスト・セラーズ」に記したとおりである。

残念ながら遺漏もあるかと思う。新たに確認できた際には別稿にて補いたい。

長崎新聞遠藤周作関連記事一覧―平成編

年月日	記事名	備考
一九八九年一月二二日	新しい本／▼「火の山の物語」（中村真一郎著）	
五月一日	国際化時代に対応へ　若返った日本ペン会長	
七月二四日	オピニオン／ＰＲし、来館者増やしたい　日宇スギノ（※沈黙の碑）	★
七月三一日	ベスト・セラーズ（長崎４位・佐世保３位『反逆』上・下）	★▼
八月一五日	ベスト・セラーズ（長崎３位・佐世保４位『反逆』上・下）	★
八月二二日	ベスト・セラーズ（長崎５位・佐世保５位『反逆』上・下）	★▼
八月二九日	ベスト・セラーズ（長崎８位『反逆』上・下）	★
九月五日	ベスト・セラーズ（長崎９位『反逆』上・下）	★▼
九月一二日	ベスト・セラーズ（佐世保８位『反逆』上・下）	★
一〇月三日	ベスト・セラーズ（佐世保４位『反逆』上・下）	★▼
一〇年二四日	ベスト・セラーズ（佐世保２位『反逆』上・下）	★▼
一一月一四日	ベスト・セラーズ（佐世保７位『反逆』上・下）	★▼
一九九〇年一月九日	ベスト・セラーズ（長崎５位『落第坊主の履歴書』）	★◇
二月一二日	ゴールデン洋画劇場　日本映画「妖女の時代」／ＫＴＮ　９・０２（※原作者名なし）	
二月二〇日	ベスト・セラーズ（長崎１０位『落第坊主の履歴書』）	★▼
二月二七日	ベスト・セラーズ（長崎７位『落第坊主の履歴書』）	★
三月六日	ベスト・セラーズ（長崎８位『落第坊主の履歴書』）	★
五月二日	各界の高額納税者（作家１３位）	
五月一五日	ベスト・セラーズ（佐世保７位『落第坊主の履歴書』）	★▼
九月一九日	旅人たちの風景〈１４６〉　遠藤周作―「沈黙」―／（奥野政元）	★
	出版だより／☆「群像　日本の作家」全２３巻	
一〇月三〇日	ベスト・セラーズ（長崎２位『考えすぎ人間へ』）	★▼
一二月三日	第１９回県第１２回文庫　読書感想文コンクール　最優秀９編／「海と毒薬」長崎・青雲中３年（名前）	★

一九九一年四月一六日	ベスト・セラーズ（佐世保6位『生き上手　死に上手』）	★▼
四月二二日	ベスト・セラーズ（佐世保6位『生き上手　死に上手』）	★▼
四月三〇日	ベスト・セラーズ（佐世保10位『生き上手　死に上手』）	★▼
五月二日	各界の高額納税者（作者14位）	
五月三一日	（広告）『決戦の時』上・下	
六月四日	ベスト・セラーズ（佐世保4位・東京9位『決戦の時』上・下、7位『生き上手、死に上手』）	★
六月一一日	遠藤周作著『決戦の時』　信長の孤独を鮮明に	
	ベスト・セラーズ（長崎8位『決戦の時』上・下）	★
六月一八日	ベスト・セラーズ（長崎4位『決戦の時』上・下）	★▼
六月二五日	ベスト・セラーズ（長崎3位・佐世保1位『決戦の時』上・下）	★▼
六月三〇日	文庫拝見／遠藤周作著『こころの不思議神の領域』	
七月二日	ベスト・セラーズ（長崎3位『決戦の時』上・下）	★▼
一〇月八日	ベスト・セラーズ（佐世保9位『友を偲ぶ』）	★▼
一〇月二九日	ベスト・セラーズ（長崎3位・佐世保3位『男の一生』上・下）	★▼
一一月五日	ベスト・セラーズ（東京10位『男の一生』上・下）	★▽
一一月一二日	ベスト・セラーズ（長崎10位『男の一生』上・下）	★▼
一一月一九日	ベスト・セラーズ（東京9位『男の一生』上・下）	★
一一月二六日	ベスト・セラーズ（佐世保8位『狐狸庵対談　快女・快男・快話』）	★▼
一二月四日	第20回県第13回文庫読書感想文コンクール最優秀9編／「沈黙」長崎・長崎西高（名前）	★
一二月二三日	時代のカギ握る　管理社会で信長ブーム	
一九九二年五月二七日	出版だより／☆カミユ文庫	
六月二日	ベスト・セラーズ（長崎9位『王の挽歌』上・下）	★▼
六月一六日	遠藤周作著『王の挽歌』　キリシタン大名の生涯	
	ベスト・セラーズ（佐世保4位『王の挽歌』上・下）	★▼
七月六日	ベスト・セラーズ（佐世保5位「王の挽歌」上・下）	★▼
七月一三日	ベスト・セラーズ（佐世保9位『王の挽歌』上・下）	★▼
七月二〇日	ベスト・セラーズ（佐世保9位『王の挽歌』上・下）	★▼

八月三日　トレンズ／有効なメディアミックス「沈黙の声」ほか／（保坂正康）
一〇月三一日　紹介法で副作用　遠藤周作の対談集『こんな治療法』絶版　講談社
一九九三年二月一一日　食卓の文化史〈２５〉　遠藤周作「沈黙」・干魚／（秋元潔）
三月二九日　ベスト・セラーズ（長崎８位『万華鏡』）　★▼
四月五日　ベスト・セラーズ（長崎６位『万華鏡』）　★▼
四月一〇日　文庫拝見／遠藤周作著『青い小さな葡萄』
六月二八日　ベスト・セラーズ（長崎６位・佐世保５位『深い河』）　★
遠藤周作著『深い河（ディープ・リバー）』　宗教問題問う純文学
六月三〇日　（広告）深い河
七月五日　ベスト・セラーズ（長崎３位『深い河』）　★▼
七月一二日　ベスト・セラーズ（長崎２位『深い河』）　★
七月一九日　ベスト・セラーズ（長崎４位『深い河』）　★
七月二六日　ベスト・セラーズ（長崎５位『深い河』）　★
八月二日　ベスト・セラーズ（長崎３位『深い河』）　★
八月九日　ベスト・セラーズ（長崎５位『深い河』）　★
八月二三日　ベスト・セラーズ（佐世保９位『深い河』）　★▼
八月三〇日　ベスト・セラーズ（東京９位『深い河』）　★▽
文庫拝見／▽遠藤周作著『変るものと変わらぬもの』
一二月七日　具体的作品を教材に「長崎の文学」別冊読本が刊行　★
一九九四年一月一二日　新春随想　正月の散策／（遠藤周作）
二月二一日　ベスト・セラーズ（佐世保１０位『心の航海図』）　★▼
二月二八日　ベスト・セラーズ（長崎９位『心の航海図』）　★▼
一九九五年六月五日　遠藤周作著『女』　歴史に対し平静な目
六月一九日　シリーズ郷土文化発掘現場からの報告５外海町／（森内敏和）　★
六月二三日　くろーずアップ／「ずっと求めていた役」ガンジス河でのもく浴シーン　秋吉久美子
七月一一日　（広告）ナツイチ集英社文庫（『ほんとうの私を求めて』）

七月一七日（広告）新潮の１００冊（『海と毒薬』）
八月二日（広告）新潮の１００冊（『海と毒薬』）
八月一〇日　遠藤周作率いる素人劇団「樹座」が２０回公演　病後の座長も元気な姿
九月一五日　寄稿／コルベさんの花　愛の聖人の遺跡／（小崎登明）　★
一一月二三日　文化ノート／舞台とオペラの「沈黙」／（俊）
一二月二六日　文学と宗教を考える講演会（※上智大学「深い河」のシンポジウム）
一九九六年四月一日　ミュージカルに独自の道　多くの功績残し音楽座が解散公演
四月一八日（広告）講談社文庫　女の読書フェア（『妖女のごとく』）
七月七日（広告）角川文庫　‘９６夏の名作１００フェア（『海と毒薬』）
七月一六日（広告）新潮文庫の１００冊（『沈黙』）
八月一日（広告）新潮文庫の１００冊（『沈黙』）
九月三〇日　遠藤周作氏が死去　純文学に軽妙エッセー　★
水や空　★
遠藤周作さん死去　「人生の師なくした」　著作活動でなじみ県内でも惜しむ声　★
一〇月一日　遠藤周作氏を悼む　濃い陰影を宿した仲間　あの熱気は遥か遠く／（進藤純孝）
一〇月八日　標点　遠藤周作さんの文学　日本的キリスト教追求　生涯をかけた問い掛け　★
文化横丁／踏み絵／（雄）
一〇月一八日　遠藤文学と宗教　イエスへ一途な信仰告白　「神からの啓示」深層心理に／（木崎さと子）
一〇月二〇日（広告）小学館（『こころの風景　なつかしき人々』（１）（２）、『戦国夜話』、『風の十字路』）
一〇月二九日　１２日から「遠藤周作展」―県立長崎図書館　知事への手紙も展示　★
一一月九日（広告）文藝春秋（「独占手記　わが父・遠藤周作」）
一一月一三日　遠藤周作特別展始まる　県立長崎図書館　著書や遺品など１５０点　高田知事あての手紙も　①
（広告）遠藤周作特別展―狐狸庵先生を偲んで―　長崎県立長崎図書館２階　②
一一月一五日　エッセー太笛（７０）／長崎愛した狐狸庵先生　”殉教の道”に思い入れ深く／（掘憲昭）　★
一一月一六日「日活」の社名再び　第１作「愛する」を製作
一一月一七日（広告）小学館『なつかしき人々（１）（２）』『戦国夜話』『風の十字路』

一一月二六日　今年逝った有名人への弔辞、追悼の言葉

一一月二九日　遠藤周作特別展　県立図書館　直筆原稿など展示　本県舞台の作品資料も　★

一二月一日　故遠藤周作夫人　ゆかりの地外海を訪問　⑫

一二月九日　遠藤さんの足跡、一万人がしのぶ　特別展閉幕　③

一二月一五日　意気込む熊井監督　第1弾「愛する」日活の再生手伝う

一二月二一日　文芸／，96回顧（2）　大物作家の訃報相次ぐ

一二月二六日　文化ノート／「信長」が教えるもの／（青）

一二月三一日　墓碑銘，96

一九九七年一月一日　ふるさとの文学風景　人さらい／（岡部耕大）　★

一月一六日　空や水（※心あたたかな病院運動）　★

二月七日　（広告）『婦人公論』三月号（「遠藤周作さん最期の夜」鈴木秀子）

二月二八日　「深い河」の感動もう一度／長崎の主婦ら手作り企画で上映PR／長崎4月17、18、21日　佐世保4月25日　④

四月一五日　（広告）映画「深い河」上映会　★

四月二七日　「深い河」の追加上映会　来月1日長崎で

五月二五日　（広告）角川文庫（『心の海を探る』）　⑤

六月九日　ベスト・セラーズ（フィクション部門長崎5位『無鹿』）　★▼

六月一五日　ベスト・セラーズ（フィクション部門長崎3位『無鹿』）　★▼

七月八日　水や空（※『沈黙』）　★

七月九日　（広告）ナツイチ集英社文庫（『ほんとうの私を求めて』）

七月一五日　（広告）新潮文庫の100冊（『海と毒薬』）

七月二七日　夏にアクセス！〈3〉酒井美紀　映画の主役に抜擢

八月一日　水や空（※文学碑）　★

八月二六日　「寅さん」遺産6億3000万円　税務署公示「狐狸庵先生」は8億円

九月七日　（広告）婦人公論10月号（「遠藤周作〝復活〟のメッセージ〈一周忌対談〉」遠藤順子・鈴木秀子）

九月一八日　遠藤周作さん没後一年　短編集など相次ぎ出版　大規模な「偲ぶ会」も　★

一一月二〇日　寄稿／好奇心旺盛な人柄偲ぶ　遠藤周作さん一周忌長崎からも多数参列／（堀憲昭）　★

一二月一六日　‘97わがまち回顧　大瀬戸支局　★

一九九八年四月二日　ハンセン病と恋に悩む少女―長崎／24、25日「愛する」を上映　7日には勉強会も　⑥

四月九日	遠藤周作氏原作舞台劇「沈黙」6月県内6ヶ所で公演　日米キャストで人間愛問う	★
四月一七日	水や空（※『沈黙』）	★
五月一〇日	（広告）遠藤周作原作「沈黙」長崎県内で公演	⑦
五月二〇日	豊かな文学の原郷・長崎ー「長崎のうた・文学散歩」の編集に携わって／（田中正明）	★
五月二六日	遠藤周作と私〈上〉／（宮崎賢太郎）	⑧
五月二七日	遠藤周作と私〈中〉／（宮崎賢太郎）	⑨
五月二八日	遠藤周作と私〈下〉／（宮崎賢太郎）	⑩
六月二日	舞台げいこ追い込み　劇団昴「沈黙」本県公演向け	★
六月九日	「沈黙」の地に思いはせ　劇団昴など公演前に碑など視察　外海	★
六月一一日	感動を呼んだ舞台劇「沈黙」　有家で県内巡回の初公演	⑪
七月六日	（広告）ナツイチ集英社文庫（『ほんとうの私を求めて』）	
七月一五日	（広告）新潮文庫の１００冊（『沈黙』）	
八月三日	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎３位『夫の宿題』）	★▼
八月一〇日	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎２位『夫の宿題』）	★▼
八月一七日	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎２位『夫の宿題』）	★▼
八月一八日	時の顔／松本清張記念館の初代館長になった　藤井康栄さん	
八月二四日	（広告）ナツイチ集英社文庫（『ほんとうの私を求めて』）	
	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎３位・佐世保５位『夫の宿題』）	★▼
八月三一日	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎２位・佐世保５位『夫の宿題』）	★▼
九月二日	遠藤氏の未公開日記出版へ　悲恋、信仰の苦悩つづる　原点を示す貴重な資料	
九月六日	ベスト・セラーズ（ノンフィクション・長崎３位・佐世保４位『夫の宿題』）	★▼
九月八日	インタＶＩＥＷネット／久々の新曲　酒井美紀	
九月二八日	インタビュー　遠藤周作氏の妻、順子さん　悲しみから立ち上がる時「死は終わりではない」	

一〇月六日　ド・ロ神父の評伝執筆へ　作家森禮子さん　外海出津地区を取材　来夏までに出版予定「未知の一面も描きたい」／（文化部・峠憲司）　⑭

一〇月一七日　遠藤氏しのぶ会　「周作忌継続を」と夫人　東京　外海の記念館概要も紹介

一二月一五日　読書好きには寂しい年の瀬・・・　しにせ古本屋文録堂　店じまい　⑮

一二月二三日　遠藤周作文学記念館　来年3月着工、２０００年3月開館　外海町が基本計画発表　★

一九九九年二月一七日　ひと登場　外海町で無投票で4選された山道幸雄さん　池島鉱存続へ支援強化　★

三月二五日　私と読書　遠藤周作の魅力／（柿田信之）　★

三月二八日　「沈黙」の舞台に遺品集う　遠藤周作文学記念館が着工　外海に来年3月完成へ　★

「神様がくれた地」順子夫人　夫の言葉に感慨深げ　★

四月四日　水や空（※文学館起工式）　★

四月一四日　故遠藤周作夫人・順子さんに聞く　「記念館」活用に期待　長崎とは不思議なご縁／（文化部・迎修）　★

四月二一日　『沈黙』など収め１５巻　『遠藤周作文学全集』刊行へ

四月二四日　川べり／「キリスト的な愛」／（衆）　★

六月一一日　文庫拝見／▽遠藤周作著『楽天主義のすすめ』

七月一三日　遠藤周作追悼ミサ　来年5月14日浦上天主堂　一般参列も受け付け　合唱団員を一般公募　来月7日にオーディション　⑬

八月二三日　ｍｅｍｅｎｔｍｏｒｉ長崎セミナー　末期医療の在り方探る　関係者ら２１００人が聴講　★

九月三日　ざっし／「よむカステラ」第5号　★

二〇〇〇年二月二九日　この一冊／遠藤周作著『わたしが・棄てた・女』宮崎應男さん　★

三月一一日　故遠藤周作さんしのびミサ　5月14日、長崎・浦上天主堂　外海の「文学館」落成記念で　一般参列を受け付け　★

四月二四日　来月13日に落成の遠藤文学館説明も　首都圏外海町会総会　★

五月七日　外海町の遠藤周作文学館　名誉館長に三浦朱門氏　★

五月一二日　遠藤文学の足跡一堂に　記念館あすオープン　外海　★

社説／遠藤周作文学館　県民の大きな誇りになる　⑯

五月一四日　『沈黙』の舞台　外海町に　遠藤周作文学館オープン　三浦朱門さんらテープカット　★

文学碑から13年　新たな発信地に　遠藤周作文学館オープン　「こしかなかった」　★
六月七日　遠藤周作文学館―外海町　木工品に生前の言葉　プレート、ペン立て好評　★
六月二一日　遠藤文学館が1万人を突破　外海町が議会で明らか　★
七月八日　ゆかりの外海訪問　駐大阪・神戸仏総領事　遠藤文学館も見学　★
七月二三日　ふるさと逸品　石炭のミニチュア（西彼外海町）　★
八月三日　我らおもしろ仲間　息のながーいグループ　瑞城（みずき）読書会　★
八月一二日　講師に松野明美さんら　外海19―21日に文化大学　★
八月一九日　夕日も楽しんで…　遠藤文学館が時間延長　外海　★
八月二一日　多彩な講座熱心に学ぶ　夏季外海文化大学「食物とくすり」など　★
八月二五日　中浦ジュリアン居館跡を公園化　西海町教委　★
九月二一日　記者の目／キリシタン史跡で外海活性化を／（大瀬戸支局・松尾潤）　★
九月三〇日　遠藤さんしのび　外海・遠藤周作文学館　映画上映など行事　あす、入館は無料　★
一〇月四日　700人遠藤さんしのぶ　映画上映など追悼行事　外海　★
一〇月二七日　高校国語教育考える　長崎で全国研究大会　★
一〇月二八日　無料バスツアー参加者募集　外海町公園などクリーンアップ　JTB・来月19日実施　★
一一月一四日　ふるさと考／本県観光の魅力どう全国が紹介　目立った日蘭交流　400周年関連　歴史探訪やグルメ　県東京事務所観光物産センター　「マスコミの関心高い」　★
一一月二〇日　末期医療考える　長崎　基調講演や座談会　★
一一月二二日　文学館で人生考えて　周作さんの妻・順子さん　外海21世紀への願いを語る　★
一二月一三日　遠藤文学館早5万人を突破　記念品贈呈　★
一二月一六日　2000ミレニアムふるさと回顧〈7〉／大瀬戸支局　池島炭鉱で大規模火災　外海に遠藤文学館開館　★
一二月二六日　県内この1年　「阿蘭陀年」友情うたう　外海に遠藤文学館開館　★
一二月三一日　水や空（※文学館オープン）　★

終章

本稿は、作者の自作解説に沿うよう読み進められてきた遠藤作品を相対化しようとする研究史の流れに沿い、その作品世界に表れた「救い」の様相を、特に第二次世界大戦を背景とした場合について明らかにしようとしてきた。このことは、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）に代表される、弱者に寄り添う「母なる神」を描く遠藤作品の「救い」が及ぶ状況を限定していく試みであった。

第一章では、未発表の小説草稿「われら此処より遠きものへ」（一九五三年頃執筆）の分析を中心とした。これは、小説家修行となったフランス留学中（一九五〇～一九五三）のマルキ・ド・サド研究を第二次世界大戦という状況を取り込みながら活かそうとした草稿であった。第一節第二節において、草稿の創作意図や留学期の日記や草稿と近しい時期に書かれたエッセイにおけるサドへの言及などを比較し、「われら」で取り組まれたサド研究には、サド研究を通じて汎神の世界に返ったうえでの「救済」を模索した可能性があることを指摘した。これは、後の「サド伝」（『文学界』一九五九・九、一〇）や「爾も、また」（『文学界』一九六四・二～一九六五・二）といった、現在、遠藤作品におけるサド受容を考察するための中心的な対象と比較しても、サドを媒介としてでは西洋との距離感を埋めることができなかったとみなされてきた遠藤作品のサド受容のあり方を再検討する可能性があるという提言である。また、第二次世界大戦を経た当時の思想状況のなかで、サドの現代的意義を、草稿や草稿と同時期のエッセイがどのように受容した可能性があるのかを、エリック・マルティ『サドと二十世紀』（森井良訳、水声社、二〇一八・一二）などを参考に指摘した。その結果、サド研究を通じて接する「悪」から、第二次世界大戦によって問題視されるようになった状況が除外されるか暗示されるに留まる傾向にあることなどが確認された。おそらくそれは、フランス革命という状況下において神を求めるネガティブの道という「救い」示したサドの思想を、第二次世界大戦下に置換させることが困難だったのではないかと考える。また、遠藤がサドを評価した「純潔をよそおう者の偽善を破壊することによって真の純潔を求めようとする」サディズムの思想を、草稿のバシカの物語で描かれる大戦下の尋問や虐殺といった状況のどの部分と重ねようとしていたと考えることが妥当なのかなど、これまでの作者の発言だけでは答えを得づらい点などを確認することができた。根拠資料の乏しさは否めないためあくまで仮説に留まるきらいもあるが、これまでの遠藤のサドへの評価や小説の援用では説明しえない部分を指摘できた。今後は、現段階では語学力不足から収集しかできていない、遠藤の旧蔵書（洋書）の書き込み調査なども深め、遠藤のサド受容に関し研究を深めていきたい。

なお、本草稿でサドと並んで祈る神は、第二次世界大戦によって「狂女」となった女性を救う力を持つ存在としてみなされている。この点を引き継ぎ第三節では、サド

への期待とは反対の方向から第二次世界大戦下の「救い」を模索したコルベ神父が体現する「救い」を考察した。『女の一生二部』（朝日新聞社、一九八二・三）はアウシュビッツと長崎原爆という二つの物語で構成されていた。先行研究によれば、コルベ神父の愛の行為で二つの物語が救われることを意図した作品だと言われている。だが、アウシュヴィツではコルベ神父の身代わりの死が収容所副所長に共苦の思いを抱かせる様が創られ、長崎原爆では原爆投下のボタンを押すアメリカ軍人に幼少期を長崎で過ごした青年とし被害をうける日本人への思いが描かれるが、結局、個人の力ではくい止めようのない戦争の悪が描かれていることを確認した。このことは、サドと第二次大戦との取り組み同様、特に、戦争における収容所等の虐殺者をくいとめることの困難を描いているものと考える。なお、コルベ神父の聖なる行為と長崎原爆を重ねて描く『女の一生　二部』が書かれたのは、ヨハネ・パウロ二世が来日し、広島・長崎において「戦争は人間のしわざ」だとする宣言をなした数か月後であった。『女の一生二部』では原爆を落とした搭乗機パイロット、また、アウシュヴィツ収容所の所長が、それぞれ被害者となる人々の痛みに共感する視点を描いた。当時、特に長崎原爆に関する言説状況は、永井隆『長崎の鐘』（日比谷出版、一九四九・一）に端を発する「浦上燔祭説」への批判と擁護が相まっていたはずである。遠藤の創作によるその位置づけは、今後の課題としたい。

第二章では、フランス留学時にサドに興味を抱いた根幹にある、第二次世界大戦がみせた「悪」への「救い」について、日本を舞台とした作品をとおして考察した。第一節では、サドの自然観を「悪」の表象として取り入れたとされる『火山』（『文学界』一九五九・一～一〇）を分析した。『火山』の赤岳とモデルとなった桜島との比較を通し、西洋との対立を描いたといわれてきた『火山』には、西洋との距離感を超え、サドを通じて目指したキリスト教福音前の世界を描いた可能性があることを考察した。この指摘は、福音前、つまり救済される前の世界を描くことを指す。そのため、『火山』には「救い」を求める嘆きが描かれるに留まる。第二節では、第二次世界大戦末期に起きた米軍捕虜の生体解剖実験を描いた「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）を考察し、キリスト教を日本的に変容した「母なる神」とは異なる、普遍的な「救い」が求められていることを明らかにした。第三節では、戦時下の日本で拷問を受けた神父を描いた、「幼なじみたち」（『野性時代』一九七七・五）を考察する。まず、戦後、自身を拷問した日本人のいる世界で生きることを選択し、恨み言一つ言わなかったという神父の内面は外部からしか描かれていないことを確認した。『沈黙』をはじめとする遠藤文学の主要テーマは「許すことの大切さ＝母なる神」だが、その観点では、神父の心情を説明できない伊東静雄の詩の引用があることを指摘した。詩の解釈からは、神父の内面ではなく神父が選んだより困難な戦後の生き方そのものが尊く、それこそ宗教的な生き方であることを受け取るのが、素直な読みであることを指摘し

た。そのうえで、他者としての子供を描いた「白い風船」（「朝日新聞」一九六九・一・一）との比較から、たどり着けない内面を有する他者を尊重することの重要性も描かれていることを明らかにした。そしてこのことは、共苦という思想を根幹とする遠藤の母なる神を人間的次元でのみ捉えると、理解できない相手への尊重が損なわれる危険があることを指摘した。

第三章は、遠藤作品の主要テーマとなる『沈黙』（新潮社、一九六六・一）で示した「母なる神」について、第二次世界大戦に目配せしながら「救い」のあり方を検討した。第一節では『沈黙』執筆のスタートラインに戦時中の弱者としての経験があったという回想に着目し、『沈黙』への船出と目され踏み絵も登場する「満潮の時刻」（『潮』一九六五・一～一二）との比較を行う。「満潮の時刻」には病室における死に際し、苦しみに共感する「母なる神」が描かれていた。本作の中心的な「救い」は、病に倒れた者の孤独を和らげる点にあったが、作中、死を意識する入院患者は、自身の死と第二次大戦下に戦死した人々の死を重ね合わせて意識していた。この点を重視し、『沈黙』との比較を試みる。その結果、戦場での死に『沈黙』と同じような「救い」を見出すことは難しいことを確認し、「母なる神」の限界を指摘した。続く第二節では、『沈黙』で打ち出した棄教を許す「母なる神」のあり方を、その後の遠藤作品との比較から検証した。なぜなら、『沈黙』発表の際、キリスト教界から棄教を許す神を描いたことで強く非難された応答として「母なる神」の正当性を今後の創作で証明したいと、遠藤が訴えたからである。遠藤はこの際、日本人の宗教心にある母親への思慕とかくれ切支丹信仰を例に挙げた。そこで、『沈黙』以後深められた、かくれ切支丹研究をまとめた「日本の沼の中で」（『野性時代』一九七九・一～六）から振り返り評価した。「日本の沼の中で」では、「母」に許しを請うところに留まるかくれ切支丹の信仰は、カトリックの根幹である再起への願いが欠けていると述べられている。この点と同様、『沈黙』以降、「許す」だけではない「厳しさ」が強調された母親像が描かれていくことを指摘した。

第四章ではカトリックから禁書に近い扱いまで受けたと晩年になっても遠藤が振り返る『沈黙』（新潮社、一九六六・三）を代表作とする遠藤の評価の様相について、カトリック新聞・長崎新聞の紙面調査を実施することでその受容のあり方を実証的に評価する基盤を整えることを目指した。その結果として、遠藤は自作を最も非難したのは「カトリック新聞だった」と振り返っているが、カトリック新聞自体は、紙面にさほど遠藤批判を一方的には掲載してきてはいないこと、また、一九七〇年代からはカトリック教会自体が、第二ヴァティカン公会議の広報に関する教令にそくして、カトリック作家を布教利用しようとする試みのなかで、文芸評論家による遠藤作品の解説を掲載することで、一般信者への布教に役立つ遠藤作品の取り扱いに力を入れていく様子なども確認された。もちろん、遠藤が述懐するように、直接的な批判もなされ

たであろうことは、『沈黙』の公開討論会が教会関連施設で開かれていることや没後の読者投稿欄に、母校のカトリック学校では『沈黙』の討論会が開かれたことがあったといった記事などから窺えるが、時代を経てそれを相対化する動きも同時にあったことが確認されたことで、遠藤の発言そのものを相対化する指標をわずかではあるが整えられつつあるといえる。また、長崎新聞の調査からも、特に長崎のカトリック教会で禁書まがいの扱いをうけ、一九八二年に長崎市外海地区に『沈黙』の文学碑が建てられた際には、青ペンキがかけられるといった事件があったことで、二〇〇〇年に開館した文学館建設地としても地域住民の反対があるのではないかと言われたという長崎で、カトリック信者に限った調査ではないが、遠藤作品が全国的な売れ行きよりも長く読み続けられてきていることが、「ベスト・セラーズ」欄から確認された。カトリックの一般的な信者の受け止め方は、今後なるべく早く『沈黙』の同時代を生きた地元のカトリック信者にアンケートやインタビューを行うことによって明らかにするほかないが、そうした調査をさらに立体的にしていくベースが、地元紙である長崎新聞の紙面調査によってなされたものと考える。

第一章から第三章までは遠藤周作の文学研究のなかでの作家の発言や作品の受け止められ方について検討してきたが、第四章では、カトリック教会が一般信者に作品を伝えようとしてきたのか、また、信者側がどのように受け止めたのかを明らかにしようとした。ただ、本稿で論じてきた遠藤作品とカトリック新聞にみる遠藤作品に共通項は見出しづらい。本稿で検討してきたのは、第一章第二章のタイトルにあるように、主に第二次大戦という状況下における遠藤の興味関心や作品での救いの描かれ方である。だが、カトリック新聞に、戦争との関係で遠藤作品を取り扱った記事はほぼ見当たらない。あくまで憶測にすぎないが、新聞に掲載されるか否かの違いは、文学作品をとおして遠藤のメッセージ（救い）が、読み手に伝わりやすいかどうかに拠るのではないか。第一章、第二章、第三章第一節で確認したとおり、戦時下を対象とした場合は、『沈黙』（新潮社、一九六六・三）のように教義にかかわる救いのメッセージを見出しにくい。そのため、作品の読みを教義に沿うよう矯めなおす必要もなかったのかもしれない。とはいえ、こうした紙面掲載状況は、第二章第三節で検討した国語教科書に採用される遠藤作品が、時代を経るごとに戦争を描きこんだ小説になっていくこととは反対の方向性にある。文学研究や国語教育という場を離れたとき、文学作品がその時々の社会にどのように影響を及ぼしたのかについては、基礎調査そのものを確立させることが難しいが、今後、遠藤作品が少なくとも文学館の建つ長崎の地域の人々にどのように影響を及ぼしたのか、作品研究との相互の連関のなかで検討できるよう努めたい。

参考文献一覧

藍沢鎮雄「母なるもの」（『母なるもの』新潮文庫、一九七五・八所収）
足立康「ひとつの誤解――解説」（『火山・地なり』講談社、一九七六・五）収録
天川月子「わたしの本棚　Ｇ・ネラン『おバカさんの自叙伝半分』」（『カトリック生活』一九九三・三）
伊藤整他編『読解講座　現代詩の鑑賞３　現代詩Ⅰ』（明治書院、一九六三・五）
今井真理『それでも神はいる』（慶應義塾大学出版、二〇一五・八）
ヴィクトール・Ｅフランクル『新装版　夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九八五・一）
梅崎春生「冒険心に富む人」（『昭和文学全集二〇　安岡章太郎　遠藤周作』角川書店、一九六二・九）付録『安岡章太郎　遠藤周作アルバム』所収）
越中哲也「長崎学の人びと〈一〉」（「長崎新聞」一九八九・一・一）
江藤淳「背教者の苦悩と悦び」（「朝日新聞夕刊」一九六六・四・二九）（石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版、二〇〇二・六）収録
江藤淳『成熟と崩壊』（河出書房、一九六七・六）
エリック・マルティ『サドと二十世紀』（森井良訳、水声社、二〇一八・一二）
遠藤順子・鈴木秀子『夫・遠藤周作を語る』（文芸春秋、一九九七・九）
遠藤順子『夫の宿題』（PHP 研究所、一九九八・七）
遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』（文芸春秋、二〇一三・九）
奥野政元『受難の文芸　近代日本の作家たちとキリスト教（翰林書房、二〇二二・七）
小鹿島果『日本災異志』（地人書館、一九六七・八）
小潟昭夫他『わが思索のあと』（出帆社、一九七五・六）
小野功生「『女の一生』――そのテーマ構造」（『遠藤周作――その文学世界』国研出版、一九九七・一一）所収
加賀乙彦『キリスト教への道』（みくに書房、一九八八・一一）
香川雅子『遠藤周作と芥川龍之介―史料分析からみたそのキリシタン理解』（教友社、二〇二一・二）
鹿児島市史編さん委員会編『鹿児島市史Ⅱ』鹿児島市長末吉利雄、一九七〇・三
笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・一一）
笠井秋生「遠藤周作」（遠藤祐他責任編集『世界日本キリスト教文学事典』教文館、一九九四・三）所収
笠井秋生「『海と毒薬』――日本人的な感覚の追究」（『遠藤周作――その文学世界』国研出版、一九九七・一二）所収
上総英郎『遠藤周作論』春秋社、一九八七・一一
片岡弥吉『踏絵―禁教の歴史』（日本放送出版協会、一九六九・六）
加藤宗哉『遠藤周作』（慶應義塾出版会、二〇〇六・一〇）
加藤宗哉「（解説）評論家と小説家が同居した作家」（加藤宗哉・富岡幸一郎編『遠藤周作文学論集　文学篇』講談社、二〇〇九・一一）所収
加藤宗哉「解説　書き手の秘密『沈黙』の場合」（遠藤周作『沈黙の声』青志社、二〇一七・一一）所収
カトリック東京教区生涯養成委員会『講演集第二バチカン公会議と私たちの歩む道』

（サンパウロ、一九九八・一）
金子賢之介「バルバロ神父と過ごした日々」（『カトリック生活』一九九六・五）
兼子盾夫『遠藤周作の世界―シンボルとメタファー』（教文館、二〇〇七・八）
兼子盾夫『遠藤周作による象徴と隠喩と否定の道―対比文学の方法』
（キリスト教新聞社、二〇一八・一〇）
川口隆行「「浦上燔祭説」の歴史と現在」
（『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、二〇一七・九）所収
川島秀一『遠藤周作〈和解〉の物語　増補改訂版』（和泉書院、二〇一六・三）
川端康成『山の音』（岩波文庫、一九八八・一〇）
菊田義孝『遠藤周作論　かれは、なにを書かなかったか…』
（永田書房、一九八七・一〇）
北田雄一「『滞仏日記』論」（『遠藤周作研究』二〇一一・九）
北森嘉蔵「『沈黙』の神学―何処への踏み石か」（『月刊キリスト』一九六七・二）
（石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版、二〇〇二・六）収録
金承哲『遠藤周作と探偵小説―痕跡と追跡の文学』（教文館、二〇一九・三）
教皇庁広報委員会
『コミュニケーションと進歩―第二バチカン公会議「広報機関に関する教令」司牧指針―』
（川中康弘監訳、南窓社、一九七四・七）
現代思潮社編集部『サド裁判（下）』（現代思潮社、一九六三・八初版
一九七二・一〇新装一刷）
現代思潮社編集部『サド裁判（上）』（現代思潮社、一九六三・八初版。
一九七二・一〇新装一刷）
古浦修子「『女の一生　二部・サチ子の場合』論―「愛」の根源にあるもの―」
（『遠藤周作研究』二〇〇九・九）
小嶋洋輔『遠藤周論―「救い」の位置―』（双文社出版、二〇一二・一二）
佐伯彰一「『沈黙』への船出」（『新潮』二〇〇〇・六）
佐古純一郎『新潮日本文学辞典』（新潮社、一九八八・一）
佐藤泰正「遠藤周作における「母のイメージ」―「母なるもの」の原像をめぐって」
（「国文学解釈と教材の研究」一九七三・二）
佐藤泰正『鑑賞日本現代文学二五椎名麟三・遠藤周作』（角川書店、一九八三・三）
佐藤泰正「解説」
（『作家の自伝98遠藤周作』日本図書センター、一九九九・四）所収
佐藤泰正「『海と毒薬』日本的風土と罪の問題」
（『佐藤泰正著作集⑦遠藤周作と椎名麟三』翰林書房、一九九四・一〇）所収
佐藤泰正「『沈黙』の終わりをどう読むか」（『国文学　解釈と鑑賞』　二〇一〇・九）
佐藤泰正「『青い小さな葡萄』をどう読むか」
（『作品論　遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・一）所収
佐藤晴夫「訳者あとがき」（『ソドムの百二十日（新版）』青土社、二〇〇二、八）
清水英夫「ベストセラーの性格」（「長崎新聞」一九七三・一〇・一一）
下野孝文「『沈黙』論―諸書との関わりから」（『近代文学論集』二〇〇二・一）
下野孝文・山下静香「遠藤周作と長崎、ある大きな力で―「とら寿し」大竹豊彦氏に聞く」
（『敍説Ⅲ』二〇〇二・一二）
下野孝文「遠藤周作『女の一生』・二部（三）――コルベ神父から修平へ」
（『敍説Ⅲ』二〇〇四・一二）
下野孝文「解説」
（『われら此処より遠きものへ』長崎市遠藤周作文学館　二〇一一・三）所収

下野孝文「『哀歌』論―「母なるもの」の形成と行方」
（『国語国文薩摩路』二〇一四・三）
シモーヌ・ド・ボーヴォワール『サドは有罪か』
（白井健三郎訳、現代思潮新社、二〇一〇・一）
夙川カトリック教会『夙川　建堂八〇周年記念誌』（二〇一二・三）
首藤正義「遠藤周作―『沈黙』と『深い河』の間」
（『カトリック生活』一九九七・一〇）
上智大学中世思想研究所監修『新装版キリスト教史第一一巻』
（講談社、一九九一・八）
ジョセフ・ローレンス・マークス『長く険しい道』
（越智道夫訳、文化評論出版、一九七二・七）
ジョン・スタインベック『長い谷間』（石川信夫訳、河出文庫、一九五四・八）
ジョン・スタインベック『スタインベック全集三　疑わしき戦い』
（廣瀬英一、小田敦子訳、大阪教育図書、一九九七・五）
辛承姫「母なるもの」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇六・二）
勝呂奏「遠藤周作「アデンまで」論」（『桜美林論考 人文研究』二〇一五・三）
鈴木秀子「〈母なるもの〉の志向」（『季刊創造』一九七七・四）
諏訪彰「火を噴く観光地」（『気象』一九六〇・五）九七 頁
瀬沼茂樹「文芸時評上」（「東京新聞夕刊」一九五九・九・二七）
曽野綾子『落葉の声』（聖母の騎士社、一九九〇・三）
武田勝彦「海外だより　遠藤周作「火山」の英訳」
（『国文学　解釈と教材の研究』一九七八・九）
武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社、一九六九・一〇
高橋たか子「遠藤周作論」（『批評』一九六六・八）
東郷克美他『高等学校改訂版　現代文B　指導と研究〈全8分冊〉』
（第一学習社、二〇一八）
友田義行「知足と安楽死を超えて」
（松本和也編『テクスト分析入門』ひつじ書房、二〇一六・一〇）所収
内藤千珠子「暴力」（飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック
日本近現代文学の読み方』ひつじ書房、二〇二三・五）所収
中村真一郎『火の山の物語―わが回想の軽井沢』（筑摩書房、一九八八・一一）
中野記偉「苦しみと文学的神の役割―遠藤周作　堀田善衛　G・グリーン」
（『逆説と影響―文学のいとなみ―』笠間書院、一九七九・四）所収
長濱拓磨『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として』（和泉書院、二〇一八・二）
南山大学監修『新風かおる教会』（中央出版社、一九六九・五）
西村幸雄『愛と信頼を求めて』（ヨルダン社、一九六九・四）
日外アソシエーツ編『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品13000』
（日外アソシエーツ、二〇〇八・四）
日外アソシエーツ編『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品　小・中学校編』
（日外アソシエーツ、二〇〇八・一二）
丹羽文雄「谷崎賞選後評　感想」（『中央公論』昭和四一・一一）
（石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版、二〇〇二・六）収録
長谷川泉×鈴木秀子「遠藤文学における「悪」について」（『知識』一九八七・一二）
浜崎史朗編「モーリヤック略年譜・書誌」

（遠藤周作編『モーリヤック著作集　第六巻』春秋社、一九八三・八）所収
樋口長太郎・安井豊「桜島噴火記念碑」（『測候時報』一九五七・二）
久松健一監修『町田市民文学館蔵　遠藤周作蔵書目録（欧文篇）――光の序曲』
（町田市民文学館　二〇〇七・九）
久松健一「遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響―旧蔵書の調査を通じて―」
（『明治大学人文科学研究所紀要』二〇一一・三）
久松健一『原稿の下に隠されしもの』（笠間書院、二〇一七・七）
平野謙「今月の小説（上）」（「毎日新聞」一九五九・九・一八）
平光吾一「戦争医学の汚辱にふれて」（『文芸春秋』一九五八・一〇）
広石廉二「弱者からの視点　「満潮の時刻」について」（『季刊創造』一九七七・四）
広石廉二「『満潮の時刻』―弱者からの視点」
（『遠藤周作のすべて』朝文社、二〇〇六・四所収）
笛木美佳「遠藤周作「母なるもの」論―「一つの秘密」が切りひらいた世界―」
（『学苑』二〇一〇・一）
フーベルト・チースリック、『キリシタン史考』（聖母の騎士社、一九九五・二）
フランク・W・チンノック『ナガサキ――忘れられた原爆』
（小山内宏訳、新人物往来社、一九七一・七）
フランソワ・モーリヤック「蝮のからみあい」中島公子訳
（遠藤周作編『モーリヤック著作集三』春秋社、一九八二・九）所収
細川正義「『海と毒薬』論」（『作品論　遠藤周作』双文社、二〇〇〇・一）所収
細川正義「『海と毒薬』」
（遠藤周作学会編『遠藤周作事典』鼎書房、二〇二一・四）所収
増田斎「〈踏絵〉と〈転向〉の交差　遠藤周作『沈黙』と大阪万博キリスト教館出展
問題」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、二〇一九・一〇）所収
松山俊太郎「日本におけるサドの受容」（『文学』一九九四・一〇）
マルキ・ド・サド『悪徳の栄え　続』
（澁澤龍彦訳、現代思潮社、一九五九・一二）
三木サニア「『女の一生』の世界」（『日本文芸学』一九八三・一二）
南日本新聞社・鹿児島大百科事典編纂室
『鹿児島大百科事典』（南日本新聞社、一九八一・九）
南日本新聞社編『鹿児島市史Ⅳ』（鹿児島市長赤崎義則、一九九〇・三）
宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像　日本人のキリスト教理解と受容』
（吉川弘文館、二〇一四・二）
宮本陽子「同伴者なきリベルタン・サド」
（柘植光彦編『遠藤周作――挑発する作家』至文堂、二〇〇八・一〇）所収
ミルチャ・エリアーデ『永劫回帰の神話』（堀一郎訳、未来社、一九六三・三）
森本良平『日本の火山』（創元社、一九五八・八）
森禮子『神父ド・ロの冒険』（教文館、二〇〇〇・三）
安井豊「桜島噴火と異常音聴域」（『天気』一九五六・四）二五頁
安井豊「昭和年間における桜島火山の火口の変遷」（『技術通信』一九五六・八）
安井豊「火山の爆発は予知できるか」（『天文と気象』一九五九・六）
安井豊「火山の爆発は予知できるか（二）」（『天文と気象』一九五九・七）
安井豊「九州の火山だより［桜島通信］」（『気象』一九六〇・五）
安井豊「最近の桜島火山の飛行機観測」（『測候時報』一九六〇・五）
安井豊・野田義男・山形英雄「桜島火山の赤熱噴石」（『測候時報』一九五八・五）
安井豊・野田義男「桜島火山爆発予測の現在までの経過」

（『測候時報』一九五九・五）
山根道公「解題」（『遠藤周作文学全集第一巻』新潮社、一九九九・九）所収
山根道公「年譜」（『遠藤周作文学全集第一五巻』新潮社、二〇〇〇・七）所収
山根道公『遠藤周作　その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、二〇〇五・三）
山根道公「母・郁と周作の年譜」
（遠藤周作著　山根道公監修『落第坊主を愛した母』海竜社、二〇〇六・九）
山本健吉「小説の中の日本的風土」（『文学界』一九五八・六）
山本和×北森嘉蔵×国谷純一郎×小川圭治
「遠藤周作『海と毒薬』をめぐって―第一回書評会―」（『兄弟』一九六〇・四）
米原万里「バグダッドの靴磨き」
（日本ペンクラブ編『それでも私は戦争に反対します』平凡社、二〇〇四・三）
ルドルフ・ヘス『アウシュヴィッツ収容所』
（片岡啓治訳、講談社学術文庫、一九九九・八）

Charly Guyot, *Les Romanciers américains d'aujourd'hui* , Paris, Labergerie, 1948
Pierre Klossowski, *Sade, mon prochain* Paris, Ed. Du Seuil, 1947
Rudolf Hoess, *Le Commandant d'Auschwis parle,* Paris, R.Julliard,1959
Shusaku Endo,*Volcano,* Richard A. Schuchert・Charles E.Tuttle Co,1979
気象庁 HP（https://www.jma.go.jp/jma/kishou/intro/gyomu/index2.html）
（二〇一三年九月最終確認）